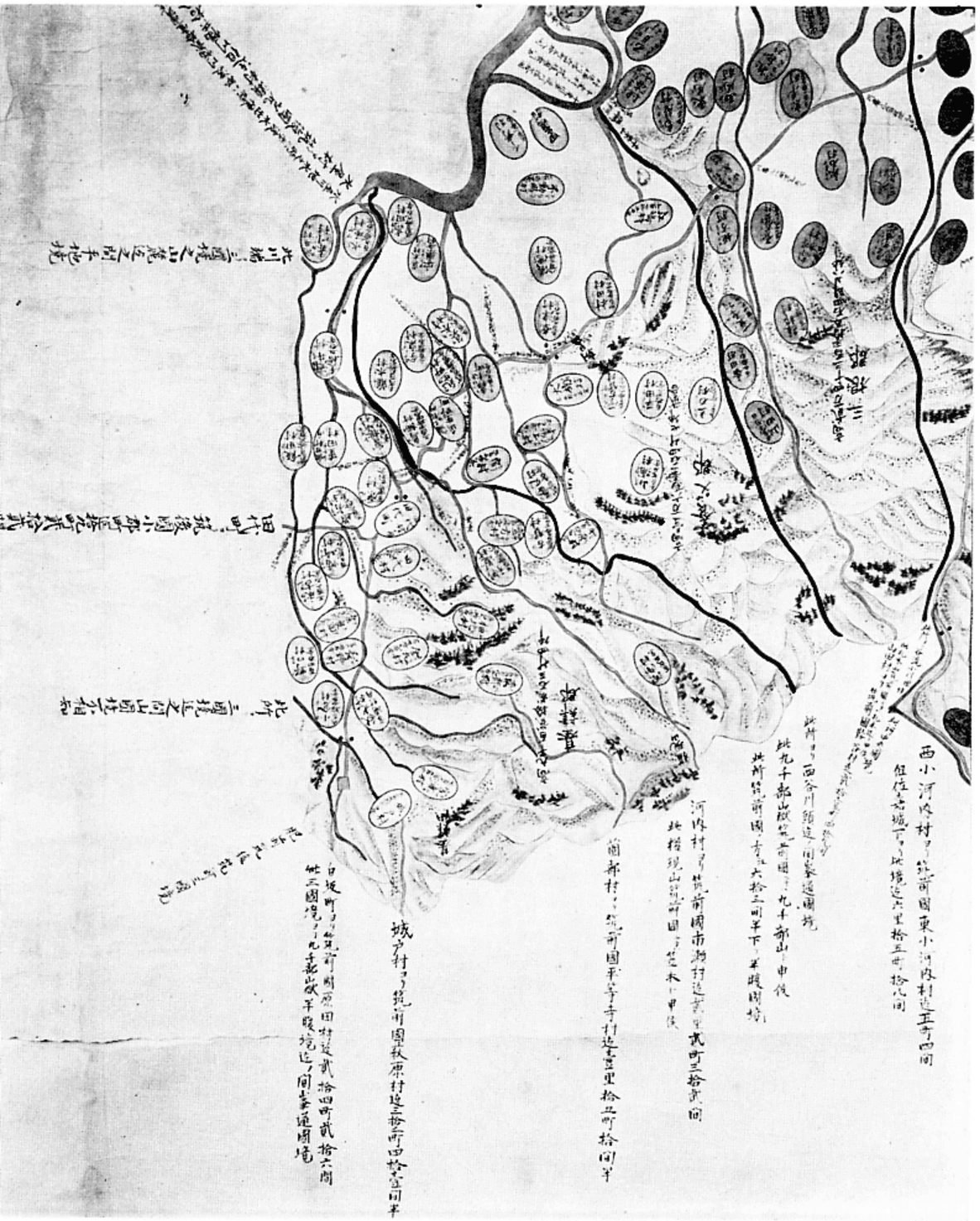
鳥栖市史資料編　第一集

日記抜書

〔田代代官所日記〕

日記抜書全巻と本文の一部

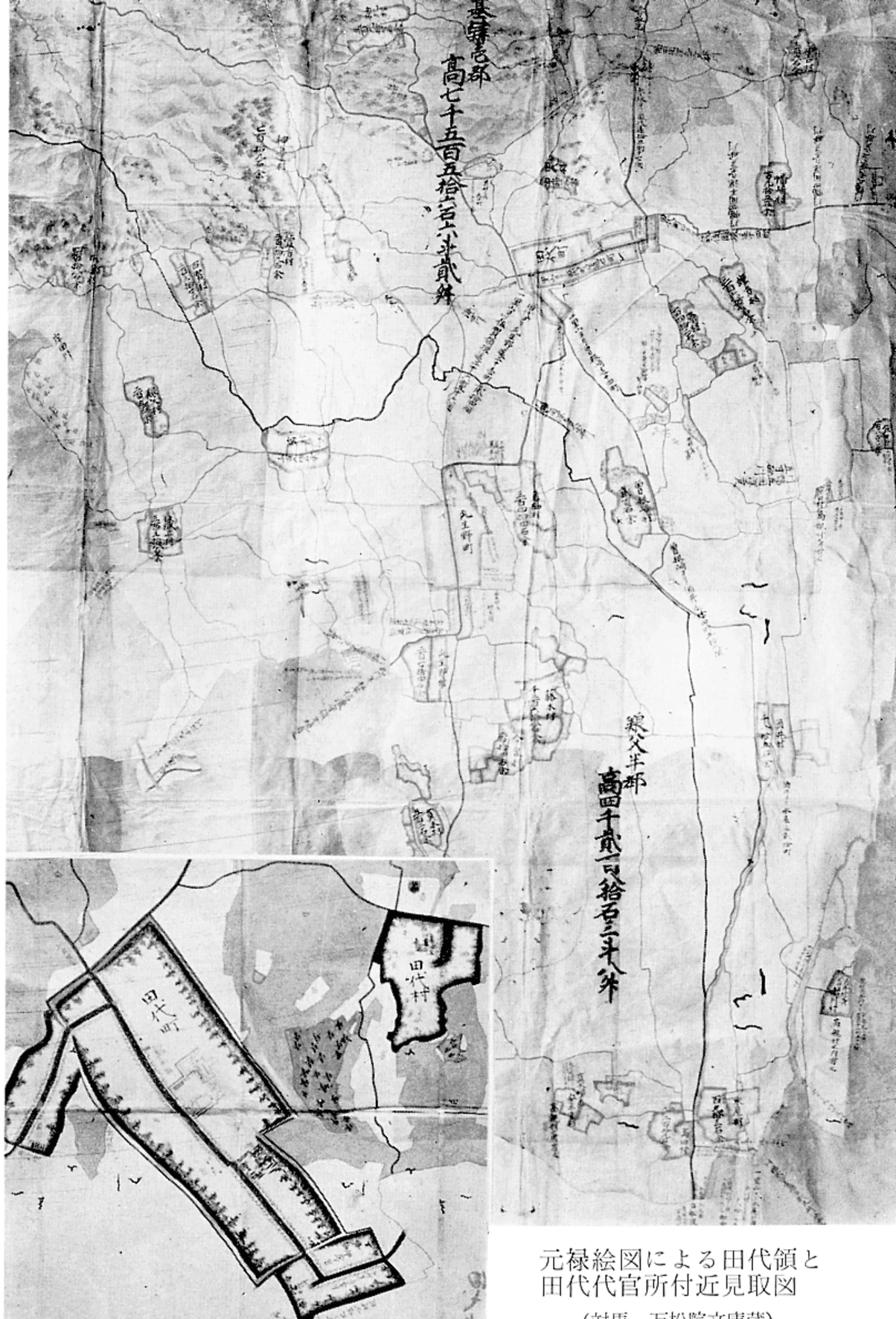


慶長年間の基肄、養父郡

慶長年中肥前之国絵図

（佐賀県立図書館蔵）

享和元年養父郡之図による田代領関係図（佐賀県立図書館蔵）



元禄絵図による田代領と
田代代官所付近見取図
（対馬、万松院文庫蔵）

第一集の刊行に当り

鳥栖市制十五年を記念して鳥栖市史の編纂をもくろみ、昭和四十二年十月に着手しましたが、ようやくその第一集を刊行することができました。

斯界で定評ある諸先生方をはじめ、郷土史家の方々のお骨折りと、そして何よりも、郷土の文化遺産を護ろうという市民のご熱意の賜でございます。

資料編は、さらに第二集以下第五集までの予定で来年三月までに続刊の計画で、その後、来年十月に本編を発刊すべく作業をすすめています。

鳥栖市史のよりよい充実のため、今後共、遠慮のないご意見や資料の提供など、皆さんの倍旧のご支援を心からお願いする次第であります。

昭和四十四年六月

鳥栖市長　安原謙市

目次

壹　從延宝四丙辰　至貞享元甲子……（一）
貳　從貞享二乙丑　至宝永五戊子……（三）
參　從正徳二壬辰　至元文五庚申……（四六）
肆　從寛保元丙酉　至宝暦四甲戌……（九四）
伍　從宝暦五乙亥　至同十一辛巳……（一一六）
陸　從宝暦十二壬午　至明和八辛卯……（一五四）
柒　從安永元壬辰　至天明二壬寅……（一九七）
扒　從天明三癸卯　至同五乙巳……（二三八）
玖　從天明六丙午　至同八戊申……（二五九）
拾　從寛政元己酉　至同二庚戌……（二八七）
拾壱　寛政三辛亥……（三一）

凡例

一、句読点をつけた。

二、当用漢字にあるものは、(五)に挙げている文字を除き、新字体を用いた。

例、抜(拔)厳(嚴)数(數)拝(拜)富(冨)

三、異体、異字は正字に直した。

例、叓(事)逃(逃)炮(砲)枩(松)扣(控)

四、平かな、片かなの別は原本どおりとしたが、変体かなは平かなに直した。

五、つぎの文字は、原本に略体を用いてある箇所には新字体を用い、正体のものは旧字体によった。

囲(圍)医(醫)円(圓)応(應)仮(假)会(會)覚(覺)学(學)気(氣)旧(舊)拠(據)経(經)芸(藝)広(廣)国(國)斉(齋)済(濟)実(實)写(寫)処(處)証(證)条(條)触(觸)尽(盡)図(圖)続(續)対(對)台(臺)転(轉)伝(傳)当(當)読(讀)廃(廢)売(賣)発(發)浜(濱)払(拂)仏(佛)辺(邊)変(變)弁(辨)宝(寶)万(萬)予(豫)与(與)余(餘)励(勵)礼(禮)炉(爐)斉(齊)灯(燈)竜(龍)窃(竊)弥(彌)胆(膽)篭(籠)

六、その他、原本どおりとしたもの。

1　助詞などの、江(え)而(て)茂(も)斗(はかり)ニ〆(にして)ゟ(より)抔(など)〆(しめ)而已(のみ)

2　地名、人名等の嶋(島)、鶴(鶴)

3　俗字のうち、縄、忰、吊、竈、歟、儘、臘、

七、原本に用いられている略字を正字の活字に用いたもの。

八、原本に終始、誤用または誤字を用いてある、つぎのものは直しておいた。

祇園(祇)爪生野(瓜)寄特(奇)牢(牢)扨抱(介)

九、(マヽ)は、原本に用いられている標記のままである。

従延宝四丙辰至貞享元甲子
日記抜書
壱

延寶四丙辰

本役、平田斎宮
佐役、賀嶋兵介　在勤

一田代町客屋四軒之外、不増様申付。田代町客屋、若キ下女なと抱置、客ニ酒もりをさせ、折〻喧嘩口論等仕、殊外不行規ニ有之、今迄有来候外ニ茂客屋可仕と企候者、数人有之由ニ付、延寶四年六月四日、四人之客屋共召寄、向後行規宜様ニ仕候得、又客屋無之候而も往還之輩ハ、何者之家ニ成共可宿候間、此四軒之外ニ客屋一軒茂増候儀、令停止候と斎兵介直ニ申付。

一川普請之奉行、其所之馳走不請様ニ申付。以前ハ三郷川普請仕候時、普請奉行之者、其普請仕候村之庄屋ゟ、其日之朝飯昼飯振舞、其費其村中之百姓失却ニ成、大分費有之候由聞届候。延寶四年六月五日ニ破損掛吉田半(マヽ)大夫、古賀次左衛門召寄、各御扶持拝領仕、其役之奉公を勤、百姓之費を請候儀、不埒千萬ニ候。向後ハ其日之普請夫を以飯取寄くひ、百姓ゟ朝昼之振舞ハ不及申、茶酒之馳走茂不請様ニと、斎兵介直ニ申付。玄関番ニ而茂川普請之奉行ニ出候者ニ如斯申付。

一安楽寺村、赤川村之百姓ニ飢飯米被下。延寶五年正月、安楽寺村百姓、赤川村百姓、両村共ニ数年田畠水損仕、何茂致困窮及飢候間、御救被下候へと申候故、家さかし迄仕、厳敷遂穿鑿候処ニ、悉及餓躰ニ極候故、飢候者にハ先飯米を借置候得と、安楽寺村赤川村之庄屋ニ申付。同年二月三日之書状を以、御国許江申上、同年三月廿九日之御返札ニ、我〻見合を以申付候得之由、被仰下候故、

同年四月二日安楽寺村十五竈之百姓六十七人、赤川村七竈之百姓三十六人、同年正月朔日ゟ三月晦日迄、壱人ニ付一日ニ米弐合宛ニして拝領申付。同年四月二日之書状ゝを以、右之趣申上。

一田代町助之丞斬罪に申付。田代新町大原八郎右衛門ニ、一年奉公仕居候介之丞、同町伊左衛門と申合、延寶四年二月廿八日、長崎林道栄方ゟ久世出雲守殿江参、唐筆入小箱壱ツ盗取候故、助之允儀、同年五月廿七日、本城河内村へ牢人申付置候。然處に助之允、同五年五月十四日之夜、田代町谷口又左衛門家へ盗ニ入候を、何茂見合捕へ候。此重科ニ依而、同七月廿二日之夜、玄関番堀江源六検使ニ申付、原村之下原ニ於て斬罪ニ申付。

一御年貢米十一月十五日限りニ、村ゝ蔵納皆濟申付。御年貢米十一月十五日限ニ、村ゝ蔵納皆濟仕候へと、以前ゟ御法度御立置候得共、終ニ如御法度皆濟仕たる儀一年も無之、此法度不立候而ハ、上之御為悪敷より、下之勝手ニ茂不成事ニ候故、延寶四年之秋其筋を委細申聞、御年貢上納催促仕候へ共、村ゝ数年之御年貢未進大分有之、其上百姓至極困窮仕居候故、御年貢如御法度皆濟為仕候儀、不相調候。如此萬納物他借之差引等迄遅滞候而ハ、還而面ゝ損失となり、災難起る事も可有候間、納物厳密ニ仕候得と、常ゝ庄屋百姓ニ申聞セ、延寶五年之御年貢小物成を、始て十一月十五日限りニ、村ゝ蔵納皆濟為仕候。此時茂数年滞居候未進ハ其分ニ仕置、其年之御年貢小物成計皆濟為仕、右未進之分ハ毎年御年貢皆濟以後ニ催促仕、少宛納させ次第ニ減、銀米共ニ無残皆濟為仕、延寶五年以来一年も無滞、其年之御年貢小物成十一月十五日限りニ、村ゝ蔵納皆濟為仕候。延寶五六年迄ハ厳敷催促仕候上ニ而、皆濟仕候得共、其後ハ御年貢小物成公役代之弐千俵米、其年返上仕拝借米等迄不及此方之催促、右之日限ニ皆濟仕。

一長崎江日用取ニ越候者、停止ニ申付。延寶六年兵介御国

へ被召寄候時、御領中之者、長崎江日用取ニ参り候而ハ、農業疎略ニ成、其上長崎ハ商賣所ニ候故、百姓風俗悪敷可成候間、長崎江日用取ニ参り候事、停止ニ被仰付可然奉存候と、申上候得は、同年八月十九日之御書付を以、長崎江日用取ニ越候者、停止ニ申付候へと被仰付、同年九月廿一日三郷大庄屋小庄屋両町別當座親町年寄召寄申付。

一種米元利共ニ御免被仰付。種米は寛永十三年丙子御米四百五拾石、一年ニ三割之利分にして御領中拝領ニ被仰付、延寶五丁巳年迄四十弐年、毎年利米百三拾五石宛上納仕候。如斯利米数十年納候間、元利共に御免被下候様ニと、御領中ゟ数度訴訟仕候得共、御免不被成候。延寶六年之夏、兵介御国へ被召寄候時、六月十七日　御前江被召出、基肆養父御仕置之儀、御尋被成候節、種米之儀以前借居候者子孫絶候得は、其村中ゟ調上納仕候ゆへ、何茂致迷惑候。近年基肆養父百姓共困窮仕、其上数十年利米被召上候間、種米御捨被下可然と奉存候由申上、同年八月廿八日之御書付を以、種米元利共ニ御免被成候と被仰付候。同年十月十三日ニ、三郷大庄屋小庄屋両町別當座親町年寄頭百姓迄召寄、種米之儀は、御小物成ニ定居候得共、数十年利上上納仕候故、今年ゟ元利共ニ御免被成候と申付。

一樹木運上銀御免被仰付。樹木運上ハ、以前ゟ村ゝ樹木壱本ニ付何程宛と、運上銀定居、御領分中ゟ毎歳百八拾匁八分五厘宛、上納仕候。然処ニ延寶六年之夏、兵介御国江被召寄候時、　御前ニ被召出候節、樹木御運上銀ハ、田畠屋敷藪竿等迄、地方不残御年貢御運上被召上、其内之地ニ有之樹木ゟ又ゝ御運上被召上候得は、二重ニ御取被遊候間、被成御免可然と申上、同年八月廿八日之御書付を以、樹木運上銀御免被成候と被仰付。同年十月十三日ニ三郷大小庄屋両町役頭百姓迄召寄、樹木運上銀、今年ゟ御免被成候と申付。

一御領中借銀借米穿鑿仕、年〻為拂候申付ヶ。近来御領中致困窮、諸人借銀借米過分ニ成行、倒百姓無際限、延寶五年之春、数竈欠落仕、其上同年六月十一日三郷ゟ訴状を以、前〻ゟ之借銀利拂も不罷成、難儀至極ニ候間、御銀三百貫匁十年之納崩ニ拝借被仰付被下候得と申上、同日田代町ゟ茂訴状を以、町中困窮仕難儀至極ニ候間、御銀五拾貫目十年之納崩ニ拝借被仰付被下候得と申上、御領分少〻治り兼候付、御国許ゟ御領分借銀借米悉穿鑿仕、何とそ差引申付候様にと、度〻被仰下候得共、此段一圓不心得候故、御請難申上由理申上候。然處ニ延寶六年之夏、兵介御国へ被召寄候時、同年八月十九日之御書付を以、基肆養父借銀借米悉穿鑿仕、年〻少宛成共拂セ致減少候様に仕候へと、堅被仰付候故、辞退不罷成御請申上、再田代江罷越精敷申談、同年九月廿一日、三郷大小庄屋両町役召寄、御領中借銀三拾匁以上、借米三俵以上、何之年月日、何村之何某ゟ何程、何村之何某、請人にハ何

一

某を立、如何様之契約ニ而借り候と記、又借り主一家之人数、年附、持分之田畠、借し銀借米をも不残帳面ニ記、差出候得、若今度不記出借銀借米有之而、後日諍論仕ニ於てハ、不及是非之決断、双方共ニ可為曲事候と申付、同年十一月廿七日ゟ十二月二日迄ニ三郷町方不残帳面差上候。同月五日より八日迄兵介村〻廻り、借り主借し主請人等迄、帳面ニ印判押せ相極、十二月十日ニ在町役〻召寄、借銀借米之法度書付を以申付候。書付写、

覚

一御領中過分之借銀借米仕居候段、被　聞召上、今度村〻町〻借銀借米之員数、御穿鑿被仰付候事。

一自今以後かりかし仕候銀米之利分、銀ハ壱月ニ壱分三、或ハ三割之五年元捨、米ハ壱月ニ弐割、或ハ三割五歩之五年元捨、被仰付候間、此暮ゟ如此差引可仕候。

附、質屋之利銀ハ壱月弐分宛被仰付候事。

一銀米かりかし仕候節ハ、かりかし主方ゟ村〻ハ庄屋、町

ハ別當座親江可申断候。庄屋別當座親承之、過分之借銀借米不為仕、不埒儀無之様ニ可仕候。若庄屋別當座親断なしにかりかし仕候輩ハ、可為曲事之事。右之趣依付仰候。堅可相守者也。

延寶六年十二月十日　　平田　斎
　　賀嶋　兵介

一

如此申付候而、借銀借米之品を、男女奉公仕借分、田畠質ニ渡置借分、男女田畠質ニ書入借分、質物書入不仕借分、元捨借之分、講に掛分と、六品に分て目録仕立候。目録之写、但目録之写略之、都合銀千三百七拾四貫五百五拾六匁四分六厘、都合米七千弐百七拾六俵弐斗七升六合七勺、右之分延寶六午年ゟ天和三亥年迄六ヶ年ニ拂、借米と他領ゟ借銀米とハ、亥年迄ニ元利不残拂、皆濟仕候。

借銀之残

一銀五拾七貫四百五拾八匁（延寶六午年極ニ借銀
天和三亥年迄払残

一同七貫七百〇弐匁（未申酉戌酉亥五ヶ年之
新借亥年迄之残分

一銀米借り主合千六百〇五人

内千四百弐拾五人（午未申酉戌亥六ヶ
年ニ皆濟仕分

残百八拾人

一銀米借質奉公仕男女合弐百九拾四人

内弐百弐拾弐人（午未申酉戌亥六ヶ
年ニ身請仕分

残七拾弐人

一銀米借し主合四百九拾五人

内四百十六人（午未申酉戌亥六ヶ年ニ借し
銀借し米不残請取皆濟仕分

残七拾九人

此分相残候。此借銀借米之儀被　仰付候ニ付て、市右衛門、六兵衛御扶助米筆墨紙、其外借銀借米帳之算用仕候庄屋共ニ被下候御米、昼飯賄並にして壱ヶ年ニ壱貫匁程宛。

延寶六戊午年

一田代町西依清左衛門、磔罪に申附。　田代町　西依　清左衛門、同町大原六郎右衛門に数年手代奉公仕候処、銀子差引之儀ニ付諍論仕、延寶五年之春、双方ゟ訴状差出候ニ付、委細遂僉儀候而、御国許江申上。清左衛門年四十九、同女房年三十八、同子市十郎年十九、同兄助左衛門年五十三、助左衛門子七右衛門年弐拾弐、助左衛門弟辰之介年十三。清左衛門儀、重科之者ニ付磔に申付。子市十郎父之科難遁候故、梟首申付。女房儀重科之者之女房に候故、斬罪に申付候得。助左衛門、同子七右衛門、辰之介儀差免、居所を替候得と、御國許ゟ被仰下。同七年十二月九日、藤木村天神木ニ於て夫〻に申付候罪科札、

此者、主人を殺たる科に
よつて、これを磔にし、
其妻をくひはね、其子を
梟首におこなふもの也

十二月　日

助左衛門、同子七右衛門、辰之介儀、城戸村江牢人申付。助左衛門儀同八年四月ニ死去。子七右衛門、辰之介ハ同五月十五日ニ牢人差免。始終之筋ハ本書ニ有之。

延寶七己未年

一田代下町横町焼火。延寶七年十二月廿六日田代下町作左衛門と申者之裏家ゟ火事出来仕、焼屋敷四拾、本屋五拾軒、物置小屋馬屋八拾壱軒、合百三拾壱軒焼候。即日斎兵介申ゟ江戸江右之趣申上、書状焼跡之繪圖、中間七郎左衛門ニ持せ發足申付。瓜生(野脱)町ゟ人夫八拾人合力可仕と申出。思寄奇特に候間、合力仕候得と申附。

一御国許江飛脚を以差上候十二月廿六日之書状ニ、類火之者共小屋掛仕儀罷成者共一圓無御座候。往還筋之儀ニ御座候得は、焼屋敷之儘にて召置候而は、見苦敷可有御座候間、小屋掛仕候様ニ、御見合を以御合力被仰付被下候得と申上候處ニ、同八年正月三日之御返札ニ、本屋壱軒に

附、御米三俵ツヽ、被成下、持山之内にて小屋道具被差免候間、見合を以拝領申付候へと被仰下候。就夫被成下候御米竹木配分仕候得共、被成下候御米竹木にて過半ハ元之ことく家作難成候故、同月十日之書状を以、類火之者中江被成下候御米竹木配分仕候處ニ、過半は今度被成下候御米竹木ニ而家作難成御座候故、田代町は往還筋にて、上使其外近国之御大名衆も御通被成事ニ御座候へは、餘り見苦敷躰ニ而ハ如何御座候間、又〻難申上候得共、今御銀壱貫五百目程類火之者中江被成下候へかし、左様御座候ハヽ、其御銀を以、我〻遂吟味家作不罷成者共斗ニ分〻相應ニ拝領申付、家作仕らセ可申候。又下代三原半兵衛、吉田孫平、玄関番原岡傳之允、類火に逢候故、家作難成躰ニ御座候。是亦御見合を以、御銀被成下候様ニ申上候処ニ、同二月朔日之御返札ニ、類火之者之内、家作難成者中ニ、御銀壱貫五百目被成下候間、見合ニ拝領申付、見苦敷無之様ニ家作仕らセ候へ。下代半兵衛、孫平、玄関番傳之允、三人中ニ御銀六百目被成下候間、見合を以拝領申附候得と被仰下候。依之右之御米百五拾俵、御銀弐百目之内壱貫八百目、其外竹木拝領被仰付候間、何とそ見苦敷無之様ニ家作仕候へと申附候。三郷瓜生野町ゟ合力仕候人夫千五百八拾人を以、面〻拝領之竹木を伐取せ候。御米御銀竹木之配分但配分略之。

合米四拾五石
合銀壱貫八百目
合柱四百八拾九本
合梁百九拾九本
合桁百弐拾六本
合さす三百三拾本
合棟五拾三本
合大床弐拾七本
合ねた百拾弐本
合敷居鴨居木弐拾六本

合小竹七百九拾三束

右之通拝領申附。残銀三百目は田代町三所之構普請之用ニ拝領申付。

延寶八庚申年

一赤川村加利川之流を鑿替候事。赤川村之加利川、東より西に流れ、水屋村利幾丸漸〻崩れ候。然處ニ延寶六年兵介御国江被召寄候時、同年八月廿八日之御書附を以、赤川村之加利川筋、唯今之分ニ而は、以後水屋村之田畠次第ニ崩れ申事ニ候間、川筋を直ニ鑿替候へと、被仰付候故、福永善介、有馬善吉に普請奉行申附、兵介附居、同八年正月九日ニ普請始、赤川之西寺野と云所を北南ニ鑿切、古川之口を埋み川筋を替、同三月十五日迄に相濟。

一鑿切新川　川之長さ九拾間／同横之上拾五間／同横之底拾間／同深さ壱丈弐尺

一古川口築塞　長さ拾八間半／横弐拾六間／高さ壱丈九尺

一東の土居　長さ九拾六間／根置弐間／築留壱間／高さ三尺五寸

一西の土居　長さ六拾七間／根置弐間／築留壱間／高さ三尺五寸

此鑿切普請に入銀之積

一銀四拾貫六百弐四匁　（川鑿夫四千六百弐拾四人之賃銀、但一日壱人に附壱匁宛）

一同七百四拾八匁　（東土居西土井築夫七百四拾八人之賃銀、但一日壱人ニ附壱匁ツヽ）

一同四拾七匁八分　普請小屋之入目

一同四匁七分　普請帳幷手形書候紙墨筆之代

一銀弐百三拾八匁五分　（鑿切普請之日数三十二日、兵介上下四人、普請奉行弐人、夫之者弐人合八人、一日に三度ツヽ之賄、雨降之小屋番弐人、日数二十二日、一日ニ二度ツヽ之賄幷庄屋三人宛之昼飯、村〻散使三人宛毎日一度宛酒飲せ候入目）

一同四拾八匁　（普請奉行福永善介、有馬善吉苦労分に銭弐貫文宛ニ而拝領申付）

合銀五貫七百拾壱匁

一銀百三拾四匁三分　（鑿切普請ニ付、ふミけし候麦芥子の代銀に拝領申付。内銀弐拾六匁五分ハ大麦壱段七畝廿歩之代。同百〇七匁八分ハ芥子四段壱畝拾歩之代）

都合銀五貫八百四拾五匁三分

延寶八庚申年

一本役、唐坊忠右衛門在勤

一田代町古賀太郎右衛門、礫罪に申付候事。延寶八年三月六日之夜、田代町吉兵衛家ニ指火仕候處、太郎右衛門と申者、拷問之上落文之儀、盗仕候儀、指火仕候儀申出。就夫太郎右衛門一類穿鑿仕候處、太郎右衛門子共両人は、延寶七年之夏、舅方ゟ引取候時、母にそへ舅方に参、太郎右衛門とハ不通仕候。兄喜右衛門も同年六月十三日ゟ太郎右衛門と不通仕居候由。右太郎右衛門年三十一、同父弥七年七十、同母年六十三、同兄喜右衛門年三十七、喜右衛門女房年三十三、同人娘年十五、同年七ツ、太郎右衛門子年十、同子三、延寶八年八月十二日之書状を以、右之趣御国許江申上。閏八月八日之御状ニ、太郎右衛門儀重科ニ候間、礫罪ニ申附、罪科札等立、太郎右衛門一類共、御國江差渡候へ、其内太郎右衛門女房は、去夏舅方ゟ引取、各江申断不通仕候ハヽ、女房幷子共被差渡間敷候。太郎右衛門兄喜右衛門儀も、各へ遂案内不通仕候ハヽ、其元江召置候へと被仰下。太郎右衛門儀、藤木村天神木ニ於て礫罪に申付。罪科札に、

此もの、さし火仕たる
科によつて、如斯
をこなふもの也
九月　日

太郎右衛門女房儀、舅方ゟ引取、伊三郎、小四郎両人、太郎右衛門と不通仕候儀、兼而我〻へ不申断候。然共太

郎右衛門女房義、去年六月太郎右衛門方を出、同九月小四郎を連、田代町吉兵衛ニ合宿仕候へハ、太郎右衛門女房、同子小四郎と不通之儀、実正ニ而御座候。伊三郎儀、太郎右衛門舅之方へ参居候得共、太郎右衛門と不通之儀、證據無御座候。太郎右衛門兄喜右衛門儀、太郎右衛門と不通仕候義、我〻へは不申断候得共、去年六月十三日に不通仕候段、太郎右衛門十人與共ニ申断候と申、與之者共も承届と申候段申上候得は、同十月十三日之御札ニ、太郎右衛門と不通仕候太郎右衛門女房、同子小四郎、太郎右衛門兄喜右衛門儀は、其元江召置、太郎右衛門父母伊三郎儀は、御國へ差渡候へと被仰下。同年十二月十三日太郎右衛門父母、同子伊三郎、合三人為宰領、中間佐次右衛門御国へ差渡。

天和元辛酉年

一鉄砲始申達。田代御奉公人、何も鉄砲之習疎略ニ見候故、為鉄砲習、天和元年辛酉年正月二日、於廣間之庭、御奉公人斗鉄砲始為仕、其人数之内ニ而當り勝れ候者ニ、為祝儀銭壱貫文拝領申付。天和三年之正月迄毎年鉄砲始為仕候。然處ニ御簡略ニ付、貞享元年正月ゟ鉄砲始相止候。

一他領之日用取不傭様ニ申付。他國ゟ日用取ニ来候者、其所之往来切手をも所持不仕、何國之者共出所難知候へとも、日用賃下直ニ候故、何も心安存傭候。就夫悪敷者多入込、田代町ニ而度〻盗抔仕たる儀有之候。如此に候而は、盗さし火等可仕も難知、本國より如何様之異難可申来も難斗候。其上當時御領中之者大分餓に及、他國へ日用取ニ出る者多候故、御領中之日用を傭候へは、御領分之餓百姓ためにも宜候。依之他國之日用取傭候儀令停止候と、三郷大小庄屋両町役ニ申付。

水入村餓人之内、及餓死者ニ服薬仕せ候事。

一天和元年之春、水入八ヶ村之飢百姓男女千四百三拾弐人に、飯米六百三拾八俵壱斗三升五合被下候へ共、男女顔色黄になり腫候而、可及餓死者、逐日出来候故、村〻穿鑿仕、拝領米之内ニ而飯米弐拾壱俵九升弐合五勺加増申付。酒井赤川水屋高田村ニは馬場春洞庵、藤木今泉真木安楽寺村ニは奥村立越を申附服薬仕為、其上ニ而兵介、右之村〻病家毎ニ廻り、看病之仕様、家居破損之修理等、其庄屋其與中ニ申付。

都合病人百九拾七人（内拾四人死 残百八拾三人本腹(復)）

都合煎薬散薬丸薬三千八百五拾壱貼

内千九百弐拾九貼春洞庵薬

千九百弐拾弐貼立越薬

右拾四人之死ハ極老、或ハ飢にあらさる病症ニ而相果、壱人も餓死不仕。右両人之醫者江薬料見合ニ申付候へと被仰下候故、春洞庵ニ銀拾枚、立越ニ銀拾枚拝領申付。

基肄郡を字を改、基肄郡ニ改。

〻ゟ御領之きの郡を基肄郡と書候而、きし郡と云来候の国と唱へ申例にて、きの郡と唱へ申由、基肄郡之字、御拝領之　御判物ニ有之字ニ而御座候哉、左様無御座候ハヽ、御改被成如何可有御座哉と申上候處、御拝領之御判物ニも基肄郡と有之候間、基肄を基肄ニ改候得と、被仰下候故、大庄屋両町別當召寄、以前ゟ書来候基肄郡ハ誤ニ而候間、自今以後、基肄郡と書候而、きの郡と称へ候と申附。

水入村ニ馬飼料銀拝領申付。延寶八年十一月朔日、赤川水屋真木安楽寺高田之庄屋ゟ田畠水損ニ付、馬飼申儀不成、赤川村ニ馬四疋、水屋村に馬弐拾弐疋、真木村ニ馬七匹、安楽寺村ニ馬拾壱疋、高田村ニ馬弐拾弐疋、合馬六拾六疋及飢難儀仕候間、馬壱疋ニ付、銀拾五匁ツヽ拝借被仰付被下候様ニ申出。同月七日願之通、馬壱疋ニ付、拾五匁ツヽにして、赤川村ニ銀六拾目、水屋村ニ同三百三拾目、真木村ニ同百〇五匁、安楽寺村ニ同百六拾五匁、高田村ニ同三百三拾目、銀九百九拾目拝借申付、其趣御

國許ニ申上、其後今度拝領被仰付候千俵之残米八拾三俵
弐斗九升弐合六勺を、代銀壱貫七百弐拾壱匁四分九厘ニ
賣、此代銀之内ニ而、右之九百九拾目、天和元年六月五
日ニ馬飼料銀借り主に拝領申附。拝借仕居候馬飼料銀九
百九拾目皆納為仕、右九百九拾目之残銀七百三拾壱匁四
分九厘ハ、麦種買用銀ニ拝領申付。

一水入村麦種買用銀拝領申付。延寶八年閏八月廿八日、赤
川水屋真木安楽寺高田村之庄屋ゟ、水損ニ付麦種調申儀
不罷成、難儀仕候間、右五ヶ村御銀弐貫目拝借被仰付被
下候へと申出。然共大分之儀ニ候故、願之内減候て、同
年九月十二日ニ赤川村ニ御銀百弐拾六匁、水屋村ニ同三
百三拾匁、真木村ニ同弐百五拾匁、安楽寺村同百九拾四
匁、高田村ニ同弐百九拾目、合壱貫百九拾目拝借申付。
其後馬飼料銀拝領申付候残銀七百三拾壱匁四分九厘、去
未年被成下候千拾三俵弐斗壱升之残米四拾三俵弐斗壱升
賣候代銀之内、四百五拾八匁五分壱厘を加へ壱貫百九拾
目、天和元年六月五日ニ麦種買用銀借り主ニ拝領申付。
拝借仕居候麦種買用銀壱貫百九拾目納させ皆濟仕。

一御巡見　上使、御領分之御仕置御穿鑿。天和元年辛酉三
月ゟ十月迄、御巡見　上使諸国御廻被成、州郡村里迄之
政事厳敷御穿鑿被成候付而は、江戸ニおいて田代へも御
越可被成哉と御窺被成候へハ、様子ニより御越被成儀も
可有之と被仰、於御國茂田代江も御越可被成哉と御窺被
成候へハ、先年之　上使も田代へ御越不被成故、今度も
先例之通、御巡見被成間敷と被仰候由、然共不圖御越可
被成も難知候故、諸事御越之用意仕、九月十三日、三郷
大庄屋村ゝ小庄屋両町別當座親年寄召寄、今度御巡見
上使國ゝ御廻り被成、諸事御尋被成候間、當御領分ニも
御越被成、御尋之儀有之候ハヽ、不依何事有躰ニ申上、
何そ訴訟仕度儀候ハヽ、心次第申上候へ、此趣下ゝへも
不残申聞候へと申附。又書付ニ而大庄屋御返答申上條
ゝ。但條ゝ略之。

右四拾壱ヶ條有躰ニ申上、此外不依何事御尋之儀、少茂
偽申間敷者也。

酉九月十三日

右之書附、大庄屋小庄屋別當座親年寄共ニ渡。此條目御
尋被成候時、若不存知と申上候ハヽ、其方共不知して不
叶役目之事ニ候故、偽候と可被思召候間、能覚居候而申
上候へと申付。其後九月廿一日御巡見使奥田八郎右衛門
様、戸川杢之助様、柴田七左衛門様、筑後久留米江御越
候時、忠右衛門は病氣に有之、兵介斗久留米御巡見使之
御宿ニ罷出、私儀　宗對馬守領分肥前國基肄養父に申附
置候賀嶋兵介と申者ニ而御座候。　上使御三人様、今度
基肄養父江御越被成も不被成も未致承知候。先頃對馬守
年寄共方ゟ對馬江御渡之筋、此度基肄養父江御越可被遊
哉と、奉窺候處ニ、御越被成間敷と被仰候由、申し越承
り候。然共近邊御通被遊候故、万一御越被遊事茂可有御
座哉、左様御座候ハヽ、御宿拵等可仕候、又御用等も可
被仰付候哉、此段為可奉窺致参上候。私相役に唐坊忠右
衛門と申者御座候得共、唯今病氣ニ御座候処、今日参上
不仕、私斗参上仕候と申候處に、奥田八郎右衛門様御逢
被成、御領分之事共委細御尋被成候故、悉返答申上候得
は、八郎右衛門様もはや田代ニハ御越被成間敷候間、庄
屋別當を四五人筑後本郷へ差出候へ、彼地ニ而基肄養父
年貢小物成運上物、其外諸事之様子可尋候と被仰奉畏
候。乍然何も愚成者共ニ御座候故、御尋之儀埒明候様ニ
御返答可申上哉、無心元奉存候と申上候へハ、八郎右衛
門様何方ニ而茂尋候事、有様ニ申候得は、此方心遣も少
く候へ共、何も偽候故、難儀仕事ニ候と被仰、左様御座
候ハヽ、基肄養父年貢小物成納帳五三年分諸運上定帳、
庄屋共ニ持せ可指上候。是を御覧被遊候ハヽ、納物之義
は悉相知可申候と奉存候。惣而基肄養父、對州ニ隔候儀
及百里候へは、毎事對馬守江尋候而仕儀難成候。對馬守
兼ゝ申付候は、領中之者　公儀之御法度を堅奉守、自分

之法度少茂不背、隣国ニ對し無調法成儀不仕、他國江出入仕候共、其所之法度を不侵様ニ申付候へと、代官共ニ申附置、諸事ハ代官計ひ申事ニ御座候。誠に私躰之者下知仕事ニ御座候へハ、於本郷基肄養父之庄屋共被召出、御聞被遊候て、如何程も不宜儀可有御座候。然共　對馬守曽而存不申候。無調法之段ハ皆以我ゝ所為ニ而御座候と申上候得は、八郎右衛門様右之帳なと見候へは、相濟事ニ候へ共、何方ニ而茂其方之様ニ申たるものハ無之候と御褒被成、柴田七左衛門様も御逢被成、同前之御事ニ候。戸川杢之助様ハ御逢不被成、同月廿三日筑後本郷町上使八郎右衛門様御宿江、下郷大庄屋原孫兵衛、今泉村庄屋古賀市右衛門、（養父郡大庄屋天本長十郎代）城戸村庄屋梁井藤兵衛、水屋村庄屋大石甚兵衛、高田村庄屋倉成五兵衛、田代町年寄永見庄左衛門、瓜生野町年寄今村庄右衛門、此三人ニ大庄屋方ニ請取置候御年貢帳、御小物成帳三年分、御屋敷ニ有之諸運上帳一冊、地方納物定帳一冊、村ゝニ有之御高札之写一冊、御壁書之写一冊もたせ、兵介より八郎右衛門様御家頼米山権之允方へ書状付遣。於本郷孫兵衛、市右衛門、兵介より権之丞方へ遣書状、八郎右衛門様御宿江持参仕、萱野長右衛門と申人を頼、指上候處ニ、其後八郎右衛門様御宿ニ七人共ニ被召出、米山権之丞、米山太郎兵衛出逢、御領分御仕置之儀、諸事僉議被仕候故、右之帳面悉見せ、其上ニ而百十ヶ條被尋候得共、少茂無滞返答申候。申年之飢饉ニ基肄養父ニ餓死無之哉と被尋候時、一人も無御座候と申上候へハ、其方なとは偽を申候と、甚しかられ候。少茂偽を申上候事ニ而無御座候。兼而代官ゟ上使様御越被成、御尋被成儀候ハヽ、何事ニ而も有様ニ申上候へ、訴訟仕度事あらば心次第申上よと、被申付候。如此御巡見被遊儀、乍恐我ゝ式迄忝奉存候故、不限此事毛頭偽不申上候。基肄養父ニ餓死壱人も無之段は、隣國ニ隠無御座候間、當所ニ而も御聞被成候得と、何も少ゝ怒り無憚申候へは、権之丞、

太郎兵衛被申候は、基肄養父は仕置能と見へ候。此間国ゝ廻り諸事尋候へは、偽斗を申、其方共之様ニ申たる者ハ無之候と、褒め被申、権之丞方より兵介方へ何もニ尋候儀、無残所埒明候て、八郎右衛門様茂御悦被成之由、返書を付被返候。右七人之者共ニ被尋返答申候趣、一冊ニ書付差上有之、兵介久留米へ出候次第茂一冊ニ記置、此二冊ニ精敷見候故、今爰ニ略す。忠右衛門、兵介申ゟ御年寄衆中江九月廿九日之書状を以、右之趣申上、兵介御返答之書付一冊、庄屋御返答之書付一冊、是亦書状ニ相添差上。

天和三癸亥年

一衣服之御制度申付。御国許ゟ之天和三年四月五日之御状ニ、従　公儀被　仰出候衣類御法度之御書付之写二通、同月十九日ニ相達、致拝見候處ニ、衣類御法度之御書附之趣、御領中ニ申附候得、此御書付之趣ニ而は、百姓共絹紬着仕候而も不苦事ニ候へ共、當地之百姓、木綿麻布之外一切着不仕様、被　仰付候間、其許百姓之衣類も同前ニ申付候へ、大庄屋なとは百姓とハ違申候間、絹紬着仕候而も苦間敷候哉、指圖難仕候間、各了簡を以申付候得と被仰下候故、同廿一日三郷大庄屋小庄屋両町別當座親町年寄其外出家神主召寄。

衣服御法度書之写

覚

一祭禮法事弥輕可執行之。惣而寺社山伏法衣装束等萬端かろく可仕事。

一町人舞ゝ猿楽は、縦雖為御扶持人、向後刀さすへからさる事。

一百姓町人之衣服、絹紬木綿麻布以此内應分限、妻子共可着用事。

一舞ゝ猿楽右同断。但役相勤時分ハ熨斗目不苦事。

一惣而下女はしたハ、布木綿可着之、帯同前之事。

以上

亥二月　日

先日相觸之通、町人衣類之儀、御定之外着仕間敷候。尤縫之紋付上帯下帯半襟鼻紙袋巾着等迄、絹紬木綿麻布之外、一切着無用候。若相背者有之候ハヽ、曲事可被仰付候。弥堅相守可申候。以上。

亥二月廿三日

右之趣従公儀被仰出候間、御領中堅奉守候様ニ被仰付。若違犯之輩於有之は、可被行厳科候。以上。

亥四月廿一日　　兵介
　　忠右衛門

如斯書付を以申付。三郷両町ニ右書付之寫一本宛渡、又忠右衛門、兵介口上ニ而申附候は、出家神主山伏官位有之輩は、神事佛事等相勤候節ハ、紬ひの絹羽二重、此内を以官位ニ應し着仕、常ニ衣服は質朴ニ可仕。無官位出家神主山伏は、布木綿之外着用仕間敷候。

本道外科共ニ醫師之衣服、庄屋別當町年寄並ニ可着用、大庄屋小庄屋別當座親町年寄同女房之衣服、以前ゟ申付置候通、木綿紬ひの絹麻布木平布さらし布可着之。同子共は木綿麻布之外着仕間敷候。其外着用仕分限之者、是亦以前より如申付置候、男女共ニ四拾歳以上、紬ひの絹下着に仕儀免之。然共上ニは襟帯鼻紙袋巾着等迄絹之類一切着用仕間敷候。帷子ハ地布着用仕、上方布は高宮布之外、着仕間敷候。井手五右衛門、梯七郎右衛門儀、御國町人之儀ニ候故、五右衛門母、七郎右衛門妻子、只今迄は衣服之制法不申付候へ共、自今以後御国町人之妻子ニ如被仰付候木綿紬ひの絹麻布木平布曝布之外、着用仕間敷候。

真宗官位有之出家之女房は、紬ひの絹着仕儀免之。同子供は木綿布之外、着仕間敷候。真木村城傳、高田村城瀧しふんの座頭ニ候間、官位之衣服ハ格別、常之衣服は布木綿之外、着仕間敷候。

同妻子之衣服、是亦庄屋別當町年寄共之妻子並ニ着用可仕候。

辻養仙、下村庄左衛門ハ、牢人醫之儀ニ候故、衣服如前ゝ着仕候様ニ申附候。

百姓町人刀さし候義、以前ゟ制禁ニ申付置候通、弥堅可相守、此以後他國江出候共、刀指間敷候。

一河内山、本城河内山へ入者、火うち道具持参儀、停止ニ申付。天和三年四月十一日、河内山ニくわんのかやのたひら少焼候。如何様之者火をあやまりたるも不相知候。御領中ニは河内山、本城河内山ゟ外ニ木山無之事ニ候へは、向後とても萬一火をあやまり、右之山を焼候而ハ大なる災に候故、同年五月廿一日ニ、河内山、本城河内山ニ入候者、火うち道具一切不可持参、若相背者有之は、曲事ニ可申附候と、大庄屋小庄屋別當ニ申付。本城河内村庄屋弥左衛門、河内村庄屋吉左衛門ニ茂右之趣申聞、山ニ入候者度ゝ改候へと申附。

一田代町客屋ニ四十歳以下之下女、不召仕様ニ申付。田代町客屋共、若き下女抱置、宿り客多有之、殊外不行規ニ候故、延寶六年三月十九日、三十歳以下之下女不召仕様ニ申附置候得共、三ツ五ツほとハ年を偽、三十以下之下女も召置、不行規難止候由聞届候。就夫天和三年五月廿一日、田代町客屋共、四十歳以下之下女召仕候儀、令停止候と堅申附。

一小原の者を百姓ニ為仕。小原之者、空也上人之流九品念佛宗ニ而、本寺は六波羅密寺と申、小原之頭之家を西法山金光寺と號シ、阿弥陀を本尊に立、小原之頭を代ゝ泉阿弥と云ひ、狂言躍を家業として暮し候へは、近来すぎわひ有かね、何れも致困窮、御年貢不納仕、或ハ他方之ばくちうち、いたつらものを集、其上葬礼も小原之頭泉阿弥執行、寺僧を不頼候。以前ゟ宗門改ニ寺手形をも不取、念佛宗と申、面ゝ誓旨血判仕候而相濟、御國へ差上候、宗門改之目録ニは浄土宗ニ加り来候。然により常ゝ

小原之頭其外之者共ニ、其方共ハ穢多乞食之類にして諸人いやしめ、百姓町人も座を同せさるは、其方共人倫之道ニあらさる事を家業とする故なり、何とそ今之家業をやめ、農民ニ成可然と度〻申聞候。就夫延寶八年、伊左衛門一家田代町ニ移り、安左衛門一家曽根崎村ニ移り、天和元年傳左衛門一家本城河内村ニ移り、平左衛門一家藤木村ニ移り、此四竈之者斗得心仕、家業を止百姓ニ成候得共、餘は業をかへす候故、天和三之春、小原之頭分之者其外数人召寄、其方共之九品念佛宗、其方共至而尊き様ニ申候得共、世之中ニ其方共と同家業之者斗念佛宗ニ而、其外士農工商共ニ念佛宗之者壱人も無之候。是を以宗旨之不尊を悟り、浄土宗か真宗かに成間敷やと申聞候へは、何れも真宗ニ改候。其後又他村ニ移り百姓仕候ハヽ、家移候様ニ竹木銀子くれ可申と申聞候故、小原之者九竈、何も百姓可仕と届候付、同年六月朔日、右九竈中ニ連〻之科銀有之候を、弐百目柱百弐拾八本、小竹七束拝領申付。半左衛門一家、新之丞一家は瓜生野町、惣三郎一家は曽根崎村、権之進一家は藤木西村、甚右衛門一家と吉郎左衛門一家は鳥栖村、権三郎一家は本瓜生野村、惣左衛門一家は今泉村、市左衛門一家は藤木村東村江移り、何も百姓ニ申附候。依之小原之者共十三竈、男女六拾壱人百姓ニ罷成。

一瓜生野町別當年寄ニ役料地申附。村〻庄屋田代町別當座親、何も以前ゟ役儀之給分被仰付置候へ共、瓜生野町別當年寄ニは、少之給分も不被仰付候。然處ニ田代町太郎右衛門指火仕候科ニ依て闕所申附候故、田壱畝弐拾壱歩、畠九畝拾八歩召上候。上郷大庄屋久保山與三左衛門、欠落仕候科ニ依て闕所申付候故、役料地之外田三段七畝弐拾八歩、畠五段八畝拾八歩召上候。二口合田高四石四斗六升壱合、二口合畠高四石五斗八升壱合有之候。就夫天和三年七月晦日に孫平を以、瓜生野町別當青木善七、年寄今村庄右衛門召寄、以前ゟ瓜生野町別當年寄役之給分

無之候故、宮浦村田代村ニ有之上り地、

宮浦村分

〆田三段七畝弐拾八歩

此高四石三斗弐升五合

〆畠五段八畝拾八歩

此高四石壱斗〇壱合

田代村分

〆田壱畝弐拾壱歩

此高壱斗三升六合

〆畠九畝拾八歩

此高四斗八升

合田三段九畝拾九歩

此高四石四斗六升壱合

合畠六段八畝六歩

此高四石五斗八升壱合

此分別當年寄給ニ申附候間、右之田畠賣払、其代銀を以、瓜生野町近所ニ田畠を買調、各等分に分所持仕候へと申附候也。

貞享元甲子年

一本役、龍田三右衛門在勤

正月之門松不立様申付。

一以前ゟ毎歳、御屋敷正月門松之椎木、男柱さひはち八三郷ゟ納、年木を立、男柱さひはち年縄年木等かさり、十二月晦日之晩、正月朔日、二日、三日之朝晩、同五日、七日、十四日之朝、上之御賄ニ而膳を備へ候處ニ、天和三年、三右衛門御國出船之節、同年七月廿八日之御書附を以、正月之門松ニ松を年木ニ結添立候へ、松年木持参候者ニ酒給させ候義、無用ニ候と被仰付候。依之同年之暮ゟ御門斗、年木ニちいさき椎木を立、其外は門松不立、賄等停止仕。

一他國之日甲 取傭候儀、貞享元年十一月廿三日申達有之候。天和元年二月六日ニ他國ゟ日用取ニ来候者、其所之

往来切手をも所持不仕、何國之者共出所難知候得共、日用賃下直ニ候へハ、何も心安存傭候故、悪敷者多入込、田代町ニ而度〻盗なと仕たる儀有之候。如此候而は、盗さし火可仕も難知、本國ゟ如何様之異難可申来も難斗候。其上當時御領中之者大分餓ニ及ひ、他國江日用取ニ出候者多ゥ候故、御領中之日用を傭候得共、御領分之飢百姓為ニも宜候。依之他國之日用取候儀、令停止候と申附置候。然處ニ近来は御領中ニ日用取少く候而、不自由ニ有之様ニ聞及候間、自今以後、他領之日用取傭候儀、差免候間、往来切手見届、慥成者を傭候へ、往来切手不持者を傭候者有之ハ、可為曲事候と、三郷大庄屋両町別當座親年寄ニ申附。

謹言上

御領中、延寶元年之比ゟ困窮至極仕、諸人借銀借米重り、年〻倒百姓大分ニ罷成、妻子田畠を沽却仕、身を賣、親兄弟を捨欠落仕、相續而如何程欠落可仕も難知様ニ罷成候処ニ、賀嶋兵介様御領中困窮之様子御僉議被成、唯今之御所務ニ而如此困窮仕筈有之間敷と被仰、御法度正しく被仰付、男女ニ儉約厳敷御勤(綱)させ被成、堤川之御普請、山林田畠農業之事迄宜被仰付、度〻訴訟申上候種米樹木銀、願之通御免被下、飢饉之時節ハ数年餓飯米拝領被仰付、其上午年ゟ御領中借銀借米御僉議被成、借銀千九拾五貫弐百目餘、借米五千八百七拾俵餘、借り主千六百五人、借銀之方ニ質奉公仕男女弐百九拾四人御座候。是にも少〻御費被　遊、借り様之品御吟味被成、夫〻相應ニ御拂せ、借銀借米悉拂、此外色〻御恵ミを蒙、何も御領中安堵仕候。　上之御厚恩我〻子〻孫〻迄、難有奉存上候。次ニは兵介様十年之御在留中、御同役平田斎様、唐坊忠右衛門様も御同前ニ御私なく、我〻不及所迄御心を被盡、御苦労被成候段、難忘奉存候。右之ことく重〻蒙　上之御厚恩罷有候而ハ、冥加恐敷奉存上候故、為御禮乍少分、御領中ゟ米百五拾石宛、毎年

進上可申上候間、被　召上被下候ハヽ、辱奉存候。左様御座候ハヽ、此米を御禮米と申御小物成ニ定、永〻迄上納可申上候。此趣宜被仰上可被下候。以上。

貞享元年　　三郷百姓中

田代町別當座親年寄四人各　連　判

瓜生野町別當年寄弐人　各　連　判

九月二日

村〻庄屋三拾人　各　連　判

三郷大庄屋三人　各　連　判

右書附之趣見届候。然共我〻如何様共難申付候間、御國江申上、御返答次第ニ可申付と、三郷大庄屋両町別當ニ申付候。就夫御國許江同月十五日之書状を以、右之趣申上候處ニ、同年十月十四日之御返札ニ、御領中訴訟之趣奇特ニ存候。即江戸表へ遂案内候間、進上仕米、庄屋共手前ニ用意仕置候様ニ、江戸ゟ御左右次第如何様共可申遣候と被仰付。

従貞享二乙丑至寶永五戊子
日記抜書
貳

貞享二乙丑八月二日

一本役、仁位助之進
佐役、内野才兵衛　在勤

一我等何方江参り候共、作所ニ出居候百姓共皆〻笠を取、仕事を止メ礼を仕候儀、必無用ニ候。道端ニなと居合候ハヽ、笠は取候共、仕事は不止候様、申付候得、他国之侍衆被通候節は、以前之通随分慇懃ニ禮を仕候得と申付。

三丙寅四月十四日

一三郷両町共ニ殊外無礼ニ有之由聞届候。此後無禮ニ無之様ニ申付候様ニ、在町役〻ニ申付候得。若無礼仕候者有之ハ、一廉可申付と申付。

十二月廿五日

一孫平、門平、半左衛門召出。昨日御国ゟ被仰下候は、籠舎申付置候、本瓜生野村喜左衛門儀、父之顔に疵付、其上欠落仕候重科之者ニ候間、所〻引渡し磔罪に申付候様と、昨日御国より申来候間、今日磔罪に申付、則罪科札認渡之。

此もの、おやと口論をし、おやの顔にきり疵を付、かけおちしたる科によつて、如斯おこなふもの也

月　日

四丁卯六月五日

一本役、仁位助之進在勤

一昌元寺町ニ人集り居候様子、為遂吟味候處、姫方村戒圓寺を呼ひ、法談仕らセ候由、前〻ゟ在家ニ而法禮仕候儀、停止申付有之候得は、自分以後、在家にて法談仕候儀、無用ニ仕候得と申付。

八月朔日

一隣国江芝居有之由相聞、見物に参り候儀、停止申付。

十月十日

本役、瀧六郎右衛門
佐役、上田武兵衛　在勤

一萱方村田捨り穂見仕候時、四之捨り之札立居候田を見候處ニ、余りからく見へ候故、庄屋を召寄吟味仕候得は、七郎左衛門申候は、ためしを取候而付置申候由申候。然共無心元存、例を取見候得は、七之捨り之例にあたり候故、四之捨り之段ニ而右田斗を七ノ捨り申付、庄屋七郎左衛門ニは、自今以後念を入、ケ様之儀不仕様ニと申付。

十一日

一藤木下モ田穂見仕候時、東村分ニ六之捨り之田を見候處、抜群からく見へ候ニ付、何も見分仕、八ノ捨りと見及候故、六ノ段を弐坪見合候得は、何もからく候故、右見候田壱坪は八ニ直し、後弐坪ハ七ニ直す。

十三日

一御壁書之趣、毎月一度宛百姓等へ讀聞セ可申事。

一郷中百姓方ゟ貫銀之内、費有之候而は、百姓迷惑仕事ニ候条、毎歳貫銀費無之様ニ可仕事。

一郷中堤川普請之儀、無油断可申出事。

一御領分之者、長崎江日用取ニ参候儀、壱人も無用ニ候。尤外之用事有之而罷越後儀は、可為格別事。

一村〻庄屋共之内、身持悪敷不似合致仕方、徒に日を暮、忘農業候族有之候而は、其所之百姓弥身持悪敷罷成、無働ゟ耕作致疎略候。忘家職商賣事等仕、不仕合ニ候得は、行當難儀仕候間、兎角庄屋自身働見セ候ハヽ、其所之百姓働宜可罷成候条、庄屋無断絶作所江立廻、諸事申

付可然候。若又其村中に身体難續百姓有之候ハヽ相救、其上にて難續者は可申出事。

一借銀借米仕居候者、上納皆濟無之、以前借し置候者方〻押江不可取候。若借銀借米仕候百姓、不作を以返弁難成候ハヽ、無其勘弁無体に利上仕、田畠を押江取、非法之差引仕候族無之様ニ可仕事。

一下代役目付之者、村〻為見分節〻可差越候間、庄屋并百姓等無怠家業を可相勤候。下代役目附之者罷越候時分、少も其所之造作ニ不罷成様ニ申付置候間、弥以百姓之費無之様ニ可仕候事。

右之條〻相守候様申付。

十四日

御領中悪人之穿鑿斗有之、善人之吟味無之候ニ付、以前行跡宜候者も至近年、身持悪敷罷成候由承届候故、行跡宜者有之候ハヽ、申出候様ニと口達書を以申付。其書付。在町不依男女、行跡宜者有之候ハヽ、其品〻を分ち、其所之役人〻可申出、縦令唯今迄無作法ものたりといふとも、悔前非相改〻善行於有之は、為善人之条、是亦可申出候。

十五日

一御領中ニ行跡宜者可有之候間、其品〳〵を分可申出候。唯今迄行跡不宜者も相改、善行有之者候ハヽ、是亦可申出と書付を以申達。委細後ニ記有之。

十六日

一大庄屋梁井藤兵衛出。昨日被仰付候趣、一〻奉得其意候。村中ニ早速可申付候と申候ニ付、六郎右衛門致面談、三通之書付之通、弥堅申付可然。扨亦當年は豊年ニ付、百姓共も心緩り、農業油断仕候儀も可有之候間、凶年と相心得、随分精を出し候様ニ可申付候。先日捨り穂見ニ罷出候刻、田畠耕し候者之内ニ好〻着物抔着仕、致耕作候者及見候。重而其通無之様ニ申付可然候。百姓之内及困窮候者、身体持直し候様に仕様は、有之間敷候哉

と申聞候處ニ、藤兵衛返答仕候は、御年貢之御免相、輕く被仰付候而も、為窮民差而宜儀も無御座候。子細は田畠繩ニ所持仕候者、又は所持不仕者も多候得は、納方茂繩之儀ニ候故か、宥免を蒙り候而も、繩之御救ニならてハ成不申故、身体を持直し申程之儀は無之候。唯漸屋敷之御行規正しく被仰付、諸事御法度稠敷、費無之様被仰付候得は、惣百姓心入も違、少之費も無之様ニ仕候ニ付、身持能罷成、身体を持直し申事ニ御座候。百姓之儀は、御屋敷御風儀相窺、御見まねを仕事ニ候故、時代ニ〻我〻〻何分ニ申付候而も曽而承引不仕、身持悪敷罷成申事ニ御座候。偏に御屋敷之御風儀次第ニ而御座候由申候。此段尤千万ニ存候故記置之。

廿三日

一如例年、今時分〻鉄砲打候儀、堅禁制ニ申付候。若相背者有之ハ、曲事ニ可申付と申達。

一於當町盗賊或は博奕等仕者有之由、聞届候ニ付、十人組中致僉儀、行跡を相改候様ニと書付を以申渡置候。其後遂吟味、異見等申聞候哉、無心元存候事。

一若右之通斗ニ而は、吟味相詰申間敷と存候ハヽ、遂相談如何様ニ仕可然候哉、存寄之通急度可申出事。

一右之者共、加異見候而も行跡を不相改候ハヽ、入札を以申付、其札之通ニ可遂僉儀候間、其通無之内ニ行跡を改、家業を勤、身持を相慎候様に可申付事。

一町中組〻僉儀之儀、如何様ニ相勤候哉、亦は行跡相改候哉、為可聞届目付ニ申付、或は密〻令穿鑿候間、聊油断仕間敷事。

右は至頃日も、方〻ニ而盗等仕者多有之由聞届候ニ付、如斯申付。

元禄元戊辰正月十五日

一不依男女立退候者、或は欠落者之類、一日片時も不可留置候。若相背者於有之は、宿主之儀は不及申、拾人組或は其所之役筋之者迄、可為曲事候。自然隠置候段相知、

本国本主ゟ召捕度之由にて其所に付届有之ハ、急度遂案内可請指圖候。萬一不相断押込召捕候儀有之候ハヽ、郷中は其村中之者、両町ハ其町中之者不残罷出指留置、是又急度遂案内可受差圖候。縦令如何様之儀有之候共、決而不可相渡候。客屋たりといふとも案内之儀、可為同前之事。

右之條〻申付。

十六日

一大庄屋三人、両町役に申渡候は、其方抔小庄屋中之身持能見分仕、若身持等悪敷庄屋有之候ハヽ、直り候様ニ異見を加へ候得。其上にて承引不仕候ハヽ、此方ニ申聞セ候得。申迄は無之候得共、御壁書之通り万事助合相勤候得。往来切手等不持者ニ、弥立宿をも借し不申様、別而両町之別當座親乙名共、随分吟味仕候得。惣而悪事は平生心を付、不申付候得は、小事ハ大事ニ成物にて候間、片積りたる様に存儀も可有之候得共、随分常〻吟味可仕。

一村〻にても町方ニ而も身持之儀、身上宜者共、頭役之者共、被申仰付候儀などを疎ニ仕、公用之時抔作病等仕、下知も不承者必可有之候間、其通之儀無之様ニ申付候得。此以前博多抔に無用ニ出、五日も逗留仕、身隠徒をも仕たる者有之由聞及候。博多ハ悪所有之候間、其通之儀無之様可仕候。不替儀をケ様に申聞置候上、其方等不調法有之候ハヽ、弥科重く可有之候間、何れも能可心得候と申聞。

廿一日

一今日宗門改申付、其上ニ而六郎右衛門申聞候は、何れも壁書之趣、能承届候得。乍然条数之儀ニ候間、一遍なと讀聞セ候而も、得と合点仕間敷候。殊に六郎右衛門も細〻申述度候得共、別當座親ニ毎月御壁書を讀聞セ候様ニと申付置候間、其方共、毎月壁書之趣承にて可有候。然共承り候斗ニ而は役に立事ニ而無之候。其方共合点不仕

字言何かも有之事ニ候間、能別當座親乙名共ニ尋承り候而能相守候得。別當座親乙名共より行規法度其外申付候儀、別當座親乙名共申付候事と存、疎略に承り間敷候。

申付候事皆以

殿様ゟ被仰付事ニ候間、疎ニ承り相背候ハヽ、早速別當方ゟ可申出候間、其時は左様之悪人御立置被成候而は、御仕置之妨に罷成事ニ候間、早速曲事ニ可申付候。乍然別當座親乙名共ゟ非常成儀を申付候様ニと不申付候間、非常成儀は、別當座親も申付間敷候間、左様ニ心得候得。此次ニは、其方共ゟ差出候誓旨之前書を讀聞セ候間、組頭共能覚居候而、女子共ニ能申聞セ候得。大切成午王ニ血判仕候前書之趣少も相背候而は、神罰不遁事ニ候間、能〻承届候得。別當座親も毎月御壁書讀聞候節、誓旨之前書も得と讀聞セ、兎角御行規法度之儀、常〻能申付、町中悪事之無之様ニ仕候得と、何れ之村〻も此趣を以、夫〻に申付。

二月廿日

御領中善人共之儀、諸人之手本と申、殊に段〻生立候者之為にても候間、其所之役〻乙名ゟも別而懇意に可仕候。若其内身体難續者於有之は、惣中ゟ相救、或は遂案内、何卒取立候様ニ可仕候。日用等ニ罷出候者は取分氣を付、餘人ゟも日数多差出、勝手宜様ニ可相斗候。其外開方發方柱替等仕候而も、不及力者有之候ハヽ、其意趣役筋之者方ゟ申出候ハヽ、以見合可申付候。扨亦公役等有之節も、右之者共ニ致了簡、自分之働之障ニ不罷成よふに用捨仕差除置、重而不相障時分、相勤候様に可申付候。惣而善人共之儀は、身持立置候様ニ諸事共に心を添、相救可申候。右之内身体等宜者ハ、村所之寄合ニも高座をいたさせ、或は役筋之者之相談人に相加へ、兎角善行之者を取立、少も見放不申様、可仕候事。

十一月廿三日

一三郷大小庄屋中、両町役中ニ申聞候は、今度穂見衆へ我

ゝ逗留之願書差上度由、内ゝ聞届候。當春も申渡候様、我ゝ勤宜と申段虚名ニ而候。殊に地方之事共、殊外不合点ニ候故、何角と申候而も無益ニ候。其上何も訴訟仕候而は、自分之迷惑不過之候。六郎右衛門は、兄弟迚も無之、子供は皆幼少ニ有之、八十餘六十餘ニ成老祖母姑有之、明日之儀も難知、御奉公ニ出候而、年を弐つと内ニ而越たる儀無之候得は、老人共ニ緩ゝと可談様無之、大不孝者ニ而候。武兵衛儀も同然に而候。老人幼少之子共斗ニ而候故、難儀成事ニ候。何も老親妻子持候衆中了簡仕、今度之訴訟差上候儀、決而無用ニ仕候得と申付。

弐己巳三月二日

一町中貫銀之儀、散使方ゟ書付を以申觸、請取候様聞届候。自今以後ハ別當座親ニ町乙名相加り、両人宛月番ニ仕候而成共、貫銀之書付吟味仕、印判を押、其書付を以、貫銀を取候様可仕候。町役之者、印判ニ無之候ハヽ、貫銀相渡不申候様、町中ニも可申付置候事。

右之通別當座親乙名中ニ申渡。

廿五日

一當町駕籠かき共之儀、駕籠之者不定以前は、往来之侍町人ニよらす、駕籠之上ハ前曽而取不申候處ニ、駕籠之者共定り候以後、町人之儀は不及申、侍迄駕籠之上ハ前取候段、非法之至ニ候。以前ゟ前取来上ハ、前取申事ニ候ハヽ、其段相伺得差圖可申之處、私ニ取来候段不届之事ニ候。殊に侍之通し駕籠迄、上ハ前を取候儀、重科之至ニ候得は、尤可被行厳科事ニ候得共、先此度は加宥免、七人之者共流罪申付。

七月三日

佐役、俵金左衛門在勤

一瓜生野町之者弐人、宿村之者壱人、宮浦村之者壱人、兄弟公事仕候由、内ゝ聞届候ニ付、三郷大庄屋両町別當乙名召寄、惣而兄弟争論等仕候儀、人道に外れたる儀ニ候間、兄弟公事等不仕候様に、其方共常ゝ可申聞候。親子兄弟之根本如斯之者ニ候故、争論等可仕筈ニて無之候由、段ゝ委細に申聞セ候。殊に新規之御高札ニも、初ケ条ニ被仰出置候事ニ候ゆへ、縦令道理有之候而も人道を背、罪難遁事ニ候と委敷申達。

廿七日

一藤木両町庄屋出候而、牛馬病氣時行候由、申聞候ニ付、則伯楽治助を召寄、唯今隣国江も御領中ニも牛馬之煩時行候由聞届候。弥時行病ニ而候哉と、相尋候得は、いかにも例年之時行病ニ而候、先年もケ様ニ御座候時分、則平胃散調合仕、服用為仕候得は、牛馬共ニ別条無之、此節も先年時行候病氣ニ不替由、牛馬病付候而は、如何様之薬を用候而も、薬験無之由ニ候得は、弥煎薬を用候様ニ、薬用候而も薬種代等無滞様ニ可申付旨申渡ス。

廿八日

一牛馬時行之疫病煩候由ニ付、如先例、壱匹ニ付雄黄五分宛被成下候間、三郷大庄屋両町別當方ゟ村ゝ江早ゝ相渡、随分防邪氣前以養生ニ念を入候様ニ申付。

八月十三日

一水屋高田真木村之庄屋共方ゟ皆無帳差出。蕎麦を蒔申筈ニ仕置候畠、捗置申候得共、洪水故蒔付不申候間、捨りニ被下候様ニと申出候故、願之通ニ申付。乍然是を例ニは仕間敷候。重而蒔付候儀不罷成候ハヽ、其刻此方江申達候様ニ可仕候。延引仕候而は捨りニ立候儀は不罷成候間、左様ニ心得候得と申付。

廿九日

一田代町貞介儀、先頃致醉狂、剩對目附之者、無作法成働仕候ニ付、縄下ニ申付置候得共、差免候。然共右之段〻不届之事ニ候故、唯今迄仕来候ばくろう之家職差止之候間、自今以後禁酒仕、可相改行跡候。偖又親之儀もはくろう仕由ニ候間、一所ニ罷在候而は禁酒難相遂可有之候条、貞介儀は別家ニ移り他之家業を相勤、はくろう之方ニ少も手傳仕間敷候。

一自今以後對貞介酒を為給候者於有之ハ、可為曲事候。縦令同座仕候者たりといふ共、同罪ニ可申付候。尤酒屋共之儀、至貞介ハ酒一圓不可賣之候。

一貞介儀、禁酒申付候上ハ、縦令醉狂不仕候共、少ニ而も給候由於聞届は、急度曲事可申付候。

一貞助方ゟ被頼酒之使ニ而も、仕候者は可為同罪候。

右之趣若於相背は可為曲事と申付。

参庚午正月廿三日

一去年耕作大分損毛有之候ニ付、百姓共之内取分及難儀候者共、飢粮米幷拝借米之儀願上、御國江遂案内、去年之損毛之御領分中押並而之儀ニ候得は、不依貧富、損失大分之儀ニ候間、當年ハ何も倹約仕、少之費も無之様ニ可仕候。就夫遊山之類は不及申、他類江之寺社参等之儀も可致遠慮候。乍然難止儀於有之は、遂案内可受差圖候。手前餘慶有之者は、ケ様之時節ハ一分之驕無之様ニ、専鰥寡孤獨之施等心掛候段可為尤事ニ候。

一酒之儀、四十才内之者ハ血氣盛成儀ニ候得は、働之妨ニも罷成、其外害ニ成儀多事ニ候条、不可用之候。縦令唯今迄給来候共、急度可相止候。五十六十之齢ニ罷成候者は、人ニゟ不用候ハヽ、耕作働之障ニも可罷成候間、自然ニは少宛用之、尤給醉不申様ニ可仕候。併四十以下之者共之内ニも病者等有之、酒用不申候而不叶者於有之は、遂案内可受差圖候。

右之趣堅可相守旨申達。

二月十一日

一當町役共ニ申付候は、當御屋敷家来共、何ニ而も買掛り決而不仕様ニ、堅申付置候間、商人共方ゟも、御屋敷中之家来ニ、賣掛等曽而仕間敷候。若何ニ而も賣申候ハヽ、現銀ニ賣可申候。若相背賣掛等仕候者、急度可為無調法候。唯今迄賣掛仕置候事ハ無之候哉、若有之候ハヽ早速申出候。相拂可申候。

一御門下〻出入之儀、去〻年ゟ札ニ而申付置候得共、弥此後堅相守、札持不申者は曽而通申間敷候。於相背は、門番も罷出候者も同罪に可申付候。御門は暮六ツより錠を落し、其時〻に開閉可仕候。諸色共ニ如江戸、指紙無之物は一品も通し不申候様ニと稠敷申付。

六月朔日

一御領分ニ他国之日用取、近年入不申、御領分之日用取斗ニ而は不足ニ有之、殊に賃銀等も高く候而迷惑仕候間、他国之日用取御入可被下候。切手等を取、慥成儀見届雇申様ニ可仕候由、申聞候ニ付、遂吟味先願之通申付、重而相障儀有之候ハヽ、差留可申由申付。委細書付ニ有之。

七月十一日

一先頃於　四阿屋雨祭之時分、御領分之社人共、殊外貧乏成体ニ見及候ニ付、其後遂吟味候處、一ケ年に一度祭礼有之ゟ外、何之所務も無之ニ付身体難續、或は米田を作り、或は大工を仕、或は御座枕を拵、忍〻他領江持参、渡世之助に仕躰ニ有之ニ付、以之外致困窮、祭服を一衣可相調手立も無之、難儀仕由ニ候。惣而社人共之儀ハ、

其所之　宗廟産神之神職を相勤候事ニ候得は、奉對其神候而、氏子共より氣を付不申候而不叶儀ニ候處、右之通に困窮仕、穢敷下職之事を仕候而は、神前之勤も疎略に罷成、第一は汚穢不浄之身と成事ニ候得は、誠ニ　神慮之程も難斗、却而ハ氏子共之為ニも無勿体事ニ候。殊に他領ゟは四土用、亦は種蒔、或は佛説等之盲目共迄罷越、毎家ゟ米麦大分差出由ニ候。如斯他領之者共ニは大分毎度出之、我　産神之神職之者ニは疎略仕候段、忘其本甚不儀之至ニ候。神は非禮を受不給事ニ候得は、忘其本候非禮之捧物ハ、他領之神迚も決而不可受給候。然上ハ随正道、先我所之　神を奉崇、其上にて人ゝ心次第ニ随分限、他領之神へも捧物等可仕候。當年夥敷旱魃ニ付、雨乞仕候節も、先我所之　神に而已奉祈事ニ候。其外時行之病難、或は火祭等之儀ニ至迄も、所之　神を差置、他領之神に祈事ハ無之候。兎角不依何事、難儀之時分ハ奉祈我神之事ニ候。其上人ゝ子ゝ孫ゝ迄之宗廟氏神之御事ニ候得ハ、為子孫と申旁以疎略ニ可奉存儀、努ゝ不可有之候。神は依人之敬、増威たまふ事ニ候得ハ、此方ゟ奉崇候得は、　神威も自盛ニ為成たまひ、疎略ニ仕候得は、　神威も自衰給事ニ候間、自今以後ハ先我　神を奉敬、四季に氏子共之為ニ捧米穀、五穀豊熟天災地妖病難等之祈禱可仕之候。捧物之儀は随分限、庄屋方ゟ員数を定置取集之、可備　神前候。

一社人共之儀も、四季ニ於　神前右之祈禱修行仕、其上ニ而毎家廻之、家内を祓、諸災難無之様ニ可仕候。

一右之通ニ候而は、社人共勝手も宜罷成事ニ候間、第一神道之学文無懈怠入精、神職之儀少も疎略ニ無之様可相勤候。若不勤之者於有之は、仲間中ゟ致吟味遂案内、社職召上候様ニ可受裁許候。

　右之趣を以申達。

九月六日

一御膳米之俵、七所ゆひにして、横立共ニむすひ留に可仕候。

一惣而近年は俵作悪敷候。口掛こまく、中俵は三所あみにして、俵之内ニ而能引廻し、むすひ候様ニ可仕候。横立共ニ結ひ留に可仕候。

一俵之内外ニ札有之俵も候而、無之俵も候。重而随分念を入候而、内外共ニ札を入候様ニ可仕候。

　右之趣、御国ゟ被仰越候間、随分念を入、俵拵仕候様ニ可申渡旨申達。

御上使御泊之時、諸役人ニ申付候は、

一諸役人少も無礼ニ無之、随分慇懃に可相勤候。

一面ゝ受取之役儀専一ニ心掛、御用之儀、毛頭差閊不申様ニ可相勤事。附り、役人勤役之内、酒一切致停止候。

一自分之用事を差置、御馳走方一片に相勤、手捌宜様ニ可入精候。

一喧嘩口論之儀は不及申、高咄高笑不仕、丁寧ニ可相勤候。

一面ゝ勤所火之用心、油断仕間敷候。

御上使御通之時、公役ニ罷出候者共ニ申付候は、

一何者ニよらす、少も無礼不仕、慇懃ニ可仕候。

一頭役ゟ申付候趣、少も違背不仕、下知ニ可随候。

一喧嘩口論之儀は不及申、小歌高咄雑談一切致停止候。

一馬子人足ニ罷出候者、取分無礼不仕、不依何事御差圖之通ニ仕、少も口答等仕間敷候。尤酒ニ酔候者無之様ニ可相慎候。

一公役ニ罷出候者共、私を構、無働ニ有之者ハ、仲間中ゟ遂詮議可申出候。

　右之趣堅申付。

十一月八日

一當夏上町火事之砌、荒木六左衛門、勝他相働候ニ付、御国御年寄中迄申上置候處、為御褒美鳥目弐貫文被成下之由、今度格右衛門便ニ被仰越候ニ付、則六左衛門召出、右之趣申渡。

四辛未二月五日

佐役、高尾平左衛門在勤

一旧冬十月於江戸表、従　公儀被　仰出候捨子之御書付、今度御國ゟ被差越候間、此旨堅可相守候。

一以前ゟ被　仰付置候通、捨申儀、弥御停止之旨、御国中堅被仰付候由ニ候。尤取揚姥も左様之儀不仕候様ニ申付、若被頼候而も仕候段相知候ハヽ、急度曲事ニ可被仰付之旨、能〻可申付之由、此度被仰越候間、御領分中此旨堅可相守候。

四月十四日

一此度田代町善六、神辺村助左衛門、喧嘩仕出候次第、遂吟味候處、双方共ニ段〻無調法其紛依無之、別紙之書付を以申付候。此紙面之趣、御領分中之者不残承届居、重而如斯之儀仕出不申様ニ可仕候。不依何事双方申分有之儀致出来候ハヽ、不及喧嘩ニ以前、組中或は組頭、亦は其所之庄屋町役共ニ相断、可受裁許候。役目之者共も聞届候ハヽ、即刻遂吟味、埒明可申候。若背此旨喧嘩に仕成候ハヽ、不依理非其仕掛候者、尤可為重罪候。相手之者も其科不可遁候得共、其場之時宜ニゟ、或は切掛打擲、難遁首尾も可有之候間、依吟味其科之輕重可有之候。惣而喧嘩は不依理非、同罪之事ニ候間、喧嘩に不及様ニ人〻可相心得候。及喧嘩候而は、縦令十分之道理有之候而も、非分之相手と同罪に罷成事ニ候得は、兼而致其覚悟、不陥罪様ニ可仕儀、肝要ニ候と申達。

七月朔日

一於在町、若博奕仕候者於有之は、訴人に可罷出候。急度御褒美可被仰付候。訴人に出候者は必諸人悪敷申ものにて候故、致遠慮儀も可有之候間、竊ニ可申出候。随分世間ニ相知不申候様ニ、御褒美可被仰付候と申付。

十一月廿三日

一六郎右衛門儀、昨日交代候。惣而御仕置方之儀は、随時宜申付事ニ候得ハ、歴時日候而は相障儀有之物に候。殊凡智之不及處、不直を直と存物ニ候ゆへ、在勤中之儀、

諸事共ニ不宜儀可有之候。此段早〻遂吟味申出之、相改可然候。若其儘差置候而は、後〻迄残置候段、六郎右衛門一分之冥加之為ニも不罷成事ニ候。弥無遠慮致穿鑿、當役江申出、急度可改之候と申渡。

十二月十日

本役、久和弥五左衛門在勤

一於御国元、弥五左衛門ニ加網幸之助を以、被仰付候は、仁位郷之御開、過半出来候間、田代表ニ而致吟味、宜百姓壱竈差越候様ニと被仰付候ニ付、於爰元役目中申談、罷渡度存候者は、申出候様ニと三郷ニ申付候處、大庄屋藤兵衛方ゟ申出候内ニ、宮浦村与右衛門と申百姓年五十八、同女房年五十弐、男子八郎兵衛年三十五、同傳介年弐十四、同萬吉年十六、一家五人罷渡度由申出候ニ付、遂吟味恰合宜者共ニ候故、則仕舞次第ニ罷越候様ニと申付。手前仕舞之為ニ銀弐百五拾匁拝借仕度之由申ニ付、則相渡。

五壬申正月十七日

一今日ゟ御寄附御普請之斧立仕。

二月十五日

一八十歳以上之者、御領中ニ御扶持人中之親祖父、庄屋町役之親祖父母、町人百姓共ニ百四拾八人有之候由、書付差出候ニ付、則目録相認め、御米百五拾五俵拝領申付。博多升取次左衛門母も、右之内ニ相加。

三月九日

一爰元下代之儀、役名と勤方不相應ニ候間、役名御替被下候様ニと以書付申出。御年寄中江申上候處、向後は手代と相唱候得之由、今度被仰越。

六癸酉七月廿九日

佐役、吉村五郎七在勤

一昌元寺町家ニ雷落掛、打毀候而家も少〻焼候得共、早速火を取消候。右之節弥五左衛門、平左衛門、三郎右衛門罷出候處ニ、火消候故罷帰。

九丙子六月廿二日

本役、戸田三左衛門
佐役、大浦　午蔵　在勤

一籠舎申付置候盜人吉兵衛、五介両人共ニ、今日斬罪申付。當町中引渡し、三間屋ニ而斬罪候様ニと申渡。右両人之者共江以書付申付。

先年度〻盜悪行いたし、死罪可被行を、以慈悲許置候處、欠落仕、剰立帰盜取候ゆへ召捕、重科によつて斬罪

被　仰付者也

十月十六日

一爰元手代役、常〻役目ニ付致苦労、郷中差引旁念を入、御為宜敷相勤候趣、連〻御聞被成候。依之為役料、上り地之内、田代分高参拾石〇四斗九升五合之田畠、三人中江拝領被　仰付候間、向後致所務候様申付。尤近年御物入のみ打續、今程御勝手御逼被成、御勘略(略)等被仰出時節ニ候条、弥役目精入厳密ニ宜相勤之旨、申付候様ニと、是又右一紙ニ被仰下候故、則今日手代三人召出し、右之趣申渡。

十丁丑正月六日

本役、袖岡正左衛門
佐役、賀嶋　権八　在勤

一瀧六郎右衛門、水論之儀ニ付爰元發足、孫平上下共ニ惣人数弐拾八人、此方〻付人御馬は筑前領原田〻帰。

廿二日

一水論下濟之儀ニ付、手代孫平、大庄屋七郎兵衛、松崎江差越、三方大庄屋共立會、下濟落着仕候由、孫平申聞候ニ付、為付届、村上時右衛門方へ三左衛門方〻飛札遣。

二月十二日

一六郎右衛門帰国ニ、三方立會壱枚、繪圖之写壱枚、小郡村と此方三ヶ村と之書継繪圖之写壱枚、被致持参。

閏二月廿三日

豆田井堰水論落着仕候ニ付、御国〻御賞賜之覚。

紗綾三端、御代官今井九郎右衛門様手代村上時右衛門殿。同拾端、戸田三左衛門。同五端、大浦平蔵。同三端、高畠長左衛門。同弐端、手代櫻井孫平。同弐反、相田九兵衛。同弐反、吉田益右衛門。金子三百疋、下代門司豊左衛門。同三百疋、佑(祐)筆位山源七。紗綾弐反、松崎町人竹野弥左衛門。弐拾石之餘米地、大庄屋七郎兵衛。拾石之餘米地、野口奈良田両村庄屋亦市。銀弐枚、大庄屋八郎左衛門。同参枚、大庄屋三郎右衛門。同壱枚、古賀村庄屋藤吉。同壱枚、飯田村庄屋勝左衛門。同壱枚、蔵上村庄屋甚内。同壱枚、宿村庄屋甚右衛門。金子弐百疋、柚比村庄屋善九郎。同弐百疋、宮浦村庄屋孫六江。

五月十日

一並定御免相ニ被仰付被下候様ニと、三郷大小庄屋中并惣百姓中〻之書付壱通差出、我〻見届、凶年之時節ニは如何様仕候哉、断申出候様ニと申付候。則凶年之節之書付壱通相添、今日亦〻差出候ニ付、受取之置候。尤御国元江申越、御差圖次第ニ如何様共申付筈之由、申付候。右書付之趣数ヶ条之細書有之、並免之儀拾年切ニ願出。

一凶年之上納之儀、断申出候様ニと申付候ニ付、書付差出候趣。

並定免之儀願上候處ニ、凶年ニ上納方不足仕候節、如何様ニ仕相調候哉と御尋被遊候。今度右之願申上候ニ付、凶年之足米を豊年ニ其年ニ應し分量を極、取立置申筈ニ、内〻申合候。如斯豊年ニ足米を取立召置、凶年ニ上納仕候ハヽ、別而百姓難儀仕程ニは御座有間敷と奉存候。此段宜被仰上可被下候。

廿二日

一松崎草野弥右衛門方〻吉田益右衛門方迄、口上書を以申来候は、久留米郡奉行、中村才兵衛、沖七兵衛方〻村上時右衛門方江、以飛札申来候。當月六日御老中様〻御奉

書を以、中務太夫様へ御登城被遊候様ニ被仰進候。就夫御登城被遊候處ニ、御老中様御列座ニ而、戸田山城守様被渡候は、有馬伊豫守領分先年被召上候得共、本高之内ニ御座候条、今度御返被遊候由、被仰渡候。郡中受取渡之儀ハ於江戸、九右衛門様へ被仰談、重而可被仰越候之由申来。

六月廿一日

一奈良田村庄屋亦市出、三方立會繪圖、庄屋百姓誓旨、繪師誓旨共ニ、昨廿日寺福童村惣右衛門、小郡村孫右衛門致相談連判仕、小郡町山王宮江納候由、尤三方互之證文取替し、相濟候由申聞候。此旨御国許江申上。

晦日

一金丸村之儀、以前は園部村之内ニ而御座候由、承傳候。園部村御料ニ罷成候節、被差上候高之分御引被成、相残高金丸村ニ而御座候半と奉存候。御内検高百拾五石八斗弐升と御座候。玄蕃竿之儀、帳面無御座候条、増減難極奉存候。正保二年嶋雄権之介様御改之帳ニ、高七拾九石七斗壱升と御座候儀、如何様之儀ニ而御増被成、御書付被遊候哉、難斗奉存候。右村高御詮議被仰付候ニ付、頭百姓共差寄り吟味仕、書上申候。此外覚申たる儀、無御座候と申出。

十一戊寅二月六日

一大庄屋七郎兵衛、城戸村庄屋兵右衛門、遂案内候は、御料園部村正應寺と申所之百姓共、数年正應寺法と申、疑敷法儀心行仕候由、数年沙汰有之、園部両庄屋木村伊兵衛、西依傳内方ゟ同村真宗常行寺、専念寺、正蓮寺、右三ヶ寺江実否相極候様ニ申付候由、依之三ヶ寺之僧旦那中召寄セ、吟味仕候由ニ候得共、邪正不相極候。然處ニ右之法儀、城戸村百姓共之内承候者有之由、沙汰有之候ニ付、我〻吟味仕處ニ、城戸村吉右衛門、介左衛門、長左衛門、甚七、甚兵衛と申者之由、就夫覚書仕由ニ而差出候。右之沙汰有之候ニ付、右五人旦那寺宮浦村因通寺

手前ニ而も、右之法儀不承様ニと、誓旨仕らセ候由ニ候。右之沙汰園部村江相聞江、両庄屋方ゟ因通寺方江遣し候書状、七郎兵衛方江遣候書状等差出候。右之儀ニ付、園部村ゟ天草御代官今井九右衛門様へ遂案内候由、旁難差置、右五人之者御屋敷江召寄セ吟味仕候得共、別而相替儀不申出候。然共天草江も遂案内候事ニ候得ハ、吟味之上、長崎表ゟ被召寄首尾ニ成行候而は如何敷存、我〻并戸田三左衛門致相談、五人共ニ籠舎申付候。右五人之妻子共、城戸村庄屋蔵へ入置、昼は拾人夜五人宛、上郷中ゟ村切ニ一昼夜宛番人申付。

十五日

酒御制法御書付之写

一向後事立たる祝事は格別、其外傍輩中之参會ニ酒出之候儀、可為無用事。

一普請等仕候節、大工并諸細工人雇候刻、酒出之儀、無用之事。

一組之者其外雇者仕候節、是又酒出之間敷候。惣而下〻へは祝事たりといふとも、酒給させ候儀、堅可為無用事。

右之趣被　仰出候間、此旨堅可相守旨委細申達。

四月九日

一宗門之儀ニ付、今日正左衛門長崎江發足、手代役櫻井孫平、佑(祐)筆新五左衛門、玄関番市助、傳内、醫師吉松道堪、城戸村五人之者、尤壱人ニ足輕壱人ツヽ相附、委細は記録ニ有之。

十弐己卯正月十二日

一大庄屋三人召寄。只今迄之納升を京升ニ而御所務被成思召候。京升ニ直し延之分は、如何様ニ名を御付被成可被召上候哉、手代大庄屋ともニ了簡之通申出候得と申達候得は、手代役と大庄屋七郎兵衛、八郎左衛門、三郎右衛門申候ハ、如何様ニ名を御付可被成候哉、不及了簡候。只今迄之向上免ニ京升之壱割を掛加へ、只今迄仕来之通、年〻向上免ニ何分下り何分と考、御免御極被成候ハヽ、

相障申儀も有御座間敷と之儀ニ付、其積ニ而算用仕立候
様にと申付。則宮浦西村分、寅年現高を納升京升之御物
成差引仕、少も相違無之。其算用、宮浦西村現高四百拾
石八斗六升三合、納升御物成弐百三拾八石三斗〇〇五勺、
但御免五ツ八分。同四百拾石八斗六升三合、京升御物成
弐百六拾弐石壱斗三升〇六勺、但六ツ三分八厘。

十九日

一水屋川落着相濟候次第、大浦忠左衛門殿より下郷大庄屋
三郎右衛門、水屋村庄屋甚兵衛并百姓中江御當被成候御
書付讀聞セ、其上にて正左衛門申付候は、並免之書付同
意ニ存候間、御国ニ願書可差渡候。大庄屋小庄屋も願之
通可差渡候。存寄も候間、大庄屋之内より三郎右衛門罷
渡候様申付。

三月八日

一宿村商人共、見セ賣仕候段聞及、不届之事ニ付、急度吟
味仕申出候得と、八郎左衛門に申付。

廿五日

一本城川内村庄屋弥左衛門ゟ筑前一瀬村江遣候書状案文。
一筆令啓上候。貴様弥御堅固御勤可被成珍重存候。然は
此比其元御領分、際木御立被成候由致承知、一昨三日罷
出見分仕候處、拾三四本程は際木御引取御指被成候、拾
壱弐本程は此方領分御指込被成候様、相見へ申候。御存
知之通、其元此方境目儀ハ、古来ゟ峯分ニ而御座候處、
其格違申候。御引取可被成候哉、亦ハ御立合御吟味可被
成候哉、此段御返答ニ委細可被仰下候。為御相談如斯ニ
御座候。

五月十二日

一只今之納升、京升ニ被仰付候。納升一割増之儀ハ、定免
之高ニ相加、向後上納仕候様被仰付、依之御國ゟ御書付
弐通被差越、則讀聞。

六月十二日

一村ゝ水道損候故、急ゝ普請被下候様、所ゝゟ申出候故、

役ゝ差出。

七月廿八日

一並定免之儀ニ付、下モ村も定免請合之書付差出し候。此
節下モ村ゟ打續凶年之節は、前ゝ之通飢粮米被成下、根
付粮米をも御借し不被成候ハヽ、定免受合難成候由、以
書付願出候。於爰元我ゝ了簡ニ難斗候。依之大庄屋三郎
右衛門、御国江罷渡、得御差圖候様ニと申付。

八月十三日

一佐賀領諫早、流死人男女〆三百五拾八人、流家〆三百弐
拾壱軒、諫早札馬之内弐三疋残る。死馬三拾七疋。都合
家三百三拾四軒、都合死人三百七拾八人之由。

九月廿日

一並定免之儀、弥願之通被　仰付候。定免之儀は御領中大
願之由、度ゝ願上候ニ付、段ゝ御吟味候而、御領中御救
之御心を以、願之通為被　仰付事ニ候。下モ村ニ不限、
上ヶ村迚も凶年打續及飢、農業ニ取離候様成時節は、何
程兼而誓旨を以御救不被下候様ニ申上置候而も、上ゟハ
御見捨可被成道理ニ無之候。此段は下モ村ニ不限、御領
中一統之事ニ候。定免之儀古法を変し、新法に被相改候
儀は、至而重キ事ニ候間、今亦輒違変難被仰付事ニ候。
今更輕ゝ敷被相改候儀、尋常にてハ難成候。右段ゝ之訳
ニ付、此度之願及吟味、只今ゟ片付候而相極儀ニ而無之、
其時ゝ御吟味を以御救被下事ニ候故、願之趣不取上候。
就夫願書写も印判等有之、本書同然ニ候故、勘定役を以
差返候間、爰元江有之願書も、手代役を以差返候様ニと
被仰越候。

十一月五日

一並し定免ニ被仰付候(ママ)此後、畠を田ニ仕、亦ハ屋敷ニ仕、
或は開發方年ゝ少宛御座候。此分ハ並し御年貢高に増、
又は洪水之節、田畠川成分ハ御年貢高ゟ減、年ゝ増減可
有之儀と内ゝ存候處、先頃庄屋共差渡候刻、大庄屋三郎
右衛門捨穂見仕様之儀、於御勘定所相伺候處、定免ニ被

仰付候上ハ、六千五百九拾七石さへ御受被成候得ハ、田地は其方江御渡被成候故、御構無之由、平田権之進返答ニ相見へ申候。我ゝ儀は御年貢は定免ニ被仰付、田畠は當役より支配仕筈と存候。右之返答にては此段疑敷罷成候。此訳如何思召上候哉、為念御尋申上。

十三庚辰正月十二日

本役、津江格兵衛在勤

一田代町ニ而行跡宜者、書付差出候。昌元寺町与三右衛門子孫介、弟与三郎、下町佐左衛門、甚右衛門、横町喜右衛門子喜八、召出致称美。去年書付差出候不行跡者共、相改候由、書付指出候ニ付、召出是又致称美。

三月二日

一大庄屋名代柚比村庄屋出。赤坂町七兵衛儀、立帰候處、此間長崎ニ罷在、町使鷹田半蔵方江當六月切ニ奉公仕、毎夜八ツ七ツ迄夜廻りニ難勤候故、罷帰候。長崎ニ而大屋之家来帳ニ付候由、長崎にて太田町善次郎を頼、在付候。善次郎儀善導寺江為商罷越候。只今は太田町ニ居可申候由、然處田代町別當田代村庄屋出。善次郎儀、弟権兵衛方江昨夕より参居、只今罷立候由、案内申出候ニ付、権八申付を以召捕来候故、正左衛門ゟ籠舎申付。

一七兵衛儀、籠舎可申付候得共、善次郎と一ツに入候儀如何ニ候故、善次郎相済候迄ハ永吉村江預ヶ置、此者儀長崎ニ而若如何様之儀も仕出来候も難知候間、随分念入候様ニと申付。

一評議之上、善次(部脱)儀水屋村境ニ而追放申付。

六月五日

一牛原村八郎兵衛、新右衛門、去ゝ寅年極月廿九日之夜、類火ニ合候ニ付、御定之銀子被成下筈ニ候處、只今迄相延、今日被成下候。員数銀子弐拾目、木三拾本、竹拾束、類火八郎兵衛右同断、新右衛門、火本茂右衛門へは、御法之通不被成下。

廿八日

一藤木上ミ分之田、用水無之候ニ付申談。明日牛原水を下し候由、申出候故、神邊村水余計無之候哉、只今之事ニ候間、十分ニは有之間敷候得共、神邊分ふ入はしかゝミ之田、見分仕候處、彼地ニも末ゝには水届不申所多有之、此水を一日差留候ハヽ、藤木同然迷惑可仕候由を以、弥明日牛原水下し申様ニ申達。

七月七日

一藤吉、義兵衛儀、兼ゝ承り候通、借銀借米之差引被蒙仰候間、差引役之者両人ニ候間、右両人ニ被仰付候。庄屋役之儀は、被召上ニ而は無之候。其段は大庄屋ニ委細申付候間、村ゝ差引之儀、都合斗承、式日御礼亦は公義被仰付事等之儀ハ、常之庄屋並ニ承り候而相勤、御給扶持ハ以前之通三人扶持ニ三石宛被成下候。但し以前は上ゟ被成下候得共、此節ハ郷中之餘分を以被仰付候ニ付、刀ニは不及候。永キ儀ニ而も無之候。先ツ来年迄と相心得可申候。以後ハ格式を以相立可申候間、段ゝ御代可被成候間、左様ニ相心得候得と申達。

十一日

一三郷ゟ卯年分納過之米七百拾五俵拝借願出、御国江申上、願之通被仰付候ニ付、返上之儀は米ニ而可被仰付候も、銀高ニ而可被仰付も、相極不申候。右拝借願上候ニ付、大庄屋三人口上書申付、取候分ニ候得共、案文未相極候。追而相極次第書載申渡。

廿四日

一去ル廿一日赤川村出火之節、筑後荒瀬赤川八町嶋ゟ加勢人夫出候ニ付、為御返礼、格兵衛ゟ郡奉行沖七兵衛、安西次兵衛方江飛脚走番遣之。但前以大庄屋方ゟ右之村ゝは礼夫遣。

十四辛巳正月廿三日

一三郷両町火消道具之儀申付。

五月二日

一正左衛門石塔建候由、殊に今日は出家なと申請候由ニ

付、酒壱斗長ひしき一折、格兵衛ゟ遣之。

廿一日

一只今ハ麦取上之時分ニ而候故、男留主は女房子供ハ、菓子肴或は帯手拭褌等ニ至迄、有ニまかせ先後之儀も不存仕候様に相見へ候由申達。

十六癸未四月朔日

一三郷両町善人都合人数八拾五人、此内五人は病氣故不出候処ニ、今度御支配ゟ被仰越候趣、以書付申渡。

一右善人之男女共ニ、新五郎、五右衛門ゟ孟遣之候故、寄會之間ニ而弐人宛召出。

宝永二乙酉正月廿六日

佐役、江口孫兵衛在勤

一三郷両町江多葉粉作之儀、書付を以申渡。委細申渡ニ有之。

三丙戌十一月八日

殿様御黒印之御書付を以、御家中江被仰付候御書付之写被差越、爰元ニ而用候儀は、見合用候様ニと被仰下。

一右御書付ニ御扶持人中江被仰渡候御書付、并三郷両町役人共へ申付候御書付弐通、右御書付御扶持人中も随分倹約相守候様ニと被仰聞、則御扶持人中江右之御書付讀聞。

四丁亥十二月二日

本役、白水李兵衛在勤

一家来御門之札なしに夜ニ入、御門を出度由申候共、挨拶ニ而出し申間敷候。扨亦昼夜ニ不限何色ニ而も持来候ハヽ、指紙ニ而も又は白紙ニ而も印判を押可出候間、此方ゟ出し置候印鑑ニ引合可出候。此段門番之者共江申渡候様ニと申達。

五戊子六月朔日

一下モ村水入田苗腐候由ニ候。然は苗先頃之分ニ而は不足ニ可有之候間、何卒相談仕候得。上ヶ村ゟ田壱段ニ付、苗弐三把宛抜候而遣候様ニ百姓中ニも申聞。何も随分精出し候様ニと申付候得ハ、手代中申候は、時節も段〻及延引候故、直ニ田毎に苗抜遣し候様ニ可申付申候故可然候。先壱段ニ弐把宛抜遣し候様ニ被申付候得。尤銘〻何ニと竹札書付指候様ニ申付候得。村ニ依痛田砂入等有之田は除之、無痛田斗り苗を抜可申候。其段は村〻惣畝数之内何段は痛田引何程、壱段ニ付弐把宛何百何拾把と書付差出し、其積を以、下モ村ニ割付可申得と申渡。

合苗弐万〇百〇四把、村〻小割略之。

日記抜書

參

従正徳二壬辰至元文五庚申

正徳二壬辰二月廿二日

本役、白水　李兵衛
佐役、中嶋傳左衛門　在勤

一在町役ゝ給地三拾石之高ハ有之候得共、地面悪敷余米無之、迷惑仕候村茂有之、三拾石無之村も有之、田代座親給三拾石無之由ニ候間、不足之分ハ唯今新規ニ田地相調、三拾石之高ニ合候様ニ仕、高は有之候得共余米無之村は、田地賣替余米有之候様、何も打寄吟味仕、掛持之者之田地か又は富家之田地之内所望仕候様ニ相談仕、新規調候田地ハ壱段ニ付百五拾匁、賣替之田地は壱段ニ付五拾匁之増銀之積を以相積、右銀何卒納崩ニ仕候得は相調候と之儀、打寄相談仕相極積書差上候得、御国江御伺可申上趣申達ス。

七月廿日

向後雷ニ打れ、水ニ溺れ候類之死人等、無油断以書付申出候得と申達ス。

正徳三癸巳二月廿四日

本役、加城狩野之介
佐役、中嶋傳左衛門

一在町役給地帳面差出置候を相渡、今度調替整済之田同地前書加へ念を入、帳面相認弐通差出候得、園部村両庄屋之役料地も、上郷同格ニ相認差出候得と申達ス。

正徳三癸巳二月廿五日

本役、加城狩野之介
佐役、中嶋傳左衛門

一三郷庄屋中之内、田代町之座親役料地之儀、余並之庄屋

座親之役料高ニ不足ニ有之、或は地面悪敷有之候ニ付、調添調替之義、去年之四月申達、当正月十五日ニ願之通ニ被仰付、其後地面之極代銀之積り、去ル廿二日願之通ニ被仰付、今日用銀方ゟ御銀相渡、何茂御礼申上。

一銀拾壱貫五百目、其村ゝ養父郡大庄屋源左衛門、上郷大庄屋善九郎、下郷大庄屋三郎兵衛、永野村庄屋文右衛門、永吉村庄屋弥五六、古賀村庄屋治左衛門、萱方村庄屋源右衛門、河内村庄屋弥左衛門、藤木東村庄屋善四郎。

五月八日

園部村之儀、数年公領ニ成居ニ付、土地之廣狭為明白、田畠共ニ検地之處、余程竿延有之候。右延町之分御所務被加候而ハ、百姓難儀可致と思召、以御了簡古竿之通御所務被成候。勿論新開相見へ候分ハ、定法之通御年貢可相納候。地位之儀は、田畠共ニ宮浦同格ニ被仰付。

六月十四日

一飯田村ゟ申出候筑後領福童村と水行出入之覚書見届申達候は、此儀ニ至而必手荒儀共不仕、以前ゟ有来たる事を以、彼方之請答可仕候。以前ゟ無之儀共申出シ、言葉違等無之様随分入念可申候。有来り之正當を以、請答仕候ニ違却可有之様ハ無之候。手荒く何角申出候時は取返不被申候。言葉之品ニゟ筑後領之申方共ニ成行候儀無之様ニ相心得可申候。殊更筑後は此方との間柄ニ候得は、猶更請答村中之者茂念を入候様相心得可申候得と申付。余は本書有之。

十一月朔日

一御領中ニ郷足軽五拾人相定。一郷ニ小頭両人宛申付置候様ニと之御事ニ候間、三郷村ゝ両町ニ而男振を撰、人柄吟味仕可申出候。人柄相極候上、羽織合羽等小頭方へ相渡置可申候。此旨三郷大小庄屋両町役へ申達候得と申渡。足軽村毎ニ壱人宛ニ而は不足有之候ニ付、宮浦両村ニ弐人、園部上村ニ弐人、同下村ニ弐人、神邊村ニ弐人、田代町ニ三人、酒井村ニ弐人、牛原村ニ弐人、宿村ニ弐

人、瓜生野町ニ弐人、右之通仕候得は上郷ニ拾六人内小頭弐人、下郷拾八人内小頭弐人、養父郡ニ拾六人内小頭弐人、合足軽五拾人内小頭六人相極。

正徳四甲午七月九日

一三郷両町ニ田畠を質ニ渡置候所、窮民共計ニ而可請返手立無之者多有之、難儀仕居候と相聞、今度郷中用銀之内御借可被成間、双方迷惑不仕様ニ取計、何茂請返し候様書付を以申渡ス。書付は役方へ有之。

享保二丁酉二月廿三日

本役、仁位孫右衛門在勤
佐役、中嶋傳左衛門同

一山方御法式之儀は、兼而厳敷被仰付置候処、近比不行規ニ成、河内山江薪取ニ参候者共之内、よきなた等持参、生木を茂取候族有之由承届候事。

一他領江薪賣出候儀御停止ニ候処、他領持出又は他領之者江賣渡候者(ヲカ)於有之由承届候事。

一河内山江火打道具持参候儀、堅御制禁ニ候処、是又相背候者有之由相聞候事。

一御立山、預り山、植立山有之村ミ之者、右山ニ而木を伐取候由相聞候事。右山方之御行規、近キ比緩ニ成、相背候族有之趣承届候、右之趣申聞、目付中ゟ茂折ミ罷出、見合次第可捕候間、三郷両町共ニ能ミ申達置候得と申渡。

享保五庚子五月十二日

本役、幾度六右衛門
佐役、中嶋傳左衛門在勤

一當春神邊村ゟ案内申出候同村与介、無案内ニ開立候下川原之吟味申付。

一吟味之末、与介儀闕所申付。

七月十八日

一池田ニ居候寿延名子与介、隠地一件落着被仰付。与介幷妻子共ニ養父茂七、与介弟甚九郎ニ申付、大屋寿延ニも書付を以申付。委細は申渡ニ有之。大略記之。御国田舎

ニ永代流罪池田与介、宿村所替与介養父茂七、同人弟甚九郎、柚比村江所替同人女房、子与吉、娘かく、人夫百人大屋寿延。

一今度大洪水ニ而御普請方、又は石砂入之田畠御年貢御免被成候と之趣、御国ゟ被差越候御書付ニ、御當役中存寄之添書を以委細申聞。

十二月朔日

一三郷両町鰥寡孤獨之窮民相改、書付差出候様申付置、今日差出ス。

十二月廿日

一先頃被仰付、三郷両町ゟ獨身者寄所無之窮民、今度御救被仰付、合人数弐拾七人、壱人前粟三斗宛被成下、別紙小割帳有之。用銀方渡、猶又曽而正道之者有之候ハヽ可申遣候。随分見合等可申付候。萬一在町之内、至極及難儀候者有之候ハヽ、其親類村中相救、其上ニ而難相繕候ハヽ、掛之役ミ迄可申出候。夫ミ御救可相渡候由、書付を以申渡ス。

一庄屋町役替り候所、役料割方之次第申渡ス。

一田代町別當才右衛門、役料は同町座親役料を御附被成候事。

一同別當善七、役料は瓜生野町座親役料御附被成候事。

一同町座親役料調副候節、拝借銀年賦有之候、此拂方は用銀方ニ相尋可請差圖候事。

一座親役料、當年分月割ニメ、源七勤之内、源七ニ相渡、才右衛門勤ニ成候而は、才右衛門請取之、其間之月は役料被召上候事。

一姫方村、飯田村、曽根崎村庄屋役料ハ、源左衛門、勘左衛門、佐吉勤ニ成候而は、右三人方江月割ニメ請取之、其余之月は被召上候事。

一宿村平内勤之内役料ハ請取之、善七勤之分ハ善七請取之候様、尤月割右同断。

一城戸村庄屋甚右衛門勤之内ハ、則月割、甚右衛門請取之、

藤兵衛役ニ成候而は、藤兵衛請取之、宮浦東村江甚右衛門罷越候而後ハ、是又月割ニメ甚右衛門請取之、其以前仁右衛門御役不被召放以前は、仁右衛門請取之候様申渡候事。

十二月廿九日

一疱瘡時行候而下〻食用禁好物等、醫師相尋随分入念候様ニ申付。

享保六辛丑二月三日

一三郷両町醫師中之儀、疱瘡人ニ随分氣を付療治仕候様ニ、尤貧窮者ニ而疱瘡仕、付而ハ人参用不申候而は不叶症ニ而も、用候義難成者ハ、庄屋迄申出候得、醫師中も氣を付、人参等用候症ニは、役人迄申聞用ひ候得、食用なくして養生方疎ニ成行候者ニは、是又庄屋迄兼而介抱方之儀申付置。

十二月廿六日

一三郷両町江三百貫目配當ニ被仰付候次第申付、委細書付ニ而末〻迄申渡。廿七日限ニ申渡候との儀御案内申出候得と申付、銀差引之目録帳も同前ニ相渡ス。

享保七壬寅四月四日

本役、幾度六右衛門　在勤
佐役、小茂田左平次

一酒井両村飯田村〻願出候は、去夏野口村分〻飯田村迄ニ、井樋所迄川御廣被遊、其上砂御流し被下候ニ付、右井樋迄ハ水下り宜候得共、飯田村〻酒井村分之間、唯今ニ至迄大分差閊難儀仕候間、川幅御廣被成、其上砂御流し被下候様ニと書付を以願出、唯今別而御手支之御時節ニ候間、成丈人夫多不入様ニ了簡仕、川幅狭キ所も大抵ニ廣メ、砂流之儀は、先當分干出に成居候所を取除ケ繕置候様ニ、兎角後〻ハ宜様ニ可被仰付候間、此節は何卒御物入之所を了簡仕可申事ニ候。夫共ニ強く差支ニ成候儀は、成丈宜可被仰候。破損掛中江も右之願書見届、場所見分仕、御普請被成方人夫積り共仕候得と申渡。

五月十九日

神邊村組頭清七、曽根崎村安兵衛は、御書付之御褒美申付。田代町与右衛門義、親孝行ニ付御米弐俵被成下。同町半右衛門同壱俵、大田町惣左衛門ニ同壱俵被成下。委細書付有之。書付之趣在町江も申觸候様申渡。

五月廿一日

一田代外町藤右衛門儀、穀物申買仕渡世仕候處、平生大酒を好、商賣之利潤を以相調給申儀も可有之候得とも、仕形不宜儀数多有之、其上調物を頼候人之銀を受取酒代ニ遣捨、銀主ニも迷惑を掛ケ候得共、商賣人故令了簡隠密ニ仕置、然は身持不宜族と相見江候。段〻下知之筋も有之候間、随分相慎向後身持を相改身過ニ心掛可仕候。此上ニも仕形不宜候ハヽ、急度可申付候間、相慎候様委敷御書付を以申達ス。

一田代町宇八儀、種油を賣在方へ通ひ候由、然處去年以前之御書を何方〻か写し取、在町江持廻人〻見セ、遠方之村〻江参り候節ハ二三日茂逗留仕、或ハ色〻之(道化カ)とうげ事を申、村人を寄、礼銭杯を取り、又は平生上るり小歌斗ニ而日を暮し、身持不宜者之由、商賣事斗り仕候而、田舎人ハ渡世之ため二而候得共、右之通ニ而在町ニ申あるき口過仕候段、甚以不宜跡行ニ而、向後身持相改、誠之筋之商賣事仕、渡世を送り可申候。此後身持相改不申候ハヽ、御下知之通可申付候。此段委敷申付候様と委細書付有之。

一曽根崎村四郎右衛門儀、年六十歳余ニ罷成候得共、平生村〻を廻り訴状等を相認候由聞届候。願事之品ニ〻其村之願書抔ハ手跡宜候ハヽ、可相認事ニ候得共、無十方訴状等を其身方〻村〻を廻り、其上右之類之儀ニ而渡世を送り候段は、甚以不宜儀ニ而候間、向後相慎人〻害ニ罷成候儀を仕間敷候。此度委く遂吟味候ハヽ、其向ニ而は難召置候。此趣を以相諭候得、委細以書付申渡ス。

六月四日

園部上村又七、同又市、同下村藤十、木山口町次三郎、
瓜生野村清七、瓜生野町弥七、田代町左右衛門、同儀介、
右之(者カ)平生不行跡ニ有之段聞届、書付を以、向後相慎身持
相改候様ニ、若不相改と之儀相聞候ハヽ、厳科ニ可申付
候。此節皆共仕形不宜との訳ヶ不遂吟味段は、存寄之旨
有之候、此節ハ諭し置候様申付。
一瓜生野町五郎介。右は平生働方精ニ入、身過能両親江念
比仕候段聞及、為御褒美以書付申渡。
一鳥目弐百疋宛、田代新町藤介、同上町藤八、秋光村十兵
衛。右之者共平生働方精入渡世仕候段聞届、書付を以褒
美申渡ス。
一田代昌元寺町九介、喜右衛門。右は平生不行跡ニ有之、
博奕之方ニ茂携り候段聞及、向後身持相改候様ニ委細書
付を以申渡ス。
六月十八日
一幡崎村藤市儀、及案内候次第極ミ之不行跡と聞候ニ付、
書付を以申諭候分ニ而は容易ニ身体を改可申者共不被
存、然は流罪可申付哉ニ候得共、配所之村ニ而も如何躰
之儀仕出し、又は忍候而居村江も罷越、村中ニ對し害を
成し候而は大切之儀ニ候。尤村中連判を以申出、皆共ゟ
疎を受申たる者之儀ニ候故、牢舎申付置、御国江御案内
申上、御裁許次第取行候方可宜哉と存候。乍去委細ニ書
付を以申諭し候上ニ而、相改候義茂可有之候哉、又は平
生不宜仕形如何様之儀を仕、常ミ御(大カ)酒等用候者ニ候哉
之趣、委細庄屋組頭召寄相尋候上ニ而何れニも可申付哉
ニ候。右之三様之内何れ之方申付可然候哉、御相談申進
候と之趣、則左平次方江申遣候處、牢舎被仰付候方惣体
御領中之戒メニも成事ニ而候得は、可然哉之儀を以御聞
被成候。先庄屋組頭召寄申分承合候處、常ニハ大酒は好
不申候得共、平生親ニも不孝ニ有之、村中ニ對し候而は
数年之間様ミ之悪事有之、大のやから者ニ而手式ニ及不
申候。此度　上ゟ何程被仰諭候共、承引仕可申とハ不奉

存候由之趣ニ付、弥牢舎可被仰付候間、左平次殿方江も
罷出、皆共申候ニ付、弥牢舎申付。
一飯米之儀、幡崎村江備置有之候御救米之内ゟ一日ニ四合
ツヽ、兄弟共江相渡、朝夕共ニ兄弟共ゟ運ひ候而給させ候
様ニと申付。
六月廿三日
一奈良田村喜三右衛門と申者、女房姑ニ孝行仕候段聞届、
為褒美鳥目壱貫文拝領申付。
六月廿九日
覚
家屋敷代
一新銀七百六拾弐匁五分園部村常右衛門、家代同百七拾五
匁小倉村九郎左衛門、家代同四百匁永吉村勘兵衛、右之
通常右衛門儀は家屋敷代被下之、両人ハ家代斗り被下之、
委細申渡有之。
一幡崎村儀右衛門。右は平生身持宜農業ニも精を入候者之
由ニ付、書付を以褒美申渡ス。
一瓜生野町弥平右同格。
一園部下村久兵衛、瓜生野町勘介、同町八右衛門子金右衛
門、同町久右衛門子傳介、同町弥七。右は平生不行跡ニ
有之、或は博奕ニ携り候者共之由ニ付、書付を以申渡。
七月十日
一田代町善八、八三郎、常ミ働方宜、母病氣有之候處、懇
比ニ仕候段奇特ニ候ニ付、鳥目百疋為御褒美以書付拝領
申渡ス。
一次右衛門義、組内善八、八三郎、働方宜敷人柄能候處、
貧窮ニ有之候ニ付、頃日米壱斗遣之候由奇特ニ候。向後
組中之儀は不及申、組頭職分ニ候間、諸事念を入候得と
以書付申渡ス。
一今泉村源七、常ミ不行跡有之段、急度可申付候得共、一
應申諭候而も不相改候ハヽ、村中ゟも申出候へ、此方ゟ
及吟味候迄ハ延引可仕候と、庄屋組頭江も稠敷申渡。

七月廿一日

一三郷村ゟ永荒河成地を、最前用銀方發シニ仕置候場所之内、不宜所ハ永荒ニ仕、宜地面は本地方ニ入候ニ付、高盛之上を中ニ願、中を下ニ願候得共、左様ニ被仰付候而は御定法之石盛違ニ成候故、石盛は以前之石盛ニ任發候へ、發方ニ付而ハ手数之多少を極、五ヶ年三ヶ年御貢米御除之方ニ被成被下候と之儀、大庄屋江申談、百姓中ニ申聞候處、弥其方可然由申出候ニ付、其場所等見分有之。

八月七日

一御扶持人中、屋根葺替時之次第、古来仕来り之子細書付差出、御国元江不伺候而は如何様共難申付候。御国ゟ之御差圖ニ付、古来之通仕候様ニと有之候得は、快諾請候而、畢竟皆中之為ニ候間、其段申達置候様ニ申渡ス。

八月七日

一昨日御扶持人差出候書付之儀、御国江可被差出と存候得共、得と了簡候へは夫ニも及間敷候間、弥諾請候所随分ニ念入、御扶持人中堅ク申合、熟談を以諾請可申、萬一壱人ニ而も不了簡之儀有之候而は、重而違却仕、甚不宜事ニ候間、其所を能ゝ申達候様ニ申達ス。

九月廿三日

一牛原村甚四郎女房儀、平生人柄至極実体有之、女之家業精ニ出シ、幼少之子共養育仕候。中ニも両舅ニ懇之勤相勝し舅姑も安堵仕、家内和順有之候段、偏ニ此女之志し神妙之至ニ候、其外宜儀多候ニ付、則為褒美鳥目五百文拝領申達ス。

一藤木西村仁右衛門。右之者以前親掛りニ而罷在候節は、行跡も不宜候由ニ之處、一両年以前父ニ別れ、持分等も無之候得共、兄弟共ニ申合、下作精ニ入相勤候ニ付、家内も取續、當夏之御救米も纔之借受、秋作ニも取付キ、兄弟共ニ思ひ合、萬端無疎意相拵、兼ゝ御下知之通得心仕候而、身体持立候段奇特之至ニ候。依之為御褒美鳥目

三百文拝領申渡ス。

一牛原村甚兵衛子共弐人、若年之時分ゟ実体ニ有之、耕作ニ精を出し働方勝レたる者ニ而、家内を持立、表向之儀は惣領ニ相渡、其身七拾歳ニ及、次男を召し隠居仕、一家一類能睦く、庄屋組頭方ゟ申渡候儀も謹而請之、段ゝ宜敷儀有之、依之褒美申渡ス。

一今泉村弥右衛門儀、親ゟ纔之居敷高壱斗程譲請、年若キ時分ゟ下作其外少宛之細工等仕、妻子を育候処、近年至而子共盛長仕、親子相働下作等精ニ入、唯今ハ左程不自由ニ茂無之様ニ身過仕候由、其外宜儀段ゝ有之、依之褒美申達ス。

一藤木西村ニ五人、牛原村ニ壱人、鳥栖村壱人、此者共人柄不宜、其上大酒を好、働方不精ニ仕候由、名之儀茂相知居候得共、此節は書載無之候は、去比三郷ゟ面付を以書付差出シ候。唯今迄之行跡相改萬端御下知之通可奉相聞候。其外村中ニ至諸事相慎可申と之趣申出候得は、此程は不行跡之所ハ不残相改たるニ而可有之候。然共為念申付候。右七人之者悪事之次第庄屋組頭委く存居可申候間、比段申渡候。随分申諭善人に罷成候様ニ可仕候得と、三ヶ村庄屋組頭ニ委細書付を以申渡ス。

九月廿八日

一去年之差圖条之内ニ、去ゝ年下郷先ゝ大庄屋杢左衛門、取込米千九百四拾弐俵之儀、百姓共ゟ出置候米を、百姓之損ニ可被仰付筈は無之と被仰遊、上之御損失ニ可被成とも何之筋ニ相極メ申渡候得と之儀、決定之儀不相見江候ニ付、其所を承極可申と存候ニ付、我ゝ存寄之趣一ゝ申上候。兎角右之米之儀、百姓共相調候而は、弥難儀之上重ゝ迷惑仕筈ニ候故、何卒　上之御損ニ被遊、納越米之方ニ被差加置、重而引戻し米相願候節之御差引被仰付被下候へかしと申出候故、弥杢左衛門取込米千九百九拾弐俵　上之御損失ニ仕、唯今迄之納越米之俵高之内ニ仕置候得と、大小庄屋共ニ委細書付を以申渡。

享保八癸卯正月七日

一去ミ子十一月、御国御家中之妻子方衣服之儀、其外被仰出之御書付之写、幷爰元御扶持人之妻子衣服之儀、御定被成候御書付共ニ相渡、何茂拝見仕候上、庄屋町役申江も向寄ニ右之御書付拝見為仕、弥向後被仰出置候御法式相守候様申渡。委細御書付有之。

正月廿日

一手代役大束与四右衛門、用銀掛高木佐介、扇伊左衛門儀、今度御国ゟ被仰越候は、御領分之御扶持人之儀、爰元之者古来ゟ被召遣候。依之旧例之通ニ被仰付候間、三人共ニ帰国申付候と之御事ニ候。相仕廻次第帰国仕候得、但与風帰国被仰付候儀ニ付、仕廻方も可有之故、切米は去年迄ニ而、御扶持米之儀は二月迄之分申付候と之儀申渡。委細は御条目ニ有之。

一爰元御扶持人之儀、向後御領分之者ニ被仰付候と之趣意、御書付を以御扶持人中ニ壱通、三郷大小庄屋両町役ニ壱通相渡。

七月十日

一藤木村庄屋久兵衛出、同村永福寺方江妙心寺ゟ觸状送来、公儀御書付写。

一男女申合ニ而相果候者之儀、自今ハ死骸取捨、一方存命ニ候ハヽ下手人ニ申付。尤死骸吊候事停止可申付候。且又双方共ニ存命候ハヽ、三日さらし候上、非人手下ニ可申付事。

一惣而此類繪草紙幷かふき狂言等ニ作り候事堅仕間敷、若相背候ハヽ急度可申付事。

右之趣被仰出候間、町中江可觸知者也。

一男女申合相果候者之死骸は、取捨吊申間敷筈ニ先達而申觸候。右之類吊之儀頼来候ハヽ、且那たりともいふとも吊候儀難成由、断可申候。

一寺社領并門前町家等之者、男女申合相果候節は、唯今之通奉行所江相訴可請指圖候。

卯三月十九日

九月二日

一御年貢本口之成方、毎年帳面御屋敷江差出候得共、小百姓共詳見届候儀無之ニ付、厳密ニ差引仕候庄屋をも、疑候様子相聞候間、當御年貢ゟ御屋敷江差出候帳面之外ニ壱冊帳面を仕立、本口其外小物成諸事貫銀等迄、地方ニ掛り取立候品一切石當りニ仕、其村切之帳面仕立、庄屋方ゟ各方江差出させ被見届候上、其帳面ニ各證印被致、其村之百姓中江預ヶ置可被申候。左様仕候時は、末ミ之小百姓迄も得と指引取立方委細ニ承り安堵仕儀ニ候。既ニ去ミ年以来ゟ御仁政之御執行ニ候處、少ニ而も百姓共ゟ差引方之儀ニ付、其村之庄屋を疑候様ニ有之候而は、御領中御下知茂乱、甚以不宜義ニ候間、右申述候通、當年之御年貢諸上納ゟ右之通執行候様ニ可仕候。右之趣在町役人中江委細申聞、間違無之様執行候得と堅ク申可渡候。以上。

十一月四日

一御米弐俵、昌元寺町善内女房。右は姑ニ孝行ニ有之候段聞及召出、直ニ書付を以褒美申渡。三郷両町江も申觸候様ニ申付。

十二月十五日

一三郷両町ゟ差出候書付、六右衛門去子春罷越、同年之夏不存知山潮洪水之大変有之、跡方不及承損毛ニ而、翌丑春ニ押移り諸国一統之成行米穀甚高直ニ有之、右之損毛旁ニ而、御領中在町共ニ至極及難義、既ニ末ミ之者餓死可仕時節、上之御仁政之儀は不及申上、當役専百姓町人末ミ之者取續方之儀昼夜心を盡、勘弁を以夫ミニ御救被仰付候ニ付、及難儀候者壱人も無之、無別条取續候段、在町一統ニ難有次第難申上尽、常之御勤方も別而厳密ニ而下ゟ願候訴訟等之儀少も無滞、夫ミニ正道ニ差圖申付、少之費も御省、惣而御領中百姓町人之為宜、少も差間候義無之様ニ執行、毎事共ニ申付、在町ニ而行跡宜

者は召出、褒美被成下、又は直に称美申付、風儀不宜者ハ委敷御教諭被下、第一御憐愍厚ク佐五郎吉右衛門同前ニ結構ニ候所ゟ、在町共ニ安堵仕罷在候。依之乍恐一通御礼申上候験迄ニ、三郷両町ゟ薪(差カ)取上度申出候由を以、右在町役ゝゟ申出、其員数薪六百把本役江、同三百把佐役江、同百五拾把賄役江、右書付之通受用申達、樽代遣之。就而は書付を以申渡、其書付。當節三郷両町ゟ以書付申出候趣、委細遂被見候。御領中末ゝ迄　上之御下知を得心仕候処ゟ、當役人之儀委細申述候。當役ゟハ　上之御下知を相請、末ゝ迄下知仕段は前役迚も同前之儀ニ候処、此節當役人之勤方を相感候趣、御領中衆議一決仕申出候趣令祝着候、然処夫ゝニ薪差出一礼申述候と之儀聞届候。惣体御領中ゟ之音物受用不仕義ニ候処、別録ニ而差出候薪之儀受用難仕候得共、御領中一統志を相立差出候薪之儀ニ候故、受之、為返禮乍軽少別録之通、三郷両町惣中江遣之候。右之通三郷大小庄屋両町役江可被申渡候得と、手代中ニ申達ス。

十二月十九日

一鳥目壱貫文ツヽ、山廻役吉松重蔵、中間六兵衛、同十内、山方下横目吉兵衛、同助八、園部下横目清兵衛、走番稲右衛門、右之面ゝ御立山之方勤方廉直ニ相勤候ニ付、御行規方も相立候様ニ相聞候。依之為褒美右之通遣之候。乍此上随分念を入、兼ゝ申渡置候通、他領江持出候諸木等吟味一入念を入可申候。

十二月廿九日

一弥市左衛門儀、人柄宜キ者と聞届居候。今度拙者ゟ尋候返答之趣を勘へ候、支配役之心ニ叶申間舗と存候而、心底を控候様子ニ曽而不相見、其身存寄之通真直ニ申出候と相見江候。支配役ニ對し候而さへ如此候得は、御代官ニ對し心底之存入を相控候義は決而有之間敷と存候。役下タゟ役頭江詔ヒ候得は、何事も役頭之心ニ叶候様ニ申候故、役頭之勤之害ニ成候と相見江候。然は弥市左衛門

は御代官之為ニ成可申手代ニ而候故、諸事内談可被致候。右之趣、御支配平田隼人殿ゟ被仰下候御紙面写之候而、猶又我ゝ存寄申達候。然は今度被仰下候御紙上之内ニも、御代官は　殿様御名代御立被成、手代役之儀、御家老中之御名代被思召候と之御趣御書載有之候。此意味之儀誠ニ重キ御儀と奉存候。兼而手代中江申達候。我ゝ儀は移り代り仕候儀候得は、全く御領中御仕置方之儀、手代役之勤之出来候は手代役之勘弁宜キと不宜と之所ニ而可有之候。付而は、御領中末ゝ之者迄安堵仕候様ニ有之候は、手代役之勤廉直ニ無之候而は、末ゝ之為ニも不罷成筈ニ候間、此所を同役中申談、真実ニ相勤可被申候。則隼人殿御方江御紙面を写、猶又我ゝ存寄奥書仕、弥市左衛門江相渡候と之儀可申上候間、左様可被相心得候。

以上。六右衛門、佐平次。十二月廿九日、櫻井孫平殿、原弥市左衛門殿、吉田善兵衛殿

享保九甲辰二月十三日

本役、幾度六右衛門
佐役、小茂田左平次　在勤

一三郷両町共ニ、人ゝ田畠持高何程、家業又ハ何細工、下作人、何商賣仕、上中下民之分り夫ゝ仕分ケ帳面、當月中ニ差出候様ニ申付。

同二月十九日

一御備米御法其外御法式、末ゝ委敷得心不仕候様ニ相聞、依之在町江出、手寄能所ゝ江家主壱人宛召寄、書付を以申渡。其上口上ニ而茂委細申渡。

同二月廿七日

一櫻井孫平願之通御役交代被仰付、米弐俵被成下、一生壱人扶持被下置、且又帰役以後四ヶ年日参相勤、御用繁キ節一入苦労仕候ニ付、右之通遣之候。数年手代役相勤、御領中之義茂功者之人ニ候故、入組たる御用之節は夜白ニ不限召出シ、相尋る御用向も可有之候間、内ゝ可得其

意候と、書付を以委細申渡。

同四月朔日

一園部下村、奈良田村、河内村、田代村、原村、牛原村、養父村、今泉村、右村〻庄屋申〻以書付申上候は、我〻義先祖〻持来り又ハ中古来〻他〻買請候義、其紛無御座候。尤先年永吉村先庄屋勘兵衛、小倉村庄屋九郎左衛門、園部下村先庄屋常右衛門、願之節被仰付候次第奉承候。乍然我〻義向後御役相勤候程之子共無之節は、餘村並ニ参拾石役料ともニ被召上候様ニ御座候而は、皆共難義千萬ニ奉存候。右持傳候と之證文とては無御座候得共、持傳候義は為存者多御座候ニ付、今度又〻御願申上、委細ハ願書有之。右書付先年〻委細ニ御國江申上、慥成證文無之候而は、願之通難被仰付由、為被仰付置事ニ候。重而御帰国之節、此書付持越宜可申上之由申達。

同六月廿一日

一今泉之者、為邪氣払之宮籠仕居、口論仕出、太介と申者、藤右衛門と申者を切り、太介義は何方江参候共不相知、藤右衛門深手ニ而快氣無覚束様子、庄屋〻申出候。折節申来候は、太介義、村際之田之中江自骸(害)仕居、藤右衛門義も相果申候由。双方共ニ相果候上ハ、打渡(マヽ)り申義も有之間敷候間、一類とも及其節居合候者共口書仕らセ、死骸之儀は葬候様申付。

同十二月四日

佐役、久和幸右衛門在勤

一鳥目三百文、米壱俵、曽根崎村仁介女房。平生姑ニ念比ニ仕り其上働方茂相勝、甚男之為ニ茂罷成由御聞被成、偖又仁介義も平生村中我〻上たる者ニ丁寧ニ有之由を以、為褒美被仰付。

一米壱俵、田代外町伊兵衛。兼而老父ニ孝行ニ有之候由ニ付、為褒美右之通申付、目通ニ而書付讀聞セ。

十二月廿四日

一米弐俵宛、柚比村庄屋五右衛門、田代村庄屋介左衛門。

右両人共ニ平生御役実体ニ相勤、御屋敷〻御用ニ付召寄候節其外礼日ニ茂、無懈怠罷出、勿論村方行規守方宜、其村之百姓共も常〻示方能候付、村中帰服仕候段、依之為褒美被成下候。大庄屋豊左衛門藤兵衛方〻郷中庄屋中江茂申聞候様ニ以書付申渡。

享保十乙巳正月六日

一園部村善作と申者、元日夜女房を切り其身自害仕候ニ付、吟味申付候處、善作義後家入ニ而、女房と不和ニ有之、離別仕居候處、取扱ニ而双方納得仕無別条候処、与風変氣ニ而女房を手負セ則切り殺候と存、善作義自害仕、女房事深手ニ候得共、自然ハ快氣仕儀も可有之哉之由、年始之事ニ候間、五日過吟味仕候様ニ、善作死骸之義は早〻取置候様ニ申付、女房事は随分念を入養生可仕之旨申付、御救人参四袋渡之。

同九月十八日

本役、樋口弥五左衛門在勤

一六右衛門出立為見送、三郷村〻百姓之内両町之組頭今町〻白坂之間ニ段〻罷出、致暇乞。

同十二月十五日

一鳥目五拾疋、山方役吉松重蔵、山方之儀平生念を入候故、〆り方茂宜、為褒美遣之。

一同三拾疋宛、中間重内、山方下横目吉兵衛、助八、稲右衛門、山方之義念を入相勤候故、為褒美遣之。

一同三拾疋、園部山廻り次兵衛、右同様ニ付為褒美遣之。

同十二丁未二月六日

一参宮留主見舞等、又ハ餞別道行寄合等之義も、貧窮成者、先後之物入有之候而は難義ニ有之由、其類之儀とも向後差止。

一村ニ〻御法度之鉄砲取扱候義、猟師之外取扱差止候。

同五月十三日

一下モ村夏作毛水損ニ付、百姓中御救米拝借之義願出、御救米一篇ニ而は心遣之義ニ付、用銀方江年賦返弁之銀拾

弐貫五百匁有之候。此御銀を御借可然候。御銀御借候ニ而は不益之義ニ遣申義茂可有之候。田代町谷口善五郎江申付、米調させ、御借し救被成度候。尤米斗りニ而は是又如何ニ候間、米壱斗御借被成候者ニは、米五升と残り五升分を小麦ニメ御渡方可然候。然時は少茂心遣之義無之候。右返上之義は、當暮右直段ニ而銀上納ニ被仰付候得は、少茂差支無之候。依之米麦御調御救被成候分凡積り申候。手代役差出、村〻積書略之。凡米百五拾俵程七月上旬ゟ先御救之心當内端ニメ御調被成分代凡弐貫弐拾五匁、但三拾匁五分ニメ凡小麦百八拾俵程、右同断代凡壱貫五百三拾匁、但八匁五分ニメ、合代銀三貫五百五拾五匁程。

同五月十五日

一下モ村麦辛子収納帳、御救米拝借之面附帳、右願書兵粮乏者幷拝借之寄目録見届、右之者共随分家内質素ニ仕取續候様ニ、御救米之外ニ御手當とて無之、御手支之御時節ニ候得共、何茂及飢候様ニハ不被仰付事ニ候間、百姓中江安堵仕らせ可置候。當春御救米之内少茂拝借不仕者共當り前之只今少〻拝借仕相残候間、重而拝借可願上候。此者共義當り前之御救前ニ而當秋迄取續見可申由書載有之候。此者共義ハ貯有之者と相聞候。此内ニ茂難義成者茂有之と相聞候。貯有之者共只今ゟ粮米無之者と同前ニは難申候。御救米當り前之儀は纔壱ヶ月分之粮米も不足仕候を、是ニ而當秋迄可取續と申出候。此内貯有之候者ハ此節之義ニ候間、相勵拝借不仕候而、至極難義仕候者ニ當り前之御救米借渡候様ニ、庄屋中ゟ委細可申諭候。此内ニ茂殊之外不同有之様ニ相見江候間、今一應得と吟味仕、両日中ニ可申出之旨申付。

同十三戌甲三月三日

一久留米御領百姓願事ニ付、國中一統致騒動候由ニ付、境目庄屋中聞合候而、追〻申出候様ニ申付。

小森村中も不残寄り集り居候處、惣奉行本城主計方ゟ折

〻廻状来、願之品ハ何分ニも宜筋ニ可被仰付旨、騒候儀鎮り候様ニと之義ニ而、昨朝小百姓ハ引取申候。頭百姓ハ于今引取不申由、郡〻段〻と所〻ニ寄會談合仕候而、久留米江罷出申筈之由、尤昨日ゟ御家老中連判之廻状、主計殿勿論八人之郡奉行ゟ之廻状ニも、願一筋ニ仕騒候義相止候様ニ折〻申觸有之、然共今明日も上郡ゟ千四五百人久留米江罷出候筈之由、沙汰有之段申出ル。

同五月十日

本役、幾度六右衛門在勤

一三郷大庄屋三人両町役罷出候ニ付、書付之趣申渡、左ニ記ス。

御國ゟ被差越候御書付、當春其表江御國ゟ被差渡候御目附之旅宿ニ落置候訴状之内ニ、三郷両町致書載何某申出候と申事不相知書付壱通有之候。惣体名をかくし差出置候書付ハ、匿名之書と唱候而、其者相知候得は、科ニも被仰付程之義ニ候故、取揚評議ニ可及様無之候間、御領中之者共右之通を相心得、以来密〻ニ訴寄事有之節ハ、内ニ名を記、外を封し致封印、御目附在留之内ニ成共、或は御目附罷越候迄難延置候ハヽ、何之手寄を以成共、御領中支配之御國年寄中迄差出候様ニ、御領中之者共江可被申聞候。以上。右之通今度御國ゟ被仰越候間、在町末〻迄委細申渡候様ニ申渡。

同十四己酉三月十三日

一江戸表ゟ到来之御書付。

一在〻用水掛引井堰之義、川内井堰を立水をわけ候処、堰仕方ゟ川下之井水令不足にも無構、手前勝手宜様ニのミ仕候故、及争論、或は両頬ニ井口有之場所片頬之井口付替候時、双方不申合、一方之自由ニ任セ仕替候故、令出訴候類有之候。自今右体之儀双方致相對、普請仕候節立會無障様可致候。若滞儀有之歟又ハ不法之事仕候時は、其節ゟ十二月を限り於訴之は、可有裁断、右期月過令出訴候ハヽ、不取上候事。

一郡境村境山野之論又ハ質田地等之儀、其外奉行所江訴出候事ニ付、證據無之非分之義をも何角申紛し、又證據有之義も年經候得は其事を申掠及出訴、相手村方之難義ニ及セ、其上双方村〻困窮之元ニ成不届候条、向後如此之筋不訴、若此類之事訴出、僉議之上、巧之訳相知候ニおゐてハ、其咎可申付候事。右之通六ヶ年以前辰四月相觸候得共、未行届所も有之様ニ相聞候ニ付、猶又此度相觸候間、被存其旨、御料ハ御代官、私領ハ地頭〻村〻名主百姓共、右之趣キ相心得候様、可被申付候。以上。

同七月十一日

一庄屋町役之盛人成子共所持仕候得は、年始其外限有之候筋ハ御屋敷江罷出、御礼等仕候段古来〻之仕来候間、弥向後共ニ其格相勤候事。

一庄屋町役之面〻當病差合有之候節は、盛人成子共所持仕候仁ハ名代差出、御用向承之候得共、未御役号も無之子共、假令盛人たり共、御役用ニ付親之名代相勤候義公辺無之義ニ候。扨又在町之願事其外役ニ相(拘カ)抱り候儀申上候節は、組頭役を以名代ニ差出し、御用向承之可申候。庄屋町役移り代り之節入札申付、高札面〻相記、御国江御案内申上、御返答無之内ハ假役ニ組頭役〻申付置可相勤事。

庄屋中當病差合之節ハ子共出勤之覚。

一公儀御役人様御通之節出勤事。

一村方之願書差出候節、品ニ〻罷出候事。

一人参願ニ罷出候事。

一御貢米津出場出勤之事。

一郷方ニ而庄屋中諸寄會、其外庄屋中出會之節、罷出候事。庄屋中當病差合之節、組頭名代出勤之事。

一御壁書其外被仰渡之節、罷出候事。

一村方御見分之節、罷出候事。

一村方願書差出候節、品ニ〻罷出候事。

一人参願ニ罷出候事。

同十一月廿五日

佐役、橋邊正左衛門在勤

一高田村右衛門女房、自殺仕候次第遂吟味候處、何之心もなく自害仕候と申、然共一命を捨候段不埒事故、療治方随分入念を候様申付。

同十一月廿八日

公儀御書付之写

一元禄年中金銀吹替已来米穀高直ニ候處、近年下直ニ相成候。然處借銀金并質地利金ハ前〻之通ニ而、諸人難義いたし候由相聞候。依之元禄十五年午年以来、借金銀ハ利金銀五歩わりたるへし、今暮前〻之通借銀を追越し手形をいたし直し借用候茂、是又利金同前之事。

右之趣、双方相違無之様ニ急度可相守、返弁滞候は借し元〻奉行所江可相届候。若又右定り〻利金下さるニおゐてハ借主可訴出候事。

一新規之借金銀ハ、尤相對次第たるへし。猥ニ高利すへからす。

右之通急度可相守者也。

同十二月廿四日

一在方年越用之糯擣申間敷なとゝ申合候村も有之由粗承候。古来〻之礼式ニ而糯を擣、諸神江も相備、先祖江之備申事ニ候得は、年並悪敷候とて糯不擣ハ甚不吉之様ニ相聞候間、平生壱俵擣候者は壱斗又壱斗程三四升も擣、神〻或は先祖江も備候様有之度候。扨又正月ニ成、親子初入之義、必不相止様ニ、料理仕候を無用ニ仕、茶を給候而成共、礼式互ニ相勤候様ニ有之度候。右礼式之儀は不相止様ニ、庄屋中江得と申談候様、存寄之趣具ニ申渡ス。

同十五庚戌正月二日

一去冬昌元寺町藤右衛門、他領之商人ニ不法之義申掛、其上御目附古賀儀右衛門ニ對し無礼成儀申、至極方外之仕形重科不輕、依之手錠入組頭中江預ケ置、昼夜番仕候様

ニ百姓中右之通心得違不仕、役〻も村中共ニ折〻立廻り、御壁書之趣堅可申付候。必〻役〻諸事心を用、御国法相守セ百姓中怪我不仕様ニ可相勤候。然時は御領中安全ニ成候。庄屋町役中各相勵相勤可申候。此節ハ第一田作方専取掛時節、其外存旨有之候而無別条裁許申付候。向後如斯義出来候時は、此度之通ニ而不相濟義ニ而候。其節厳科ニ被仰付候。必御うらみニ存間敷候。皆共為心得委細直ニ申論。

一科代人夫六拾人、今泉村惣兵衛、助右衛門、六平、團右衛門、右は四ヶ年以前欠落仕候喜三右衛門、密ニ立帰居候付而は、此節御国法之重キ科ニも不被仰付候而難叶儀ニ候得共、存寄之旨有之、科代人夫申付手錠差免。

一今泉村茂七組合中七人、科代人夫七拾人。右は喜三右衛門欠落前、似セ銀似セ人参取扱候得共、存寄有之、科代ニ而禁足被差免候段、委細書付を以申渡。

一科代人夫三拾人、今泉村庄屋七郎右衛門。右は今度同村喜三右衛門一件偏ニ勤方緩ニ有之所より、此度之通村中ニ凶事も出来、上之御法相乱候様ニ成行、此節ハ急度被仰付様も有之候得とも、科代申付遠慮差免候。向後御役念入相勤、村中ニも怪我等不為仕候様、万端心を尽可相勤旨、委細書付を以申渡。

一今泉村茂七。右は父喜三右衛門云て殊ニ他領ゟ悪事仕候者之悴之儀、其上両親兄弟共迄欠落仕たる事候故、茂七儀は追而裁許可仰付候。則村中江御預ケ被成候。万一御裁許前、茂七取逃候ハヽ、大庄屋作平、庄屋七郎左衛門、同村組頭越度ニ可被仰付由、委細以書付申渡。茂七家屋敷御取上ヶ被成、御賣拂被成候間、村中ゟ入札仕候様ニ申付、家財書付差出候様ニ申渡ス。茂七組合之組頭新平、組頭役被差替候間、替可申付旨申達。

三月廿九日

一茂七儀、親兄弟共曳科ニ依而、御国表江差渡候。此者儀ハ兼而行跡宜候由ニ付、御年寄中御方江被召仕候様ニと

申上候間、其通可申渡候。茂七必心遣不仕様ニと可申渡旨申渡。

一茂七家財賣拂代九匁四分五厘、則同人江遣之。

同四月四日

一隣旦江富札と申を賣出し、御領分別而上郷村〻より買取、不宜儀ニ候間、右之筋ニ携り不申候様、村〻両町共堅く申渡候様、久留米御領彼方境目ニ而おどり所〻ニ而仕候由、此方境目村〻より夜通ニ致見物、働方差閊ニも成候様ニ聞候。當年は年向も違、其上兼而右体見物ニ茂不罷越候様ニ申達置候待は、両様共ニ急度相慎候様申渡。

同九月六日

佐役、関野新八在勤

一田代町市日ニ在方ゟ持出候野菜物薪等、町外ニ罷出相調候者有之候ニ付、何茂右之品相調候者共難儀仕由、諸品其通ニ法外ニ仕候而ハ、畢竟町内之為ニ不宜候間、中間走り番之内差出候様申達。

同九月廿七日

一幾度六右衛門、今両三年逗留之儀、三郷両町百姓町人中ゟ願出、関野新八ゟ御国江差上。

享保十六辛亥七月廿二日

本役、平田所左衛門在勤

一殿様御初入之節、三郷為惣代大庄屋壱人、両町為惣代町役壱人、御国江も罷渡、又ハ下関江罷越候先例ニ而候處、両役共ニ重キ役義引請居、遠路相渡候而は農事之支ニも可罷成候間、今度之義は御用捨被仰付候。追上物差上候ニ不及候。畢竟ハ罷渡候物入、御領内百姓中ゟ差出候儀を御厭ひ被遊、被仰出候儀と相聞候条、其旨を申聞候得と委細申達。

同十七壬子二月九日

一在町人〻隣国所〻ニ而牛馬を調候ハヽ、代銀持参候而可買調候。必掛ニ買調義堅ク無用ニ候。即座ニ代銀拂難叶訳有之、慥成義ニ候ハヽ、在町役〻方ゟ請合手形向様ニ

遣し、牛馬請取可申候。扨又隣国之者、當御領内在町ニ而牛馬相調候ハヽ、是又向様ゟ其座ニ而代銀請取、牛馬ひかせ可申候。必かけニ賣渡不申様ニ、勿論掛ニ買不申候而難叶義ニ候ハヽ、向様村所庄屋方ゟ右代銀請合手形取候而、牛馬相渡候様ニ稠敷申附置候得、不然候は向後取上ケ無用之段申渡。

同二月廿八日

一長野村奈良(田脱)村野口永吉両村幡崎飯田此七ケ村、以前ニ違、用水之変有之、田作損毛仕難儀仕候ニ付、去ヽ成春川掘之御願申上候。其節申上候通、先年山潮洪水之以後、川上之石砂漸ヽと流来り、長野村分戸田笠井手ゟ幡崎村分後田渡り瀬迄、川底殊外高く罷成、左右之田ニ水引落候故、水勢弱く罷成候。惣代飯田村之義は此川一筋を以、御田地養来候処、右之通以前違川水少く候故、別而旱損所ニ相成申候。幡崎永吉両村分も此川水を以相用候地面多く御座候ニ付、是又右之場所旱損仕、及難儀申候。長野奈良田野口之義は、右之川中高く罷成候故、右地面ニ吸水多く冷水出、田作以前と違出来悪敷罷成、其上少之雨ニ而も水土手を越し、川端壱通ハ水洗之地面と成、難儀仕候。右七ケ村之差閊多候。就中飯田村打續旱損仕り至極之難儀ニ御座候。去ル辰年以来ハ定御物成不足之年多く御座候ニ付、損毛ニ應し毎年取替米等仕償ィ申候。地変ニ而村中年ヽと及困窮申候處、去年又ヽ旱損仕、難儀の様子ニ見及申候。依之三郷相談仕、當春公役壱名ゟ人夫弐人ツヽ合力仕、此人夫千人、長野奈良田野口永吉両村幡崎村ハ公役當り前之外、極貧者を差除、其外竈別ゟ一同罷出候。飯田村之者普請中極貧者を差除ケ、其外竈別ゟ罷出、川掘仕様ニ相極置申候。

一長野村戸田笠井手ゟ幡崎村分後田渡瀬分長閊数弐千百弐拾間余之間川幅三間深サ三尺、所ニゟ四尺又ハ瀬ヽ斗り掘候様ニ仕度候。

一今度川掘御普請中、御奉行衆上ゟ御付被遊被下候様ニ奉

願候。

一杭紫(柴)朶入用之所御座候間、杭六拾荷但五本持、紫(柴)朶六百把被仰付被下候様奉願候。右之分ニ而不足ニ有之候ハヽ、其節御願可申上と、以書付願出。村割夫割之書付有之。

同十月朔日

一大坂町御奉行ゟ西国中国四国留主居中被召呼、御書付を以、国ヽ虫入大損毛ニ付而、必定飢人可有之、依之大坂御役所組与力衆御付ケ、御米被差下候、御米望之所は、地頭役人名主等被召速、与力衆江被相達買取候様ニ、御米望無之處は右之次第相断可申候。則御米夫ヽ御賣渡可被成候。代銀之義は百日延ニメ、直段は其所相場相對ニメ御賣可被成由、御書付ニ而被仰渡候趣大坂役ゟ申来、此旨以飛船御国江被仰上候筈ニ候間、手代中存寄申出候得と申達候處、爰元江御米御買又は御望無之と之義は御国ゟ御差圖可被仰付、右米直段下直ニ無之、其所之相場と有之候は、御考御座候而之御儀と相聞候。下直ニ御賣候ハヽ、其国ヽニ而も不足可仕、其所之相場ニ而候ハヽ、国ヽニ而も多く米御望ニ有之間敷候。殊ニ代銀上納茂急成儀ニ候得は、孰れ国ヽ飢人無之様ニと御趣意と相聞候。爰元之儀、御備米其外御国ゟ之弐千四百俵米も有之事ニ候得は、何そ急ニ御調ニも及間敷様ニ相聞候。兎角御国江御伺之上、御差圖可有御座儀と奉存候。右国ヽ之内、組与力衆滞留之間ハ、大切成義共と相聞候。爰元之義は夫ヽ御備兼而有之儀ニ候得は、此節ニ至り候而も、乍恐御面目と奉存候。依而右与力衆江御米望無之段御届被仰上も、御肩廣キ義共ニ奉存候段、申出。

同十一月四日

一村ヽ食用難儀之者有之ニ付、今日ゟ目付中家別差廻様子聞届之義、今日ゟ初ル。

同七日

一村ヽニ而五軒七軒宛極ヽ難儀仕者有之由、依之手代中も

壱人宛代ルヾ村ゟ江罷出、至極膚薄く有之食用共ニ難儀
次第見届候様申付ル。

同十八丑正月四日

一當町夜廻り火用心之義稠敷申付。自身番人数相増、其外町内町裏夜中一夜ニ弐拾人宛、旧臘共八日晩ゟ昨夜迄一夜一町切ニ夜廻り仕候。尤上ゟ粥用ニ米弐升薪五把宛毎晩遣之。右之分ニ而相止メ申筈ニ候得共、當月十五日迄之人数相減候間成共、町内ゟ廻り候様ニ仕度旨、町役方ゟ申出候。弥其通仕候様、夜食用薪共此内申付候半減ニメ可申付、念を入相勤候様申渡。

同正月十一日

一去年従　公義御賣米ニ付、御国江御伺申上。此節御救米差足之義、御国元御差支ニ付、銀米ニ而被差越候儀は、御叶不被成候間、大村湊江従　公義御廻米弐千俵御調被成候間、所左衛門大村江罷越候様被仰下、只今与力衆唐津表江御越之由、相聞候付、手代役原弥三左衛門(祐)佑筆前川幾右衛門召連罷越。

同正月廿二日

一去年田作損毛ニ付、三郷両町ゟ諸上納口ゟ之願御国江申上置、今般被仰越候趣、三郷両町江書付を以申渡。去秋作虫入大損毛ニ付、三郷大小庄屋両町役ゟ段ゟ以書付願出候趣、追ゟ御国元江相伺置候處、此度被仰下候は、近年は別而御勝手向被差支、當(マヽ)分之御償も難成御時節ニ候処、朝鮮国去ゟ年飢饉ニ付、御賣米も例年之ことくはか〳〵敷無之、其上去春御国火災ニ付、非常之御物入不輕事ニ候得は、御家中御撫育全く難成程之御時勢と相見江御安心難成候処、御米壱万石御拝領被成候ニ付、御家中之御撫育并類焼之面ゟ末ゟ身体ニ應し、御救不被仰付候而難叶義ニ候処、此節御領中大変ニ付、右御拝領米之内為御救被差渡、其上御救不足之分此度　公義ゟ被差廻候御米、三斗俵ニメ弐千俵之積御調被成、其外御出方多く素り御年貢ハ皆無程ニ候得は、御拝領米を以、御家中之

御備不被成候而難叶、依之類焼之面ゟ江被成下候御救も、纔宛被成下候程之儀ニ候得は、御領中之者共江、此上之御救曽而御手ニ難被及候間、人ゟ其旨を存し年内ニ事替り、扨又艱難を見候而危急之憂を免れ、農業ニ昼夜無油断相働候様ニ、勿論去年之損毛不輕儀ニ而段ゟ御救を被成下候年並ニ付、御憐愍之上左之通被仰付と之御事ニ候。

一毛上有田之分は、其村ゟ之定免を以御年貢被召上候。尤窪り田御年貢方之儀は、追而御差圖可被仰付と之御事ニ候。尤毛上有田御年貢之儀、算用相極早ゟ御案内可申出候。

一御小物成并御礼米之義、去年之上納前被差免と之御事ニ候。

一公役代米之義、去年畠方作毛宜候故、願之通難被仰付候得は、田方古来稀成損毛ニ而、人ゟ及難義候故、被加御用捨、上納御差延年賦上納被仰付候。尤年賦之義ハ追而御差圖可被仰付と之御事ニ候。扨又大小庄屋ゟ願之書面ニ、去春以来川御普請被召上候人夫賃銀之義申出候得共、此義は御取上不被成と之御事ニ候。

一畠方之義、去年作毛宜候故、上納方可被差延様無之事ニ候共、御領中一統田方之損毛不輕事ニ候得は、御了簡を以、御年貢御差延年賦上納被仰付候。尤歩掛之義は追而御差圖可被仰付と之御事ニ候。

一田代町瓜生野町居屋敷御年貢并瓜生野町裏畠ニ掛ヶ候上納米之義、是又御了簡を以、御差延、年賦上納ニ被仰付候。尤年賦之義は、追而御差圖可被仰付と之御事。

一種籾之義、窪り田之分ハ願之分数御借渡被成候。扨又寺社御除田水屋村高田村苗代田御除地并下モ拾ヶ村用心苗種籾之義、此節御差圖ハ無之候得共、何之道御借渡不被下候而難叶筋と相聞候故、爰許了簡を以、右同前借渡候。此外毛上有田之内無付候田之籾種之義、是又此節如何様共不被仰付、爰許了簡ニ而借渡候儀茂難致候。追而

御差圖可申付候間、此分之種籾は先御年貢之内籾ニ而相備置可申候。

右之通御差圖被仰下候。御国元之儀、兼而申聞候通、甚敷御差支之御時勢ニ候得共、御憐愍深ク、此度為御救用

公儀御米御買請之義被仰下、其上願出候口〻之義、願筋ゟ茂結構ニ被仰付候段、誠以御懇愛深ク被遊御座候段、皆共朝暮難有奉存、農業無油断相働可申候。此旨御領中之末〻迄能〻可申聞候。扨又願出置候内ニ、郷方屋敷御年貢之義、此度御返答相達不申、相伺、追而御差圖次第可申渡候間、可得其意候。以上。

一三郷大小庄屋両町役中ゟ去年大損毛ニ付、御役料地余米無之、兼而貧窮之面〻食用難儀之次第願上候ニ付、御国元江被申上候處、今度左之通被仰越と之御事、御書付を以被仰付。在町役〻中江何俵之内何俵は拝借、何俵ハ拝領と被仰下。

二月廿八日

一今朝卯刻、博多ゟ原仙右衛門参着、先比此方ゟ御国江被差渡候飛船之飛脚善右衛門儀帰着。尤御救用之朝鮮御米五斗三升入三百俵、かちめ弐拾八俵、皆掛共ニ千五百三拾弐斤、縄俵之掛目五百八拾目入テ。鹿尾藻六拾八俵、皆掛共ニ千百六拾弐斤、右同断。鹿尾藻追積正味掛四拾俵弐千弐百三拾五斤被差越、上乗弐人下目附壱人、外ニ此方走番善右衛門、上乗仕被差越由被仰下。

同三月朔日

一當正月ゟ二月迄御領分死人、酉戌亥三ケ年並し壱ケ年之死人弐百五拾人程

一去子年死人三百拾弐人

一當正月中死人六拾四人

一二月朔日ゟ同十日迄日数十日ニ三拾七人

一同十一日ゟ廿日迄日数十日ニ三拾六人

一同廿一日ゟ同廿五日迄日数五日ニ拾九人

一同廿六日ゟ三月朔日迄日数五日ニ弐拾六人

〆死人百八拾弐人同　但二ケ月分

四月七日

一御支配ゟ御状到来。田畠虫付之義、国〻ゟ御案内有之候と之御事、二月廿日江戸表大御目附中様ゟ御廻状有之、御領分之義、弥以心を用候様ニと之儀、江戸表ゟ申来候。則御紙面帳末ニ記し被差越候。御領中右之虫有之事ニ候哉、庄屋共委被申付。葭萱之根又は土中等若其通ニ有之候ハヽ、御書面之通取行候様ニ下知可被致候。田畠ニ虫付候所は、虫之巣残り葭萱等之根ニむかごのことく成物取付、或は土之壱弐寸下ニ右之巣有之、段〻生し候も有之由ニ候間、可心付儀ニ候。若左様之所茂候ハヽ、葭萱ハ焼拂又は土を掘焼捨可申事。

同四月十九日

一頃日庄屋町役連名之書付ニ而差出候は、在町御救之義、當月十一日ニ御渡被成候當廿日迄之御救迄ニ而、其後は御渡被成候御手當無之、麦茂いまた一同ニ熟不仕、右之通ニ而は可及飢命哉と皆共役〻迄茂申出候。殊ニ公米も御願被遊候得共、麦出来迄は御救可被下と奉存候者茂有之候間、庄屋町役ゟ口上ニ而申渡候分斗ニ而は不得心ニ候条、御書付を以被仰渡候ハヽ、人〻江其趣可申渡候。尤麦出来迄間も有之候故、至極難儀仕者も可有之と之趣申出候。右之通申出候段、甚心得違ニ而候。當月廿日之御手當は去秋ゟ之積方ニ候得共、廿日迄御救續兼候故、當分兎哉角と差詰被置、追〻御国江も被仰上、御国御家中之御扶助之内急ニ被差越、或は御扶持之内或は竹屋荒木屋借し出之内ゟ被取繕、又は別筋之銀を以、博多米御調被成御救被成候。畢竟公米相渡り候得は、朝鮮米ニ而御国ゟ御渡置被成候ハヽ、代りを積渡候様ニ已ニ御差圖も有之、其外之口〻ニも御埋メ被成事ニ候故、残り迚茂無之候。右之通之事故、廿日ゟ先キ御救御渡不被成趣申渡候。必公米ニ目を掛不申様可仕候。

一追付麦茂出候處、此程は菜等取候者少く、早麦等を専給候様ニ相聞候。此先何程被思召上候而も、先〻御救不被為及御手儀ニ候条、先比と存随分菜諸品を差加江、麦を食延し候様可仕候。

一火消行規悪敷候而、此程瓜生野町之仕形不埒ニ候。此後庄屋〻組合召連罷出不致様ニ仕候得、若此内之通ニ候ハヽ、急度可為越度候。

一穀留之儀、此先同前ニ候間、法を背他方江出し候者有之候ハヽ、急度差留、目附申迄内〻申出候様ニ、左候ハヽ、差留候品直ニ可被下と之儀申付。

同七月朔日

一川内村之義、去秋之大変ニ付、稲之取揚遅〻、麦之蒔付及延引候故、當夏麦作損毛仕、百姓中難儀仕候由、依之田作根付義茂食用乏敷所〻全く仕得不申勢ニ候得共、村中申談、漸一通り根付相仕廻候處、村中都而相衰、食用之方専一ニ拵候得共、田之草水修理仕得不申、及難義候と之趣、以書付申出、聞届候。則遂見分候処、手入無之田過半有之と相聞、氣毒千万ニ存候。依之御米弐拾俵、難義仕候者共江為取續相渡候間、無油断草水之心遣仕、御田地少茂荒不申様ニ可仕候。尤書付之内難義之優劣有之と相聞候間、渡方之義次第ニ應し、役〻之者依怙贔負なく取行可申候。去年以来御救方其外共ニ夥敷御出方有之候上、御国元甚御差支之儀も度〻申聞候通ニ而、殊今度願之筋ニ類し候儀、先〻終ニ無之儀ニ候得共、彼是一應御国許江不相伺候而難取行儀ニ候得とも、手入不得仕時は御地面荒し可申哉と、其所至而大切ニ存、御国元之思召如何ニ乍存、右之通申付候。勿論古来稀成損毛之末ニ而無之候得は、難取揚儀ニ候得共、旁無據此節右之通申付候間、以来御見合之儀必例格ニ存申間敷候。

同七月四日

一萱方村、古賀、牛原、養父、蔵上、宿、鳥栖、藤木両村、今泉村、極貧者食用難義之者為見分、佐役罷出、春田十

兵衛も罷出。

同九月六日

一姫方村辰右衛門持分之田畠下作共ニ、當作毛苅候節遂案(内脱)候様ニ、大木水車道具幷家共ニ望之者有之候ハヽ、是又遂案内候様ニ、勿論田畠共ニ同前ニ候、委細以書付申渡。

同十九甲寅二月十日

本役、加城　六之進
佐役、江口傳左衛門　在勤

一去冬欠落仕候水車辰右衛門義先頃立帰、町役〻申出候訳を以、召捕入牢申付、御入番無しニ〆被召置、食用之義は窮民御救申付置、追而御国江御伺申上候歟、又は牢下し可申付歟可(如何カ)被成とも、重而取計之筋ニ申談。

同四月十二日

一高田村介左衛門、四右衛門義段〻吟味之上、今度願成就と唱(江カ)候小百姓を呼寄候も、実ハ組頭庄屋を替候相談之為と相極「候ニ付、手足ニ錠を入れ村江預置候通申達。」

注、「候ニ付……申達。」は「基養政鑑」により補う。

十八日

一川掘壱ヶ所、長野村野口村、右は野口村豆田井手之上、近年川内之濱高く罷成、水抱少く水勢弱候ニ付、右之場所川掘仕筈ニ候様ニ、久留米御領小郡村〻申来候条、御掘セ被下候様ニ申出。

同五月十四日

一高田村四右衛門、助左衛門、右両人之義は、先年行跡不宜段申出候も有之、此節遂案内候筋を以、四右衛門助左衛門幷番穢多両人食用
上〻被仰付、入牛之者米五合ニ塩味噌薪用一日壱人ニ付銭拾文宛可被仰付候。番穢多義は草り等茂作り可申儀故、食用被下候上、薪代等可被仰付様無之、素り油代は被下候段申達。

同九月廿二日

一昨晩御國御左右到来、今日左之通御書付を以被仰付候。

一米五俵宛、原弥三左衛門、吉田善兵衛、緒方善左衛門。
右は去ミ年田作大変ニ付、御領中御救取行方ニ付、別而致苦労、殊ニ富民富商共ゟ差足シ用銀借起し方共ニ申諭宜、彼是御救方不相滞心遣仕候段相聞、去ミ年之義古来稀代大変ニ而候處、假成ニ茂御救相届候は、役ミ心力を尽候故と被思召候。依之御称美被仰付様も有之候得共、御差支之御時節之上、去ミ年御領中大変、去年ハ御国田舎損毛、當夏又ミ御国火災之変有之、打續之大変ニ而、猶又至極之御差支ニ付、何程ニ被思召ニ而も、御手難被届候ニ付、乍少分為御褒美右之通被成下候と、今度平田隼人殿古川圖書殿ゟ被仰付。

一御米弐俵宛、青木与次兵衛、岩谷種右衛門、門司七左衛門、前川幾右衛門、右同断ニ付為御褒美被成下。

一古賀儀右衛門、片山宇兵衛、岩谷伊兵衛、山下品右衛門、右令苦労候段、称美申聞候様ニ被仰下。

一田代町年寄又左衛門、同年寄平右衛門、瓜生野町別當儀右衛門、柚比村庄屋甚兵衛、長野村庄屋次左衛門、永吉村庄屋門八、牛原村庄屋安右衛門、蔵上村庄屋新蔵、今泉村庄屋七郎左衛門、宮浦東村庄屋仁左衛門、右は去ミ年御領中田作損毛ニ付、御救取行方之義ニ付而、銘ミ掛り之村町人ミ取續方専ニ致心遣、素り身分難義仕候趣不申出、念入相勤候段御聞届、奇特ニ被思召候。御称美之趣委敷申聞候様ニと、是又今度御支配ゟ被仰下。

享保弐十乙卯二月十二日

本役、加城　六之進
佐役、江口傳左衛門　在勤

一近春隣国ゟ為勧進大勢相催し、又ハ日参酒なとゝ申候而在町江徘徊仕候由、兼而右類一粒一銭茂入間敷旨、被仰付置御法之義ニ候、然處間ミ心違有之甚如何敷、向後右体之勧進ニ決而志し不仕候様ニ、扨又時分柄ニ而候間、見セ物之藝者等時ミ入来可申候。必一刻も不召置様、堅可申付之旨申付。

同六月四日

一昨日も當町通り候得は、町内之者惣而無礼相見、女肩を抜、門口ニ立居候。其外馬さし女家見せ表向江旅人と相見、大勢集居、足を投出し、殊外見苦敷体ニ而罷在候。旅人之義ニは候得共、馬さしより氣を付可申事ニ候。所之法式と申義何方ニ茂有之義ニ候故、右之通法外ニは仕らセ置間敷事ニ候。彼是町役召寄、堅申付候得と申付。

同十日

一下モ村水入田苗腐り候分植直し植次之義、庄屋百姓大形ニなと相心得不申様ニ、老少共ニ差加り精を出し、植次草を取明ケ、人力之及候様精を出し候得、少ニ而茂出来方相増候得は、銘ミ為ニ成候義致得心、手ニ不及と申、打捨不申様ニ申達。

同十一月十二日

一御国元百姓食用之筋ニ罷成候は樫ノ実に而、至極結構成物ニ候。爰元ニ而も大変之節、人ミ給候由ニ候得共、拵様不宜所ゟ給候而も不宜、食用之筋ニ罷成候儀を不存と相聞候。依之拵様委敷申聞。

同十二月廿二日

一下モ村近年水損打續、去年茂十ケ村御物成上納不足仕、上ケ村ゟ之償も不納たけ取繕得不申、千五百俵余御物成上納御差延ニ願上、當年茂又ミ水損ニ而有之候故、千六百俵余之不納と罷成候、兼ミ申付置候通、御時節も相違候處、右之通打續御物成之内當時ニ而も不納ニ罷成候段、氣之毒千萬ニ存候。去ル子年大変以後、御領中之面ミ茂殊外相衰居候上、右之通打續年並不宜候而は、上ニ差當り御心當之御所務方間違ニ罷成候而、御手當之被違候。御難儀は一ミ不申述候共、皆共可奉推察候。然は我ミ眼前ニ見聞候御領中之損毛ニ而、大切之御物成も皆濟難成程之勢ニ候得は、末ミ之難義は察入、夫而已安心不仕候。面ミ之内證ニは此方之存よりハ言語筆跡ニも難著程之苦倦仕候者茂可有之、一村之内江も又左様無之者も

可有之候得共、ケ様打續御物成を茂皆濟難成年向ニは、不限貧福ニ、御物成皆濟難成所を、奉恐申候而可有之候。兼ミ茂儉約之義ハ申渡置候得共、此節は別而儉約第一相心得、物毎質素ニ仕居不申候而は、御物成皆濟不得仕儀も、不奉恐ニ罷成候間、少シ(も脱カ)費之義無之様と可仕候。追付正月ニ候間、例年一家寄會仕候通當正月ニハ仕間敷候。若費ケ間敷事仕候段承出し候ハヽ、屹度申付ニ而可有之候。

一去ル子年大変後、隣国之内ニ荒田畠多ク有之、凶変之末ニ候故、前ミ之通耕作仕候人少く候ニ付、他領ゟ人を雇耕作仕候風説有之候。御領中之者為排他領江罷出候ハヽ、切手を願出、吟味之上差免申事ニ候。以後共ニ諸細工人、只今迄之通吟味之上、差支之筋無之者は差免可申候。其外之者他領ニ出、日雇拂之儀は一切差留候間、此旨可相心得候、第一隠シ候而罷出候者有之候ハヽ、其者之儀は不及申、其所之役人屹度可申付候。

一粗承候は、近年御領中一孝奉公仕候者、風俗悪敷罷出、主人之申付候義間ミ不相用、我儘を働候族有之由ニ候、左様之者ハ主人ゟ早ミ可申出候。奉公仕候者之見セしめ心得、物毎質素ニ仕居不申候而は、御物成皆濟不得仕儀ニ屹度申候様有之候。若又我儘を働候族茂其儘ニ召置、案内茂不申出、主人有之段相知候ハヽ、其主人を屹度可申付候。在町共ニ奉公人幷日雇取之名付仕、明後廿五日差出可申候。

一下作人之風義殊外悪敷罷成、下作取引相滞、地主甚難儀仕段粗聞届候。是又風義を不相改、我儘をのミ申候ハヽ、早ミ地主ゟ可申出候。若隠置、後日相知候ハヽ、其地主越度ニ可申付候。

一近年御領中ニ地黄少宛作候處ニ、年ミ作廣候と相見、去年我ミ見及候ゟ當年ハ手廣ク所ミニ地黄を作り候。地黄之義は當時其利益有之様ニ相見江候而も、手入養の雑用を考候而は、外之畠作ニ地黄作り候程之手入養を仕候ハヽ、地黄之利益不相替ニ而可有之、今程米穀下直ニ有之、

地黄代替候ニ茂手間入無之候故、段ミ地黄を作り廣候と相見江候。畢竟地黄之儀は地面之害ニ成申者ニ而候間、向後地黄を壱人前五歩拾歩作り候義は格別、其余作り度存候者ハ前廣(慮)ニ遂案内、此方之差圖之上作り付可申候。

元文元丙辰正月十五日

本役、吉川内蔵允在勤

一在町ニ而順礼歌を習、順礼之まねを仕り、非人之仕形を致し甚不宜候故、急度差止候様、手代中江被申渡。

同三月朔日

一紙面之趣承届候。此度田畠捨高三郷大庄屋共より書付差出候ニ付、被差越見届候。就夫、去ル酉年分御年貢之内四千〇五拾俵程、去寅年千五百俵致不納、又ミ當年茂不納相増候様子ニ有之候段被申越候。各存之通、並定免ニ被仰付置候上ハ、豊凶に不拘、全ク上納不仕候而難叶候処、年ミケ様ニ打續不納勝ニ有之候段ハ、畢竟各御領中江之下知油断有之、御領中之者茂上を不恐所ゟ毎度致不納候と相聞候。素り子年之儀は古来稀成大凶年ニ而過分之御救を茂被成下候程之事故、不得止御用捨被加たる事ニ候。御年貢之義大切ニ相心得、近来之被仰出を御領中之者難有存候ハヽ、年ミ不納不仕筈ニ候處、却而餘り御憐愍被加候処ニもたれ、何角と弁別を設、不納仕候風儀ニ相成候と相聞候。向後ハ大底之損毛分ニ而は、捨之願は可被取上事ニ而無之候。扨又子年御領中江御借被成候銀筋、今以全ク上納不仕由相聞候。御国両度之大火以後別而御勝手向御急迫、時勢御領中之者不承筈ハ無之事ニ候得は、上之儀を大切ニ存候ハヽ、各不及催促、上納方無油断様ニ不仕候而難叶事ニ候処無其儀候。右令書載候通上を不恐所ゟ御年貢を不調致し、拝借銀茂全ク取立不申候段、甚以難心得事ニ候。此旨急度御領中江被申渡、向後油断無之様ニ可被致下知候。

十二月五日　　古川圖書

加城　六之進殿

三月十七日

一園部上村小原江文左衛門刺髪仕、浄念と名付居、園部火災ニ付而幸七申出候訳を以、拷問仕候得共吟味不極、手錠入、則右組頭組合之者并浄念一類共江預り置、彼者徘徊不致様、たき火等も不為致様、堅申渡可差免と申付。

一幸七、次助申出候、大興善寺住持弁海、團七、源太、源蔵、藤内、〆五人之者共、平生不行跡を以逼害為仕、小松之儀は別而人ミ不行跡ニ有之と相聞候。不行跡者有之候ハヽ、早速不申出候処ゟ大勢不行跡ニ相成候と之義申達。

一幸七、次介、甚七、造篭ニ入候迄ハ縄を掛置、手錠を入、かき之義は御門江置候様申達。

四月四日

一豆田井手
一川掘壱ケ所　幅八間　長四拾間　野口村

右は豆田井堰之上、川中之濱高ゟ相成、水抱少ゟ候ニ付、掘除呉候様、小郡村庄屋孫左衛門方ゟ申来、去ミ丑年少ミ御掘セ被下候得共、又ミ濱出来候ニ付、井堰不仕、前見合之上掘セ呉候様ニと、奈良田村庄屋徳左衛門以書付申出候処、全取除之儀は可被難叶候、何れ歟手代中破損掛中見分仕候様申達。

六月八日

一近来穢多共見掛宜候而、百姓中ニ相紛候間、月代耳下タ通迄そり下ケさせ可申候。若難成由申候ハヽ、江戸之穢多之通、髪をざんぎりニ仕らセ可申候ざんぎりとハ元。結ニ而結不申、元服仕候而之短髪ニ而候、此通ニ仕らセ、以来町人百姓ニ紛レ不申様ニ仕候得と、[redacted]庄屋江申付。

同廿一日

一近日上ケ村之田ニ殊之外てのこ虫多相見江、別而吹込之所虫多候故、甚痛相見江、百姓中茂心遣仕候由、養父郡大庄屋太左衛門申出候故、村ミ申談人力を尽し、其上ニ

而虫除り不申候ハヽ、前ミ之通虫祈禱仕、田別札立、又ハ虫追等早ミ可仕候旨申聞置候次第申出、随分虫除之手段可申付之旨申達。

一兼而五穀成就之祈禱仕度候付而は、廿四日五日六日此三日之内、日柄撰之義、宮浦社人美濃方江申達候様申達。

一永吉南村奈良田村之田ニ大分虫入候由、何分之次第ニ候哉、走番見セニ遣候様ニ申達候處、早植田随分茂り居候田ニ虫多相見江、勿論吹込之所同前候。今朝之雨ニ而少ハ去申候様子ニ候。小倉村ゟ永吉村迄右之通ニ候由申出。

一三郷大小庄屋中出(申カ)。村ミ近日てのこ虫大分出来、百姓中心遣仕候。依之虫追仕筈ニ申談候。其上虫除之祈禱仕筈ニ候由申出。随分虫追可仕候。必ミ少之物入茂無之様ニ申付候得と申達。

廿二日

一今日三郷大小庄屋并組頭召寄、近日村ミ田ニてのこ虫多く相見江、殊之外心遣ニ候。依之夜前博多江夜通しニ馬差出、魚油樽弐丁取寄、壱ケ村ニ壱升宛渡候間、村ミニ而吟味仕候而、自分田地を持居候内、急ニ油調候義難成貧窮者壱人ニ、三合宛相渡シ、多く虫相見江候田ニふり候様ニ、去子年虫窩之節茂油をふり候田ハ毛上残候由聞及候ニ付、為試右之通申付候。代銀之義は當暮上納ニ申付候。明朝役方ゟ油渡候間請取之、一刻茂早く田ニふり候様ニ、扨又村ミ共ニ人ミ出精、成たけ油調候間ふり候様ニ、其外虫除之手段油断不仕様ニ申達。

廿三日

一寄合三ノ間ニ御門番六兵衛召出。六兵衛義平日実体ニ有之、殊養母ニ懇ニ有之、養母此間ゟ病氣に而床ニ付居候由ニ候処、勤之隙ニは附副看病仕、男之身ニ而仕間敷儀迄茂仕候段、委細聞届奇特候。此後迚茂随分懇ニ仕候様、依之為御褒美御米壱俵被成下候と之趣、直ニ申達。

十月十二日

一御年貢宰領之者便ニ御支配ゟ被仰越候は、入牢仕居候高田村四右衛門、助左衛門、御国元ニ被召呼、奴ニ被仰付候間、警固相附被差渡候様ニと之御事ニ付、近ミ船便次第可差渡候。依之右之趣申知らセ牢屋ゟ出し、月代為致、手錠入候而、牢屋之囲之内歩行為致候。ケ様ニ三年之間入牢之者ニ候得は、歩行仕得申間敷候。昼斗り足ならし為仕、夜ルは牢屋ニ入置候様ニ、番穢多随分念入候様ニ可申付之旨申達。

元文二丁巳三月四日同廿九日

一奉公人之内心得違之者、以書付申渡候付、今晩庄屋組頭上郷御宿江召寄、夫ミ申渡有之。入牢之人ミは今晩直ニ入牢申付、中間ゟ穢多江為申付、牢屋之掃除為致、入牢之節も穢多ゟ為入。

藤木村

善四郎

右は藤木村弥三右衛門と申者方江、給銀七拾五匁ニ相付、定り之給銀ニ而は不足ニ存、父勘兵衛申談、少斗り之病を申立ニ致、父方江罷帰り候ニ付、主人弥三右衛門儀は輕病故、快候ハヽ可罷帰と存居候處ニ、素り少之儀故、山江苅取ニ参り、屋根葺替之節も相働、痛之支ニ不成儀を給銀之訳ニ付虚偽を構、給銀不足ニ候ハヽ幾重ニも其儀を可申談之処、病氣ニ詫(託)し主人方を罷帰り、不届千万之仕形ニ候。主人江少茂不忠かましき儀不仕様ニ、兼ミ申付置候処、右之仕形と申、父子共ニ平生不行跡ニ有之、下作差引等之義放埒之仕形茂有之と相聞、旁重科ニ付入牢申付候。

真木村

与右衛門

右は娘を養父郡大庄屋太左衛門方江一季奉公ニ召置候処、先比奉公人給銀相定申付候ニ付、右定之貰銀ニ而不足ニ存、娘儀縁ニ付候故、差返候様ニと、太左衛門方江

度ミ申出候由、給銀不足ニ存候ハヽ幾重ニ茂其訳主人方江可申談之処、一度一ケ年之間奉公仕らセ可申と申極、給銀迄相定置、右之通虚偽を構候段不届至極ニ候。最初之申極を変し、半途より主人江手支さセ候仕形、且又平生不宜者と相聞、旁重科之者ニ付入牢申付候。

酒井村

新吉

右は去比一季奉公人之給銀相極候儀を騒、何角と所ミ之奉公人ニ申觸候段、不届之至ニ候。其上平生人柄不宜段、此節相知れ、旁重科之者ニ候故入牢申付候。

酒井村新吉弟

孫助

右は今度一季奉公人之給銀相定候ニ付、諸人ニ寄合、給銀之儀を何角と申組候依科、下郷大庄屋藤兵衛江弐十五ケ月之間、奴格ニ召仕候様ニ申付候。

園部下村

又六

右同断之訳ニ付、真木村庄屋弥兵太江弐十ケ月、奴格ニ召仕候様申付候。

長野村

又助

右同断、柚比村甚兵衛江。

曾根崎村

平助

右同断、園部上村庄屋喜兵衛江。

柚比村

弥平

右同断、高田村庄屋十左衛門江。

神邊村

弥助

右同断、水屋村庄屋与右衛門江。

右之通申付候間、諸事相慎、精ニ入相勤候様、勤方宜候

ハヽ月数了簡可申付候。少ニ而茂不勤ニ有之段相聞候ハヽ、急度厳重ニ可申付候。

三月廿九日

田代昌元寺町

弥　平

右は平生人集致シ、其上此度一季奉公人給銀之義ニ付而茂、其身不相抱(抱)儀ニ携、旁不行跡者ニ候故、急度可申付候得共、此度迄ハ令宥恕候。右之通之者故、人家多所江難召置候ニ付、城戸村之内ニ流罪申付候。

姫方村庄屋

源左衛門

右は平生勤方不宜、近年ハ御年貢取立方等不埒有之、御米津出之節も毎度御米出し方相滞、其上去ル比一季奉公人共居村下江大勢相集り不宜儀申談候節も、不念之儀有之、旁ニ付閉門申付置候。此節屹度可被仰付候得共、御宥恕を以庄屋被召放候。

一三郷両町役ヽ召寄、左之條ヽ口上ニ而委細申付候様、手代役ニ申渡ス。

閏十一月廿四日

一御国之御米取立方尖ニ有之、御称美之次第可申渡事。

一別段筋米方、當暮百姓中皆濟候様ニ、勿論庄屋中之年賦米共取立之俵数早ヽ書付可差出事。

一當夏御年貢米御蔵詰之節、急ニ取立難成相滞候百姓中未進之儀、當暮急度可取立候。若相滞候者有之候ハヽ、御賄方小田与七左衛門方迄可申出候。向後右体之者ハ表向之及御沙汰可被行御法候。以後米方相滞候儀、手代不承付様ニ申付候と之義可申渡事。

一下男下女給銀御定之通、在町堅可相守候。追付出替之節ニ至り候間、委ク可申渡事。

一下男下女惣而少ク候間、奉公可仕程之者、在町随分吟味仕、早ヽ奉公ニ可出候。必自由不仕様ニ、日雇抔之心さし等無之様ニ可申付事。

一當暮奉公ニ出候下男下女之書付、極月末比可差出事。

一他領下女抱度者は願上、請御免可召置事。

一下男下女給銀御定之通ニ而は不足有之など(ヤウニ)ヽ、若は心得違候而他領江出奉公仕候歟、又ハ日用抔可仕儀可有之歟、万一右体之者有之候ハヽ、屹度召捕厳科ニ可被仰付候。在町役ヽ随分心を付候様ニ可申渡事。

一村ヽ百姓之内、柄杓細工幷そきへき細工仕者多有之由、在町共ニ名書付可差出候。壮年又ハ達者ニ有之者農業相止、右細工可仕様無之候。片輪者歟、病人ハ格別之事ニ候。右之通細工人多有之候は、畢竟庄屋中心付大形ニ有之所ゟと相聞候。以来心を用、必右細工人達者成者ハ農業いたさセ候歟、奉公仕らセ候様ニ堅下知可仕旨、可申渡事。

一他領江日用抔又は荒所作ニ罷出候者在之由、急度呼返し、爰元ニ而抔候様ニ下知可仕事。

一貫銀筋之義、村ニ依り心得違有之、高ニ不掛品を貫銀ニ相加江候と相見江、其次第ハ疱瘡之願立、痢病之願立、又は田捨付之節はたこ銀、或は井手井堰祝入目等を貫銀ニ相加江候は甚心得違ニ而候。向後此類貫銀之方ニ不相加様ニ堅可相心得事。

一諸職人幷日用抔仕候者、御定之賃銀可請取候。雇候者茂御定之通可相渡候。職人之内ニ増賃銀之儀、向様ニ合力何程仕候ハヽ、参り細工可仕之旨申候者有之由、右体之者ハ無遠慮竊ニ手代申迄可申出事ニ候。向後右体之者無之様ニ職人日用取江可申聞事。

一火用心盗人用心堅可仕事。

一地黄弥作間敷事。

一諸上納銀幷用銀方返上銀、日限之通無滞皆濟可仕事。

一姫方村源左衛門、幡崎村萌右衛門、年賦銀上納可仕事。

一去ル丑年町役庄屋中江拝借被仰付置候米之儀、繰ヽ宛之事ニ候間、當暮皆濟可仕事。

一宿村江有之上使屋給上ケ米之内、去ル酉年御差延願仕置

候。此残り米當暮返上可仕事。

元文三戊午六月九日

一上ケ村中ゟ下村水入田江致合力候三把苗之義ハ、随分宜キ苗を差下候様、村ニ依人ニ依心得違候而、引捨苗又はいけ苗或は井堰等ニ流掛り居候枯苗を、まきらかし候而遣し候者万一有之候ハヽ、向後見セしめ之為、急度御叱り被成候間、心得違不仕、宜苗を一刻茂早ゝ付下候様ニと之事。

一下村之儀も三把苗、万一用ニ不立苗其外稗苗等を紛遣し候ハヽ、御玄関江持来可仕、其まゝ請取候ハヽ、是又御叱り可被仰付旨と之事。

一下モ村庄屋中江申達候は、上ケ村ゟ合力之三把苗之義、跡方ゟ付出し候様ニ候間、此方ゟ取ニ遣し不申様ニと之事。

右之趣手代役ゟ三郷庄屋中江申達。

六月十五日

一今日三郷大庄屋幷一村ゟ頭百姓壱人ツヽ、御寄附召寄、以手代中申渡候は、當夏之義、度ゝ之大水ニ而下村毎度洪水出、其内跡方稀成大洪水茂有之、水入之村ゝ田作水下ニ成候分、多くハ皆無ニ罷成、尤苗青ミ少ゝ残居候も段ゝ腐り、皆無同然ニ罷成候由、右痛田只今植直候迚も時節甚後レ候故、実入之程難叶、畠作物茂水入之分ハ皆無同然ニ成、甚敷損毛見江来り候。定免之主意、下モ村損毛之節は上ケ村より下モ村之御年貢取續候事候得は、下モ村之損毛ハ御領中一統之損毛ニ而、笑止千萬成事ニ候。ケ様ニ損毛見江来候年向ニは、大小庄屋百姓共之心入可有之事ニ候間、随分心を用費成儀少茂無之様、只今ゟ心掛候儀専一之事ニ候間、庄屋頭百姓ゟ末ゝ之者江茂能ゝ申聞、少之費も無之様可仕候。扨又右度ゝ之大水ニ而御領中村ゝ川筋大分之破損出来、其外堤土手之損しも有之、ケ様ニ普請所出来候義は、去ル子年山潮之節之外ニは稀成事と相聞、唯今ハ田地用水大切之時節候故、水

掛ケ引之支ニ罷成候急場之所ゟ、段ゝ普請被仰付御事ニ候。兼而之御法式茂、役ゝ在方出勤之節、湯茶之外何品ニ而も馳走曽而請ケ不申様ニと被仰付置、庄屋共も其旨存之前ニ候得は、出勤之役ゝニ對し、兼而も馳走等可仕様無之、勿論庄屋百姓之内不心得之者も有之、少之品ニ而も馳走等仕候とも、役ゝ曽而請不申筈候得は、此節申渡ニ茂不及事ニ候得共、頃日之風聞ニ、川普請等之節酒を間ゝ出し、村ゝニ而迷惑仕候と之趣、風説有之候。此義ハ取用可申事ニ而無之、其村ゝ之難義を不厭、酒等出し可申様も無之、出し候とても役ゝ請ケ不申筈ニ候故、右之沙汰ハ虚説ニ其紛無之候。右之通之沙汰を請候は、庄屋共之兼而之處置不宜所ゟと相聞候。當年は御領中之損毛見江来たる事ニ候得は、別而心を用不申候而難叶事ニ候。万一人情等ニ相拘り酒は勿論輕品たりとも馳走かましき儀等仕候段相聞候ハヽ、急度可申付候間、其旨を相心得、少茂費成儀仕間敷候。

一米参俵、高田村庄屋十郎左衛門。右は兼而勤方宜敷段承届居候。然は同村牛飼土手之義、洪水之節間ゝ及破損、去年以来は度ゝ破損仕候處ニ、十郎左衛門儀洪水之節彼所江罷出、破損無之様下知仕、心之及相防候段兼ゝ聞届、殊ニ先頃洪水之節、夜白彼所江罷出相防、手前ゟ莚こも竹之類等差出、土手を相圍、心力を尽し下知仕候所ゟ、切ケ所も輕ク有之段役ゝ申聞、我ゝ直ニ見分之節茂右之仕形委ク見届候。洪水之節は外之心遣茂多有之事ニ候處、右之土手大切ニ存、別而心掛候段、奇特千万ニ付、右之通被成下候。尤右之次第御国元江も委細申上候ニ付、向後弥役目念入相勤可申と以書付申渡ス。

一米壱俵、萱方村散使善右衛門。右は兼ゝ堤所心掛、大雨之節は不限夜白等立廻、土手損し等無之様ニ心遣仕候段、兼而聞届、當年之儀度ゝ之大水ニ而、都垣副両所之堤土手之損し茂少ゝ有之、万一及大破候時は別而大切之事ニ候處、善右衛門義自分之事を差置、両所之堤江罷出、

夜白心之及相防候段、委敷聞届、奇特千万之事ニ候ニ付、
右之通被成下候旨、同村庄屋江申渡ス。

一園部上村庄屋喜兵衛、水屋村与右衛門、幡崎村庄屋嘉介、
城戸村庄屋徳右衛門、園部下村庄屋傳十、養父村庄屋与
三右衛門、瓜生野村庄屋正五郎、長野村庄屋次左衛門、
酒井西村庄屋治八、同東村庄屋市右衛門、宮浦東村庄屋
仁左衛門、同西村庄屋伊兵衛、神邊村庄屋治平、〆拾三
人、當春御国ゟ斉藤四郎次被差越、川御普請之節、勤方
宜候ニ付、御寄附江召寄称美申達。

元文三戊午九月十三日

一當地御扶持人之義、一代切之御奉公ニ而相續難成旨、粗
風聞有之趣ニ相聞、如何敷候ニ付、御支配圖書殿と御内
ミ委細申上越候處、今度御返書来り、爰元御扶持人之義
一代切と申ならハし候義、初而御聞被成、左様ニは有之
間敷義ニ候、御扶持人中常ミ不快(便カ)ニ可存候。追而相續之
格ニ可被仰付候間、左様相心得候得、扨又御扶持人中之
子供、刀をさし不申段、向後不及遠慮候間、刀を指し式
日御礼等申上候様ニ仕候得、皆中江茂此段申達置候様被
仰越、右之趣申達。

元文四己未二月三日

佐役、吉村十左衛門

一在町寺ミ之内、本堂又は門再建其外色ミ之存立有之、檀
方中其外之人ミ江奉加之様成仕形ニ而萬人講なとゝ名
付、又永代經ニ事寄、亡者之供養なとゝ申、毎月説法、
是ニ付而も人ミ之志しを仕候様ニ、色ミ之方便を廻し、
紙袋等大分配り米を集候寺ミ有之由相聞、甚不宜仕形ニ
候。大凶変以来年向不宜、御差延之御年貢さへ返上不得
仕、素り大凶変之節富民富商ゟ取替置候大切之銀筋茂返
弁不仕罷有候處、寺ミ之すゝめニ付而は、人ミ身上不相
應、男女共ニ銘ミゟ志し之米差出候由、此儀人ミ心得違
と乍申、甚以不届成仕形ニ候。急度右体相止させ候様、
人ミ江堅申付、寺ミ之内至極之大破ニ而寺茂難相立候ハ

、、願之上ニ而人ミゟ志ヲ茂請可申儀ニ候。只今左様之
寺茂見及不申候。然は年並宜節再建之存立可有之儀ニ
候。右之通時節を不考、右之仕形之寺ミ甚不宜候。急度
相止候様ニ手代中ゟ在町江申達候事。

元文五庚申二月廿六日

本役、内野権兵衛在勤

一内蔵允儀交代前ニ付、三郷両町役ミ幷惣中江左之通以書
付、役ミ幷組頭一村壱人宛、田代町ゟ五人、瓜生野町弐
人、御寄附江召寄、手代役書付申渡ス。

拙者儀、當年迄五ケ年當役相勤候処、御領中人ミ末ミ迄
家業精ニ入候と相見、御法式をも能相守候所ゟ、重キ無
調法仕出シ候者も無之、當春首尾能交代之身分ニ至、喜
祝不輕事ニ候。委細は宗門御改之節手代中を以申聞候通
ニ候。扨又御領中村町ゟ何事ニ而も願上度儀有之候ハ
、、不限大小事、以書付願出可申候。遂被見合了簡候
上、帰国之節御国江持渡り、何分ニも宜申上、成たけ願
之筋相立候様ニ相働申ニ而可有之候。尤一村一町ニ不抱(拘カ)、
又は壱人ニ而も願之筋有之候ハ、、願書ニ姓名を記し、
無遠慮此方江直ニ差出可申候。以上。

二月廿九日

一兼而申付置候町高〆之義、只今日和之内ニ仕候方可然、
明後朔日ゟ取掛候様ニ、町役中江申達、御扶持人中江も
右之次第申達、御屋敷上使屋前は破損掛中下知仕、御屋
敷前は日用夫郷方ゟ出ル、上使屋前は公役夫出ル也。

六月八日

吉川内蔵允交代

御本役、内野権兵衛在勤

一園部上村善右衛門と申者、独身ニ而下(マヽ)ひう細工等仕者ニ
而、昨日小松権右衛門方江下ひう細工ニ罷越候處、折節
田植相仕舞候祝ニ焼酒を右善右衛門に茂給させ、李右衛
門と申者も相見江、善右衛門同然焼酒を給候而、右両人
共ニ権右衛門方を出、夜ニ入、水車惣五郎方江麦粉を取

ニ両人共ニ参り、何角くど〳〵申居候様子ニ、両人共ニ水車を立出、無間茂李右衛門声ニ而呼り候付、惣五郎其外近所之者走り出見候処、李右衛門疵付有之、横腹を二所突れ、（一行押入、字句不明）右之次第庄屋方江組頭ゟ相届候ニ付、喜兵衛駈付見候処、李右衛門義急ニ死ヌ様子ニ茂不相見、尤はきと物を申程ニは無之、早速同村醫師道州召寄、内薬相用、牛原村外科元浦江申遣し、金創之療治相加へ候由、右善右衛門儀は其場ニ不相見候ニ付、善右衛門家を取廻し戸を拓キ候処、伏居候ニ付、則縄を掛取逃し不申様ニ仕置候段、庄屋喜兵衛ゟ申出ル。善右衛門酔狂と相聞、人ニ疵を付候仕形甚敷悪事ニ候間、中間を遣し搦メ取、入牢仕らセ、手負李右衛門義は随分金創療治仕候様ニと申付。

一入牢之善右衛門江飯運候者ニ、必たばこ之火、切レ物之類、帯類之物を乞候とて、入れ不申様稠ク申付。

一村ニ畠之内所ニより御年貢は上納仕候而茂、作り物生育不仕場所有之と見及、左様之所ニは成たけ楮はセ其外相應之品有之候間、見立次第植立候様、此義は手代中氣を付候様ニと申達ス。

十一月六日

一絹物幷木綿物ニ蕗（褁）付其外停止之品ニ、今日大小庄屋両町役玄関江召寄、左之通申渡ス。但當病之者は組頭出ル。

一御扶持人中妻子幷諸役人を初、絹物一切停止。但醫師社人出家座頭ハ、衣類只今之通り可仕事。

但、持来候衣類ニ蕗（褁）付有之分ハ其儘着可仕候。此後ハ決而染不申様ニとの事。

一櫛笄之へつかう堅停止之事。

一雪踏決而踏不申様ニとの事。

但、両町幷上郷小町ニて之見世之セツた急度賣拂可申事。

十一月廿五日

一公儀ゟ国ニ江被仰觸候御書付之写、御支配ゟ被差越、三

郷大小庄屋両町役中御寄附江召寄申渡。尤當病差合之面ニハ為名代組頭出、御書付、

公儀ゟ被　仰出候御書付之写

一諸国村ニ大小百姓共、年貢幷諸役掛物或は村用等ニ至迄、毎年名主組頭念入帳面ニ記、惣百姓立會勘定無間違ニおゐてハ銘ニ印形取置申へし。尤名主組頭も右帳面ニ奥判可仕事。

一右は定たる事といへとも、端ニニは年来之仕くせを以、毎年勘定帳面惣百姓ニ印形をも不取置、出入ニ及候義、間ニ有之候条、自今以後此旨急度可相守事。

右之趣知行村ニ江可相觸候。若此以後出入ニ及候節、遂吟味、件之觸書不致承知村方有之は、地頭可為越度候。以上。

右之御書付、御領中大小庄屋方江写取、頭百姓末ニ迄拝見仕らセ、以来御書付之趣無間違相守候様申付ル。

十二月五日

豊後国宇佐八幡宮社建立ニ付而、御免ニ而富興行有之候由、札壱枚ニ付百弐拾文札銭差出候由、必在町人ニ富札請ケ不申様ニ堅可申付旨、申達ス。

日記抜書

肆

従寛保元丙酉至寶暦四甲戌

寛保元丙酉二月廿九日

本役、内野　権兵衛
佐役、吉村十左衛門　在勤

一瓜生野町別當伊平次儀、勤方宜厳密ニ有之、町内風儀も直り候様聞届、其趣去ル比御国江申上候處、此度御国ゟ御左右到来、伊平次儀勤方宜段、御称美被仰越、座親助右衛門儀も町内下知宜候故を以、座親共ニ両人為御褒美御米拝領被仰付。

一御米五俵、瓜生野町別當伊平次。同三俵、同町座親助右衛門。右は瓜生野町之儀、風俗不宜、殊ニ困窮所ニ而、御年貢諸上納方共ニ跡方ハ相滞たる由ニ候處、伊平次儀厳直成者ニ而心を用、助右衛門申談、町内下知正敷有之候處ゟ風俗も直り、諸上納方等も尖ニ相納候様ニ罷成候段、御國元江御聞届被成候。多年悪キ風俗を直し候段ハ、偏ニ両人之町役萬端心を用、下知正敷故と被思召上、為御称美右之通被成下候段、此度御支配ゟ被仰下候。以来猶又心を用相勤候様ニと申渡。

三月八日

一瓜生野町出火有之、焼失跡火本外類焼之者、幷取崩家共ニ都合竈数十四軒之者共江、任先格御銀材木被成下候趣、瓜生野町役共江申渡。但小間一間ニ付銀拾弐匁宛之積ニメ、材木も其積り有之、此後瓜生野町類焼ニ遇、且取崩ニ成候者拾四人、兼而其日暮シ之極貧窮者共斗ニ而、今日之經営茂難成体ニ而、當日之經営も難叶、至極及難儀候ニ付、拝借被仰付被下候様ニと町役共ゟ願出聞届、御差支之御時勢ニ候得は、右体之願取上不申事ニ候得

共、往還筋之儀ニ候得は、町並之家假成ニも早ゝ取立不申候而難叶候所、當日之經営も難成体有之候而は、家取立候儀茂難成可有之、無據相聞候ニ付、別段之了簡を以、拾四軒之者共江御米弐拾八俵、七ケ年賦ニメ拝借申付旨、町役江以書付申渡。

三月廿三日

一大庄屋豊左衛門、藤兵衛、弥平太申出候ハ、此度川岸崩、御普請被付候ニ付候而、存寄之趣申上度段申出。其次第は、兼而久留米領佐嘉領荒篭取除之熟談申掛置候處、一圓果敢取不申候ニ付、頃日久留米領申掛置候は、唯今之通ニ而は兼而申達置候主意も相立不申事ニ候。先ツあらこ弐ツ三ツ成共取除呉候様ニと申達置、いまた其返答も無之、折角右之返答相待居候時節ニ而、唯今之内此方江御普請被仰付候而ハ、久留米之方何分ニ可有之哉、尤崩所之御普請ニ而、殊ニ乱杭斗之事ニ而、出張り所御普請ニ而も無之候得共、兼而様子承り候処、小森野村あらこ掛之者有之、少之儀ニ而も久留米役所江大ィニ申直シ、あらこ取除方之儀障り候ニ仕候趣ニ候得は、此節之御普請如何様申直シ候も難計儀ニ候間、暫御差延度之趣手代申ゟ申出、存寄尤ニ相聞、乍然御普請延置、若當夏洪水之節ニ大ニ崩相増候而は、御国元之釣合旁氣毒ニ有之、夫共熟談之間ニ成候勢ニ候得は、押而御普請も難取計、小郡孫左衛門兼而心安申談事ニ候故、豊左衛門右之崩所見分ニ罷出候節、孫左衛門も同道崩所を見セ、難閣場所と申所を相知候上、孫左衛門存寄も内ゝ承見候様ニ申付。

六月四日

一頃日、牛原村之内とうこうと申所之植立山之松ニ、とう虫夥敷入、松枯可申勢ニ相見江候ニ付、山廻役岩谷伊兵衛、色ゝ心遣仕候處、四阿屋宮之社人出羽申候は、夜ニ入火を立候得は虫集ル物ニ候由申候ニ付、此間夜ニ入所ゝ火を燃候得は、虫大分火之本毎ニ飛入死ニ候付、松之

病も止候由申出候。此節之儀伊兵衛働と申、出羽別而氣を付、殊更虫祈禱之札を出し致苦労候ニ付、為御称美鳥目壱貫文拝領申付。

七月十四日

一御領中在町人ミ無礼ニ有之段、兼ミ相聞、既先頃駒井靱負様御下り之節、木山口町ニ而無礼仕候者有之、夫ミ叱り申付、向後無礼之仕形無之様、屹度相改候様可申付旨、被仰付候。依之左之通申渡候間、在町人ミ江此旨堅可被申渡候。

一長崎御奉行其外公儀御役人様隣国御大名様御通之節、両町幷上郷小町之人ミ家内ニ居候者は路地江下り、随分丁寧ニ礼儀可仕候。路地江下り候儀難成程之病人等ハ、御目通ニ居不申、勝手江引込可申事。

一右御通之節、村ミゟ公役ニ罷出候者共、町宿ニ而右同前路地江下り礼儀可仕候。惣而町宿ニ而表通ニ決而臥り申間敷候。扨又町内致歩行候節、くわゑきセる不仕、はちまき仕間舗事。

附、長崎ゟ江戸江被差越候御用物之公役、又は他領之侍中上下ニ付、公役ニ罷出候節茂右同前ニ可相心得事。

御大名様方御通之節も、無礼法外之仕形可有之、不届千萬被思召候。右之通ニ候得は、他領之侍中往還之節も、猶又無礼法外ニ可有之と被思召候。向後急度相改候様可申渡旨、被仰付候。依之左之通申渡候間、在町人ミ江此旨堅可被申渡候。

一長崎御奉行其外公儀御役人様隣国御大名様御通之節、両町幷上郷小町之人ミ家内ニ居候者は路地江下り、随分丁寧ニ礼儀可仕候。路地江下り候儀難成程之病人等ハ、御目通ニ居不申、勝手江引込可申事。

一右御通之節、村ミゟ公役ニ罷出候者共、町宿ニ而右同前路地江下り礼儀可仕候。惣而町宿ニ而表通ニ決而臥り申間敷候。扨又町内致歩行候節、くわゑきセる不仕、はちまき仕間舗事。

附、長崎ゟ江戸江被差越候御用物之公役、又は他領之侍中上下ニ付、公役ニ罷出候節茂右同前ニ可相心得事。

一在町人ミ、他領之侍ニ行逢候節ハ、御壁書ニ被仰出置候通、笠を取、草履をぬき、腰を屈メ、道脇ニ寄、随分慇懃ニ可仕事。

一長崎御奉行御通之節ハ、久留米ゟ御家老出勤有之候。田代町路筋家内ニ居候人ミ、路地江下り礼儀可仕候。此外物頭御使者等ニも夫ミ慇懃可仕事。

一御當役両町幷上郷小町御通之節、家内ニ居候者は路地江下り礼儀相勤、路地江下り候難儀成者ハ勝手ニ引込居可申事。

附、在町江御出之節も、御目通之家ミ、右同前相心得可申事。

一水屋津出ニ付、御當役御下り被成候節、川向之土手を通り候者共、御通を見掛候而も礼儀不仕罷通候儀間ミ有之、甚無礼之仕形ニ付は、川向を通候者共、御當役御通之節は勿論、御役ミと見請候ハヽ、急度手をつき礼儀可仕事。

一田代町瓜生野町上郷小町之人ミ、常ニ町並ミ之家ミ表通臥り居、法外之体ニ罷在、役ミ通り候も不存仕形間ミ見及申候。往還筋候得は、爰元御役ミのミニ而無之、他領之人見掛候所も甚法外ニ相見申候。向後昼之内、町並表通ニ臥り無礼法外之仕形仕間敷候。尤病人等有之節身を隠し候所も無之程之小家ニ而、無據表通ニ臥り候ハヽ、屏風等ニ而身を隠し、臥り候様ニ相心得可申事。

一両町人ミ幷上郷小町之人ミ、尤在方より公役等ニ付田代町江罷出候者共ニ、御扶持人幷庄屋町役通り候節、高腰を掛不申、右役ミ途中ニ行合之節も、分ミニ應し礼儀可仕候。勿論在方ニ而同前ニ候事。

一公儀御役人様隣国御大名様通之節、尤御當役御通之節、両町幷上郷小町江他領之商人等入込居候とも、爰元之人ミ、同前礼儀不仕候而不叶事ニ候。若無礼之仕形有之候ハヽ、其家主ゟ急度礼儀仕候様申聞、萬一不相用候ハヽ、其家ゟ追出候様可相心得事。

一郷足輕之儀、御先拂又は辻番、上使屋不寢番等ニ罷出候節、諸事念を入相務、法外之儀不仕、第一御先拂ニ罷出候者は、人〻無礼法外之儀無之ため被差出事ニ候得は、御通り先ニ立、左右を見廻、子共ニ至り無礼之仕形不仕様申付。勿論他領之者たりとも無礼法外之仕形無之様ニ申付。萬端ニ氣を付、念を入相勤可申候。右勤ニ罷出候毎度、其掛之庄屋〻務方之儀委敷申付、差出可申事。右之通在町共ニ人〻江委敷申付候様被仰付候間、可得其意候。以上。

丙七月十四日　　手代中

三郷大小庄屋衆中
両町役衆中

寛保二丁戌正月十五日

一今日例年之通壁書讀聞、手代中を以申渡ケ条左ニ記。

一田畠作仕様之事。

一絹類高染物セつた踏不申様との事。

一百姓食物雜穀可相用との事。

一火用心之事。附、灰屋雪隠仕替之事。

一牛馬飼様之事。

一他類拂ニ切手なしニ出間敷事。

一奉公人名附差出候様との事。

十二月八日

一去ル五日御貢米仕出之節、我〻両人下り候処、牛飼土手下モニ御仕立之櫨木ニ牛繫キ有之候ニ付、右牛主吟味を遂候處、奈良田村善太と申者之牛ニ付、早速善太儀組合ニ預ケ置、上〻御仕立之櫨と不存儀も可有之候。縦令村方〻仕立置候共、右「善太、櫨苗百本科代申付。委細之書付略之。」

右之趣、奈良田村庄屋幷善太可申渡候。以上。

注、「善太……略之」は「基養政鑑」により補う。

一去ル五日津出之節船頭廻之儀、柚比村酒井西村瓜生野村此三ケ村閊當りニ候處、酒井西村俵拵甚不宜、兼而米拵

方縄俵共ニ念入候様堅く申付置候處、不届之至、其外村〻共ニ初津出之節之通無之、麁抹之俵拵相見江、向後唯今之通ニ候ハヽ、其村〻庄屋急度申付候間、堅申付候様ニとの趣、大庄屋三人幷酒井西村庄屋治八江委細申渡ス。

寛保三癸亥正月廿七日

本役、濱田伊左衛門
佐役、吉村十左衛門

一御領中一季奉公人之儀、他領江出奉公仕候由、粗相聞、村〻ニおゐて厳敷吟味仕候様ニ、若大形ニいたし、右体之者有之段相顕候ハヽ、庄屋組頭迄急度越度ニ可申付候間、左様ニ無之様ニ念入候様ニ申渡ス。

四月八日

一夜前御国御左右到来、大川筋荒篭取除ケ手付之儀、當正月十四日迄弐分通不残相濟候段御聞届、右熟談筋ニ付、段〻尽心力相働候者共江御褒美被成下候。此上段〻遂熟談全成就之節ニ至候ハヽ、御称賜被仰付様之品も可有之候間、皆共無油断相働候得との御事。尤青木与次兵衛儀は、分而令苦労候ニ付、外ニ米拝領被仰付。豊左衛門、又左衛門、新蔵江之被成下銀之儀は、郷中用銀御手當外餘銀之内〻御渡被成候様ニとの御事ニ付、左之通以書付申渡ス。

一紗綾弐反宛、青木与次兵衛、原新平、門司七左衛門。右は大川筋荒篭取除之儀、段〻及熟談、旧臘十五日手付ニ取掛り、弐分通當正月十四日迄ニ相濟候。右之一件は、数年来及熟談候得共、様〻故障有之、申組不相調候處、此節手付之分相濟候は、皆中所置宜、心を盡し令精勤候故ニ依、為御褒美右之通被成下。

一御米弐俵　　青木与次兵衛

右同断ニ付、分而心力を尽し令苦労候ニ付、別而右之通被成下。

一銀弐枚宛、上郷大庄屋豊左衛門、田代町年寄又左衛門、

蔵上村庄屋新蔵、同断之訳ニ付被成下、以書付申渡ス。

延享元甲子二月十八日

本役、濱田伊左衛門
佐役、吉村十左衛門　在勤

一御領中之出家中、在町之人家ニ而説法致候由ニ候間、向後在家ニ而説法不仕候様ニと之儀、左之通手代中ゟ在町江申觸ル。

一諸宗之出家中、寺ミニ而説法致候儀は格別、在町人家ニ而説法之儀は、以前ゟ停止被仰付置候処、真宗一派之出家中、間ミ在家ニ而説法致候段相聞、如何様之訳ニ而、猥ニ在家ニ而説法有之事ニ候哉、難心得事ニ候。向後在家ニ而説法有之段相知候ハヽ、其家主出家共ニ重科ニ可被仰付候間、此旨出家中幷在町人ミ江堅申付可有之候。

一他領之出家諸宗共ニ御領内入来候節、不案内ニ一夜ニ而も留置候ハヽ、是又重科可被仰付候。幷六十六部類も同前ニ候。此旨人ミ江委申付可有之候。以上。

二月十八日　　手代中

三郷大庄屋衆中
両町役衆中

六月廿九日

覚

一科代人夫五拾人、酒井西村与三右衛門、右水屋村分土手筋之持分之畠有之候処、仕形不宜、土手之害ニ相成、水引ニ障、旁成紛敷仕形有之候ニ付科代申付。

延享二乙丑三月八日

一米弐俵、木山口町惣左衛門。右は平生人柄宜、殊ニ兼ミ町内極貧窮者共江も氣を付、多少之間施物いたし、貧民を救ひ候由相聞、為御褒美、右之通拝領申付候。

三月廿一日

一下モ村ゟ願出候粮米幷和布ひしき、高田村ニ而渡候ニ付、十左衛門出、下モ村御救請候者寄候而申渡候は、近年打續致損毛、猶又去年殊之外損毛故何茂難儀可仕存、

何卒皆共難儀不仕様、御救可被下候得とも、近年御差支ニ候得は不被及御手ニ御事ニ候故、右之分ニ而随分取續候様可仕候。皆共難儀之次第御国元江申上候処、今度和布ひしき被差渡候。今日相渡候和布ひしきの儀も於御国元御調被成御事ニ候得は、皆共難儀御聞通被成、為被差渡事ニ候間、皆共難有可奉存由申渡。此節手代役青木与次兵衛、御目付吉松安左衛門出勤。

三月廿四日

一十左衛門上使屋江出張、田代町町人共之内、組頭幷壱組ゟ三人程ツヽ召出、直ニ申付候ハ、田代領之儀以前ニ違、近年は段ミ町方相衰候様ニ相見江、年ミケ様ニ相成時は、町も不立様ニ可成と心遣存候。右之通成行候茂、人ミ働方無精ニ有之、商賣仕候者商賣方ニ付無精有之、耕作仕候者は作方ニ手入養ひ大形ニ仕、日用取拵仕候者ハ日用銀を食用之差足ニ不仕、右賃銀を以酒を給、町内之身上宜者之見まね仕、其上食用等雑穀を不相用様子、聞届候。ケ様ニ諸事心得違仕候而は、人ミ相衰申筈と存候間、耕作商賣日用拵仕候者共随分諸事ニ心掛、不働ニ無之様仕、身体持立候様可仕候。右之通之儀、掛之手代役幷町役迄ハ折ミ申達候得共、其下知不相届事ニ候哉、風俗悪敷故、此度は直ニ此段申渡事ニ候間、右之通之身持之者共ニ候得は、縦令難儀仕、御救其外諸願等申出候而も、取上申事ニ而無之候。身持相改風俗直シ候ハヽ、願之儀は取上申候而可有之候間、左様相心得随分相働可申候。唯今此所江不罷出面ミ、能ミ右之趣申聞候様ニとの儀申渡ス。

七月十九日

一三郷大小庄屋両町役中ゟ申出候は、　上ミ御時勢と申、追年打續田畠共ニ損毛仕、百姓町人共ニ致困窮候ニ付、三郷両町人ミ申談候上、左之通致看(簡)略、何分ニ可有之哉、差支之儀等は無之候哉と申出、何茂尤成存寄ニ候故、弥左之通申合候様ニ申付ル。

覚

一人〻食用猥ニ米不相用、雑穀ニ野菜等相交食し可申事。
一田代其外公役ニ罷出候者、又ハ山入之者、宿本之通ニ麁食相用可申事。
一平日之出會酒、決而無用之事。
一振舞一切相止、尤無據訳候ハヽ、一汁一菜ニ可仕事。
一有来候講會賄之儀、夫ニ應し相減シ随分輕可仕事。
一婚礼法事之料理一汁弐菜、尤法事之節并土盤共ニ酒決而無用之事。
一祝言愁其外見廻等音物之儀、一類中其外無據方江贈答仕候ハヽ、只今迄之仕来を易へ、鳥目拾壱銅を包取遣可然事。
一村〻祭礼神座は定格之通ニ仕、銘〻贈答不仕、并親子之外客請不申、尤追而供日掛舞無用之事。
一衣類之儀、随分麁服相用可申事。
一小庄屋以下夏冬共ニ羽織無用之事。
一馬臥之節、馬醫之外寄會飯給候儀無用之事。
一真宗一派、毎月廿八日寺ニ而寄會之節、飯給候儀無用之事。
一同宗一派、霜月取越之法事無用之事。
一浄土宗ニ而毎月念仏講ニ寄會飯無用之事。
一伊勢参宮其外諸方参詣之節、餞別酒迎等無用之事。
附、土産物無用之事。
一願成就宮籠之節、神酒は格別、外ニ酒無用之事。
一諸職人日雇取雇候節、家内同前之食物給さセ可申候。并酒無用之事。
右之通三郷両町申合、費成儀少茂不仕、人〻諸事質素ニ可仕と申合候事。

九月九日

一於田代町瓜生野町、平日行跡働共ニ宜者、此間〻吟味之上、町役中〻書付差出候ニ付、今日左之面〻召寄称美申付。

田代町
長左衛門
平兵衛
平右衛門
斧八
治平太
吉左衛門
吉右衛門
佐兵衛
喜右衛門
善右衛門
茂左衛門

〆拾壱人

瓜生野町
与七
長兵衛

友平
五郎介
萬吉
久七

〆六人

九月十九日

一田代町役中〻手代中迄、左之通内意書役出ス。

田代町之儀、専商賣之蔭を以、人〻渡世仕来候。依之市之儀、町中共不及申上、在方人〻ニ至迄諸品を持出市賣仕、日用品等自由ニ相調候得は、御當地第一之宝と相立、永〻立衰不申様、町内〻面〻心掛候様との儀、古来上〻被為御氣付御事ニ御座候。然處近年市之勢不宜、他方〻来馴候商人茂漸〻引ケ候様相成、商人共難儀仕罷在候處、當春以来は猶以立衰、唯今ニ至而は市日入来候者無御座、漸市之形有之迄ニ罷成候。市日平日共ニ唯今ニ至り御領内村〻〻市立必致度、相止〆候様子有之、氣付

相考見候処、年並不宜大切之時節ニ候故、人〻儉約致方之儀、先月以書付在町共ニ堅申渡候。其以後村〻之取沙汰承り候處、ケ様之時節田代町江出、少之品ニ而も相調、又は酒ニ而も給候而は、如何様之無調法可有之茂難叶(計カ)抔と見聞を恐、當町之出入相止ミ候と相聞候。惣体心安所ゟ御領内村〻ゟ隣旦出、諸用相調候處、右申渡ニ付猶又、上郷村〻下郷之内小郡江罷越、養父郡之方村田瓜生野江出、日用相調候様成行申候。ケ様ニ隣旦江越、諸用相弁候様罷成、當町之賣買相止ミ、酒屋共は不及申上、商人共之難儀無此上体ニ御座候。唯今之通ニ而は弥市も立止ミ、當町零落之基と可罷成段、我〻ニ至り難儀千萬ニ奉存候。依之我〻存寄左ニ申上候。

一市日之儀は、御格別之御了簡を以、御宥免之御沙汰被仰出被下候ハヽ、在方之人〻得心仕、市日平日共ニ當町江出入仕候様ニ成行可申哉と奉存候事。

一往還筋之儀ニ御座候得は、かるわさ品玉取、或は五人三人

も同前ニ申出候間、差免候様ニ仕度候事。

一當町駄賃馬数之儀、以前は八拾疋余有之候処漸〻相減、唯今三拾疋余罷成申候。惣体商人之往来も減し、駄賃を取渡世仕候馬持及困窮罷在候上、去秋田畠共ニ不作仕、面〻食用も乏、難儀仕体ニ而候得は、當春以来馬之飼料願出候得共、御時節柄を奉存、其段委ク申聞、草出来迄取續セ召置候。右馬数之内一駄之荷物付候儀成馬も有之、時ニより運送差閊申儀ニ御座候。殊ニ長崎御奉行様御往還當地御休泊之節、御本陣乗掛馬之儀は田代町ゟ、我〻下宿人用之馬之儀は三郷運送仕候、御本陣馬数弐拾五疋程用意仕召置、御入用相達来候得共、右之内ゟ用意難成、差支可申と難義千萬奉存候。唯今之通ニ而は此上段〻減可申も難叶(計カ)奉存候。右申上候通、商人駄賃減候上(マヽ)、原田宮地馬専筑後野通り仕候ニ付、此筋之駄賃必致度絶申候。勿論野道馬防之儀段〻奉願防見候共、唯今之致方ニ而は手及不申候。此上之儀は御領境鑿切り、壱ツ橋を掛候ハヽ、野通相止ミ可申奉存候。御見分を以鑿切被仰付被下候様奉存事。

右之書付見届、尤小倉村野通馬防之儀ハ、手代中町役中罷出、見分仕候様申達ス。

延享三年丙寅正月十五日

一爰許之儀、只今之通ニ而ハ、年〻御年貢米不得致全上納候へハ、却而下之不勝手と相聞候ニ付、殿(殿カ)ニ茂願出、以前之通穂見免ニ可仕之処、其通無之候段了簡ニ不及候。定免ニ而ハ不勝手ニ候と之趣、大小庄屋中連名之書付を以申出候へと申達有之。

二月廿三日

一子正月九日、田代町三太郎儀、城戸村喜右衛門奴ニ申付候處、申付候儀も不相用、行跡相改候様子無之趣、喜右衛門ゟ申出候ニ付、穢多ニ可被下段、手代中を以庄屋幸蔵江申渡。

四月十九日

一三郷ゟ免方之儀願出候書付差出候ニ付、伊左衛門ゟ申達候ハ、此度差出候書付ニ、下郷斗穂見免ニ願上候段、如何様之訳ニ候哉、先年定免之御願申上候節茂下村ハ穂見免ニ被仰付置、上村斗定免ニ被仰付候様ニと之事ニ候得共、両様ニ難致、仰付を以、一統定免ニ被仰付候段ハ、庄屋中能存居申筈ニ候處、下村斗穂見免ニ願出候訳、以書付申出候様ニ申付。右書付ニ下村ハ除居候間、下村茂以書付如何様と成とも申出候様ニ、手代中を以大庄屋中江申渡。

十月三日

本役、嶋雄八左衛門在勤

一八左衛門ゟ大庄屋中江御用有之、召寄置候處、佐賀表ゟ御使者有之候故、佐役十左衛門方江手代中同前罷出候様ニと申達。十左衛門ゟ大庄屋中江申達候ハ、田刈揚方不果敢取候ニ付、此間ゟ段〻致下知事ニ候。右下知之主意ハ、以前ハ御年貢米之儀、毎年霜月十五日を限、蔵詰仕たる事ニ候處、いつ比ゟ之仕来ニ候哉、皆濟手形ニ籾取立と登載いたし、籾取立之儀村〻御年貢蔵ニ相詰たるニ而無之、畢竟取立無之分を籾取立と書載いたし候儀と相聞江、甚不宜仕方ニ候。御年貢米其外共ニ取立方延〻ニ有之候へハ、百姓手前ニ食費しと相成、畢竟ハ百姓共之為ニ不相成事ニ候。依之當年ゟ籾取立之儀取用不申候間、大小庄屋中随分と心遣仕、霜月十五日限ニ急度米ニ而取立、蔵詰仕候様ニ、手代中ニも奉り之郷切ニ心遣仕候へ、御國之御米間ニ付而ハ、仕出方之儀茂追〻下知之通延引不仕様ニと之趣申達ス。

延享四年丁卯八月四日

本役、嶋雄　八左衛門

佐役、七五三杢右衛門

一公儀御役人様或ハ諸國御大名様御往還之節、道番に庄屋中自分之提灯をともし相勤候。

上ゟ之役人と名乗候而刀を指し候者ハ、向後御紋之提灯

をともさセ可申候。其旨庄屋中へも申達置、勿論賄方江茂可達之段申渡。

本役、平田又左衛門、同年十一月ゟ在勤

寛延元戊辰六月十二日

一下村御備船囲用之木屋掛、今度取立候ニ付、材木願出候處、過分之材木ニ候故、願之通不申付、則とま囲ニ申付。小屋造作之積書ハ日記有之略之。

六月十七日

一田代村庄屋作平、田代町藤兵衛ニ以書付申渡。

一田代町藤兵衛。右は今度田代村庄屋作平儀勤方不宜、庄屋役被召放候ニ付、此節吟味之上、跡庄屋役申付候。田代村之儀ハ町を引請候所柄之上、作平勤方不埒有之たる跡役儀ニ候得ハ、万端心を用、精ニ入厳密ニ可相勤候。

一藤兵衛儀、御国元江御伺ニ不及、直ニ役儀申付候ハ、百姓開敷時分御役宅之番仕苦労ニ相聞候故、早〻引移り候様、御役御禮茂明後十九日申上候様申渡ス。

一田代村作平。右は数代田代村庄屋役相勤来候處、勤方不宜、庄屋役被召放候ニ付、御役料地面家屋敷共ニ法式之通御取上被成候。右之趣大庄屋宅平江申達ス。

一田代町富取行方、町役中江以書付申渡ス。

田代町市立衰候而及零落候間、為賑興行之儀、依願去ル酉年ゟ被差免置候処、取行方大形ニ有之と相聞、不届之至ニ候得共、存候旨有之不及吟味、此度仕方を改申付候。以来取行之節不埒ニ成行候ハヽ、屹度可為沙汰候。此後廉直ニ取行、段〻餘銀等集り候得は、町中之為ニ相成事ニ候間、専心を用厳密ニ取行可申候。

一富之儀、當月ゟ新法ニ取行候ニ付、荒木宇内、松浦屋長左衛門、竹屋次介、元〆役ニ申付。乍苦労相勤候様申渡。

一前以書付被差出置候帳面之残銀ニ五月富餘銀差加江、惣銀高相極帳面ニ記し、右三人江引渡、厳密ニ致請引、念を入相勤候様申渡。

一富札賣高、度毎ニ書付を以申聞候様申渡。

一松林院宿禮之儀、少〻過分ニ相見候得共、庵及大破候処、自分之再建難成候ニ付取立之ため、度毎ニ相渡候由、付紙ニ相見、最早数ケ年之間右之員数相渡候へハ、庵修補ハ假成ニ茂出来可申儀ニ候間、向後は五百文ツヽ、茶代として可相渡候。右之外ハ付紙ニ而申出候通ニ取行候様、町役江申渡。

寛延二年己巳四月六日

佐役、橋倉紋左衛門在勤

一下モ村御備船修理入目銀之儀、是迄ハ御立山用水不差支場所、下草さらへ代銀を以修理被仰付候へ共、場所ニ〆全ク用水不差支之儀共不相聞候間、御国江申上、向後下草さらへ之儀相止メ候と之趣、以書付山方役中江申渡。

寛延三年庚午七月廿八日

本役、平田所左衛門在勤

一頃日南風吹續、其上残暑強候ニ付、三郷共ニ田作虫生し候ニ付、上〆五穀成就為御祈禱、三座之祓被仰付候故、三郷社人中召寄、日柄撰申出候様申渡。

一小倉村庄屋正右衛門、長野村庄屋次左衛門、奈良田村庄屋太平次、宮浦社人悴大輔、神水持弐人、右は郷中田作虫祈禱立願屬當り、箱崎之神水今日〆罷越申度、御切手上郷大庄屋徳左衛門以書付願出、願之通申付。

九月五日

一了寿儀、右は古賀村庄屋役相勤居候内、無調法之儀有之、城戸村江流罪被仰付置候処、享保元申年致出奔、去〻辰年悔先非立帰候ニ付、河内村江流罪申付置候。然処今日ハ大衍院様御年忌ニ被為當候ニ付、御慈悲を以流罪御赦免被仰付候趣、以書付庄屋新右衛門江申渡。

十月五日

一川内村傳四郎、甚右衛門両人、先月廿二日之夜猪待(狩カ)ニ罷出候処、傳四郎儀鉄砲之矢ニ當り相果居、甚右衛門儀ハ直ニ立去り候段、案内申出候ニ付、見分人差越遂吟味候処、甚右衛門鉄砲ニ而誤り候と相見候、然共意趣等ニ而

之仕形共不相見候。依之為吊科銀壱枚甚右衛門親藤市幷

一家中〆傳四郎後家江相渡候様、勿論傳四郎後家子共も若年者有之由、可令難儀候間往〻假成ニ取續候様、藤市一家中〆可令介抱旨申付候間、村中〆茂猶又心を添、為致養育候様可心掛旨、庄屋新右衛門江以書付申渡。

一川内村藤市、右は悴甚右衛門儀、先月廿二日夜同村傳四郎と申者同前猪待(狩カ)ニ罷出候処、傳四郎儀鉄砲之矢ニ當り相果居、甚右衛門儀直ニ立去り候段、庄屋〆申出候ニ付、遂吟味候処、甚右衛門鉄砲ニ而誤候と相聞、甚右衛門儀御領中隣端ニ懸為相尋候へとも行衛不相知、欠落ニ相極候。依之傳四郎為吊科銀壱枚藤市幷一家中〆傳四郎後家ニ可相渡候。勿論子共も若年ニ有之、可令難儀候間、此以後共ニ假成ニ取續候様、一家中〆加介抱候様、是又以書付申渡。

寶暦元年辛未四月朔日

一園部下村〆新開田以書付願出。脇田下村之分下田弐段四畝程同村藤左衛門、同所下田壱段壱畝程同村喜左衛門、熊本下田拾歩程同村藤左衛門、合新開下田三段五畝拾歩程、右之場所川端之空地ニ開立候而宜様子ニ相見候ニ付、新開田被仰付可被下候ハヽ、御法定之通開立候上ニ而、畝歩御極被下、御本高ニ相加へ、永〻少も荒不申様可仕と之儀願出、御国江可伺越段申達ス。

六月十九日

一藤木村江不宜者有之候ニ付、内〻ニ而吟味仕候へハ得と相知レ不申、右之通ニ而召置候間ハ、以後御下知届兼可申と奉存候間、御吟味被仰付被下候様、大庄屋与市、庄屋久兵衛、以書付申出候。其書付略之。

一藤木村伊右衛門。右は今度藤木村組頭之内ニ對、無筋意恨を挟、訴状之企仕候段相知、遂吟味候処、相違無之、甚左衛門、弥七江も相進〆候由申出、其上平日大酒を好不行跡ニ有之、當春も願書企村中寄立之儀、頭立相進、重科之者ニ付屹度可申付候へ共、以寛恕闕所申付。一家

之内永代奴ニ拝領申付。尤老母儀ハ兄傳九郎方江引請、相養候様申付候。向後相慎行跡相改候様申付。伊右衛門、右は上郷大庄屋徳左衛門へ被成下。伊右衛門女房、同人子伊作、右は下郷大庄屋宅平へ被成下。同娘きく、右は原村庄屋幸蔵江被成下。右之通永代奴ニ被成下候間、厳敷召遣ィ随分行跡相改候様、徳左衛門、宅平、幸蔵江申渡候様申達ス。

一藤木東村甚左衛門。右は此度藤木村組頭之内ニ對、意趣を挟、伊右衛門ニ与シ善蔵、弥七申合、無筋訴状を企仕候段相知、遂吟味候処相違無之、其上平日大酒を好不行跡ニ有之段、此節吟味之上相知、重〻不届者ニ付、闕所之上、宮浦西村之内陣屋江一家内流罪申付候。向後相慎候様、行跡可相改之趣、大庄屋与市、宮浦西村庄屋長左衛門江も申渡。

一藤木西村善蔵。右ハ此度右同様之趣を以闕所之上、妻子共ニ飯田村江流罪申付候。向後相慎行跡為相改候様、藤木西村庄屋久兵衛、飯田村庄屋八郎兵衛江も申渡。

一藤木東村弥七、科銭壱貫文、同村惣右衛門五百文、同文を以向後行跡改候様申渡。右三人闕所ニ付目付申差出。

一藤木村市平、右は藤木村伊右衛門、甚左衛門、弥七、不宜訴状之企仕、相加り候様ニ伊右衛門申進候得共、不相加、不同意之訳早速組頭中江相届置候段、奇特ニ候故、右之通拝領申付。

寶暦二年壬申九月十四日

一御国御左右到来、

上ゟ御倹約之義被仰渡、御前ゟ御直ニ被仰出候由之御状面、

一筆申達候。七月二日従　御前思召之御旨、以御書付被仰出候ニ付、同七日御家中出仕之日被相達候様、与頭町奉行御郡奉行江申渡候。依之御書面之写帳等差越候間、御屋敷中江被相達、存寄有之人ハ申出候様可被申渡候。恐〻謹言。

八月十二日　　多田監物
　　平田将監
平田所左衛門殿
橋倉紋左衛門殿

覚

潜商犯科之者ハ、　公私ニ付可處厳科儀當然之事ニ候。然處近来寛恕勝ニ相成如何敷候。向後は存寄有之、裁許筋重ク可申付候条、皆申兼而其通相心得居可申事。

一勝手向之儀、追年相衰家中撫育幷参覲交代之費用難相償、此節猶又不時之物入も段〻見来候へハ、旁以此向ニ而不相済、一体趣向を盛候敷、又ハ是迄之筋ニ作略を可加歟、何れ廣ク料簡を聞届度候間、諸役家中之者ハ勿論之儀、百姓町人ニ至迄、少ニ而も存寄之筋有之候歟、其外不依何事ニ申聞度義ハ、何れも無伏蔵委細ニ書付、封印を以大目付役方又ハ私宅迄差出候様、夫〻ニ申渡。勿論大目付請取候ハ、封儘奥江持参候様可申渡候事。

七月二日

一筆申達候。今度御書付を以御倹約筋被仰出候趣、幷御国役〻江申渡之趣、共ニ状末ニ写差越候間、熟覧可被致候如被　仰出候、是迄段〻御省略筋御取行被尽候上之儀ニ候へ共、御勝手方御手詰ニ付而ハ、猶又何分御勘略(箇)被遊度、既ニ　上御衣食をも卒(マヽ)品御用可被遊、就夫ハ諸役人之員数諸役所〻之入目幷諸向請拂等精吟味、減少之筋申出候様と之御事ニ候間、御倹約之品付候程ニ被相縮候程之儀ハ、輕少之儀たりとも急度吟味を差詰、其外御勘略(箇)筋心付之儀ニ共、委細ニ可被申越候。此段為可申達如此ニ候。恐〻謹言。

八月十二日　　多田監物
　　平田将監
平田所左衛門殿
橋倉紋左衛門殿

覚

一御勝手向段〻被差支候ニ付、御先代迄数度御倹約被仰出、上下共ニ此上ニは最早減少之筋不相見候へ共、猶又當春於江戸表ニ御見廻ニ付、格別之御勘略(簡)被仰出候處、訳有之姑ク御取行無之候。然共差當り御家中江之御扶助渡方、御蔵前順路ニ無之段相聞、逐日御時勢差廻御凌之道不見来、誠飢饉之年兵乱之跡同様之事ニ被思召候ニ付、弥御衣食ニ付而之御勘略(簡)、急度可被相立候。其内召物之儀ハ公儀御勤之御格合も有之候故、御在府一ヶ年御勤被遊候以後、御在国年を打合、其上ニ而御納戸方御定銀御極可被成候。先於御國式日表江御出之節、綿服御着用被成、御上下御羽織御下着共ニ、相應之品を以用意仕候様被仰付、御膳方之儀ハ是迄之御入目半分を以、是非共ニ御膳部仕立候様被仰付、惣体倹約之儀格〻ニ随ひ其程位も在之候処、右之通被仰出候段、却而異様ニも可相聞哉ニ候へ共、御時勢不被得上次第候間、可被存其旨候。尤是ニ準、諸役人之員数諸役所之入目幷諸向之請拂等、猶又精遂吟味、格別減少之筋申出候様、國中諸役方諸番所之儀ハ勿論之儀、江戸京大坂田代長崎博多勝本朝鮮和館江も夫〻申渡。委曲被承届候而各中僉儀之上、決定之趣を以、追〻被相伺候様ニと之事。附役御定式之被成下、旅役之御宛行幷居役旅役共ニ勤方相勝候人江之御賞賜等、御倹約ニ付而ハ猶又成たけ被減間敷事ニ候間、是又被得其意候様ニとの事。

八月

右之通御倹約之儀、以御書付被仰出候ニ付、写相渡候。

諸役中拝見有之候様可被致候。右御書載被成候通、上御召物幷御膳方御入用等大ニ御省略被遊候段、乍御時勢奉恐入御事ニ候。併是迄累年御倹約筋彼是被取行候上之儀ニ而、此上格立候程之御勘略(簡)被成方差當り不相見、役人之人数御減少、役所〻〻之入目被相縮候外ハ、御倹約之品付不申候間、各屬下之役所、此上何分差詰減少之筋可被申出候。勿論前〻ゟ御倹約筋毎度被仰出候處、年月

を經候ニ随ひ、心之弛も又は出候物ニ候。左候而ハ、被仰下之御旨ニ令違背筋ニ候間、自今急度其旨を相守候様、可被相達候。以上。

八月九日　　年寄中

右之書付御状共ニ、御扶持人中及在町役〻江茂委細申付候様申達ス。

寶暦三年癸酉正月八日

一御領中人〻旦那寺之儀、其人〻先祖ゟ之旦那寺極有之事ニ候へ共、縁付又は養子ニ参候類ハ、先之寺ニ附不申候而ハ不叶事ニ而、先年も其通申付有之候へ共、其後段〻猥ニ成、一家内ニ而旦那寺弐ヶ寺三ヶ寺茂有之、人〻難儀仕候と相聞、依之右仕形急度相改、一家内ハ其家主之寺ニ附候様ニ可申付候。先年申付候節も、以前ゟ之旦那及断絶候なと〻申儀有之、縁付之者或ハ養子等ニ参候者も先之寺江付不申、元之寺之儘ニ而召置候儀間〻有之、右様之処ゟ猥ニ成候と相聞候間、右体之儀ニ相抱(拘カ)り不申候様ニ、以来乱不申様ニ寺〻尤人〻江も在町役〻ゟ堅申付候様申達。

正月廿四日

一御國上裏町薬屋平次郎と申者、瓜生野町本照寺江昨晩罷越候由ニ而、瓜生野町役ゟ御切手差出候處、為似切手と相見候ニ付、於上使屋吟味仕候処、決而似セ切手ニ而無之段偽候付、先綱下ニ仕、入牢申付候様ニと申付居候内、先刻ゟ段〻申上候ハ、皆偽ニ而私儀実ハ御國追放之者ニ而、大坂江被差越筈ニ而、去十二月廿五日兵庫船ニ御乗セ有之候處、博多ゟ船揚仕候。其節右切手之儀は船頭相認メ呉候趣申出、段〻夜更候ニ付、今晩ハ先入牢為仕置。

三月八日

一御扶持人中之子供、幷中間走番小人其外御領中之者、武藝心掛居候者、今日於御廣間路地武藝為仕、午上刻ゟ初、未申刻ニ至相濟、御扶持人子供中江は鳥目壱貫文御誉録

拝領申付。其後御玄関ニ而御酒煮肴遣之。

十月廿六日

先達申付置候囲籾俵高之儀、江戸表ゟ被仰越。

一筆申達候。先般堀田相模守様ゟ諸國囲籾之事被仰渡候処、御国之儀高辻無御座候故、古来ゟ御仕来之品も有之候ニ付、肥前御領地之高斗囲置候様被成度段、被仰上候御伺書、去廿三日相模守様江御留主居嶋雄只右衛門を以被差出候処、一昨廿七日相模守様江御留主居被召呼、只右衛門罷出候処、御用人岩瀧五兵衛被出會、右御伺書ニ御附札を以、肥前国領分之高割を以、囲籾可被致候。尤御勘定奉行被談候様ニと被仰出候。

一右ニ付今朝、御勘定奉行御勝手方御用番松平帯刀様江御留主居右同人致参上、御用人森田幸次郎江懸り合、今般被仰出候囲籾之儀、田代領斗囲置候様ニと被仰出、御勘定奉行可談之由被仰渡候ニ付、罷出候趣申伸候処、則被申上御返答被仰聞之趣致承知候。右御領分御高壱万石分籾千俵ニ付、三斗五升入之積ニ〆當冬迄ニ被囲置候へ、三千石餘之分ハ囲置ニ不及候。尤右囲置候段下モ御勘定所江相届置候様、帯刀申候由被申聞、相應ニ御請申罷帰候。

一籾囲之事、籾俵壱俵三斗五升俵之積ニ〆壱万、囲分千俵御囲被成、端之分ハ御囲ニ不及候間、籾千俵御囲蔵江被詰候ハヽ、其段早〻可被申越候。右之段為令申達如斯御座候。恐〻謹言。

九月廿九日　　古川大炊

平田所左衛門殿

橋倉紋左衛門殿

一右ニ付三郷大庄屋中江以書付申達候ハ、先般申渡置候御囲籾之儀、今度江戸表古川大炊殿ゟ被仰下候は、御囲籾参斗五升入ニ〆壱万石之高千俵囲置候様ニとの御事被仰下候間、得其意、右之俵数早〻取立置候様可被申渡候。蔵詰之儀ハ重而可及差圖候。

一右籾詰蔵之儀、衆儀(議)之上、三郷大庄屋方之郷蔵江詰之。

寶暦四年甲戌三月廿六日

一久留米領百姓相騒申由ニ而、町年寄谷口善左衛門、昨日小郡迄為聞合罷越、昨晩遅ク罷帰り今朝申出候は、上郡百姓中願之儀存立、段〻下り一昨日八幡川原と申所江寄立候由、人数凡三四千人程と相見江候由、願之筋ハ委細ニ相知不申候へ共、先頃被仰付候頭掛六分、其外前懸方之儀ニ而可有之由申候。尤右百姓中ゟ今日ハ山隈山ニ寄会可仕由、井上組ゟ申越候由評判仕由、其外別而承候筋茂無之由申出。一昨日は城下ゟ足輕三拾人被差出候へとも、宿借候者も無之由ニ而罷帰候由、委細ハ記録ニ有之。右騒動ニ付、久留米領之境目村〻江左之通申付候様ニと申達ス。

一火用心之事。

一兼而被仰付置候通、此節は猶又旅人等決而留〆不申様ニとの事。

一庄屋中何事ニよらす沙汰承候ハヽ、早速申出候様ニとの事。

一大庄屋中茂此節之事ニ候間、村〻江氣を付候様ニとの事。

五月廿日

一手代中申出候は、頃日之洪水ニ而川之破損之場所多有之、破損掛中も御普請ニ取掛居候へは行届不申候間、井手かまち等急場之儀は、渡(假カ)普請ニ申付何分可有之哉之旨ニ付、別而急場は手代中見分之上、渡(假カ)普請仕候へと申達ス。

十二月廿五日

佐役、高松宇左衛門在勤

一御扶持人中幷在町江申付候様被仰付候ハ、

一正月一家寄會之儀、親子之間ハ一汁一菜、其外之親子ハ料理無用之事。

一年餅例年之可為半減事。附、近所江餅遣り取無用之事。

一一家之間、年餅遣り取無用之事。

一大酒不仕、其外費ヶ間敷儀一切無用之事。

日記抜書

伍

従寶暦五乙亥至同十一辛巳

五年乙亥三月十八日より

一本役、三浦内蔵允在勤

一大工木挽桶屋屋根葦壁塗畳屋塗物屋指物屋江、御領中諸職人等不精ニ有之、雇候者甚不勝手ニ候由相聞候。他領之諸職人ニ比候得ハ、細工之善悪茂可有之候處、身分不相應之賃銀を取候由相聞候。依之右之格を急度相改、諸職人とも毎日日之出前ニ細工場江罷出、精を出相勤可申候。其上相改不申諸職人ハ、急度其職を被指止候。将又大工不働ニ有之、雇候者之為ニ成不申候ハヽ、在町ゟ願之筋ニ依、大工運上被差止候而、他領大工を御免被仰付儀茂可有之候。

一御領中一季奉公人之下男下女、近年風儀悪敷罷成、隣国之奉公人ニ違、働方不精有之、殊ニ過分之給銀を取候由、依之田畠を致所持候百姓茂下人を抱得不申、多くハ自作仕候者ハ無之、下作勝ニ成候と相聞候。右之通成来候ハ畢竟在町役ゝ之下知不宜故ニ候。過分之給銀遣し召抱候下人ニ候得ハ、主人之心儘ニ召仕申筈ニ候処、稠敷召使候へハ心儘ニ其家を出候族有之、主人茂左候而ハ當時手支ニ成候由故、却而下人之心ニ随ひ、心儘ニ召遣候茂難成様ニ成来候と相聞、甚風儀不宜、只今之通ニ候ハヽ、漸ゝ御領中田畠作衰候積ニ候。此後下男下女之風儀急度相改、主人之下知を背不申様相心得可申候。勿論主人茂召抱候節、年中之働方申極、人ゝニ應し給銀相極無緩召仕、萬一下知を背候族有之候ハヽ、早速可申出候事。

一右致書載候通、御領中之田畠下作勝ニ成候處、下作人之

風儀不宜、田根付一通り仕廻、其後手入養ひ不仕荒し候茂有之、扨又秋作出来は地主見分をも不仕内、宜しき出来之分足刈と申心儘ニ刈取、残之分ニ而地ぬし之見分を請差引之仕形ニ依、地主江差返候茂有之、地主之損失多上納之方不宜候ニ付指足候と相聞、其上地主へ未進等多く旁以下作人之仕形不宜候。向後急度正道之筋を以下作可仕候。此上ニ茂不相改候ハヽ、地主ゟ可申出と之趣、以書付申達。

六年丙子閏十一月十九日

一諸役ゝ召寄候上、於御廣間致口達候は、頃日郷方ゟ願書指出見届候。右願ハ至極重キ願ニ而難取上事ニ候得共、三郷一統申談決定之上之願之事と相見候故、先我ゝ方江願書請取置候而、役中申談候上、御国許へ申上候而可有之候。併重願之事故、御取上被遊候儀は難量候得共、何分ニ茂宜様申上候而可有之候。何卒御国元茂宜御聞通被遊候得かしと存事ニ候。此上は跡諸上納方少シニ而茂滞不申様可致出精候。若又滞候様有之候而ハ至而重事ニ候条、随分出精可仕候。将又御領中田畠作之致方及聞候次第を、以書付申渡候間、書付之趣承届、来年よりハ仕方を替、耕作出精候得と為申聞候上、猶又以書付申達。

御領中田畠作毛之儀、以前と違年ゝ相劣候と聞候ニ付、其子細を考候処、連年氣候之善悪有之儀ニ候得共、氣候ニ依而と斗難申、畢竟手入養之仕方以前之通ニ無之所ゟ、漸ゝと作之出来方劣候と相聞、天災ニ而之不作ハ可致様無之候得共、手入養不行届、宜出来候土地茂漸ゝ悪地ニ成行候段、歎敷事ニ候。右ニ付御領中耕作之致方以前ニ違候處ハ無之哉と、役ゝ之申分承、段ゝ遂吟味候処、田畠所持仕候町人百姓次第ニ自作を相止メ、田畠専下作ニ任セ置、下作人之義ハ牛馬弱候上食用も乏敷候所ゟ耕作一通之働難成、食用之拵仕候間、間ゝ耕作仕候体之者間ゝ有之、漸ゝ作之出来方劣候と相聞候。依之来年ゟ右之仕形を相改、田畠所持仕候者ハ急度自作仕、餘計之田

畑所持仕候者自作ニ余り候分を下作ニ入、勿論遠方之村〻懸持之分ハ自作難成事ニ付、下作人江作らセ可申候。尤右之通相改候ニ付而ハ、下作人之儀、家内人数多く、繰之下作ニ而ハ及難儀者可有之哉、左様之者ハ掛之大庄屋幷其村之庄屋ゟ遂吟味、余計致所持候者ゟ勧メ作らセ候様可仕候。ケ様申付候上自分之勝手而已を存し、所持之田畠を繰斗自作仕下作ニ入候仕形之者於有之ハ、屹度可申付候。尤右相改候付、耕作手當之儀、年内より夫〻心掛可申候。

一大小庄屋中之儀、平生耕作方之下知仕事と相聞候得共、此度相改申付候付而、向後尚又心を用、作所在廻り専下知仕、萬一相背候者有之候ハヽ早速可申出候。扨又庄屋中下知之次第茂手筋を以承届申事ニ候間、無油断可致下知候事。

一御領中之男女、近来ハ分限ニはつれ、衣食を飾、或ハ不似合器物を用候と聞候。毎度申付候通、下〻常ニ雑穀を食用いたし、農具ハ格別、無用之衣類器物等決而求不申、諸事倹約仕候様、庄屋町役共より猶又堅可申付と之趣申渡。

寶暦七丁丑二月廿二日

一長崎抜荷物商賣方御法式之儀被仰出候付、御國ゟ被仰越候趣を以、御領中在町役〻今日召寄申渡。

公儀ゟ被仰出之御書付寫

唐船抜荷抜賣之儀、先年度〻被仰出も有之候処、近年猥ニ相成抜荷仕候者も有之由、其上近比度〻唐船漂流茂有之、右ニ就而ハ紛敷儀茂有之趣相聞、年〻申付不行届、都而之儀、先年度〻被仰出候趣、弥違失無之様厳敷被申付、抜荷仕候者有之(脱アルカ)相改召捕候様可被申付候。

八月

右之通堀田相模守様より御留主居被召寄、諸方御留主居一統相揃候上被仰出候ニ付、御国元御年寄中ゟ旧冬閏十一月七日之以御状被仰下候、抜荷仕候者無之様御領中江

堅申渡。示方尚又無緩様ニ仕、右之御写御領中之者へ申渡、堅相守候様申候得と之事被仰下候条、三郷両町共厳重可申達之趣以書付申渡。

三月廿二日

三浦　衛　守殿
高松宇左衛門殿

俵　平　摩

一御國元ゟ被越候御状面

六月八日

一筆申達候。御領中郷村之貫銀諸掛物、近年夥敷相増、百姓共甚令難儀候段相聞候。依之貫銀百名ニ付何程と定式を相立、其外掛物共ニ相減候筋吟味之上、追而委細可及指圖候。扨又以来ハ御年貢算用之節ハ、庄屋とも江頭百姓平百姓之内ゟ罷出、立會算用聞候様被仰付候間、庄屋共得其意、只今ゟ郷村ニ費筋少茂無之様心を可用候。若不相應之入目於有之ハ、急度可申付候間、此旨可被申付候。頭百姓平百姓之内一両人ツヽ召寄、庄屋共へ右之趣申付候条、其通相心得候様可被申付置候、此段為可申達如斯ニ候。恐惶謹言。

三月三日　　嶋雄八左衛門

本役、小川　又三郎　在勤
佐役、小田儀左衛門

一高田村文作、耕作方功者之者と相聞候付、此節田代御領中之百姓共へ之耕作之下知人ニ申付候。依之帯刀御免ニ而大庄屋上座(マヽ)ニ申付候様被仰付候間、随分出精御為宜可相勤之旨、御支配ゟ拙者共江以書付被仰付候条、御差圖之通下知方随分出精仕、耕作筋宜出来在(立カ)候様心を用可相勤之趣申渡。

六月十九日

御領中之儀、近年別而及困窮候得共、品ニ依以前ゟ相増候費筋多相聞、當節之時体、有来之儀たり共省略無之候而不叶事ニ候間、御領中ニ拘候儀ハ勿論、自分事ニ而も

諸事随分質素ニ仕、費筋無之様庄屋中心を用相示可申事。

（上欄の注）
重之内抔結構を尽し仕立候入目、内ゝハ自餘之事ニ托し、田畑高より貫立候貫銀ニ貫込ゝ相償候趣ニ付、此通申達之由。

一於郷宿寄合之節、諸賄近年入目多、失墜筋皆以郷村ニ掛、甚令難儀候と相聞候。庄屋中御用筋ニ而郷宿江出会之儀ニ候得は、左様有之間敷事ニ候間、已来は郷宿へ出合可隙取存候節は、掬飯用意可仕、若其外出合隙入候ハヽ、中飯斗之ため卒菜ニ而相仕舞、酒事ハ堅令停止候事。
（上欄の注）
於郷宿御用筋取調候節、美酒佳肴を集、不相拘者迄も招寄、無用之飲食仕候其失墜、悉く右同様之趣ニ付、此通申達之由。

一合例切之節、村ニ而酒肴用意持越候様相聞候。例切之義遊山瓢水ニ而無之、出来方多少之専見分事にて、其重儀ニ候處、酒肴迄持越候段甚如何敷候条一切差留、已来ハ其場へ罷出候者共自分ゟ掬飯持参、郷村之貫銀ニ不相成様可仕候事。右之入目数相償候趣ニ付此通申達之由。

（上欄の注）
例切之節、酒肴持越致飯食候失墜、捨付之節、奸智之統ニ入候

腹心之仲間、内ゝ田坪譬ハ弐之捨りニ可成當を、五六之當ニ致、其有餘を以、右之入目相償候趣ニ付、此通申達之由。

一役ゝ江二季其外事立たる訳ニ付、卒品を以軽音物仕候義格別、不時之音物重具相送候義ハ堅令停止候。乍然當所出作之品、心易方へ相贈候義は勝手次第ニ候事。

（上欄の注）
初条同様之趣ニ付、如此申達之由。

一宗門改之義、役ゝ江饗應かましき義令停止候。郷村之物入ニ不相成様、随分心を用可相勤候事。

（上欄の注）
右入目初条同様之趣ニ付、此通申達之由。

右之條ゝ堅令停止候。若違背之輩於有之は、重ゝ可及沙汰候。以上。

右之趣被得其意夫ゝ被申渡、尤両町へ拘候義ハ是又被申渡候得と之義、申渡有之。

九月廿九日

一御用之儀有之候趣を以、三郷大庄屋中御屋敷江召寄置、其留主江左之面ゝ遣之、諸帳面及蔵封仕候様申付。

一破損掛役古賀磯右衛門、目付役原岡与三兵衛儀、中間壱人走番壱人宛召連、右は上郷大庄屋徳左衛門方江差遣。

一山廻役大石五左衛門、目付役前川與右衛門儀、中間壱人走番壱人宛召連、右は下郷大庄屋宅平方へ差遣。

一破損掛片山定右衛門、目付役大石源右衛門義、中間壱人走番壱人宛召連、右は養父郡大庄屋与市方へ差遣。

右之面ゝ大庄屋中は素り、諸人不相知様ニ密ゝ差遣之、右之面ゝ大庄屋宅へ罷越候時刻を考、大庄屋三人へ御書付を以申渡。上郷大庄屋徳左衛門、下郷大庄屋宅平、養父郡大庄屋与市。右ハ御領中不作打續連年及困窮候處、此一両年ニ至候而は、御年貢有米之分も不納仕、其上諸取立等法外之次第ともにて、百姓共令難義候と相聞候。其方共も役儀之主意を以、御年貢何分不納無之様相働、素り一統難義之筋は早速ニ申出候ハヽ、仕法之筋も可有之候處、無其儀内ゝ仕操而已仕、今日之首尾を合候心掛

斗ニ而、御領中難義之程少も不相厭仕形と相聞、剰有米之分茂不納ニ相成、役義第一之主意を忘却仕、甚不相應之勤方ニ候。依之重〻御叱筋可有之候得共、以御寛恕役儀召放、自分持分田畠悉被召上、遠村へ蟄居被仰付候間、相慎可罷在候。右之趣申渡候節、詰合御扶持人中幷御門番走番御玄関ニ相詰居候様申達ス。

一右之後、手代役青木与次兵衛、原弥七左衛門、門司七左衛門、書付を以申渡ス。与次兵衛、七左衛門儀は相痛居候ニ付、名代人差出候様申付。与次兵衛悴利右衛門、七左衛門悴仙介罷出。

一御領中不作打續、数ヶ年来漸〻と及困窮候處、此一両年ニ至候而は、御年貢有米之分も不納仕、不埒之次第言語同断ニ候。手代役之義ハ御領中善悪其外諸向差操之次第も能〻見聞仕罷在、殊多年之勤ニ而功者成事候得共、抑不手廻し有之候機し相見へ候節、上ミ御為且ハ御領中之難相考、不顧前後速ニ其筋可申出事ニ候。左候ハヽ、主法之仕道も可有之候処、是迄右躰之心付絶而無之、剰諸取立等法外之次第百姓共令難義候を、其儘ニ差置、大様ニ相心得、徒ニ役儀を相勤候と申ものにて、甚不届之至ニ候。依之役義差除遠慮被仰付候間、急度相慎可罷在候と之趣申渡有之。

一佑(祐)筆役緒方又右衛門、破損掛古賀磯右衛門、玄関番前川与右衛門。右者手代役青木与次兵衛、原弥七左衛門、門司七左衛門為代假役被仰付候。役柄も違候間随分心を相用廉直ニ可相勤候と之趣申渡。

一又右衛門、磯右衛門、与右衛門へ弥七左衛門〻諸帳面壱通引渡有之候段申出。

一三郷大庄屋方へ遣候面〻罷帰、諸帳面差出之。

七月九日

一御祈禱之節、在町〻樽肴差出候儀無用之段、申達有之。

（上欄の注）
自分〻〻之音物ニメ差出、実ハ初条同様之趣ニ付、如此申達之由。

七月廿日

一大小庄屋中、両町役幷一村〻頭百姓壱人、平百姓弐人宛被召寄、左之通申渡。

一村〻之毛上例切相濟候ハヽ、一村切ニ捨り高早〻書載可差出候。尤捨高相極候節、頭百姓平百姓之内立會、段取廉直ニ可仕事。

（上欄の注）
例切相濟候後、庄屋頭百姓了簡を以、其持主之親疎ニ依、勝手次第ニ捨之段取書替候趣ニ付、如此申達之由。

一例切之節、村〻依百姓共勝手而已申募、如何敷儀も有之と相聞候。已来例切之節は、其田地主は令遠慮、余人〻相例無偏頗有体可仕事。

（上欄の注）
持主之内酒肴等仕出し候者之田坪ハ、実ハ弐三之捨りニ可成も、四五之捨りニ致呉、無其儀者之田坪ハ、実ハ三四之捨り可取を、壱弐之捨ニ致候類、奸智年〻致増長候趣ニ付、此通申達之由。

一諸大名様方御通路之節幷諸家中往来之節、人馬賃銭受取候員数、書載可差出候事。

（上欄の注）
人馬賃銭受取候高、譬ハ三百目に候を百五拾匁と申成し候趣ニ付、如此申達之由。

一不作損毛之村かふり之儀、一村〻ニ〻かふり之石高早〻書載可差出候事。

一村〻欠米之儀、其欠相立候訳書載仕、御領中都合之欠米何程と書付可差出候事。

（上欄の注）
譬ハ実之欠米ハ五俵ニ候を、拾五俵弐拾俵とも申立、田高ニ掛貫立候趣ニ付、如此申達之由。

此三ヶ条は、十二月限ニ可差出候事。

右取立方、村〻之庄屋中〻百姓ともへ明白ニ不申聞候所〻、百姓共疑を生し候様ニ相聞候。庄屋中も百姓共安心仕候筋を心掛、諸事取計可申之處、是まて無其儀甚如何敷候。依之右條〻素り御物成其外諸取立高を、一村〻〻庄屋頭百姓之内埒明候者両三人宛立會吟味仕、逐一帳面一冊ニ仕立可差出候。其度毎ニ可及證印候。尤右之者共立會相極候筋、村中一統間違ニ不存と之奥書仕、勿論立會勘弁仕候庄屋頭百姓平百姓何某と書載押印を以、一村切ニ無遅滞可差出候事。

一諸取立皆濟已後、右之帳面新ニ二通りツ、仕立、一村〻〻〻可指出候。則右帳面壱ト通りハ此方へ留置、一通りハ御國へ差出候筈ニ候条、其旨を可存事。

（上欄の注）
第一後年ニ至、相緩〻不申ため一ト通りハ御國許へ差上、且ハ一村都合之現上納米何百俵之数を人〻持高ニ分て、小當り幾程之納分と、都合（脱アルカ）と小當と見通宜のため、如是申達之由、加之爰許へ留置有之一通り之帳面、地主〻〻相廻し押印仕候得は、引高と現高之品も愈以致明白候ニ付、如此取計之由。

一御年貢之儀、先格之通十一月十五日限取立目録可差出候。尤是まて之仕来まかせ、皆濟無之内にても差出候様相成居候段、如何敷候。向後ハ急度取立候上、目録可差出候。其外諸上納十二月廿日限ニ無遅滞皆濟可仕事。

（上欄の注）
當時之規格大ニ相緩〻候得共、手数事ハ名目斗にて、先例を追候而、実事ハ実ニ相躰候趣ニ付、如是申達之由。

一古法之通、村〻當り帳毎歳無懈怠可差出事。

右之條〻堅可相守候と之趣、夫〻申渡有之。

七月廿六日

一両町役弁壱町〻組頭弐人宛召寄、御書付を以申渡候は、一近年ハ郷方為仕操、両町へも先納之銀米不絶申掛、不得止毎度差出候よし、依之已前身体相應ニ手廣く商賣仕候者も、次第ニ手短成商業ニ仕成し候處〻、隣国邊〻諸品入来も少く、自然と商賣筋不手廻ニ相成、町中漸〻と相衰へ令零落候と相聞候。以前之通身体ニ應し手廣く商賣仕候儀構無之候条、無遠慮勝手次第諸商賣相勵、何卒宜成立候様随分出精可仕事。

一諸上納十二月廿日限皆濟之仕来ニ候処、近年ハ猥ニ相成如何敷候。先格之通急度取立皆濟可仕事。

一諸上納方、近年は未進多有之候段、町役共〻申出置候。此儀ハ追而不及穿鑿候事。

一町中不作法ニ相聞候。右体之者多相成候而は、不行跡成者も自然と出来、町中之風義も悪敷相成候条、不行跡筋之者相聞候ハヽ、急度可及沙汰候間、其旨を可存候事。

一旅籠宿外ニ密〻旅人を留置、勝負事仕候者間〻有之段、粗相聞候。右之族相顕候ハヽ、重ク罪ニ可申付候事。

一貧窮者、去年已来御救米願請取續居候者も有之候。町役共別而心を寄、段〻成立候様教訓可仕事。

一町公役疎ニ相心得候者有之候段相聞へ、田代町之義ハ旅人休泊之場ニ候得は、人馬之出方及遅滞、間違等有候而ハ如何敷候。人馬運送之義重キ事ニ候条、公役大様ニ無之様可相心得候事。

右之條〻相背候者於有之ハ、町役共無遠慮急度可申出と之趣、申渡有之。

七月廿九日

一村〻馬口労共弁上ケ酒差止之。

八月八日

一農隙ニ付、川〻飛石其外小道之繕仕候様、申付。

一當正月〻七月迄之入目銀差出候處、無益之入目多、其上於宗社祈禱仕候上、村〻於氏神も祈禱仕、入目夥敷如何

敷義有之候付、不致證印候。以来ハ相伺候上ニ而取行候様申付。

八月十二日

一中間走番小人武術心掛候様申付。

一御扶持人中在町出勤之節、馳走受不申様申達。

八月十七日

一風鎭祈念之義、他領掛立願被差止之。

（上欄の注）
他領之神社へ致立願候と参詣之庄屋百姓、実ハ自分ニ〻之慰ニ罷越、飲食遊興之入目ハ皆悉貫銀ニ成候ニ付、如此申達之由。

一大工木挽之義、相雇候者方へ参り作事仕候節は、精ニ入、工手間二日掛候細工一日半ニも相仕廻、成たけ御領中之差支ニ不相成様可心掛義、本意ニ候處、無其義細工方不精ニ有之、果敢取不申、工賃多く掛、一統迷惑ニ相成候段相聞候。畢竟他領之大工不入来、當所之大工斗ニ而作事仕候所ゟ、我意ニほこり勝手つくニ働候と相聞候。依之隣国邊之大工知音を以、人柄等能見聞仕候者相雇候義向後差免候。乍然切手不持越私ニ罷越候者相雇候義、堅令停止候条、已来他国之大工相雇候節ハ、右体之吟味専ニ仕、胡乱成者當所へ不留置様可仕候。右之訳ニ付、是迄之大工運上差免候と之趣、郷村両町ニ茂申渡有之。

一村〻合封役、一村ゟ組頭壱人、平百姓壱人宛立之。

（上欄の注）
當時之事情、庄屋許之諸算用を百姓共ゟ問難様子有之、不問候而ハ難知、不知候而は疑を生し、民心不穏を以、合封を立候は、畢竟村ニ御年貢蔵之戸前を、米出し入之節ニ合封仕候而、鍵ハ其年之合封之者、其家に持帰候も、実ハ其村之庄屋、米之出し入自由不仕候得は、自然と不埒も無之、且ハ庄屋許其年之諸算用に立會候得は、各熟知仕候者一年ニ弐人宛、十年にハ二十人有之、然時は諸算用不問候而、是と非と明白仕り、民心穏に成行之意を含、如此申達之由。然共年月を經候得は、近年は合封之主意村散使同様、諸上納取立之催促人と相成候而、民間ゟ立置候合封、却而民心之本意に致悖戻候品も有之由、是を以義倉

之設と相成候而、諸民之饑餓未然之備を立有之候由。

一田代町別當城右衛門、同座親傳四郎、六拾文銭壱貫目ニ而、御印請負願出申付。右之通毎歳運上申付、米穀他領出メり方之儀一切相任候間、郷村之輩潜ニ賣出不申様、厳重心を用可相勤候。尤郷方船賃米之義ハ其訳有之米筋ニ候故、無印銭他領出差免候条、其旨可相心得候と之趣申渡。

八月廿五日

一別當城右衛門、座親傳四郎、田代村メり方申付。

田代村之義近年甚及零落候付、當節庄屋不相立、大石源右衛門義住宅申渡、村中示方之義致下知候様申渡置候処、差當故障之筋有之候。依之右両人田代村メり方兼帯申付候。持役も有之苦労之事ニ候得共、随分心を用、右村へ有之候庄屋給幷仕代等を以、貧民を相救、村中成立候様可相勤候様申渡。

八月廿七日

一永吉北村給地幷仕代米、貧民へ與江候様、大庄屋惣左衛門へ申付。

永吉北村之庄屋給之義、永吉村へ附候土地故、當時其方支配申付候間、右之給地幷仕代等を以、村中之貧民に見合與之、村方連〻成立候様ニ心を用、猶又農業方出精相勵様可申付候旨申渡。

九月十一日

一中間、走番、小人共、郷村へ無心不申候様申付。

一庄屋給仕代之義、是迄譬ハ三百石之現高ニ候内ゟ、三拾石之現高を全引除、残弐百七拾石ニ仕代を掛、貫取候意味甚如何敷候条、向後ハ仕代米弐拾俵宛ニ何之村も同格ニ相極、其分取立帳ニ書之、村〻之荒高引不申様仕、大小庄屋中役料地茂百姓地同様ニ可仕候。

（上欄の注）
庄屋給仕代（以下、約三十字ほど不明）
譬ハ三百石之村ニ而半分捨り候得は、百五拾石之現高ニ相成、右高三百石之内ゟ右給地三拾石引抜候而、残弐百七拾石之内捨り

之高を引除、其残之現高ニ掛、諸成方貫立候付、小物成其外諸懸物之石高元来ハ弐ツ五歩之筈ニ候処、五ツニも相成候を三拾石ニ掛候得は、四拾五俵之仕代と相成、無筋之来を致不埒候而、百姓地面及難義候ニ付、給地も百姓地同様諸成方貫立、其代為仕代弐拾俵宛村毎ニ取立、庄屋へ遣候様此節申渡。尤大小庄屋中御用ニ付罷出候節、於御宿致食事候ハヽ、掏飯持参餓を凌候様先達申付置候得共、舊習改兼今以郷宿へ時ニ賄仕らせ、其入目貫銀ニいたし指引候趣歟ニ付、其後以了簡右弐拾俵之外ニ六俵相増貫立遣候様申付、以後臨時ニ無余義隙入有之、御宿ニ而賄を請候ハヽ、自分ニ〻ゟ飯料差出候様申達之由。

一御年貢上納米本口之義格別ニ候間、並合現高ニメ取立、其外諸小物成米は向後荒高割ニ貫立候様申付候。船賃米之義は仕来本口掛ヶ可取立候。尤上郷は試之為、先當年内ニ銘ニ蒙致し見度旨申出、則差免候趣申渡。

（上欄の注）
近年ゟ此砌迄於村ニ、兎に角捨高多く成候様心懸候を、年ニ致増長候其旨趣を尋候処、譬は水入村損毛有之候得は、上納不足之分上村取替候義、定免請合之節之約定ニ候故、捨高少キ村ニハ村蒙之取替米多数ニ割掛、捨高多キ村ニ取替米をゆるめ候抔之主法ニ付、村ニ相競捨り高之大ゟ相成候を手柄といたし候習風と相成、或ハ一坪ニ壱升五合も有前之籾を刈候節ゟ、籾之拵方ニ様ニ之奸曲を以、壱升双ハ九合八合ニもはかりなし、或ハ田坪之端しニのミ養を入レ、大凡此あたりにて捨り切可申と考候所ハ養を不入、毛上あしき様ニ作なし、又ハ一坪之内宜敷出来候所ハ悉く刈取、損毛之所を捨り切之坪ニ残置候抔人(マヽ)にも有之、天災之外好んてこと不作を巧候機相考候故、如此本口之外荒高ニ掛取立候様申達し候由、尤其後本口米其外諸品ともに悉皆荒高ニ掛貫立候主法相立。

一庄屋給地之義、密ニ他人へ預ヶ候義差止之。庄屋給田地之内、密ニ他人へ預ヶ置候族間ニ有之段風説も有之、庄屋給之義ハ永代ニ被下置候土地ニ無之、役儀之間被成下置候訳ニ候得は、不埒筋ハ決而無之筈ニ候。當節主法も御改之事ニ候故、若不届之筋有之ものニ仕候時、差返

たるにて可有之候得共、萬ニ一其儘ニ而隠置、後日吟味之相顕候ハヽ、預ヶ主ハ素り預居候者之義ハ、猶又厳科ニ可申付候条、此旨を堅可存と之趣申達有之。

一醫師外科中。
右は其術を令修練候義専一之事ニ候処、心掛薄く、剰醫師外科ハ別段之者と相心得、我儘を働、諸事放逸成仕形も有之段粗相聞候。御領中之人民ニおゐて差別ハ無之事ニ候。勿論両術之義ハ人命ニ相拘大切之家業筋ニ候得は、病苦相救候義本意ニ候条、已来は藝行出精専用立候様相勵、素り御領中御法式急度相守可申候と之趣、以書付申達。

一御領中之社人社僧、身持業作不宜利欲而已専ニ仕、神職之筋大様ニ相心得候族有之段相聞、不埒之至ニ候。自今ハ其職ニ之勤行第一ニ心掛、少も法外邪慾之仕形無之様、急度相慎可申候。

一真宗之内、新後世と相唱候義有之由、以前ゟ無之近来之異名と相聞候間、於當領右之宗旨を行候義一切令停止候。萬一已来右体之所為有之段及風聞にも候ハヽ、急度可為曲事候。

一法事之節出家相招斎非時いたし、酒事専ニ仕、終日隙取候様相聞候。法事之義ハ先祖之年回を重し吊候主意第一之事ニ候処、及大酒令醉忘候様相成候段ハ、法事之道理ニ不相叶、偏ニ遊興筋ニ相立、甚不本意候。向後ハ於在方法事致執行候節、酒事一切令停止候。尤於両町も右之格を相心得、不及酒宴様可仕候。右之趣若不埒之聞有之候ハヽ、急度可及沙汰候段申達ス。

一山方年中請払之諸帳面、此方之證印を請置候迄ニ而、算用相済候と申ニ相成、其帳面役人之宅ニ召置、年中算用承り候筋も不相立如何しく候。以来は年中請拂之目録仕立、諸帳面共ニ正月中ニ役方へ差出、則於役方算用承有之候様申達ス。

一山方甚不メりニ相聞候間、諸事厳密ニ相勤、不埒之義等

見届候ハヽ、早速案内可申出候。尤下横目共も無油断立廻、山方相替候筋見聞仕候ハヽ、此方へ直ニ申出候様申付。

一御仕立山之諸木、御用立候程之木は勿論、御領中屋敷竿之内たり共、御用ニ相立候諸木一〻遂吟味、帳面ニ仕立證印可被請候。

一山方拂物之請込代銀、役人宅へ預置候仕来如何敷候条、已来は銀銭入箱用意候而、用銀方へ預ヶ置、同役立會合封を以、右箱へ可被入置候。尤出之候節も立會相互ニ證印可被見届候。

右領趣厳重可被相守段申渡。

九月十九日

一御領中之畠、櫨植之場所ニ〆捨を付候處も有之と相聞候。櫨畠之義ハ実生し益も有之事ニ候得は、捨り付不申筈ニ候。素〆村ニ〆捨無之茂候而區〻ニ候段如何敷、假令地主之人柄違候共、土地之於差引は差別可有之事ニ無之候条、自今人柄違候共、無遠慮捨り付無之一統同様可取立候。

一櫨畠之畔迄櫨を植置候付、其脇ニ有之候余人之畠、右之櫨茂木垂ニ相成、其分捨り付不申現高ニ掛候而は、全難儀候處〆其場所も捨りを付候ニ付而、一体其村之現高相減甚如何敷候間、以来は櫨茂脇畠之木垂ニ相成差支候分は、地主〆伐除候様可仕候。若し其地主〆伐セ不申候ハヽ、地主之人柄無遠慮可申出候。見分之上伐セ候様可申付候。右之趣御領中へ可被相觸旨申達し有之。

手代中へ以書付申達。

一人民之疾苦を問尋、下情相通候様と之事。

一大小庄屋勤方、無親疎申出候(様脱カ)ニと之事。

一村廻無油断仕候様ニと之事。

一心付之義ハ不差置申出候得、當役之氣逆候事たりとも、後難不厭申出候得ハ、忠節たるへきと之事。

十月十三日

一大小庄屋中へ書付を以申達。

大小庄屋中役料地之儀、百姓地同格ニ仕、仕代米弐拾俵と相極、村中〆貫立候様申渡置候。然處大小庄屋中御用ニ付罷出候節、於郷宿飯料之義、今以郷村〆相償候と相聞候。然時は往〻如何敷所も可有之候間、今般以了簡仕代米弐拾俵外ニ六俵相増貫立候様申付候間、以来は飯料之義自分〻〻〆相償可申候。

十月廿九日

一在町諸上納品〻之當、御屋敷差出證印を受、役家百姓中出會之間之鴨居ニ張置候様申付。

(上欄の注)
元禄年並定免願請候節、此筋ニ付候而は、後年ニ至必定百姓之輩、疑心を生し候儀は可有之候、然時は諸上納之品〻之當を、其村〻之役宅之鴨居に張置候而可然と、申候老年之庄屋有之候趣を、聞傳居候者有之、當節如此申達之由。是又諸算用筋銘〻之納前不問候而自知候之手段。

一郷村病身者之外、小細工等停止申付。

一於郷村質物取候義停止申付。

一在町頼母敷講停止申付。

(上欄の注)
於在町威権有之者共、頼母敷講と称し、実は米銭之無心申掛、往〻不埒のミ出来、諸人之不勝手ニ相成候ニ付、此通申達。尤窮を賑し患難を救候義、互ニ可相勵趣申達之由。

一郷村〆上納之品〻、十日限証印を請候様申付。

(上欄の注)
此通無之候而は、上納及遅延、不埒多候ニ付為締申達之由。

一上郷大庄屋惣左衛門、養父郡大庄屋三郎左衛門へ、兼帯勤之村〆拾俵宛遣之。

一長野村庄屋次左衛門、奈良田庄屋太平次、野口金丸兼帯ニ付、向後拾石之仕代ニ極之、三拾石之割合を以、八俵弐斗弐升之内、四俵ハ其掛之庄屋へ遣之、残四俵弐斗弐升余宛之分ハ貧民救用ニ申付。

十二月廿一日

一在町へ申渡候は、

一在町役ゟ式日之礼疎略無之様ニ申達。
一小庄屋中無禮ニ無之様ニ申達。
一百姓中ゟ呉候薪疎略ニ無之様ニ申達ス。
一両町へ申達候は、
一町人布上下着勝手次第ニ候。
一町内之者無礼無之様ニ可仕候。
一諸商賣高利不貧様可仕候。
八年戊寅正月十五日
一宗門改之節、家来中へ馳走ヶ間敷事不仕様ニと之義、大小庄屋中へ申達。
一家来中示方之儀ニ付、町役及中間走番小人中へ申達。
二月朔日
一伊勢参詣仕候者、金羅(比脱)と而已申出如何敷候ニ付、已来は実情申出、且又諸上納方ハ勿論、農事之妨ニ不相成等之訳、書載差出候様申達。
廿六日
一宿村商賣仕候様申達候ニ付、両町へ以書付申渡。
近年之成行ニ付両町之義、商賣相衰候ニ依而、令困窮不手廻しニ相成、家業方大様ニいたし、徒ニ日を送り候者も有之段相聞候。素り諸商元手銀無之候而は、心之儘相成筈ニ候得共、已前ゟ商買(賣)にて身上持立候者、元手銀之貯へ有之者斗持立候と申ニも無之、貯へ無之者身体宜相成候茂数多ニ候。然は商賣之義、朝暮之無差別精を出し相働候心掛専要と相見へ、第一は身持行作人柄次第ニ候。右之心掛宜者ハ他方之諸商人も其人柄を見込情を掛、少之賣買物掛賣も致し、又買掛候者ハ其品を致賣買、代銀無滞様正道ニ令差引候ハヽ、荷主之存込念比も次第ニ相増し、勿論荷主之利益も有之事ニ候得は、掛賣之諸品段ゝ餘分ニ相成、其上米銭恩借之筋迄出来、左候ハヽ、自然と、ほそきゟふとき商賣ニも可至哉ニ候故、兎角身持専一之義ニ而、諸事心掛精を入相働候と之二ツニ相極候。能ゝ其旨を得心仕、随分相慎、無間断様出精相働可

申候。就夫宿村之義、已前商賣も有之、相應に成立候村柄ニ候条、数十ヶ年来商賣被差留候付、宿村ゟ両町へ引移候様ニ相成、漸ゝと相衰殊外零落候故、小商賣御免之義、先年ゟ願上置候訳を以、為御救當節四五ヶ年之間、御試ニ小商賣被差免候。依之両町之者之内、以前宿村繁栄致し候と申儀承傳居、此節可引移抔心附候者も間ゝ有之様相聞候。今右書載之通、心掛宜出精次第ニ候得は、不心掛者成り立候例無之、世業精心を入相働候者ハ、無益之費筋少く利益も相見へ候筈ニ而、所柄之違候とて聊身体持立可申様も無之、何方ニ居候而も出精次第身上持直し候道理當然之事ニ候を、右体之心付仕候甚不了簡ニ候得は、両町之者宿村へ引移候義ハ如何敷候条、願出候共決而不被差免候。乍然次男三男別宅を構、小商賣可心掛存寄之者ハ、可為勝手次第候。右之趣両町役人へ被申渡、町役ゟ夫ゝ申付候様申渡。
三月朔日
一牛馬拝借之義、牛馬死候跡斗に是迄借渡し候處、此節ゟ農業心懸候者へ新規願ニも可借渡と之事申達。
五月九日
一三郷両町庄屋町役給地坪ゝ吟味、八人庄屋給地之事申達。八人庄屋と唱候義ハ、享保年之記録に有之。
（上欄の注）
同年七月十日申渡趣ニ付、如是取計候也。
六月廿六日
一郷村公役米六俵ツヽに極之。
（上欄の注）
公役米之義、上郷村ゝハ一銘ニ付六俵ツヽと相極居候処、下郷養父郡之内、六俵或ハ七俵又ハ其内水屋駄賃を籠一箇ニ取立候村も有之、唯今之通ニ而は、往ゝ不宜義も可致出来機相見へ候ニ付、衆議之上、三郷一統同様ニ壱銘六俵ツヽと相極、本口駄賃之義、別段ニ差引候様申達之由、名組書付之義ハ手代中預りに成候也。
一公役米名組極之。

一水屋村駄賃銀極之員数之書付手代中方ニ有之。

（上欄の注）
水屋村駄賃村ゝ銘頭人数等御改革之砌ニ付、大小庄屋ゟ書付取之、手代中預ニ申達候由。

一村ゝ銘頭人数極之。

七月十日

一累年三郷大小庄屋両町役給地之義、内ゝ為仕操密ゝ賣拂、甚不埒相成居候と聞及候ニ付、去夏已来書付或は手代中を以も申渡置候處、段ゝ吟味相積當節以書付申渡。庄屋役料地之儀願請不申、私之相對を以卒忽ニ仕替候も有之と相聞、被宛行候土地勝手つくに内ゝ仕替は、決而如何敷可遂吟味事ニ候處、右体之分は前ゝ之通差返候抔、組相聞候ニ付不及穿鑿候。已来拂替之義令停止候。萬一為仕操密ゝ賣替候族も有之、相顯候ハヽ、其科重可申付候。夫ニ付上郷大庄屋惣左衛門、園部上村庄屋小平次役料地之義、先役徳左衛門、喜兵衛勤之内仕替候段申出、遂吟味候得は、弥依願拂替候段、留書ニ記有之、無相違候故差構無之候。且瓜生野町別當与次右衛門役料地、先ゝ別當伊平次勤之節、願出候而仕替候段申出、素賣渡之證文ニも其旨相見へ候。右仕替之義及多年、殊伊平次幷其節之請人迄も致死去、只今ニ至吟味不詳候。然共先ゝ役人願請置候主意乍荒増留書ニ書載之、全其筋無之事共不相聞候条、當節与次右衛門役料地茂仕替之分差構無之候と之趣、惣左衛門、小平次、与次右衛門、勿論大庄屋中へも手代中を以委細申達。郷村之義今程農事下知最中故、小庄屋中へは大庄屋ゟ逐一申達候様申渡。

七月十二日

一先達大雨之節、飯田村〆ノ元川筋土手既切所と相成候處、庄屋茂藤次駈付、村中百姓共を呼寄、猫伏莚藁等を取寄防候處ゟ不及破損候。然處右入目村貫銀ニ入可申哉、如何可仕哉之旨伺出候ニ付、今日衆議候は、及大破候時ハ上ゟ之御出方と相成候義ハ當然之事ニ而、川側地

主ハ格別、村中之地面ニは決而不拘事候。然を村貫銀ニ入候は其筋無之儀に相決し、依之右入目之分御普請入目ニ相立候様、茂藤次義乍役義立働候段奇持ニ付、称美申渡。

八月九日

一在町之者共、御領中之善悪賛と不存義を申觸、間ゝ妨ニ相成候義有之、依之大小庄屋両町役召寄、申渡候得と書付を以申達。

於他国ハ国中之善悪外人へハ咄等決而不仕相慎、萬一相咄不申候而不叶事たり共、加了簡猥ニ不申聞事ニ候。然處御領中之儀は隣国通行之場所と申、殊ニ市日ニは隣旦ゟ数多罷越、入交之所柄ニ候得は、外人居合候節ハ別而心を用、善悪筋咄し不申筈ニ候處、無其義候哉、隣国ニ何事も早ゥ相聞候訳を以は、何事も無考うか〳〵と外人江何事に不依相咄候と聞、甚不埒之次第ニ候。別而町方ハ専入交之事ニ候条、御領中之義ハ勿論統而無用之口外

決而仕間敷候。若後日其筋相聞候ハヽ、急度厳科可申付候。

八月廿七日

一田作足刈之義、以前穂検之節ゟ遣格ニも候歟、通行之道筋四株通程宛刈取居候由ニ聞居候處、如何之訳ニ候哉近年甚相乱、下作人我儘ニ莫太(大)ニ刈取、間ゝ不宜筋有之、一統之及難儀、畢竟御上納之差支共相成訳も候故、昨日衆義之上今日以書付申達。村ゝ例切之儀も近年之風俗と相成、午刻過ゟ取掛候故、五日ニ濟候村は十日又は十五日程ニも相濟、其後下作打合も仕候事故、尖ニ収納仕義も難叶、是又畢竟御年貢尖ニ上納仕候差支とも相成、往ゝ百姓中麦蒔付之時節も後れ候事故、已来例切相濟候村ゝハ、其節ゝ其村ゝ之庄屋ゟ案内申出候様、一統庄屋中へ申達置候得と、大庄屋中江申渡。

御領中郷村田作足刈之義、程も可有之義ニ候を無其義、是迄は下作人我儘を以猥ニ刈取、如何敷筋も有之由相聞候。依之向後は農人通行之道筋又は其田之障ニ成候場所

は、四株通刈取候様申付候間、已来其格不相乱様堅可申付候。尤自作之分も例しを切候場所ハ右之格を相守、其外不拘所は可為勝手候。

九月九日

一神邊村庄屋新右衛門儀、村方諸事之下知筋心を用、其上申渡事等速ニ取斗、役筋令精勤候と相聞候。奇持之至ニ候ニ付、称美申渡。

一御領中例切之義、前以は例之節雑用ニ取計候も有之、又は籾を賣拂、村貫銀之致差足候も有之と聞候得共、孰も多クは其節之入目ニ遣捨り候と相聞候。就夫去秋例切之節は、自分ゟ飯料用意持出、費筋無之様堅申付置候ニ付、例籾ハ失墜無之筈ニ候。然は御領中之例籾集候而は、年〻ニは不輕相聞候。素右之籾其年之村用ニ取遣候得は、夫たけ貫銀相減し、村方勝而可相成哉ニ候得共、たとへ貫銀致差足候時、繼之義ニ而、其上去年申渡候通ニ而は、已来例切之節入目筋ハ無之筈候得は、右之籾無之物と存、引除置候而も百姓之迷惑ニハ相成間敷事ニ而、凶年之時分難義之助ニ罷成、畢竟百姓中之為ニ候間、年〻別段相備置、大損毛之節用立候様ニ致置候ハヽ、一廉之備可相成事ニ候。依之當節ゟ右之籾、其郷之大庄屋方へ請込、籾之俵数一郷切ニ帳面仕立差出証印請置、厳重ニ相備可置候。取遣候節ハ可得差圖候。右備籾之義ハ手代中掛ニ申渡候間、可得其意候と之趣、以書付申達。庄屋ゟ村〻之者へも委細申論候様申渡。

右例切籾之義、其節〻聢と無之筋に取遣ィ一廉之用立候義ハ有之間敷、然は近年百姓中零落之事ニ候得は、外ニ凶年之貯ニ仕置候義可難成、依之百姓中難義之次第を深慮之上之事ニ候間、庄屋中も其所自得候而、籾取集之義随分無抜目様心を用候得、我〻儀茂掛ニ被仰付厳密下知仕候様、委細被仰渡置候。若し手抜之義有之候ハヽ、我〻迄越度相成事ニ候。誠ニ百姓中身分を繋候為之御取計候間難有奉存、聊も輕卒ニ不可存、勿論籾を以貯置候而

も永年可難貯候。當作出来之上新籾仕替候様に仕候歟、又は借廻し等之工面も可有之事ニハ候得共、右体之義ハ是迄之様子を以勤候得は、必後年其弊可有之候。依之其年〻稗ニ仕替置候様と之趣も猶又手代中ゟ達之。

九月廿四日

一去八月、他領出之穀類幷御年貢皆済不仕者、私之借銀借米拂不仕様、委細以書付も御停止被仰付置候。然共不了簡者も可有之哉ニ候得は、手代中ゟ猶又當節委細申渡候得と申達。

一他領へ米穀賣出候義幷御年貢皆濟不仕輩、私之借銀借米之拂、御定式之通屹度御停止之旨被仰付候間、在町共ニ厳重ニ御申付可有候。去八月も委細以御書付被仰渡置候通、御上納専一奉存、皆済不仕内ハ決而内借之拂不仕様、借渡し候者も其旨存、理不尽催促不仕様堅御申付可有候。

十一月四日

一芝居田地之義、當春已来醫師中へ申達置候訳ニ付、田代町醫師門司元益、飯田村高尾元沢、今町平川元隆、頃日罷出手代中迄申出候は、芝居田地之義年〻と相乱、只今之通ニ而は不埒ニ付、其筋不相立候間、當節ゟ新ニ帳面仕立、大庄屋与三兵衛、醫師中ゟ三人ツヽ年番を極、其年之餘米ニ加判仕候仕形ニ相改、其年〻之余米を年番醫師三人配當仕、施薬等不自由に無之様仕度段伺出、評(議)儀之上只今之通ニ而は不埒ニ相聞候間、當節ゟ右之田地余米等、大庄屋中年番之醫師中立會相改、余米之義ハ醫師中申出候通、薬物等相調、諸人之病苦を救候義肝要ニ心掛候様、可申達旨申渡。右芝居田地之訳ハ享保寅年申渡有之。

一右醫師三人ゟ申出候は、朝鮮人通路之節、醫者中ゟ壱人被差出候。然處我〻自分ゟかんはん等用意致し候而は難儀ニ御座候間、何卒

上ゟ御拝借被下候ハヽ、御用之義ニ候故相勤可申由申出、

合羽之儀ハ賄方へ有之候ヲ借用仕、かんはんハ新ニ出来候事故、御国へ申上候趣も如何敷候間、用銀方にて可拵と之義申達。

十二月廿日

百姓之内筋骨健なる者、他国へ罷出候者も有之候様聞候。左様之者ハ當地ニ而世業無之相候と聞候得とも、於爰許粉骨を尽し出精相勤候ハヽ、相頼候先方も不便を加へ、素り生国之事故、往〻其身之為にも可相成事候間、右体之者へは利害を申聞、農業を勧メ御領中ニ而心之及相働、随分身体持立候様、教訓可仕義専要相心得候様、去冬申付置候處、今以其〻無之様、粗相聞、如何敷候条、向後ハ壮年者相拵一切差留候。乍然病身者等ニ而於當所働難成者は、庄屋中吟味之上、切手之義願出候ハヽ、依其訳可差免候と申達。

九年己卯正月廿三日

一近年貫銀其外諸掛物等過分ニ相成、其年本作之分ニ而は上納不足ニ有之、多クハ差足を以相償、御領中難相立候得は、成立候期も不見来趣ニ相聞候ニ付、去〻年己来右体之吟味申渡、専費筋無之様仕法相立候。右之通申渡候は、畢竟御領中一統成立候形チニも相成、上下ともニ安心之筋有之候得かしと役〻心を用申事候。然處當節宿願之由にて多人数旅行之義願出候。一昨年以来御主法之次第も有之、其上作毛相應ニ出来、余力ニ茂相成候故ニ候哉、假令一両年作得有之候而も、後年豊凶之程ハ難計候故、前後相考、作益之分ハ成たけ貯置、損毛之節助饒ニ茂相成候様可仕義肝要ニ候を、右体之物入致候段如何敷候。伊勢参宮之義、遙〻旅行之事ニ候得は、往還之入目軽かるましく、失墜仕候様有之候而は氣毒成事ニ候。尤身代相應ニ有之者、老人或は女人又は大病等相煩難止立願等有之者は格別ニ候得共、當節願之人数之内ニも、今日を繰ニ渡世いたし候者共も相見へ、甚如何敷、願之通難申付候間、向後は右書載之通渡世相應ニいたし候者、

老人又は女人等旅行願出候ハヽ、吟味の上可差免候。其外何比(大)太病相煩重キ立願有之罷越度之趣、素り罷越候而も農事之差支ニ不相成、旅行跡は家内之者何某耕作方仕と之義迄、委細庄屋ゟ書付差出候様可仕候。扨亦抜参宮等之義ハ堅令停止候間、若右体之族有之候ハヽ、庄屋ゟ急度可申出候。萬一庄屋隠置、後日相顕候ハヽ、其掛之庄屋越度、可申付候と申渡。

二月廿四日

一只今農隙之内、郷村田畠畦溝筋さらへ置、用水之節不差支様ニ庄屋立廻り、下知仕候様申達。

三月十三日

一丑寅両年諸作假成ニ有之、粮米等之貯茂候而油断之筋ニ候哉、麦作手入養之心掛疎、家業之本意を怠り候者も有之由、粗相聞候。麦作之義ハ百姓第一之食物ニ候得は、専粮米を貯へ無用之費少も無之、餘分之作益を以連〻身体持立、不作之節成たけ心苦を軽メ候様、何分心掛不申候而不相叶事候處、一両年少〻作徳有之とて近年之成行を忘、當時之身勢を厭、家業大様ニ共心得候ものニ成候而は、身体持立候期無之候。去〻年以来段〻仕法申付候茂、偏ニ百姓とも成立、以前之通ニ漸〻と相成候得かしと御仁慮ニ候を令忘却、耕作かた懈怠之機し言語道断之次第ニ候。庄屋ハ其村〻〻之農長ニ候故、無油断立廻り、耕作方精ニ入候者ニは称美を加へ、不精之者ハ戒之、厳重ニ致下知候儀當然ニ候處、無其儀農長之失本意、庄屋ハ上納方取立役人と而已相心得候義有之趣ニ聞候處ゟ、右体之不覚悟も生し、役義不相應ニて甚不届之至ニ候得共、先不及沙汰候。已来役意之根元ニ心付、耕作方専心を寄、無油断下知可仕候。若緩〻之筋相聞候ハヽ、可為越度候。就夫見合を以村〻江猶又役人差廻し、作方手入養ひ大様之仕形有之候ハヽ、何某作所と申儀致吟味、遂案

内候様申渡候。猶又米作之義ハ大切之御年貢、百姓共生得家業ニおゐてハ無此上重キ事候故、皆共分(別)而精力を尽し、宜上ニも勝而出来立候様ニ可仕儀、本意ニ候處、夏作之仕形大様之者有之候を相考候而は、米作之義も夏作同様之主意ニ相心得居候者有之間敷とも難極、右様之者穏ニいたし置候而は害をなし大切之事ニ候間、根付時節前〻役人猶又無油断差廻し、地拵之致かた又は手入養之善悪為見届申筈ニ候。米作は勿論麦作共ニ可入念候。萬一両様共ニ大様之場所及案内候ハヽ、其者共義急度申付様之品可有之候条、其旨を可存候。

一園部上村甚右衛門、惣三郎、四郎兵衛、科代夫壱人前五人宛。同下村市右衛門、右同様。右ハ麦作手入養甚大様之者有之段相聞候ニ付、役人差廻し及見分候處、右之者共作所別而大様之仕形相聞不届者ニ候。依之右之通科代申付候様申渡。

四月十六日

去〻七月已来主法相立、下〻費筋等まて委〻糺候も、偏ニ百姓中身体持立候様と之御仁慮ニ候得は、銘〻倹約を第一ニ相心得、身体持立候義此節ニ候。然処宮寺ニ致参詣候得は、為土産諸品相調廣く相配、或は酒迎と申候而途中迄酒肴持越、又は其家〻に相贈候義有之由聞候。毎度以書付申渡候通、吉凶ニ付而は贈答無之候而不叶義ニハ候得共、其儀も分限ニ不似合儀は御停止被仰付置候。然を宮寺江致参詣候程之義迄も互ニ無益之贈答仕候儀如何敷候。何れ御仁恵に随ひ役〻迚も心を尽し、百姓身体持立候様下知無之候而不叶事ニ候得共、随分倹約筋可被申諭候。然なから全体吉凶之禮式無用ニ仕候得と申付候ニ而は無之、當然之義ハ分限相應ニ仕候得と下知可有候。一示方毎度以書付申渡候得共、多〻は漸〻と緩せニ相成来候。畢竟其掛之役人〻時〻相糺無之所〻終ニは事ゆるミ候。前〻〻申付有之候義は勿論、去〻年已来申渡之筋ニ猶又無油断相糺、風俗宜相成候様下知候義専要之事候。

一在町役〻之内、存寄等有之候而も人情ニ拘、或は仲間ニ對し黙止之義有之様相聞候。其役筋ニ差當候義、内〻之意味相拘、御高恩を忘却可被仕様も無之候。郷村之義ハ素油断無之、御政事等之義ニ存寄有之候ハヽ、無遠慮可被申出、其上は斟酌之差圖可致候と之趣を以、此節手代中〻申達候様申渡。

一藤木村、今泉村、真木村へ他村地主中〻助力仕候様有之度旨、大庄屋〻申出候訳ニ付、手代中〻申達候様申渡。

藤木村、今泉村、真木村之義、石盛ニ應シ候而は人少ニ候故、田畠手入養ィ疎に草荒等間〻有之段相聞候。依之先達右三ヶ村百姓之内、農事尤心掛候者共へ牛馬買用銀及粮米等、格別ニ拝借被仰付候は、偏ニ百姓身体持立候而其村〻も在付候ハヽ、御領中一統之潤ニ相成候訳も候故、御仁恵を以右之通被仰付候。然は右三ヶ村下作人中へ他村之地主中〻夫〻ニ致助力、乍此上草荒等無之様仕候ハヽ、其村之利益と申、所詮地主中之為共可相成事ニ候間、先當節ハ下作人之内兼〻耕作相働候者を相撰、一両人宛へ見合を以粮米等借渡候様被申渡、来春ニも至候ハヽ、猶又地主中〻致助力、下作人取立候様御申諭可有之候。勿論其期ニ至候ハヽ、地主〻借渡之員数等委細案内可被申出候。如是有之候ハヽ、地主之利益も可有之、且又水土之奉蒙　御恩を居候事故、地面宜相成候様可心掛儀ニ候故、委細手代中〻申渡候様申渡。尤地主中名前為致書載、且又下作之内致心得違、不法之義等仕候ハヽ、不差置案内申出候様申達候得と申達。

一藤木村高持酒井村善次、高田村恕平、今泉村高持瓜生野桂四郎、真木村安楽寺村高持藤木ノ大庄屋給、高田村八十八、右持高ハ三拾石以上吟味之上申渡。

七月廿三日

一御國御左右到来、手代中大庄屋中江御褒美被成下。黒米三俵宛、手代役古賀磯右衛門、緒方又右衛門、前川与右衛門。同弐俵宛、養父郡大庄屋市郎左衛門、下郷大庄屋

治兵衛、上郷大庄屋惣左衛門。右は御領中近年諸掛物夥敷相成、耕作方令出精、相應ニ出来立候而も、御年貢外出来多、手取之作益不相見、其上本作之分ニ而は不足ニ有之、多く銘〻差足を以庄屋方へ致差引候様有之、悉皆諸物之入目相渡、手入養等之物入、百姓共之失却ニ相成候所〻、自然と耕作方大様ニ相成候と相聞候処、御主法已来段〻令出精、殊貫銀欠米等大ニ相減候は、手代役中心を用令下知、其上郷方へも田作之手入善悪を見届、素り大庄屋中専御仕法を相守、厳密ニ令下知候ニ付、不輕銀米相減、御領中之実益、田畠持高ニ應し手取之作徳と罷成、扨又近年之御年貢上納方少茂不相滞、右両年ニは御差延米之内弐千俵取立相納候義是迄無之候処、右之面〻頭役差圖能令得心、精密ニ下知致候と相聞、奇特ニ候。依之是迄之被称勤方、為御褒美右之通被成下候。右書載之通、今度御国〻被仰付候則申渡之候条、得其意大庄屋中へも可被申渡候。

七月七日

(十)

一去寅年郷村捨付之籾幷去〻丑年大豆代米、弐匁増之分被返下候を賣拂、稗相調、長蔵へ相備置候俵数、合籾三拾三石八斗四升弐合、此米拾六石〇五升五合三匁、俵ニ〆四拾八俵弐斗壱升五合三匁、外米三拾五俵ト弐斗〇三合七匁、但宝暦七丑年大豆壱升ニ付、代米壱升〇弐匁ニ〆最初取立候處、其後米直段違却之義有之、増弐匁之分役所〻差返有之候ニ付、一統配分可仕候処、数少之米、郷村多人数へ割賦仕候義難成、依之備米之内ニ相加、都合米八拾四俵ト八升九合、此代六拾文銭壱貫三百六拾弐匁六分三厘、但俵ニ付拾六匁壱分七厘替、右代稗ニ〆弐百三拾三俵三斗〇三合五匁、但壱俵五斗入、但俵ニ付五匁八分三厘三毛。右は去寅年郷村捨付之籾幷大豆代弐匁増之米を以、稗調之相詰候処相違無之段、上郷大庄屋惣左衛門、下郷大庄屋治兵衛、養父郡大庄屋市郎左衛門、宮浦西村庄屋長左衛門、神邊村庄屋新右衛門、牛原村庄屋

武左衛門、宮浦西村頭百姓勘平、神邊村頭百姓弥左衛門、牛原村頭百姓利右衛門、連印書付を以申出、右稗不調有之、今日百四拾五俵相備、残稗之義追而可差出旨申出。

一右ニ付米穀出入之節は、御用番手代役大庄屋は順番を立、順番之大庄屋役と戸前之合封可致旨申付。但小庄屋三人幷頭百姓三人は年〻村次に庄屋百姓名印仕、米穀収蔵之所へも罷出、委細常平米穀帳ニ記置候様申達。

十二月十七日

一三郷大小庄屋幷頭百姓壱村壱人宛、両町役幷頭立候者壱人宛、御寄附江召寄、書付不申渡、前一統へ申達候様申渡候は、當年作毛之義意外之から虫生し、一昨年程之年向ニ而無之候處、乍當然之義御年貢尖ニ取立候故、御津出し毛頭滞候義無之、百姓中も出精上納仕、殊御返上米三百五拾俵、園部両村〻八拾俵相納奇特ニ候。此旨称美申渡候様手代中へ申達。「然而之後、書付を以申達候条〻。」

注、「然而……」は「基養政鑑」により補う

御領中並定免之儀、数十ヶ年ニ相成候ニ付、其節掛合之者も絶而無之、申傳を承居候者は可有之候得共、穂検免ニ而諸事不手廻ニ有之、難義仕候筋面り見聞不致候故、定免之御高恩大様心得居候と相聞候。抑穂検「免にて勝手不宜筋数多有之内にも、第一は穂検之下た見より段〻手数有之、捨穂見相済候迄は凡五十日程も隙取候内、時雨時分に相成、籾刈取日程もすくなく、刈取候ても雨に濡、こき候ても籾を干候天氣無之、」一日ニ仕舞候事ハ五日七日ニも掛、彼是にて数十日を送り候故、麦蒔付甚及延引、麦蒔之田は土地をかたかし候間も無之、雪霜降寒氣強候得は、五日ニ生し候も廿日卅日も生し兼、遅仕付候麦ハ養ひ仕間も無之、実入殊外悪敷、百姓之義専麦を以食用ニ仕、素牛馬之飼料等ニも相用候故、此損失莫大之儀ニ而難義仕、扨又毛上遅く、刈取候而も鳥獣食荒、其上雨露に晒候而は能熟候稲茂実取薄く、藁之義も性ぬ

け縄俵菰等ニも用ィ難用ニも相成、牛馬之布藁ニも不宜、家を葺候而も腐安、藁は専百姓共當用之品損失不少、勿論麦蒔之義、寒氣最中之仕付ニ相成艱難を受、其外失墜ニ相成事而已多、不手廻ニ而難義之次第、一ゝ願上多年之大願漸願請候。依之麦仕付は甚寒ニ不至前ニ慥ニ相仕廻、夫ゝニ應し諸事之手廻、勝手宜相成候義ハ、偏ニ定免之難有筋候處、穂検免持分之儀見聞不仕者共斗ニ付、農事働方諸事共ニ已前も今も辛労仕候義ハ相変申間敷と一通ニ相心得、已前皆共辛労甚敷有之たる處ニハ思付無之、大様ニ心得居候と相聞候。尤右之次第ハ御領中之銘ゝ、兼而存知之筈ニ而候得共、間ゝ不心得之者も有之様ニ相聞候故、右之趣令書載候。

注、「免にて……」は「基養政鑑」により補う。

一定免被仰付候節、若私曲邪欲之仕形相顕候ハヽ、早速穂検免ニ御直し可被成と之被仰付有之候を以而は、其節ゟ後ゝ如何敷筋も直し可申哉と、早御勘へ有之たる事と相聞候。既ニ爰許近来之成行根元何れ之筋ニ候哉、皆中能ゝ存知之前ニ候。古来定免被仰付候茂、上御損益之筋を以被仰付たるニ而は無之、偏ニ百姓共御救之ため被仰付候訳ニ候得は、農業方精を出し候ハヽ、百姓共難義不仕筈ニ候。然るを農事不精ニ有之、一旦之欲を貪、邪欲を構候様ニ共有之候而は、定免永不相續之基ニ候。若し捨付之節、庄屋頭百姓我儘を以不直筋をいたし候ハヽ、其村皆以其風俗ニ可相成、一村其風俗ニ相成候ハヽ、余村も其氣味生し、不宜筋ニハ移安もの故、統而其氣風ニ可相成義、必然之事候。然時ハ一統我増ニ捨を好、手入養ひ等も致大形、自麁業不精ニ有之候。出来不宜田畠次第ニやせ地と相成、如何邪事募候機相見へ候ハヽ、已来之難可難量候。左候時ハ、當役之皆中、兼而之下知方別而不心懸ニ相極、一統之人民ニ對し面目も無之事と申、第一は御領中之衰微、素百姓共辛勞限有之間敷、且又已前之役人、御領中之為存様ニと精力を尽し、

多年之大願成就仕らせ候実意を失ィ、彼是其筋不輕事候故、皆中ニ至而も先ゝ役人之実意を継、萬一百姓共勝手つくを申聞候は厳敷戒、或は念比ニ教訓仕、當時之人情ニ不相拘、萬事廉直ニ下知仕、御領中古風ニ帰し、専定免主意相立候様可仕候。兎角定免致永續候筋ハ、古来相極候規格之通、諸事正道ニ致と不致と之両段ニ相極候得は、其正道之仕形無之者は、国賊共可申候間、相慎可申事候。

一御領中作毛例切之義ハ、至而大切之筋ニ而次第有之事と相聞候。並定免之義ハ多年之大願ニ付、段ゝ御吟味之上、元禄十二年願之通被仰付候ニ付、其時分ハ捨切ニ罷出候面ゝ、少も私曲邪欲之仕形仕間敷と之旨を以皆共申合、於神前誓旨血判等いたし候上ニ而捨切場所へも罷出、随分直実ニ仕候と相聞候處、何之比ゟ右之古格相止、漸ゝ惰弱ニ成行、近来ハ自由取計候村も有之と相聞候。其意味甚以不審敷、依之明年ゟ例切ニ罷出候銘ゝ、実味を以其郷之宗廟歟又は其村ゝ之於神社、旧例之通屹度誓を立、厳重ニ罷出候様可仕候。右捨切之儀は、専右之筋も有之候間、村並之村ゝへは其時分ハ役人差廻し可申候。萬一私曲之仕形有之、後日其筋相顕候ハヽ、吟味之上重キ可及沙汰候条、其旨可存候。

一百姓共農事もたれ心なく随分精ニ入、手入養致耕作仕候ハヽ、土地之位悪地も漸ゝと直、作毛出来増可有之事候。其出来増は何れ之為ニ候哉、如何程出来不宜候而も、定御物成之極有、納越米迚も其定数有之事ニ候得は、永年之出来増皆以百姓之為ニ而、外之益ニハ不相成事候条、其所ヲ合点仕、随分正道之筋を以、精ニ精を入相働候ハヽ、自然と恵を得候道理にて、年ゝ作益弥増、身上成立候様可有之候。

一下モ村水入ニ而損毛仕、上ケ村ゟ合力を得候程之村ゝハ、昨年之通上ケ村庄屋立會見分可仕候。勿論上ケ村損毛も有之候ハヽ、数十ケ年来莫太(大)之取替を請居候と相聞候得

は、実情を以下〻村〻致返弁、何れ上下共ニ不及難義様、庄屋頭百姓立会見分仕相極可申候。

一村ニ依、近来検見と申、假令ハ一段之内、二三歩程毛上を立置、余は刈取、麦辛子等を早仕付候義、前方有之たると相聞候。此儀正道之筋にて決而無之、邪事之仕形ニ候得は、御領中之人民存念をも可恥入之事ニ候處、人口を不相憚、我儘之致方言語道断之族ニ而、人民之風俗を害、甚不届之至ニ候。已来萬一右体之筋有之候ハヽ、吟味之上重く可申付候。

一田竿弐畝〻以上延畝坪ニは、捨を切不申儀、定免之規格と相聞候處、是以近来緩せニ有之たると相聞候。急度古法之通可仕、借又草あらし之田ニは、捨を切申間敷候事。

一御領中之義ハ定免願請居候事故、右条〻之次第及差圖間敷事候得共、段〻書述候通定免之儀、数十ヶ年ニ相成候ニ付、精力を尽し願請候役人は絶而無之、規格漸〻と緩ミ、近来ニ至候而は猶又不心得之者も多相聞、歎ヶ敷事ニ候。然時は後患難量、其所至而不便存、何卒定免之格合令自得、皆中古風ニ帰候様厳密ニ下知仕、幾久敷被行候様有之度存念を以、右之通申付候条、右之次第得心可仕候。尤此書付之趣、庄屋町役中写之、百姓共へ相渡、皆共令熟得堅相守候様可仕候。

十年庚辰四月三日

一瓜生野町貧民家修理御加被下、手代役破損掛〻見分申付。

十月廿日

一他国之商人諸品を持越、在〻へ持出し致商賣候段相聞候。他國之諸商人在〻へ召置候儀は素り、両町ニ来り一夜之宿も夜入候ハヽ宿〻外不出、若用事有之人〻他行いたし候ハヽ、宿主〻案内者を付候様ニと之義、厳敷申渡有之事候處、其吟味疎ニ有之、剰在〻へ勝手次第徘徊、為致商売候段、甚不埒之次第ニ候。旅人在〻へ罷越致諸商候様有之候而は、不相調候而も當用不差支品迄も、出穀宛ニ相調候様ニ相成、押詰在方之為ニ不相成、第一は両町

之諸商人、売買之差支甚敷候条、已来は旅人在〻罷越候義堅令停止候。若於両町数日留置、在〻江諸商為仕候段相聞候ハヽ、厳敷可申付候間、此旨を相心得、密〻相背候者有之候哉、御領中之商人共相互に吟味仕、右体之族有之候ハヽ、早速可申出候。尤在〻ニおゐて他国之商人相見候ハヽ、何方へ宿仕居候哉と役人中令吟味、勿論宿無之罷候者は猶又急速差返、其旨此方へ可相届候。

十一年辛巳正月十二日

一親ハ慈にして能子を教へ、家業無懈怠常ニ倹約を守り、家田畠を子共ニ譲り、子孫繁栄仕候者。

一親に和順能つかへ孝行なる者。

一主人は情あつく、能下男下女を召遣ィ、下男下女ハ真実にして能主人之下知を請、奉公仕候者。

一夫ハ常ニ行規たゝしくして女房を召遣ィ、女房ハ柔順ニして、たゝしく夫につかへ候者。

一兄は能弟を愛し、弟ハ能兄を敬ひ、和順に有之者。

一姑婦能和柔なる者。

一郷村は農業、町方ハ商買ニ精を出し、常ニ倹約にして身体持立貧窮を救候者。其外諸人不慮之難義を救候者。

右之通之者、有之候ハヽ、其次第帳面ニ書載、當十八日切ニ差出、勿論平日不和之者たりとも、右善事たに有之候ハヽ、無疎意申出候様、申達候得と手代中へ申渡。

十五日

第一之存知をいたし、或ハねちとやら申義取行候者も有之様、粗相聞候。右之筋ハ博奕同前と相見、御領中之害甚敷候故、已来堅〻令停止候。萬一不相守族相顕候ハヽ、曲事可申付候。右之趣在町役人へ相達、掛〻之者へ厳重申付、若相背候者於有之は、早〻申出候様申達候得と申渡。

（上欄の注）
第一ととなへ、仕形之替り候迄ニ而、実ハ博奕同然と申内、第

一ハ壱を以十を得、十を以百を得候仕形ニ候得は、貧民程楽安く、或ハ家具農具迄も沽却いたし、或ハ借銭相湊欠落いたし候類も間ニハ有之、又ハ女わらべといへとも相携、惣而之害ハ却而博奕ゟも甚敷候ニ付、於御領中興行之義ハ必至度被差止候得共、隣旦ニも所ニ興行有之、右之取次といたし候者を存と唱へ、人ニすゝめ賣ありき候ニ付、御領中のミ停止被仰付候而も、存有之候而ハ密ニ相携候者多く、衰微深害之基本ニ候故、存いたし候者ハ勿論、相携候者無之様制止有之候。尤第一之起り候義、元来富突と申物有之、其枝葉ゟ生し候者ニ而、害深候付、後年ニ至、第一ハ素り之義、富突迚も永く興行無之様と之含を以、別而此義厳禁有之候由。

一於在町耕作之働難叶年比之者、又は作所を不相抱、或は病身ニ有之、何れ農業之経営筋無之者、藁抔賣致渡世候儀不得止事候。然處壮年者之内、農事を大形ニいたし、賣薬等之骨折ニ無之渡世筋之見眞似を仕候族も有之様、粗相聞候。幸に達者に生付、殊ニ壮年ニも有之上ハ、百姓之家業を専可仕之処、生得之家業を忘レ、辛労ニ無之

渡世方を相好候段、甚不埒之所存ニ候。依之向後ハ病身者、扨は耕作かたニ難叶年比之者ハ格別、其外之者右体之義ニ携候義、一切差留候条堅可相守候。村ゝ之者へ厳重ニ申付、若不相用族も有之候ハヽ早速申出候様、大小庄屋中へ委細可被申渡之旨、手代中へ申渡。

十八日

一常平米穀之儀、去寅九月申渡置候。然處丑年已来之作毛ニ比へ候得は、去辰年之儀ハ不作と相聞、夫たけ可及難義候。依之辰年例切籾之分ハ百姓へ可渡哉、又ハ右籾を與へ耕作人ニ而も可仕立哉、何れとも宜方可申付候間、得と申談候様、手代中へ申達候処、手代中申出候は、右之通申付時、其益無之と申ニ而無之候得共、右常平米穀之義ハ凶年之備ニ被仰付置たる事ニ候得は、御備之俵数も年ゝ相増候様有之度、乍恐御時勢も御違被為遊、次ニは百姓中之貯も定而有之間敷候得共、若萬ゝ一凶年と申儀も有之候ハヽ、一統及餓死可申、乍恐御下知も被為届

間敷、其上海山隔居候儀候得は、御往復之間も有之、當役之心ニ難任儀も乍憚可有御座、如此之節一統ニ御渡被下候ハヽ、只今之稗へハ金玉ゟも難有可奉存候と之義ニ付、其理有之事候、如何様一郷ニ一両人位を仕立候而は、一統百姓中之心行も往ゝ如何可有之哉、弥評議之通ニ可仕旨申達。

十九日

一宗門改例年之通壁書読聞せ、其末改之席毎ニ佐役儀左衛門ゟ口達申渡。其後其面ゝ呼出並居候上、手代役を以、称美之書付夫ゝニ為申渡。一統申渡候上、壱人ツヽ膝下ニ召寄、扇子弐本宛遣之、扇子之義ハ直ニ渡之。口達之節は次之間ニ出浮、諸般後共同然。

一口達之大意。宗門改之義、切支丹ハ素り邪宗門共ニ天下之重キ御法度ニ付、厳敷御吟味被仰付候御事ニ候間、堅相守、若し疑敷筋見聞仕候ハヽ、誰ニよらす早速可申出候。勿論在町之役人ハ、聊も無油断厳重ニ吟味可仕候。

萬一緩ニ仕置候段相聞候ハヽ、役人可為越度候。

一是ゟ後申聞候次第ハ、去丑年已来以書付中渡置たる筋ニ候得共、村ニ依末ゝ之者不落着ニ有之様ニ相聞候。其不落着ニ有之候は、畢竟庄屋之申付緩ニ有之候歟、又は申聞様之不詳故ニ而も候哉、申渡之次第末ゝ迄不貫様ニ致し候は、庄屋不念大様之筋と存候得共、先當節は其沙汰ニ不及候。依之前方段ゝ申渡候内、心得第一之儀を一通り只今為申聞候。御法式之義は、不依何事堅相守候様可仕候。

一並定免之義は、只今壁書ニ読聞せ候通、大小庄屋頭百姓邪欲私曲之仕形相顕候ハヽ、役人罪科ニ被仰付、元之穂検免ニ御直し可被成と之御事被仰渡置たるを以而は、定免之難有次第忘却候ハヽ、邪欲私曲之仕形茂生し可申儀と、其節ゟ相見居候事と相聞候。然は定免永續之根元ハ、定免ニ相成候節之法式を大小庄屋頭百姓能ゝ得心仕罷在、百姓共へも合点仕候様、不絶申聞せ、不所存之者無

之様、随分心を用可申事ニ候。定免致永續候法式と申は、外之儀ニ而も無之、耕作方随分精を出し、能出来立せ、諸納物大切ニ存、少も邪成義不仕、何事茂正道ニ致スとたに心掛候得は、定免之主意ニ相叶候条、其通ニ相心得可申候。

一兼ゝ申渡候通、庄屋ハ取立役人と斗存候而は甚心得違ニ候。其村之農長ニ候得は、農業無油断心掛、百姓共耕作方心掛宜者へは称美を成し、不精之者ハ呵之、又は教をいたし、何レ作かた之心掛委ク相成、一統令出精、悪地も自然と上地ニ成候ことく下知仕候義、農長之本意ニ候。其通無之候而は農長と難申、其村之作物不出来有之候は、庄屋之下知大様之故と相聞候間、随分心を用、村中之者耕作精を出候様下知第一ニ候。尤組頭百姓儀も同前可相心得候。

一貫銀筋之儀、何程之入目有之候間、此分ハ貫立可致との儀、兼而村中之者へ相知せ、此分ハ其上ニ而取行可申之処無其儀、合封組頭等之立會にて相極候村も有之様、粗相聞候。一体之貫銀は郷村ニ相拘候物入之事故、一統へ申聞候而不叶事候を、合封組頭等之内へ申談、貫立候段ハ甚如何敷、素り百姓共疑を成し可申事ニ候間、向後はたとへ軽キ出かた筋之義たりとも村中へ申聞、一統内意仕候上、取計候様可仕候。

一百姓之義、横道之仕形不致候而、耕作方一筋ニ傾キ精を入、諸作共ニ宜出来立せ候事、生得之家業ニ而、分ヶ而大切ニ可入念は田作ニ候。其子細は

御領主ゟ土地を百姓中へ分ヶ被與、耕作被仰付、御年貢を相納させらるゝ訳候故、手入養宜上ニも宜敷致し出来立せ、御年貢たに相納候得は、其餘ハ精次第作益を以、親妻を育申事何之御蔭候哉、皆以御領主之御高恩ニ候。其水土之御高恩を令忘却、邪欲私欲之仕形を致し、當時其益相見候共、正道之仕形ニ無之候故冥利を失ひ、押詰身分之害も生し候義面りニ候。ものニたとへて申さハ、

朝夕水を遣候所相用候木、水ニ入よわき木を遣置候而は、間もなく腐れ損し、又水に入強キ木を相用候時ハ、くされ遅ク候。然共不絶水掛候故、終ニは腐れ損し候。人も其ことく運之強キ者ハ邪欲をいたし候而茂、水ニ入つよき木と同然ニ而、暫ハ其罰不相見候得共、邪欲つのり候時は其罰有之、素り運之弱き者ハ邪事をなし候得は、水ニ入よわき木と同前故、間もなく其罰有之、運之強きと之違にて、止ル所は身上之潰と相成申義、天地之道理ニ候条、何事茂正道之筋ニ引入、専農業而已ニ心を寄候儀、百姓生得之仕業ニ候。古ゟ申傳ニ積善之家有余慶、積悪之家有餘殃と申事有之候。其積善之家有余慶と申ハ、邪成事少も不致、萬事真直にいたし事積る時は天道ニ通し、其家慶事余事と申し、扨又積悪之家ニ有余殃と申ハ、上ミを不恐邪欲私欲而已をいたし、道を道ニ不致、諸事直キニ無之仕形積る時ハ、冥利を失ひ、其家有餘殃と申事候得は、天道之照覧可恐事ニ候。能ゝ相慎可申候。

二月二日

一田代町平七、吉兵衛、牛原村平九郎、神邊村貞右衛門。右之者共兼而不行跡ニ有之、其上毎度停止申付置候第一之存仕居候段相聞、入牢申付候。委細追而吟味可申付と之儀、上使屋江召出申渡。

三月廿九日

一牛原養父蔵上宿村之者共、牛を索、一昨日川内山ニ而生木を伐居候を、河内村庄屋弥左衛門ゟ源右衛門を以案内申出。山方〆之儀ハ兼而稠敷申付儀候處、御法相背候段不届之至ニ付、申付様之次第も可有之候得共、以宥恕先縄下ニ申付、村ゝニ預、組合之者共ゟ番仕らせ置候得。川内山之義　上之御為而已ならす、下ゝ迄重寶と申義にて、前ゝゟ御法御定被置たる訳も有之候得は、右之通申付置、追而如何様共可申付旨申達。縄下ニ申付置而ゝ、牛原村清兵衛、浅右衛門、傳右衛門家来又吉、久右衛門家来平七、忠蔵、喜右衛門家来又五郎、養父村源四郎、

平兵衛、蔵上村茂右衛門、宿村仙太、弥助、茂右衛門、六内、源太郎、甚蔵、惣左衛門、右之通ニ候也。尤縄不足ニ有之候ニ付、其分ハ手錠請入させ被成、錠鑰無之も候ニ付、御目付役ゟ封をいたし置候様被仰付、縄下タ之者共も手錠ニ不及候事。

一右ニ付、何れ可及夜陰候故、提灯之儀御賄方へ申達、小人ニ為持遣之候也。

七月二日

一御本役、田嶋左近右衛門在勤

一御扶持人之内、又は中間、走番、小人、武術稽古仕居候処、壱ヶ年ニ油三升宛、内ゝ了簡を以申付候。已後猶又相勵稽古仕候様可申付旨申渡。

八月十日

一酒井東村庄屋平右衛門、水屋村庄屋藤兵衛、高田村庄屋十郎左衛門、眞木村庄屋半兵衛。右は下モ村田作之内、草荒し又ハ手入方甚大様之所柄相聞候ニ付、科料申付或は壱通り相呵候面付、別紙之通ニ候。田作之義ハ数度致手入候程、夫ニ應し出来立宜敷有之段は、皆共別而能存知罷在事ニ候間、手入方大様之者は厳敷申付。草を為取、若ハ所之作人當病差合等も有之候ハヽ、草除之義ハ時節も有之事ニ候故、吟味之上取計様之仕道も可有之、何れ草荒ニ不相成様ニ心を用候義、定免之本意ニ候處、其心付も無之と相聞、草荒し其儘ニ致し置候段、甚下知大様ニ相聞候。已来心を用無抜目下知仕、萬一差圖を不相用、手入かた麁略仕候者も有之候ハヽ、早速可申出候。

一酒井東村六平、水屋村善作、喜平次、高田村九介、甚四郎。右は田作手入善悪為見届、頃日役人差廻候處、右之者共持分之田作草高ニ有之、不手入と相聞候。田作之義ハ数度草を取除候程、出来も宜敷候処、不手入ニ有之、甚不届者ニ候。以来右体之義無之様出精仕、耕作方屹度相勵可申候。

一科代夫五人宛、水屋村喜右衛門、高田村賀右衛門、同村

下作人孫四郎、安楽寺村与三右衛門。右は自作下作之田地、頃日役人差越手入方見分有之候処、草荒しと相聞候。田作之義ハ、草を数度取除候程宜出来候義ハ、皆共能存罷在なから、手入大様ニ而捨置候段、百姓之失実意候而已ならす、其底意如何敷相聞、甚不届者ニ候。依之右之通科料申付候。已来耕作方随分可相勵候。

十二月廿六日

一米壱俵、田代町彦左衛門。右は坂越年賦申延之義ニ付、島村弥次右衛門へ相附、佐賀江罷越令苦労、其上船賃銀等之義も致心遣候ニ付、右之通為称美被成下候。

一米弐俵、上郷大庄屋惣左衛門。同壱俵、神邊村庄屋新右衛門。右両人御用筋申渡候度毎ニ真実ニ相守、下知筋尖ニ夫ゝニ取行、其上平日役義専心を用候と相聞、奇特之至ニ候。依之為称美、右之通拝領申付候。

一米壱俵宛、園部上村庄屋小平次、同下村庄屋覚右衛門。右は當年御国渡之俵数、数少ニ付而船仕出引續急成事候処、無滞津出仕、諸上納共ニ尖ニ皆済、甚致心遣候。依之為称美、右之通拝領申付候。

日記抜書

陸

従寶暦十二壬午至明和八辛卯

寶暦十二壬午年正月晦日

一自丁丑年以来宗門於改之席、馳走之設無之様ニ申付、唯今に至其通ニ候處、郷村ニ依而ハ諸用入目、老若人別ニ銭壱文或ハ弐文三文之間を以貫立候と相聞候。然時ハ民間之費を厭候主意ニ相違仕、往〻如何様之筋も出来可申哉ニ候故、先此節迄ハ手代中〻差留候様仕度之趣申出、其通取計有之候得と申達。

二月四日

一川筋普請仕方、手代中〻書付を以存寄申出。郷村川筋御普請所入用之杭小竹之儀、是迄ハ山付村〻之者伐出し、上郷は中隈秋光小倉、下郷ハ大田(マヽ)、養父郡ハ宿村へ持出し、相應之者ニ預ヶ置、其村〻郷普請之節ハ御普請所ニ召仕候人数之内〻取寄させ候而相用、又ハ前廣(廉カ)ニ致様ニ仕取寄有之候處、右五ヶ所之預主　上〻御見合被成下ニ而も無御座、郷村〻遣し候手筋ニ而も無之(候脱)。然共御普請有之候村〻〻杭竹請取ニ参候得は、農業之働を相止メ、立會候而夫〻ニ吟味仕、杭竹相渡候。此節専御普請被仰付御事候故、破損掛山廻役〻立會候而相渡候儀も難成、村〻〻ハ多人数来候得は、折節は不埒之儀茂可有之、又ハ預ヶ置候所〆り無之所も有之候得ハ、いつとなくニ紛失之杭有之、扨又外ニ召置候儀ニ御座候故、残杭梅雨後ニ成候得は、久敷雨露ニ晒れ候故、其後用候而茂夫たけ御普請所之弱と可相成、彼是之儀を勘弁仕候ニ、顕ニハ不相見候得共、何れ往〻御失墜之筋も可有御座哉と、乍恐奉存候。自是之後ハ、右五ヶ所〻村別ニ致数を相極、杭竹伐出し候砌不差置、山付或ハ里村之者江申付、村〻庄屋方江為持運、其

村庄屋〻破損掛申江杭竹紫(榮)朶之員数預之手形為差出、杭竹木雨露ニ晒不申様、為相囲候様被仰付候ハヽ、杭竹等紛失又ハ晒れ損候儀茂有之間敷と衆議仕候。

一右之通被仰付候時、五ヶ所之預所〻村〻庄屋方迄之運賃銀、扨又杭竹枯候後村〻江取寄候得ハ、三本持壱荷は五本持又ハ六七本茂持候様相成、夫たけ賃銀減候故、自今之以後伐出し候生シキ杭竹を早速庄屋方江持運セ候様仕候得は、三本持壱荷ハ三本持〻外ニ持セ候儀難叶、五本持共ニ同前之理ニ御座候。差當候而は右村〻庄屋方迄持運候賃銀と、杭竹枯候而壱荷は弐荷も増居候賃銀之減し無之、御出方相増候様聞江候得共、是迄之通仕候得は、前条ニ書載仕候通ニ顕ニ不相見御失墜其程難計奉存候。庄屋方迄之運賃銀之儀茂大イ成御普請所有之節ハ前廣(廉カ)ニは依可申候得共、普請夫之内〻運候様仕候得は、縦令ハ姫方村〻大田(マヽ)迄杭為運ニ参候間茂朝之内江可致、水屋村〻参候間も右同然ニ而、いかに調敷申付候而も多人数を使候儀故、下知難届折節も可有之哉と奉存候。然故顕ニハ相知間敷候得ハ、伐出候杭竹早速村〻庄屋方迄為相運、庄屋江慥ニ預ヶ置、枯候而三本持六本持候半〻素り壱荷と相極候儀ニ候得は、三本持を為持運、兎角空ニ杭竹之紛失不埒無之様ニ仕、御普請所も十年損不申所は拾五年茂損不申様有之、拾五人ニ而一日ニ相仕舞候御普請所ハ、拾人ニ而相濟候様有之候方、乍恐　御為可宜と評議仕候。

一杭竹之儀いつとなく漸〻小〻罷成、所ニ〻弐本持壱荷は、三四本持も荷イ候様ニ有之、三本持五本持共ニ同然ニ而竹ともニ夫ニ準し候。素壱人ニ而杭三本を荷候故、三本を壱荷と御極被成たるニて可有御座候所、三本持六本荷イ候様有之候得ハ、則六本持壱荷ニ而御座候。然ハ伐賃

銀ハ以前と同様有候處、杭竹儀ハ小く相成、其分御普請も損し易く可有之哉、杭竹伐出候者難儀ニは可存候得共、古法之通杭竹伐候而、往〻麁略無之様被仰渡度衆議仕候。右は是迄之致方を勘弁仕、我〻申乍愚意衆議仕候趣、不弁之我〻口上ニ而は御聞分被下候様難申上、乍恐書載仕奉入御披見候。却而不宜儀多ク可有御座と奉存候得共、先般被仰付候御旨も御座候故、不顧思召如斯御座候。尤杭竹伐出し之場所ゟ村〻江之運數、杭竹(柴)朶之寸尺等、向後間違為不仕、別紙ニ書載仕候。

二月七日

一去年改之節、一村ゟ弐三人宛召出、御書付を以称美申付。其節宿村養父村は、庄屋ゟ之申出及延引候而、称美無之、真木村高田村水屋村ハ様子有之称美不申付、是を以当節称美申渡。

一養父村傳九郎。右之者平素行跡宜、猶且農事之心掛能、朝夕出精仕候段聞届、神妙之至ニ候。依之令称美候。猶又御法式無油断相守、身体持立候様可仕候。

一宿村次介。右之者平日行跡宜、家内江茂睦敷、素り耕作方心掛能相働候処、去ル寅年ゟ別家ニ相成、假成ニ相暮候由聞届奇特之至ニ候。依之令称美候。弥御法式之旨相守、農業出精身体持立候様可仕候。

一真木村治平次。右之者正直ニ有之、母兄を敬ひ家内睦敷、素り耕作方出精仕候段聞届、奇特之至ニ候。依之令称美候。随分御法式之通相守、猶又母兄江愛敬いたし、身体持立候様可仕候。

一同村喜三左衛門女房。右之者舅姑を敬ひ、夫ニ和順ニ有之、素女事ニ勝レ其上農事方ニ心掛、夫を相助ヶ候段聞届、弥重奇特之至ニ候。依之令称美候。弥不怠相勤、身体等持立候様ニ可仕候。

一高田村利左衛門。右之者貧窮者ニ而下作一偏之渡世仕候処、人柄宜家内江茂睦敷、耕作方心掛宜、勝而相働候段聞届、奇特之至ニ候。依之令称美候。随分候法式相守、

農事不怠弥令出精身体持立、少〻ニ而も田畠を求候様可心掛候。

一同村幸八。右之者實体ニ有之、母江能つかへ、家内病人打續、不慮之物入等有之候故身体相害候得共、耕作方心掛能、別而相働候ニ付、假成ニ相暮候由聞届候。神妙之至ニ候。依之令称美候。弥農事出精御法式相守、身体持立候様可仕候。

一同村文吉。右之者實体ニ有之、両親ニ能つかへ兄弟江茂睦敷有之、父数ヶ年相煩居、兄弟茂病身ニ有之、渡世方難儀仕候得共、耕作方勝レ而相働候故、假成ニ相暮候趣聞届奇特之至ニ候。依之令称美候。猶又親兄弟江も愛敬を致し、身体持立候様可仕候。

一水屋村吉平。右之者實体ニ有之、両親江能つかへ、素耕作方心掛能、勝而相働候由聞届、弥重奇特之至ニ候。依之令称美。猶又両親ニ不怠相勤、農事出精身体持立候様可仕候。

一同村幸介。右は貧窮者ニ而下作一篇之渡世仕り、人柄宜、家内江も睦敷、平居耕作方ニ心掛、能相働候段聞届、神妙之至ニ候。弥相働御法式之旨相守、身体持立、少ニ而も田畠を求候様可仕候。

一右之者共猶改之席召出、称美之書付夫〻ニ申渡、扇子弐本宛遣之。

二月廿六日

一御領中ニ他国ゟ酒間〻入来候由粗相聞、他領酒入来候儀ハ堅制禁之筋ニ候処、右体之者相顕候ハヽ、急度可申付候間、在町人〻江稠敷申渡候得。猶又他領境目之村〻ゟ、萬一他領酒決而相調不申様、是又稠敷申渡置候得と、三郷大庄屋両町役江申渡。

三月朔日

一目付中、役隙之節郷村立廻、麦作手入且又御政事方之義間違之儀も有之歟、或は人柄善悪等之義迄心を用承之、案内申出候様申渡。

四月七日

一手代中ゟ申出、三郷江申觸候廻状。郷村ニゟ賣薬を以渡世仕候者有之候處、不精之者ハ耕作を相止、賣薬を以家事と仕、農業之本意を取失ひ候と相聞候ニ付、既ニ小倉村順右衛門儀は賣薬被差止、文治仲四郎儀ハ瓜生野町江出、賣薬仕候様被仰付。依村〻右体百姓農作之妨ニ相成候儀は差止候と之御事ニ候間、両町ニ居住仕商賣仕候ハ、格別、郷村農人之内賣薬之者ハ御差止可有之候。尤病身者等無餘儀次第も候ハヽ、其訳可被申出候。

閏四月四日

一小倉村百姓風儀不宜、農業方不精有之候と聞届候ニ付、庄屋組頭平百姓都合拾三人、御廣間之露地ニ召出、委細申諭。

五月七日

一手代中ゟ申出、郷村江之廻状。旱打續干田多ク苗代所も水無之、甚心遣之様子、相聞候ニ付、各一統油断ハ無之儀と存候得共、作所江被立廻、頭百姓は勿論其外共ニ罷出候而、成たけ用水之下知可有之様ニ可申達旨被仰付候間、猶又無油断立廻、其村〻下知有之候様、庄屋中江も能〻御申達可有候。

一数日日和打續候間、在町共ニ家別火用心之儀、油断不仕候様御申達可有候。

五月十六日

一神邊村庄屋新右衛門申出候は、此間ゟ之旱ニ而、神邊村分ニ拾壱町余根付不相成田坪有之、段〻時節後ニ罷成心遣千萬ニ御座候。此上雨を待、根付仕候而ハ、甚延引ニ相成候ニ付、村上之井手〻〻及いかり等之水を落、只今迄根付不相成場所、根付為仕度奉存候得共、百姓中植付置候田干田ニ相成候事故、難渋仕不任所存候。植付置候田ハ五六日干田ニ相成候共、強キ病ニも到り申間敷哉、水上ゟ之水を下し、先壱通根付為相仕舞候様と之御下知被仰下候ハヽ、百姓中も納得可仕候。其上大庄屋も罷出、

水筋の下知仕候様被仰付被下候様と之趣、手代中ゟ申出、新右衛門氣付尤ニ相聞、弥其通取行候へ。大庄屋は勿論目付中も可差出候間、其旨申渡候得と申達。

一神邊村庄屋新右衛門申出候趣を以ハ、余村迚も右之致方可有之候間、三郷大庄屋及一郷ゟ功者之庄屋壱人宛召寄申談度之趣、手代中ゟ申出、其通申談可宜候間、其通仕候様申達。

一右ニ付下郷大庄屋治兵衛、上郷大庄屋惣左衛門、鳥栖村庄屋正五郎、奈良田村庄屋太平次、神邊村庄屋新右衛門召寄、頃日ゟ旱打續根付不相成田坪過分ニ有之、甚心遣候。然は新右衛門申出候通を以相勘候而は、何之村も水下し之仕道可有之哉ニ候故、皆中存寄之筋茂可有之候間、心付之儀ハ申出候様申達候処、大庄屋申出候ハ、一昨日曽根崎村老松宮江参籠仕候節申談候は、城戸村井手水を小倉村江下し、宮浦西村井手水を同東村江下し、園部上村水を同下村江下し、根付不相成場所何とそ為相仕舞申筈ニ申談置候。下郷之儀、神邊村上之井手水を落し同村池田分ニ下し、其後田代村後田前田分ニ下し、養父郡は、牛原村水を養父村宿村江下し、蔵上村井手水ハ末水勢強有之候ニ付、村中之植田ニ水を掛不申候而根付不成所江水を下し、相仕舞申筈ニ談置候。其郷大小庄屋罷出水筋之下知仕事候へ共、養父郡之儀ハ大庄屋市郎左衛門相痛居候ニ付、御目付被差出被下候様申出候其趣申出候付、大庄屋中心遣之通仕、少ニ而も根付相濟候様下知可仕候。目付中儀ハ可差出候間、其旨大庄屋中江申渡候様申達。

五月廿九日

一旱打續、村〻根付不成田多有之、下も村之儀別而根付難成、既ニ昨日ゟ土用ニ入、段〻時節相後候得共、根付仕候程之雨無之、藤木村今泉村飯田村酒井村之儀、水掛所纔計根付仕候、其外真木村高田村水屋村ハ全根付無之、甚心遣之年向ニ候処、昨夜ゟ之雨ニ而川水も少ハ可相

増、上村之内根付無之田ハ降下候雨ニ而根付、干候田茂根しめり可仕候故、今日は郷村江罷出、水足見分之上、上ケ村ゟ川水を下し、根付不成田多有之候村江成たけ根付仕セ度、右之次第手代中ゟ申出、心付尤ニ付、早〻罷出宜取計候得と申達。

一緒方又右衛門、走番藤太召連、藤木村江罷出。右ハ鳥栖村井手水を下し、根付之下知仕候。前川彦右衛門、走番稲右衛門召連、酒井村江罷出。門司郡兵衛、今泉村真木村江罷出。牛原村川水を下し根付為仕、此次第委細申含、鳥栖村庄屋正五郎牛原村江差越ス。原岡与兵衛高田村江罷出。原文次郎水屋村江罷出。緒方喜内安楽寺村江罷出候處、用水無之根付難成候故、真木村江罷越ス。永見文左衛門儀ハ園部川筋為水足見計之、中間入右衛門召連罷登。

六月四日

米三俵、緒方又右衛門、前川彦右衛門。右は旱打續田根付難相成所数多有之候ニ付、致憂慮居候折節、去月廿九日雨降り候ニ付、早速郷方江罷出大小庄屋之内申談、水下し方ハ素り、根付方甚致心遣、不圖餘程之町数為致根付候ハ、偏ニ右両人心配宜故と奇特之至ニ候。尤廿九日ゟ去ル二日迄之間、昼夜之骨折不大形苦労之段相察候、依之右之通為御褒美被成下候。

米七俵、永見文左衛門、門司郡兵衛、原岡与三兵衛、岩谷三左衛門、青木利右衛門、原文次郎、緒方喜内。右は旱打續、下モ村之儀取分田根付難成、百姓共及難儀候處、去月廿九日雨降候ゟ、差圖之旨ニ付郷方江罷出、川上ミゟ水を下し、夜白相詰、下モ村江心之及、田根付仕らセ候段、別而苦労之事ニ候、依之右之通為御褒美被成下候。

一米弐斗弐升、大石源右衛門。右同断之次第ニ而川水下し方令心遣候ニ付、右之通御褒美被成下候。

一米壱俵。中間喜平次、倉右衛門。同壱斗壱升、小人茂平次。右ハ旱打續下モ村之儀、取分田根付難成難儀仕候処、

役中下知を請、川水を下し、下モ村成たけ根付仕候ニ付而ハ夜白相働令骨折候。依之右之通為御褒美被成下候。

一米壱俵、走番藤太、稲右衛門。同壱俵、小人善蔵、依右衛門、次左衛門。右は旱打續、下モ村之儀配分田根付難成、難儀仕候処、役中下知を請、川水を下し、下モ村江成たけ根付仕らせ候付而ハ、夜白相働令骨折候。依之右之通為御褒美被成下候。

六月五日

銀三両宛、下郷大庄屋治兵衛、上郷大庄屋惣左衛門。同三両、神邊村庄屋新右衛門。右は旱打續、下モ村之儀取分田根付難成、百姓とも令難儀候処、去月廿九日雨降候ゟ差圖之旨ニ付、川上ゟ水を下し、成たけ根付仕候段聞届、郷方之儀なから夜白相詰心遣仕候段、尤之事ニ候。依之右之通為御褒美被成下候。新右衛門儀、右村之水を下し候儀ハ不容易事ニ候處、其村百姓申江申諭方宜候ゟ、川水も尖ニ用達奇特之事候。

一銀弐両宛、鳥栖村庄屋正五郎、奈良田村庄屋太平次。同壱両宛、藤木西村庄屋清蔵、今泉村庄屋代忠平。右同断ニ他村江掛用水、根付方共ニ令心遣候段聞届、尤之事ニ候。依之右之通御褒美被成下候。

六月廿八日

一藤木村之内、後植之田、用水無之、別而草荒し多候付、今日河内村川水を下し候方ニ申談、為下知、山廻役原岡与三兵衛、小人壱人召連、川内村へ罷出。

一緒方又右衛門、小人茂平次召連、酒井村江罷出。前川彦右衛門、門司郡兵衛、走番嘉七召連、藤木村江罷出。永見文左衛門、上郷大庄屋惣左衛門、奈良田村庄屋左平次、右ハ飯田村江罷出ル。岩谷三左衛門、右ハ今泉村江罷出ル。原文次郎、右ハ水屋村江罷出。

七月三日

一手代中ゟ大庄屋中江之論談。元禄年中ゟ依願為御救、定免ニ被仰付置たる御事候処、當年之儀古来稀成旱魃ニ付、

下モ村之儀別而根付不成田多有之候。定免請合之儀ニ候得は、上納方之儀不滞様ニ大小庄屋中覚悟可有之儀と存候得共、来春ニ至、百姓中食用無之、及餓候様ニ共候而は、人命甚大切之事ニ候。乍恐　御時勢茂被為適候御事ニ候得は、御救之儀容易ニ可難成被仰付候。然を右根付不成田打捨置候様なる仕方有之候を、其分ニ為致置候而は甚如何敷儀ニ候。大小庄屋中如何相心得居被申候哉と申達候得は、大庄屋答候は、乍延引も百姓中江申論し、成たけ畠作物仕付させ候而、食用之差足ニ仕候様可仕候。下モ村庄屋中幷百姓中江申達候は、根付不成田ニ是迄畠作物仕付候分は、追而宜勘弁之筋可有之候。只今ゟ後畠作物仕付候分は、小物成之儀は格別之儀ニ候、本口御上納分は差除ヶ、百姓中全作益ニ為致可申候間、随分出精致し仕付候而、来春食用之差足ニ可仕候哉、ケ様ニ申談候茂、乍恐成丈　上ミ江御救等之儀御願不申候様ニ、且ハ皆中来春食用少シたけニ而も差足ニ仕、耕作方手弱無之と之所存ニ候。然共万一了簡違仕、荒田を其儘ニ仕捨置候ハヽ、畢竟其者共之不所存故ニ候ゆへ、勘弁方ニ不相加、持切之上納可為仕候。此時又右衛門ゟ申候は、只今大庄屋中より申聞候通ニ候、及飢候ハヽ、　上ミゟ御救可被仰付、荒し候田は上ケ村ゟ取替を請可申と申、不所存共ニ而田を荒し置候ハヽ、屹度御叱可被仰付候。成丈精力を尽し耕作方相働候而も、天災ニ而損毛仕及飢候ハヽ、其節は　上ミゟ其分ニ可被召置様茂無之御事ニ候。若茂右植付不成田打捨候ハヽ、　上ミゟ穀類御仕付被成御収納有之候。其通成行候而は百姓之冥利ニ尽可申候故、大庄屋中ゟ申達之通、只今ゟ随分と銘〻ゟ秋稗蕎麦蕪類を蒔仕付候而、食用差足ニ可仕候。大庄屋中江申達候、根付不成田、本口差除候と申儀、定而上ケ村ゟ取替仕、御上納は全相納候所存ニ而可有之候。下モ村百姓中茂其所了簡違不仕、随分相働可申候処、下モ村庄屋幷百姓中答ニ、御衆議之次第忝次第ニ候あしに(ママ)了簡違可仕様

も無之、随分と食用之差足ニ成候品蒔仕付可申候。乍然水田之分は乾キ居候而も、蕎麦類は出来立之程無覚束候故、辛子菜類ニ而も蒔付、是又食用之足ニ可仕候。藤木上ミ分今泉村下モ右同然。酒井村之儀は最早畠作物仕付候地拵仕候由申聞、下モ村荒田ニ畠作物蒔付候節は、三郷中は一体之事ニ候故、上ケ村より見合を以人夫合力仕候と、右段〻衆議、遂一青木利右衛門ゟ案内申出。

八月朔日

一當年旱魃ニ付、三郷大庄屋中及年功之庄屋中江申達候は、今年旱魃ニ而田根付不相成分百五拾町余有之、根付いたし候田茂、干田ニ相成候次第、段〻承届候。其上六月十五日之洪水ニ而、下モ村打越ニ付、書付茂差出見届候。然處最初ゟ水有之分は、例年ゟ出来込宜相聞候。就夫頃日皆中ゟ申出候訳茂候得は、明日ゟ出穂不致分は、麦作仕付候と相聞候。然は出穂之有無相違は無之儀なから、為念右之場所江為見分、明日ゟ役人差出候間、可得其意候。尤當年は存寄之旨有之、手代役又右衛門引切勘弁方江相勤候様申渡候間、随分申談厳重ニ可仕候。

一城戸村庄屋徳右衛門、奈良田村庄屋太平次、飯田村庄屋善九郎、酒井西村庄屋弥三兵衛、高田村庄屋十郎左衛門、鳥栖村庄屋正五郎。右者當年勘弁方之儀は例年と違、大切成儀ニ候間、手代役は素り大庄屋中無伏蔵申談、厳重ニ可相勤候。

一小庄屋壱郷弐人宛。右者當年之勘弁方存寄之筋有之、手代役より引切相勤候ニ付、右之趣平日御用筋申談方ニ罷出候庄屋江申渡候間、其趣相心得了簡之筋茂候ハヽ、右之面〻ニ申談可申候。依之為惣代召寄申渡候間、外之庄屋中江茂可相達候。

一去ル辰巳両年ゟ三郷捨り付之例切籾、俵升ニ〆稗相納、

當節取立候俵数

辰年分三郷

合籾高参拾壱石五斗七升

此稗六拾参石壱斗四升
五斗入
俵ニメ百弐拾六俵壱斗四升
巳年分三郷
合籾高参拾弐石八斗七升五合
此稗六拾五石七斗五升
俵ニメ百参拾壱俵弐斗五升
メ

右稗今日詰之候ニ付、規格之通年番之上郷庄屋小倉村治平太、下郷同断川内村庄屋弥左衛門、養父郡同断宿村庄屋代次兵衛、年番之頭百姓三人召連罷出。但此節大庄屋三人茂罷出。

注、本項には「辰巳両年常平穀蔵詰」の頭注あり。

一右之稗は穀物蔵詰之(ニ脱カ)、御用番手代役緒方又右衛門合印仕筈ニ候處、當節相痛居候ニ付、前川彦右衛門、順番之大庄屋新右衛門立會、戸前之合印仕置候由ニ而、則帳面差出候ニ付致證印置、委細常平米穀帳ニ記有之。

十月十九日

一瓜生野町次右衛門、不行跡者ニ付、先年宮浦村陣屋江流罪申付有之、其後行跡改渡世方出精仕、少田地等相調、悴も人立候ニ付、下作等仕度存候得共、山内之儀ニ而余分ニ地面無之事ニ候間、右次右衛門村中江召下候儀、御赦免被下候ハヽ、耕作為仕度、然時は村中及掛持之為にも相成事ニ候間、願之通被仰付被下候と、庄屋長左衛門申出候趣を以、手代中申聞候ニ付、耕作出精仕儀ニ候ハヽ、願之通可申付旨申達。

十三年癸末三月十五日

一存寄之旨有之、在町人改申付、役ゝ差出ス。

三月十七日

一取計之筋有之、夜分役ゝ差遣。城戸村喜平太、助左衛門、宮浦村道仙、園部上村妙覚坊、同下村久内、無別条召捕。

一宮浦村園部村之囚人之儀、時刻申合之上、城戸村江送越、

土蔵ニ入、手錠を入、走番小人番仕。

一囚人宰領申付、原文次郎博多江差越ス。

一御国ゟ被差越組之者四人同然、御門番善右衛門出足。

一郷足軽五人、囚人警固用ニ為差出。但足軽羽織着ニハ不及段申達ス。

一人馬等追ゝ城戸村江参着ニ付、諸事手配之通無滞、今亥刻如博多出立。委細別録。

四月朔日

一作事掛中、山方役中江書付を以申渡。是迄御普請方ニ付而之諸帳面令證印候は勿論、其外節ゝ之書物之類、逐一引渡無之處ゟ、差支之品有之と相聞候。以来は役儀被仰付候節、目録を以相請取之、當役江可被遂案内候。

一在町ゟ差出候井樋渡樋、其外材木願書等、節ゝ令證印候品ゝ、逐一引渡無之處ゟ、差支之筋有之と相聞候。以後役儀被仰付候節、目録を以相請取之、當役江可被遂案内候。右若大様之次第有之候ハヽ、越度可被仰付候。

四月二日

一三郷両町江書付を以申渡。在町役ゝ之方江有之書物類、目録を以受渡取渡無之處ゟ、大様之筋も有之と相聞へ候。去ル卯年既ニ筆紙墨料申渡置たる事ニ候得は、諸事之留書も可有之候間、其以前之書物共ニ目録書載、當節差出、已後役儀被付候節ゝニ至り、急度可遂案内候。萬一不埒之次第有之候ハヽ、越度可被仰付候。

四月十二日

一園部下村久内、宮浦西村道仙、城戸村喜平太、助左衛門、御国江被指渡候跡、家財其村庄屋ゟ預り證文差出、番人付置候處、番人は為引取。

十月朔日

一田代町中、犬噛合を以慰之儀、差止渡趣以書付申渡。

十一月廿四日

一今泉村之儀、庄屋給地無之差支候。折節忠平庄屋代之儀ニ候故、役料地ニ可相成相應之拂土地も候ハヽ、相求置

候様ニ有之度旨申付候。然處田高拾八石〇参升五合之田地相拂候者有之候得共、全自分ニ而相調候儀難叶段相聞候故、去ル辰年用銀之内より銀壱貫目借渡、翌巳年ゟ拾ヶ年賦ニ上納申付、外ニ仕代米弐拾六俵之内ゟ庄屋代給米之分拝受仕候而、其残米并役屋敷ニ有之候穂実等を差加へ、不足銀之分ハ何分手段仕、相調候様ニ申渡候。依之右田高代銀参貫五百七拾四匁之内、壱貫目ハ拝借銀、外ニ弐百九拾匁〇六厘弐毛は、仕代米之残穂実等賣拂候代銀を土臺ニいたし、不足銀弐貫弐百八拾参匁九分参厘八毛之儀、忠平ゟ差足、素り右拝借銀之壱貫目銀、年〻上納仕儀ニ候得は、余分之銀高致作略相調候ニ付、役料高ニハ乍不足、給地之規格相立候段、心掛宜、尤之次第奇特之至ニ候。此旨令称美。

十一月廿七日

一田代上町傳右衛門、正蔵、柚比村甚四郎、博奕仕候段相顕、入牢申付。

十二月十二日

一科代夫五人、田代町正蔵。右は不行跡者共呼集、於宿元令博奕候ニ付、入牢申付候得共、科料申付出牢為致。科代夫三人宛、同町傳右衛門、久左衛門。右両人之者博奕筋相顕候ニ付、科料申付出牢為致。科代夫三人、柚比村甚四郎。右同断ニ付如此申付。科代夫壱人前弐人宛、組合之者申。組合之主意不相立、依之右之通科料申付候と之儀、夫〻以書付申渡。

十二月十七日

一上郷山附村之内、宗旨心得違之者有之段風説有之、内〻吟味申付候處相違無之、去ル辰春宗門改之節、本役又三郎殿、佐役儀左衛門、右之筋急度相改候様誓旨血判申付置候處、却而右之類漸〻相増候ニ付、頭人之者五人は、去ル三月御国江被召呼、其余頭立候者吟味之上、今般以書付申渡。

一宮浦西村道仙女房、道圓、城戸村助左衛門女房、新吉母、

同村喜平太女房、幸次郎、はま、長吉母、園郎下村久内女房、斧八、久之介、右之者共兼〻厳重申付候を不相守、甚不行跡者ニ付御國江被召呼候。依之持分土地之内半分取揚候。尤御領中為見懲、他方江縁組養子等差留候条、村〻名付之者共之内ニ而双方縁談養子取組可仕候。

一城戸村喜左衛門女房、りく、重太郎、ひさ、弁太、久助後家、真木村江。

一城戸村伊三郎女房、せき、甚蔵、利兵衛女房、酒井西村江

一城戸村与三右衛門女房、白坂宇平次離別女、萱方村江。

一城戸村判七女房、新七女房、藤木東村江。

一城戸村五郎兵衛女房、平右衛門女房母、宿村江。

一宮浦西村吉左衛門女房、嘉市、文太郎、長右衛門女房、瓜生野上町江。

一宮浦西村善四郎女房、さと、よし、善太郎、傳太郎、萬太郎母、永吉村江。

一宮浦西村善五郎女房、善兵衛女房、幸右衛門、金右衛門、萬四郎、孫太郎、清十、酒井東村江。

一園部上村源八女房、ちやう、豊八、新太郎女房、きた、むめ、りよ、古賀村江。

一園部下村甚平女房、ちよう、市太郎、さん、たつ、川内村江。

一園部下村仁左衛門女房、八十、かね、ゆき、久十、幡崎村江。

一奈良田村宅平女房、源太、源次、はく、源太郎、浅右衛門女房、真木村江。

一曽根崎村長右衛門女房、嘉平太女房、熊太郎、亀次、永吉村江。

一飯田村太平次女房、太左衛門、宇蔵、さく、辰右衛門、弥左衛門、太吉、弥兵衛女房、藤木東村江。

一田代下町喜藤次、ふり、金吾母、宿村江。

右之者共兼〻申付を不相守、甚不行跡者と相聞候ニ付、

持分田地半分取揚、右之村ゟ江所替申付候。尤御領中為見懲、他方江之縁組養子等差留候条、村ゟ名付之者共内ニ而双方縁談養子取組可仕候。乍然多年不行跡を相改、専耕作方出精一筋ニ相働候段相聞候ハヽ、其者業作人柄ニゟ、他方之縁談養子取組差免候儀も可有之候条、諸事実体ニ農事可相勵候。右之外ニ於村ゟ當節御呵之者大勢有之、書付数通有之候得共、事繁多ニ有之、此所ニ不記之。委細は別録、(啓)佑筆方江箱入ニ而有之。

一書付を以當節所替申付候者共、持分土地半分取揚之。畝高入口坪付等委細之儀は、村ゟゟ差出候小割帳ニ有之。

田 合畝数弐拾壱町六段八畝拾五歩
畠
内 拾八町五段七畝拾八歩 田
参町壱段〇弐拾七歩 畠

田 合高弐百弐拾八石九斗参升五合
畠
内 弐百〇九石〇〇四合 田
拾九石四斗参升壱合 畠

畠 合米
田 豆入口九百四拾壱俵弐斗壱升壱合
内 八百七拾五俵弐斗壱升七合 田
六拾六俵壱斗壱升九合 畠

一三郷両町江拝借申付候牛馬調代之儀、是迄五拾匁宛ニ候を、七拾五匁ニ増し拝借申付候事。

明和元甲申五月四日

一於御領中下作を以渡世仕候者、他領之田請作一切令停止候段、前方急度申渡置候處、當節他領江之請作致候者有之由、粗相聞、他領續之儀ニ候得は、不了簡者其筋有之間敷共難極候。右体之族は、平日之身持業作不宜候処ゟ下作茂無之哉、又は勝手つくニ宜候而請作仕候哉、兎角御領中ニ而下作無之候は不行跡者ト相聞候条、身持業作相改、作等仕候様本心ニ可立帰之處無其儀、偏ニ申付を相背候仕形、重ゝ不届者ニ候を、其儘ニ召置候而は、御領中害を生シ候付、急度申付様之品有之候間、右之趣庄屋中ゟ厳敷申付、右体之者無之様、随分心を用吟味仕、

若違背之者も有之候ハヽ、不差置可遂案内候。万一請作仕候者を押隠し召置、後日於相顕は、其者ハ不及申、掛之庄屋迄屹度可申付候。

七月三日

一酒井西村清介儀、女房を殺害仕、其身も自殺仕候段、庄屋弥三兵衛案内申出。役ゝ差出、弟惣右衛門、女房弟源四郎、口書為仕、庄屋ゟも書付差出候處、馬代引負有之候故ト相聞、外ニ主意も不相見候付、早ゝ葬候様申達。

七月九日

一木山口町甚八子弥介、園部上村勘三郎母。右は村ゝ不行跡ニ立入候者共、段ゝ呵申付候處、先非を悔、是迄之不行跡誤入候。以来急度心底相改可申旨、一統以書付誤筋歎出候。然處右之者両人は其筋無之、我意を立可申と之所存ニ相聞、重ゝ不届者ニ付、弥介事ハ大庄屋治兵衛江、勘三郎母事は大庄屋惣左衛門江、被成下候と之儀申付。

園部上村
善 七
一家内
作 平
一家内
藤右衛門

作右衛門
母
幸 介
女 房
善右衛門

園部下村
勘右衛門
女 房
清 七
忠 内

河内
養 仙
女 房
喜平次養子
助 市

宮浦西村
助右衛門
一家内

長野村
久保田幾平
女 房
傳 蔵
女 房

平右衛門
女 房
平 十

宮浦西村
喜右衛門
一家内

弥三次

甚八子
善兵衛

同東村秋光
次左衛門娘
せ ん

源左衛門
女 房

権七子　傳五郎　神邊村　正右衛門
次左衛門子　久兵衛　龍蔵
長野村久保田　甚五郎　河内村　五兵衛
河内村　茂平次　原村　喜平次
女房　女房
蔵上村　茂右衛門　鳥栖村　源四郎
一家内
又兵衛　姫方村　忠介
一家内　女房

右之者共事、不行跡筋ニ立入候段相聞候付、旧臘呵申付置候。然処多人数之儀ニ候得は、若違等も有之、或は間近親族、又は縁類等之釣合を以風説甚敷、第一家内壱人ニ而も不行跡者有之候ハヽ、畢竟示方不宜故ト存、彼是ニ而呵置候処、右体之筋携居不申、何筋難儀之趣追〻相分候条、差構無之候条、差構無之候。

右御書付、大庄屋中召寄申渡。

一御呵外ニ不行跡筋相携居候者共、御法式之重キ儀を恐入、書付を以誤歎出候者、今日御赦免被仰付候。

御書付左之通。

宮浦東村　後家　同村秋光
木山口善吉　藤平
同村　弥三次　女房　長野村新六　後家
城戸村　又吉　田代村　伊平
一家内
園部上村　甚七　鳥栖村　伊右衛門
平四郎

右は不行跡筋不分明候付、旧臘呵申付候処、自分ゟ不行跡ニ相携候次第、押隠罷在候段難儀ニ存、先非を悔誤候一件委細申出候は、真実ゟ起候心底と相聞、神妙之至尤ニ候。依之無別条差免候条、弥身持業作厳重ニ相慎ミ、農事第一ニ出精可仕候。萬〻一申出之筋齟齬いたし、不被取捨、後日於相聞候は、急度厳科ニ可申付候。

一不行跡者共、追〻書付を以誤之次第白状申出候処、區〻有之不相貫候ニ付、此度在町共ニ新帳ニ仕立、名書之上ニ勘之者名前を令書載、逐一連判仕らセ差出候様ニ申達。

不行跡者居住之村〻
大庄屋中
両町役中
小庄屋中

右者旧臘已来段〻呵申付置候不行跡者共事、無用之儀ニ立入、御制法之重キ筋を令忘却、不届者ニ候処、先般御國江被召呼候頭人共之謀計ニ迷され、無故法儀ニ携居候段、皆共漸心付悔先非、以来急度心底相改可申、是迄不所存之次第誤入候と之儀、追〻庄屋町役方江以書付歎出候趣、逐一見届候。右之書付、相應ニ相聞候茂有之候得共、其内日課授り候次第茂令書載候。日課を請候根元は、偏皆共申開之為ニ可相成哉と之工ミ候段顕然ニ候処、誤書之内ニ右之次第を申述、我意を立候意味ニ相聞、不埒ニ候。日課之儀は、誰ニ而も布施銀を以令懇望候得は、先方ゟは任望筈ニ候。尤於彼方皆共ゟ之申達ニ、我〻ハ助ケ給へを専相唱信仰候得共、此節申抜ケ之端シ〻、日課授り申度と相望候ハヽ、何分不被授事當然ニ候。然は工面之主意申分之證拠ニは決而不相成、殊日課請候儀は不達段、能〻知渡たる事ニ候を、下賤之身分とて申分之為ニ設ケ置、前後不相貫無十方儀共申出、甚敷不覚悟者有之候。乍然以来行跡相改候誤筋之一段ニおゐてハ、相違無之相聞候条、先ッ聞届置候。弥身持業作相改候筋、明らかに有之様可相慎候。就夫皆共申出書付之内、書面詳かならす區〻ニ候間、不行跡者共一村切ニ帳面新ニ仕立、前書等別紙相渡候書載、帳末ニ旧臘呵以後誤筋歎出候共、不残(マヽ)様ニ名付印形為仕可差出候。

右之趣、大小庄屋両町役へ申渡、不行跡之者江猶又厳重申付候様「申達。」

大庄屋中
両町役中
小庄屋中
在町　与頭幷組合之者中

注、「申達」は「基養政鑑」により補う。

旧臘以来不行跡ニ立入候者共呵申付候処、先非を悔、是迄之不行跡誤入候、向後急度心底相改可申旨、一統以書付申出候ニ付、先加用捨候。然共前後不覚之者共候得は、誤筋委細歎出候而茂、内密ニ不取捨者茂可有之哉、若右体之者見聞いたし候ハヽ、虚実ニよらす、たとひ風説たりとも急速可遂案内候。不行跡者之名付も逐一相知居候事故、少茂遠慮ニ不及候。萬ゝ一右之不届者穏便ニ取計置、後日相顕ニおゐてハ、在町掛之役人幷与頭組合之者迄、油断之越度重々可申付候。者共へは在町役人ゟ厳重申付候得と申達。

一鳥目壱貫文宛、園部上村利三兵衛、同下村善蔵、城戸村太左衛門、宮浦西村甚兵衛。右者居村不行跡ニ立入候者余分ニ有之候処、右之者共事、右体之儀ニ少茂不相携、村方之者へ不宜訳等度ゝ令教訓候段相聞、心底尤之儀ニ而、甚奇特之至ニ候。依之為称美右之通與之候。猶又農事出精可相勵候。

一鳥目壱貫文宛、城戸村藤蔵、助六。右は居村不行跡筋ニ立入候者餘分ニ有之、右筋ニ不相携候而は村方之者と参會も難成様ニ、不行跡者共所為を以仕掛、其上下作等之持筋相妨候得共、右両人事乍貧窮者、今日之渡世難凌ニ不相拘、身持堅固ニ有之段相聞、甚神妙之至ニ候。依之為称美右之通與之候。猶又農事出精相勵、身体持立候様可仕候。

八月七日

真宗一派中。右は先住年回之法事為執行、或は彼是之申立を以、他領之同宗相招、致説法度段願出有之候節は、吟味之上差免候茂有之候。説法之儀、他領之出家幷舌相勝

候を相招候段、如何敷差支之筋茂条、向後他領ゟ同宗相招候儀は令停止候。将又是迄は於在家、間ゝ説法等為有之由相聞候。俗家ニ而右体之取行可仕様無之、是又如何敷候間、自今一切差留候。

八月廿二日

一朝鮮木綿三疋、上郷大庄屋惣左衛門。同五疋、田代先別當次郎左衛門。同七疋、城戸村善八。同拾五疋、高田村文作、同弐疋ト壱反、壱人前壱反宛、瓜生野町喜兵衛、治右衛門、惣左衛門、忠平、儀右衛門。右は去午年近来稀成旱魃ニ付、田作損毛夥敷、既ニ御差延を茂過分ニ奉願候程之年向ニ候得は、村ゟ貧窮者別而極難之体ニ罷在、左様之者共江は、備稗村ゝ取立高ニ應し相與候。水入村之儀は、稗外ニ御救米等被成下候處、右之面ゝ貧民難儀を厭ひ、米穀相應ニ相與江候次第聞届、心底尤ニ相聞候ニ付、御国江委細申上候。依之皆共之致方奇特ニ被思召、為御称賜右之通被成下と之儀、御差圖被仰下候間、難有頂戴可仕候。

八月廿九日

一田代町先別當次郎左衛門。右者去寅年町中取立役相勤候内、田代町西七組令支配、日貫之仕道を以、上納之期迄借廻候利分取集、当六月迄銭五百拾五匁五分七厘有之候由、然は今般御取揚土地、次郎左衛門江賣渡候内ゟ、柚比村分ニ而下田壱段壱畝〇七歩、高八斗九升九合、入口米七俵ト五升、代銭凡六百五拾匁程之所賣渡、土地之儀は、別當嘉兵衛相渡置、西七組中ゟ別當方へ貫立遣候夫賃銀、向後貫立不申、右田地餘米を以令差引候様、別當江申談候趣申出候。弥申出之通田地賣渡候様致へく候。尤嘉兵衛江茂右之次第申渡、七組中へも委細申聞置候得と申付候。

閏十二月九日

本役、樋口弥五左衛門

一米弐俵、養父郡大庄屋新右衛門。右者當夏田作根付相濟

候以後、六月ニ至洪水出、数日之儀ニ而、下村田作株窩多有之、植継致植直不申候而は難相成候處、時節後レニ付、実蒔苗ニ而は生育不致、當所ニ実蒔無之候ニ付、隣旦之苗を相調、植継植直シ致心遣、尤藤木村之儀は、依下知兼而実蒔為致其苗を為植、餘分ハ他村江も遣之植付させ候。幸と氣候茂順路有之、致生育実取も宜相成、御年貢茂差閊無之候。畢竟新右衛門心を用下知方宜、其外郷内示方平日心掛候儀共多有之候段相聞、旁奇特之至ニ候。依之為御称美右之通被成下候。

二年乙酉二月廿二日

一佐賀領轟木町江芝居有之由、従前ミ為見物罷越候儀、稠敷差留候様、惣而他領江出候而は、過言我儘を申募候而も、不苦事ニ心得居候様聞候。他領江出候而は、尤其所之法度を可守儀ニ候。勿論見物等ニ決而不罷越様可申觸趣、委細手代中ゟ申達候様申渡。

二月廿七日

大小庄屋中

両町役中

去比何国之僧ニ候哉、隣国辺江相越説法等仕候処、説法之体異様ニ而甚殊勝ニ相見、夥敷男女致帰依候由、風聞有之、其外丘尼(比脱)抔両三人罷通候段相聞候。何方之僧比丘尼と不相知、胡乱成者江一宿ニ而為仕候段、如何敷候条、於當所村ミは立宿も不為致、勿論縦令両町ニ而旅人宿たり共、右体之者江泊宿為仕候儀堅令停止候。若相隠為致泊宿、後日於相顕は、重可申付候。尤在町共ニ異様之僧比丘尼入来候ハヽ、早速令吟味、一刻も不召置様厳重ニ申付、素ゟ此方へも不差置、可遂案内候と、在町役ミ江申渡。

九月九日

一下モ村當年之水損不軽儀ニ付、小百姓食用無之、御救被仰付事ニ候得共、既ニ壱人前壱合五勺宛ニ而、其分ニ而は働相成儀ニ而無之、若竈を潰候様相成候而は、素ゟ下モ村人少ニ有之候得は、田畠を荒候様成行可申候。左候時は地主及難儀候間、地主ゟ茂、憐情を加候様有之度、右之儀大庄屋中幷下村庄屋中江申渡ス。

十一月四日

一上郷大庄屋惣左衛門、以書付願出候園部下村、柚比村庄屋給地之儀、田畠三拾石宛之高ニ而御座候得共、悪地多殊外餘米寡、素り両庄屋共ニ不如意ニ御座候而、難相立難儀仕候。然は當節御取揚家屋敷、入札御拂ニ被仰付候旨承知仕候。左様御座候得共、上郷幷飯田村江有之候八竈之家屋敷、高札直段ニメ被仰付被下候ハヽ、右両村之百姓中江申付、働を以少ニ而茂為賣上、給地相増候様為仕度奉存候。尤當御時勢諸事厳密ニ被為　仰付御事御座候得は、少茂蟠り候儀は無御座候得共、至後年人ニゟ困窮仕候ハヽ、心得違之儀有之間敷とも難量、左候時ハ事ニゟ品ニゟ、其村之損失至而不軽次第、御賢察被為遊被下、偏ニ當節御慈悲を以、右之家屋敷代銀、年賦拝借被為　仰付被下候ハヽ、二ツ割ニメ園部村は三ヶ年賦

ニ申付、買調候田地餘米ニ村貫銀ゟ致合力上納為仕、柚比村之儀小高村ニ御座候間、六ヶ年賦ニ右同様取立御返上仕、永ミ庄屋役料ニ為仕度奉存候。尤村貫銀を以御返上仕儀、如何敷可被思召上候得共、百姓中ニも後難之程難量、一統納得仕罷在候。此段至而御願難申上御儀ニ御座候得共、只今之通之御役料ニ御座候而は、永年其村之憂之程奉存、不顧恐御願申上候。御賢慮上願之通被為仰付被下候ハヽ、別而難有仕合可奉存候。右願候所、村貫銀ゟ差足年賦上納仕候儀は如何敷候得共、両村百姓中納得仕、大庄屋惣左衛門迄申出たる事ニ候故、評議之上願之通申付。

三年丙戌正月十五日

一大小庄屋中江申渡候は、去年之儀、損毛一体と申内、下モ村は別而水損甚敷、人ミ及困窮、就中下作人は、常年之通ニ請作仕得不申者茂可有之、或は自作之者も損毛ニ氣を落し、是亦自作之分等相滅申候様成行可申哉と甚心遣候。其通有之候而は、作方養等必定大方ニ成行、萬一ハ荒地も出来可申哉、近年　上御時勢別而被為違候事ニ候得は、去夏已来ゟ段ミ被為垂　御仁恵、猶又去秋已後御救米毎度願之通被成下候も、畢竟其儀無之、飢餓を凌作方弥念入豊熟之期を可相待事ニ候得は、何れ極難之下作人江は、其分際ニ應し、地主方ゟ茂心を付相助ヶ、随分耕作出精仕候様、大小庄屋中下知仕、勿論一統庄屋之儀茂自作出精仕、村方茂其下知ニ相服し候様ニ心を用候義専要之事ニ候。若又其旨致違却候様ニ有之候而は、第一農長之趣意不相立事ニ候故、一統御仁恵之程奉感心候而、百姓中江能ミ相諭候様と申渡。

十月十日

一寛延三午九月廿二日之夜、河内村甚右衛門と申者、猪狩ニ罷出、同村傳四郎を誤而鉄砲ニ而打殺、其場直ニ致出奔、行方不相知候処、今程立帰、姫方村江居候段相聞候故、召捕直ニ入牢仕らせ候様ニ申達ス。

一右ニ付番人穢多ニ申付為番仕、今晩ゟ油一夜ニ四勺ツヽ、飲米壱人前ニ五合ツヽ、塩噌料銭弐文半ツヽ、賄方ゟ相渡、甚右衛門食用之儀は、評議之上可申付、先姫方村庄屋清右衛門食事給させ候様申達ス。

十一月廿四日

毎歳正月十九日ゟ某共廻村之上、宗門改申付候。其節は當病差合歩行不成者外は無残打揃、誓旨血判老幼ハ黒判等仕筈ニ候処、當日出人少ク候。相勘へ見候処、別而両町判残余分ニ有之、畢竟町役申付之筋大様之故哉と存候。宗門改之義は至而重キ次第と申、年に一度之改ニ候得は、軽キ病人或は差掛候用事之儀たり共、取繕罷出不申候而不叶事ニ候を、大様ニ心得居候と相見江、判残多自由ヶ間敷仕形、甚不埒之次第ニ候。尤判残之者追日罷出改を請候へは、其度毎ニ役人相附罷出、要用之障とも可相成、勿論此方役所之手数多、旁如何敷候条、来正月改之節ゟ、重病人歩行不成者之余者、急度罷出改を請可申候。万一自今已後、右体之自由を働候者後日相知候ハヽ、申付様之品可有之候。

四年丁亥五月廿四日

一三郷大小庄屋両町役中江申渡。御国之儀連ミ御不勝手ニ付、當節御倹約筋被仰出厳敷被取行、着服其外之義共ニ兼而被仰出置候御法を相守、勿論諸事費筋無之、身分相應ニ随分質素仕候様ニと之御事ニ候。然は御領中之義、着服之類及櫛かんさし之類等ニ至迄、御法式之趣壁書を以毎歳讀聞、一統能存居候處、間ミ心得違之者有之候哉、着服絹類等相用、櫛かんさし之類紛敷品指し候者茂有之由、粗相聞候。右体有之候而ハ、究而旅人通路児女等之見真似をいたし、金銀ニ而拵候差物を見候而は、金銀なかし之指物成共相求、着服之義茂襟袖へり帯等ニ而も絹類相用度心得ニ相成候は、畢竟身分ゟ上たる者へ目之付候而、人ミ身上之分限を相忘候仕形候。いつれ之國ニ而も其國法は急度相守不申候而不叶事ニ候を、大様ニ相心

得候と聞江、甚不届之至ニ候。向後は一体金銀ニ紛敷差物は素、少し之絹類たり共着服ニ相用候儀一切令停止候。委細は壁書之通ニ候条堅相守り、其上萬端質素ニ而毛頭費筋無之、人ミ世業方令出精、身代持立候様之心掛専一候。

一金毘羅宮或は彦山参詣等仕候者、旅立又ハ帰郷之節、親族其外懇意之者共酒肴を携、途中迄罷越餞別、帰郷之祝詞をも相述候事と聞候。右体之義は、失却甚敷於時体如何敷候条、一切指留候間、其旨相心得、已来は決而持参物不仕、迎送之事情を而已相述候義ハ勝手次第ニ候。

七月十七日

一上ヶ村田虫之儀、頃日相除候處、近来又ミ生し候段、甚以心遣候。油を入れ除け置候坪も、其近辺ニ油不入田有之虫多く而は、相除居候田坪ニ押移候と相聞、然時は手入方精力を費候田主及迷惑候故、御領中一統村貫銀ニ而油相調、虫之軽重に不拘、田坪毎ニ油を入候様有之度候。

之入方ニ候故、両町は勿論、上郷小町ミ油屋少〳〵たり共、決而他領江油賣出不申候様ニ申觸候様被仰付。

九月六日

一在町馬口労仕候者、隣且ニ掛不絶不埒之差引等有之候越、手代中ゟ申出、在町ニ達候様申渡。

家業方不精之者、馬口労を好ミ風俗不宜候ニ付、去丑八月厳重ニ被仰出置候御旨も有之候處、漸ミ忽ニ相成、至近来候而は猶又在町共ニ不埒之筋有之候様、相聞候。右体之者は風儀も傷ひ、殊ニ其所之害不少儀故、不差置被遂案内候様ニ、御申觸可有之候。

一牛馬之儀、他領と賣買は勿論、御領内之賣買たり共、在町其掛之役人江其節ミニ逐一相届、得差圖候様ニ、馬代銀等賣買之其主ゟ直ミニ令請引候様、堅御申付可有候。

御憐愍を以牛馬買用銀も拝借被仰付事ニ候処、一体之賣買如何敷風説有之候ハヽ、其掛之役人越度可被仰付、素り隣端掛合不埒之筋ハ、其在町百姓町人ゟ差引相償候様、先年も被仰出置候間、右之旨委細申付被置、在町共ニ組合之者も互ニ吟味合、已来決而不埒不仕様、厳重ニ御申付可有之候。

一筑後御領、今以小富興行有之候ニ付、他領之存し、御領分ニも徘徊仕候様相聞候。御領中之者決而相調不申、素り存等不仕様、厳重御申付可有之候。御停止之旨、毎ミ厳重被仰付置候事故、萬一相背候者有之相顕候ハヽ、急度可被仰付候間、此旨堅御申付可有之候。

五年戊子正月八日

一下モ村洪水之節御救船之儀、以前は拾八艘有之候處、段ミ朽損難用立候ニ付、去ル寅年五艘之造替、三艘之修理被仰付、都合八艘之御備船御渡被召置候処、海上と違、平日潮をかい候義不相成、水囲ニ仕置候而も、炎天之節堀水涸候時は、日乾キ雨ニ濡候故、旁を以損方早く、右八艘之内三艘は去ル申年新艘被仰付、相残五艘も最早朽損、當春修理不仰付候而は、難用立体ニ相成候。就夫去

年六月大洪水俄水之節、村ゝ江備有之船ニ而は、其村之痛(マヽ)人幷牛馬等追ゝ乗之水揚仕候ニ付、手空之船無之、役ゝ罷出候而も下知も難相成、御救之掬飯積方間後ニも相成、水ニ渇且飢ニ及候者も可有之為体ニ而畢竟船数少キ処より右之次第大切之儀ニ付、曽根崎村藤木村大庄屋方へ中船壱艘宛御備有之候ハヽ、人馬水揚掬飯配り下知等ニ至迄、可宜段評議相決、壱艘船大工請負ニ而之造作入目積書、両大庄屋中へ申付為差出候様、其上ニ而如何様共可申付と之趣申達。

六月九日

一大庄屋治兵衛、新右衛門江御渡被置候御備船之儀ニ付、被仰渡候御書左ニ記ス。

一下郷大庄屋治兵衛、養父郡大庄屋新右衛門。右者下モ村洪水之節御救船之儀、以前は拾八艘備為有之と相聞候処、右之船段ゝ朽損人命ニ相拘候。御備船難用立候而は大切之次第ニ付、去ル寅年已来造替修覆等申付、都合八艘相備置候処、海上之船と違、平日潮をかひ候儀不相成候故、損方早ゝ、右船数之内五艘は甚朽損候由ニ而、當春修覆之儀願出、無余義相聞候ニ付、酒井両村へ弐艘、水屋村江壱艘、高田村江壱艘、北古賀江壱艘、都合五艘修覆為致相渡候。就夫去年六月大洪水之節船数少ゝ、人命幷牛馬等ニ至迄、船揚之手捌急ニ相成不申候処、色ゝ相働追ゝ乗之致水揚、人命幷牛馬ニ至別条無之仕合之儀ニ候。然は手空之船無之、御救之掬飯等積せ差下候儀難相成、段ゝ令延引、役人心遣之上、漸及晩景掬飯差越たる儀ニ候得は、食事甚間違(違カ)に有之、其内ニは既に飢疲候者茂為有之由、水入村江備有之候船ニは、其村之危急を守相救候心遣罷在候得は、掬飯等為積差廻候儀不相成、素船差廻候様可申越も其便り不行届、いつれ上ヶ村之内へ備船出来、掬飯も為積村ゝ江差廻、其外下知筋申付越、又ハ危急を相救候便ニも相成、彼是手當宜相聞候ニ付、當御時体御出方之儀は不容易事ニ候得共、當節別段之御

仁恵を以、曽根崎村藤木村大庄屋宅へ壱艘宛新造弐艘出来申付、相渡置候間、囲ニいたし、間ゝ水を掛ヶ槇はた打候処透不申様心を用、勿論雨露之不掛様ニ念を入、相囲置候様可仕候。尤洪水之節相与候掬飯等為積村ゝ江差廻、其外急難之村ゝ江差越危(マヽ)便宜様、治兵衛、新右衛門下知可致候。以上。

九月十一日

一三郷大庄屋罷出。當年大旱損ニ付而ハ、先達御書付を以被仰渡置候、旱損甚敷村ゝは無據捨並シ取行候儀、就夫郷違ニ捨付之場所ニ、庄屋中ニ罷出候様ニ被仰付たる事ニ候。庄屋中入違候義、頃日手配段ゝ申談、則面付書載差出候。尤庄屋ニ相添、壱ヶ村ニ壱郷ゟ百姓壱人宛、三郷ゟ三人一日代ニ入替、其村之次第委細ニ見届、萬一不審成仕方見及候ハヽ、居村之庄屋へ早速申出、庄屋ゟ其郷之大庄屋へ申出候様ニ申組、偖又野取帳之義、他郷ゟ相勤候庄屋相仕立、其村へ不召置毎日持帰、捨付相濟候即晩、手代中宅迄差出候様ニ申談候と之事。

一大庄屋中も、郷違捨並之村は勿論、荒高掛之村ゝへも、例シ切場所相廻候と之事。

一捨り例シ合升歩竿之儀も、三郷村ゝ共ニ同様相仕立、大庄屋方ニ而寸法相改、村ゝ江渡置候と之事。

一大庄屋中差出候荒高掛、現高並村ゝ仕分之書付。

上郷

宮浦西村	小倉村
同　東村	長野村
城戸村	金丸村
野口村	奈良田村
園部下村	永吉村
同　上村	柚比村
右は荒高掛銘ゝ蒙り	右は捨り並現高掛

養父郡　下　郷

一牛原村　一河内村

牛原河内　原村分　柳井町
養父村　右銘ミ蒙り
蔵上村　メ拾四ヶ村
宿　村　右捨並し
鳥栖村
藤木上ミ分
同下モ分
今泉村
瓜生野村
真木村
高田村
メ拾ヶ村
右捨り並

神邊村
萱方村
古賀村
田代村分
前田
同　後田
曽根崎村
原　村
姫方村
幡崎村
飯田村
酒井東村
同　西村
水屋村

（一赤川村
メ拾四ヶ村
右捨並し

捨並し村ミ江郷違見分之庄屋中面附

小倉村へ　飯田村庄屋　善九郎
長野村へ　酒井東村庄屋　四郎兵衛
奈良田村へ　養父村庄屋　与三郎
永吉村江　水屋村庄屋　藤兵衛
柚比村江　酒井西村庄屋　弥三兵衛
神邊村江　今泉村庄屋　善左衛門
萱方村江　真木村庄屋　半兵衛
古賀村江　瓜生野村庄屋　善右衛門
田代村江　藤木西村庄屋　清右衛門
曽根崎村江　高田村庄屋　十郎左衛門
原　村江　鳥栖村庄屋　正五郎
姫方村江　小倉村庄屋　新兵衛

幡崎村江　蔵上村庄屋　三郎次
飯田村江　長野村庄屋　七郎左衛門
酒井東村江　奈良田村庄屋　弥次兵衛
同　西村江　宿　村庄屋　平右衛門
水屋村江　瓜生野村庄屋　善右衛門
養父村江　原　村庄屋　文右衛門
蔵上村江　古賀村庄屋　幸　平
宿　村江　柚比村庄屋　清　蔵
鳥栖村江　田代村庄屋　小兵衛
藤木東村江　飯田村庄屋　善九郎
同　西村江　神邊村庄屋　只右衛門
小倉村庄屋　新兵衛
萱方村庄屋　勘　平
姫方村庄屋　市右衛門
田代村庄屋　小兵衛

右合例勘並レニ付而は、不直之仕形等無之様、手代中目附中村ミ打廻、致見分候様ニ申達。

十月朔日

御國御左右有之、御年寄平田斎殿ゟ佐役儀左衛門江之御状相達、御領中之男女八十歳以上、其餘長命之者可有之候間、御國へ申越候様申来、在町吟味致面附差出候様ニ申達ス。

十二日

一三郷両町ゟ八十歳以上男女面附

上郷

宮浦村　小倉村
年八十三　独身　文　八　年八十四　四右衛門　母
同東村　長野村
年八十一　甚右衛門親　源　介　年八十三　弥平次親　弥　介
年八十八　清左衛門親　恕　心　奈良田村
年八十八　源左衛門　母　年八十　新蔵　母

年八十七　九郎左衛門　母
年八十　善平　祖母
年八十　喜兵衛　母
永吉村
年八十六　貞平祖父　助左衛門
年八十三　仁左衛門　母
柚比村
年八十四　善九郎親　甚兵衛
年八十弐　弥右衛門親　甚右衛門
園部下村
年九十四　利平次親　清吉
年八十五　介左衛門親　六右衛門
年八十　河内祖父　藤左衛門
年八十九　源兵衛　母
年八十四　仁平次親　利左衛門
卯八親　孫平

年八十七　新蔵親　金兵衛
年八十壱　惣介　母
年八十壱　半左衛門　母
年八十　利平次　母
年八十　弥三次親　弥介
年八十　武七親　武八
年八十　九平親　岩部
年八十　専念寺老僧　智益

メ人数三拾八人　内　弐拾三人　男
拾五人　女

下郷
萱方村
年八十弐　忠蔵親　久左衛門
神邊村
年八十壱　寿庵　祖母
年八十　喜介親　文六
年八十壱　源七親　藤市
年八十壱　佐平　母

年八十六　惣八親　又七
河内村
年八十六　治左衛門　母
年八十壱　仁平次親　介市
年八十四　半兵衛平　母
年八十弐　右衛門親　平兵衛
原村
年八十　徳右衛門　母
年八十四　甚蔵　母
年八十六　喜平次親　新右衛門
飯田村
年八十四　甚蔵　母
年八十五　文右衛門親　惣七
姫方村
年八十　女房
年八十六　茂平次親　源左衛門
年八十壱　儀平次伯父　善吉
年八十九　宇平次　祖母
年八十壱　半左衛門　母
幡崎村
年八十　傳平親　折右衛門（新カ）
年八十　平吉　母
酒井西村
酒井東村
年八十　久兵衛親　久左衛門
年八十弐　四郎兵衛　母
年八十壱　作平親　吉左衛門

年八十六　文五郎　母　水屋村
年八十弐　孫四郎親　母　年八十　権四郎親　孫四郎
年八十四　茂平次親　与七　年八十五　源八　母
年八十弐　正右衛門親　権六　年九十　又六　母

メ人数三拾壱人　内　拾六人　男
拾五人　女

養父郡
牛原村　養父村
年八十六　儀平次親　平右衛門　年八十　与三郎　祖母
年八十四　五右衛門　母　年八十九　藤七　母
蔵上村　宿村
年八十五　権右衛門　母　年八十弐　四右衛門　母
年八十壱　忠兵衛　母　年八十　利右衛門　母
年八十四　善九郎　母　年八十壱　次平次　母

年八拾壱　傳兵衛　母　藤木東村
年八十四　種右衛門　文右衛門　年八十五　母
藤木西村
年八十弐　幸七親　忠兵衛　瓜生野村
年八十壱　八平　後　家　年八十三　平介　母
今泉村
年八十弐　文七親　金兵衛　年八十六　文右衛門　母
安楽寺村
年八十四　弥吉　母　年八十九　又四郎　母
年八十一　忠平　母　年八十三　甚八　後　家
年八十　与七　母　年八十一　藤左衛門親　勘右衛門
牛原河内
年八十　久四郎　年八十一　善太郎　祖　母
年八十二　又右衛門親　藤　市　年八十一　新兵衛　祖　母

メ人数弐拾八人　内（八人　男／弐拾人　女）

瓜生野町　田代町

年八十五　嘉兵衛　年八十弐　勘左衛門　母
年八十　与兵衛　後　家　年八十一　甚平親　長右衛門
年八十三　孫四郎親　勘　七　年八十六　弥六　祖　母
年八十八　茂八親　藤　七　年八十弐　九兵衛　母
年八十　知　貞　年八十一　弥平太親　市郎右衛門
年八十一　儀右衛門親　新左衛門　年八十弐　太平次　祖　母
年八十五　伊右衛門　母　年八十五　源四郎　母
年八十　幾平　母　年八十壱　伊右衛門　祖　母
年八十　久四郎　年八十一　善太郎　祖　母
年八十五　利介親　儀　兵衛　年八十一　傳右衛門　後　家
年八十　善五郎　母

年八十一　甚右衛門　母　メ人数拾人
年八十　道益　母　内（弐人　男／八人　女）
年八十三　介左衛門

メ人数　拾四人　内（七人　男／七人　女）

三郷両町都合　百弐拾壱人　内（五拾六人　男／六拾五人　女）

十二月十八日

一三郷両町へ手代渡之廻状。當年之儀旱魃ニ付損毛甚事ニ候得共、人ミ分限ニ應し倹約専要之事ニ候。總ニ茂心之用不用ニゟ、事ミに其験有之事ニ候故、諸事細密ニ心を相用、成たけ令省略、年柄不相應之儀共不可有之。

一従前ミ衣服之御制法有之、絹類厳敷御停止之儀、毎歳御壁書を以被仰渡儀ニ候得共、近年漸ミ華美之風俗ニ押移、御法式大形ニ相心得候者茂間ミ有之、婚礼或は葬禮等之節、一体忽ニ成行候様ニ相聞候。在町役ミ之家内不及申、其以下之妻子等御制法少茂違背無之、其外髪之飾具踏物等ニ至迄、分限不相應之品相用候者も有之様ニ相聞候。是又急度相改諸事質素之風儀ニ相成候様、若又右体相背候輩は有之候ハヽ、御目附中見聞之上、可及御案内候間、其旨御心得厳敷御申達可有之。

一在町共ニ火用心之儀、厳重ニ御申達可有之、村ミ共ニ庄屋中ゟ竈別火所相改、不用心之火所は、早速仕替候様ニ可儀致下知旨、偖又近来在町ニ小盗人令徘徊候様相聞候。町方ハ勿論之儀村ミニ而も、庄屋中夜中時ミ立廻、用心堅固可有之候。

一隣且ニ今以第一之小富有之由、在町人ミ背御制禁蜜(密)ミニ相調不申候様、年並不宜殊ニ時分柄之事ニ候故、心を被相用、厳重之下知無之候而は、存をいたし或は調候者も可有之哉、就中他領之存、通路之在町ハ決而存之者立宿も仕らせ申間敷旨、厳敷御申論可有之、右ケ条之趣ハ人

ミ能ミ相通、聊違失無之様ニと之儀、猶又委御申達可有之。

手代中。

六年己丑七月廿三日

一御佐役、泰武左衛門

一宿村之儀、先達而ゟ疫痢流行一圓相鎮り不申、今程田作之手入第一之砌ニ候処、假成之百姓は日雇等ニ而大概手入相濟候得共、貧窮者病氣付又は家内病人多難見放者共ハ、自作下作之手入大形ニ有之、無據草荒しニ可置段見及候故、養父村、蔵上村、鳥栖村、藤木両村、今泉村、瓜生野村、右村ミ公役壱銘ゟ壱人宛、都合百〇七人之合力人夫差出、勿論右村ミ庄屋中幷合封之者壱人ツヽ召連罷出致下知、右手入大形ニ有之候田坪、合畝数弐町弐段之草取除、牛原村之儀は流行之病有之、合力難仕相聞候故差除候段、大庄屋新右衛門内ミ申出。

同月廿五日

一養父郡大庄屋新右衛門。右者宿村之儀、夏已来熱病流行ニ而人ミ専相煩、今以流行相止ミ不申由ニ候。然は田作手入第一之時節ニ候処、貧窮者共病氣ニ付而は、無余義手入養も不

相成、大切之一段、大庄屋新右衛門心付、右之村ミ庄屋中へ宿村合力人夫之儀遂相談候処、令同意皆中幷合封之者共人夫を召連、宿村江罷越、厳重ニ令下知、草荒しニも可及、田坪之手入速ニ相濟候と相聞候。宿村之人ミ非常之難ニて、大切之田作手入も不相成處、郷内致一和、宿村難義之百姓を相救候段、御法之主意ニ相叶奇特之至ニ候。依之称美申渡候。

廿六日

一東之方ニ両三夜丑刻、彗星之如キ怪星出ル。

廿八日

一未中刻比、大地震南北ニ揺動。

九月廿七日

一牛原村江流罪之酒井西村庄屋弥三兵衛、柚比村江流罪(之脱カ)同東村庄屋四郎兵衛。右者勤方不直之聞有之候ニ付、禁足申付置、則大庄屋治兵衛を以内ミ其筋相尋候處、両村散史給不足米、去ル辰年ゟ致貫主、其米散史江相與候分は縄之儀にて、餘ハ不残村用ニ取遣候段申出、其筋不審敷候故、猶又吟味之上口書申付候處、最前申出候は、畢竟偽にて、実は弥三兵衛、四郎兵衛申合、東村組頭傳蔵、西村組頭佐吉、仁三治、新兵衛、頭百姓九郎兵衛申談、皆共自分之不埒筋ニ取遣候段申出候故、右五人之組頭、頭百姓とも是又吟味之上口書申付候處、弥三兵衛、四郎兵衛申出候通相違無之、右体之不直之仕形ハ勿論、其外少之義たり共貫立之次第ハ厳重之仕法相立居候處、酒井両村ニ限、散史給米不足と申貫立候ニ、不及年向ニも統而致貫立、皆共自分之不埒ニ取遣候段相顕、御法相背甚以不届者共ニ付、屹度申付候様も可有之候得共、宥恕を以役儀召放、右之村ミ江流罪申付候。尤役宅畳立具等取揚候間其儘召置可申候。

一居宅取揚、小倉村江所替、酒井東村組頭傳蔵。右同断、萱方村江所替、同西村頭百姓九郎兵衛。右同様之科ニ付以書付如是申付。四ヶ村之庄屋中へも夫ミニ申渡。

一科銀壱貫目、酒井西村組頭仁三次。同八百目、同佐吉、同五百目、同新兵衛。是元(マヽ)同様之科ニ付以書付如是申付。

一酒井両村組頭中。右同断之主意ニ付、以書付叱申付。

一下郷大庄屋治兵衛。右者酒井両村之儀、庄屋幷頭百姓とも申談、去辰年已来散史給不足米と相立令貫米、専其者共不埒筋ニ取遣候段相聞江、尤治兵衛ゟも其次第申出、不直筋相顕候ニ付、庄屋幷頭百姓共儀禁足申付置候処、此節夫〻ニ申付候。然は郷内ニ多年右不直筋有之候処、是迄心付も無之候ハ、畢竟治兵衛儀大形之處ゟ右体不埒筋出来、役儀之主意ニ不相叶候。依之當節厳重申付様之筋も有之候得共、此節ハ以用捨不及沙汰ニ候。已来郷村之儀、随分心を相用入念可相勤候。

十月廿日

一酒井東村庄屋小兵衛、同西村庄屋儀兵衛。酒井両村之義、元来百姓共風儀不宜候ニ付、前方ゟ申渡たる筋有之、第一耕作不精ニ有之、百姓之忘本意候者も間〻多、殊ニ百姓中兼〻不致一和、其上村方風俗之害ニ相成候族も有之と相聞、既ニ先達而不埒筋相顕候ニ付、両庄屋役義召放、幷組頭共夫〻に御裁許被仰付たる事ニ候。就夫両人儀吟味之上両村庄屋相立候故、村方之者共令一和、御法専相守身分行作を慎、已来風俗立直候様、厳重令下知候義専要ニ候故、右之通之村柄ニ候得は少も下知方緩ニ無之、随分厳敷常〻可申付候。其上御法筋ハ素り諸事心得方不宜者有之候ハヽ、速ニ遂案内可請差圖義勿論ニ候。若其儘ニ召置候筋相聞候ハヽ、両人可為越度候間、其旨を存、一統是迄之風儀を捨、自今正路之筋ニ立帰、農業一篇相勵、村方成立候様厳重可令下知候。

十二月廿七日

一當新町平七子平五郎と申者、兼〻不行跡ニ有之、其上近年賭事を好、或は馬口労仕、隣且掛合之筋有之、町方之害ニ罷成候段、町役中案内申出候故、先入牢申付。

七年庚寅三月廿三日

一去秋作損毛ニ付、當春ニ至米穀高直に有之、田代町之儀、極貧者共経営筋難相立、當日及極難候段町役中見聞いたし、其儘ニ難差置、竈数百軒ニ及候人高之内百三拾人余之者共江、見斗ィを以多少之致勘弁、救米相與候面〻、及俵数、米弐拾俵別當次郎左衛門、同五俵座親勘治、同弐俵町年寄太兵衛、同壱俵同平兵衛。

三月廿四日

一田代町別當次郎左衛門、同座親勘治、同町年寄太兵衛、同平兵衛。右ハ年次不宜候ニ付而は、米穀も高直ニ有之、田代町極貧者、當日之經営筋令難義候段、皆中見聞之上、竈数百軒ニ及候人高之内、百三拾人餘之者共江見斗を以、救米を相與候段聞届候。町役之儀ハ町中示方ハ勿論、困窮民其外極難之者を相救候義ハ尤之事ニ候得共、右次郎左衛門、勘治、太兵衛、平兵衛儀、當節身体ニ應し救米を出し相與候心底、至而奇特ニ相聞候。右之次第ハ御国江申上、追而可被及御沙汰ニ候得共、先称美申渡。

閏六月十七日

一本役、嶋雄権之介在勤

朝鮮木綿七疋、田代町別當次郎左衛門、同弐疋同座親勘治同壱疋同町年寄太兵衛、同壱疋同平兵衛、同壱疋大庄屋格惣左衛門、同壱疋宮浦東村平三郎、同弐疋城戸村喜右衛門、同四疋高田村恕平。右者去秋田畠作甚敷損毛ニ付、既ニ御差延をも過分ニ奉願候程之年向ニ候處、在町貧窮者共當春ニ至極難之体ニ罷在候ニ付、御救米等被成下候。右之面〻貧民難儀を救ひ、米穀身体ニ應し相與候次第聞届、御国江申上候、依之皆共致方奇特ニ被思召、御時体は被為違候得共、為御称賜右之通被成下候間、難有頂戴可仕候。

十月廿四日

近年朝鮮交易相絶候由を以、御手當之儀被相願候得共、近来別而御手當之儀被相願候得共、近来別而御手當被成下候上、先年ゟ之拝借返上方格別之年延等被仰付置候

儀、此上手當等難相成儀ニ候得共、前ゝ家来共取計方心得違も有之、勝手向差支難儀之旨相聞候。依之別段之思召を以、交易相開候迄當分之内、大坂御金蔵ゟ銀三百貫目ツヽ、當年ゟ御廻被下候間、向後随分倹約相用、家来等迄奢ヶ間敷儀無之様、家法厳重ニ被申付被取續候事専用ニ候。尤交易相開候様取計候儀心掛可被申候。銀子請取方之儀は、御勘定奉行可被承合候。右之通被蒙　仰候。然上は、少も奢ヶ間敷儀無之様不仕候而不叶段、勿論ニ候。尤奢筋之儀は様ゝ有之候内、第一目立候は家作、腰之物、衣類ニ候。依之先達而御法令を以被仰出置候通、猶又已来弥相守、銘ゝニ随ひ諸事不目立様可仕旨、堅可被申渡候。以上。

一近年銀にて大刀作之大小を帯候者多、又は異様之大小も相見へ候。鞘をかねにて張、逆輪(マヽ)等を入候は、銘ゝ用方之存付故ニ而可有之候間、難制止候。惣而武器は不用美飾、質朴利要を専ニ可致事ニ而、銀太刀作之大小は甚目立、

事を、皆中不存段不審ニ候。是又法令之役ゝ大様不埒ニ候得共先ツ不及沙汰候。右一定之制法申出候已後、違背之族有之は、法令役人、大目附、町奉行、郡奉行、目附、徒士目附、下目附ニ至、大様之勤方可及沙汰候条、此旨をも能ゝ可申渡候。以上。

八月十三日

右之通従

大殿様被　仰出、左之通被　仰付候。

一御家中江戸勤之服は、

御壁書を以被仰付置候故、不限江戸表外之旅にても右に準可申事。

一御家中、御国ニ而綿服之儀ハ不及申候得共、冬羽織ニ至而は、格ゝ宜品着用も相見候間、格ゝニ應し不目立品可致着用事。

一御馬廻妻子、上着急度可為綿服候。夏服幷髪飾共ニ不目立品可相用事。

但、木綿ニ似寄候絹類一切被停止候事。

一大小姓之衣服、男女ともに右之釣合を以、相應之衣服可相用事。

右同断

一御徒士之衣服、近来別而宜相見江候。茶宇之袴、琥珀丹後之袴、横麻上下、単上下等一体被差停候間、麻上下相用、都而御馬廻、大小姓之釣合を以、面ゝ格ゝニ随ひ内端ニ可仕事。

但、茶宇琥珀丹後袴之儀、能方之人は其勤有之節斗被差免候。平日は着仕間敷事。

一御徒士中、御紋付之衣類令着用候人多相見江候。已来は縦令父子兄弟拝領之品たりとも、其身拝受於無之は、一切着用仕間敷候。尤拾五歳以下持来之品着用之分ハ被差免候事。

一同妻子之儀、右之釣合を以麁薄之品相用、不目立様可仕事。

但、木綿ニ似寄候絹類一切被停止候事。

一八郷給人中ハ、奉役御廻格在役無役等ニ、府中御家中之単上下等一切着仕間敷事。

一坊主御料理人之儀、間〻御家中に紛候服も有之と相聞候。右之釣合抜群内端ニ可仕事。

一坊主御料理人之妻子、銀之かうかい、かんさし屹度被差留候事。

一町人之衣服、男女共ニ宜相見へ候間、以来目立候衣服着仕間敷候。別而妻子之服目立候故、帯抱帯等ニ至迄不目立様仕、尤銀之かうかい、かんさし之儀、前〻も御停止被仰付置候得共、近来相背候者有之と相聞、不届ニ候間、已来屹度被差留候事。

一諸組以下、右之釣合を以、横麻上下、絹羽織等着仕間敷候。并妻子之儀も絹類決而不相用、身分相應ニ可仕事。

右之通被　仰出候。若相背者於有之は、其着飾衣服等被成御取揚候。尤此書面不残御法令書ニ可書入候。

此旨夫〻可被申渡候。已上。

八月十五日　　年寄中

与頭衆中

八年辛卯正月廿三日

一在町役〻血忌差合等之節、向後御案内申出候様申達。

五月九日

一昨昼夜之大雨にて山潮出、山附村之義、所〻夥敷山抜ニ而大木大石土砂流落、田畠を埋〆、川〻ハ左右之土手筋洗切候場所多、最前之川筋ハ大濱に相成、其際之御田地ハ川底と成、又は大小石土砂洗込、或は洗鑿候田坪数拾町と相聞、其外川〻井堰之義は、壱所も不残洗落し、一体用水を請申儀難相成、右土石入洗鑿之田坪ハ勿論、障り無之田坪と而も右之訳ニ而、田根付不相成場所数多有之由にて、庄屋中追〻案内申出候。所〻別録有之、略之。

右御案内申出候趣、逐一帳面を以入御覧候也。

一國部上村小松久作と申者、母子住居仕候家、昨夜之山抜

ニ而土中ニ埋、右久作母両人行方不相知、多クハ土中ニ成居可申存候故、村方之者堀求罷在候得共、一圓相知不申候。先此段申上候旨申出、人命大切之儀ニ候故、随分穿鑿仕候様申達ス。

七月廿八日

一江戸表杉村直記殿ゟ之御状。

今般於江戸表従　公義被　仰出候御旨、大御目附中様ゟ之御廻状写を以、杉村直記殿ゟ被仰聞、則右写相達候ニ付、左之通御領中為申觸。

可願義は其村〻村役人を以、支配之役所へ相願可申義、若村役人不得心之筋ニ候ハヽ、百姓惣代壱両人ニ而可願出処、近年百姓共大勢申合、領主地頭屋敷門前へ相詰、強訴いたし候類多く有之、右之通大勢御府内へ立入、領主地頭屋敷之門前ニ集り、剰往来をも妨候段、對　公義不届之至ニ候。然とも愚昧之者共全心得違候而之仕業故、是迄重儀御仕置も不申付候。已来右体御府内へ立入、領主地頭屋敷門前ニ相詰候ハヽ、召捕、於奉行所吟味之上、理非之無差別、頭取之者ハ重儀御仕置申付、其餘之百姓共縦門訴不加候共、一同咎可申付候。もし頭取不相分候ハヽ、其村之宗門人別帳糺之上、門前ニ相詰候者とも之内、筆頭之者共御仕置可申付候。右書付村〻にて写取、名主之宅又は高札場、村はつれ抔ニも張置、村役人共得と相弁、常〻百姓共江委細利害可申聞旨、御領ハ御代官、私領は領主、地頭ゟ可被相觸候。

九月廿三日

一三郷大小庄屋中、同一村ゟ百姓壱人ツヽ。右者去ル五月八日山潮洪水、同十四日風雨強、引續洪水出、両度之天災ニ而御領中一統及大破、取分山附村〻山抜にて、大小木、大小石、土砂等夥敷流落し田畠を埋、川〻ハ上ヶ下モ共ニ統而左右之土手洗切、井堰等不残洗落、或は堤所之内も所〻及大破、依之御田地余計ニ荒損し、誠に古来稀成御領中大変ニ付、早速御国へ追〻御案内申上候處、

達御聞、御領中一統不慮之天災ニ而、百姓共令難儀段被
遊　御憂慮、就右先般大殿様　御仁恵を以、御領中ゟ御
請申上居候御用銀御赦免被仰付、猶又皆共労役を深ク御
厭被遊、何卒相勵取續候様被　思召上候。然處大小庄屋
は勿論、百姓共迄御時体を奉寒心、右御普請所其砌前後
之假繕は素り、土砂除ケ等ニ至り御願筋をも不申出、右
破損所百姓共老若男女罷出、尽粉骨及力候分ハ、時節を
不取後、根付等相仕廻候ハ、偏ニ深切に相働候と相聞、
神妙奇持之至ニ被思召上、御称美被仰出候。右之御旨一
統難有可奉存候。

一右相濟、於御廣間猶又直ニ委ク申達ス。

十月十七日

一御国表去年已来御倹約之御法令追〻被仰出、爰元へも其
節〻被仰越、然處當節御国中倹約之御法制格別厳敷被仰
出御旨、當御領中之者共へも屹度申付候様被仰越、猶又
御書付之写之差越候處、省略筋諸事微細ニ被　仰出候。
尤當所之儀は従前〻壁書を以御法之旨讀渡之義にて、猶
又去ル丁丑年已来別而諸事省略筋申渡候事ニ候得共、今
般御国元別而厳敷御取行之儀ニ而候間、此上堅相守、着
物等ハ素り諸事質素に可仕候。扨又遊興筋ハ勿論、當所
之義ハ往還筋之事故、間〻見せ物等令通行候間、右体之
儀不相携、或は兼〻相制置候通、隣国へ見物事ニも不罷
越、随分身分相〆り、省略筋専可心掛候。萬一緩せニ相
心得、違背仕候者於有之ハ、屹度可申付候。

日記抜書

従安永壬辰至天明二壬寅

柒

安永元年壬辰正月十一日

一宗門改ニ付、盲人之儀は、歩行不成部ニ入、追而改候様
申達ス。

五月十九日

一本役、平田又左衛門在勤

一破損掛三人、山方役緒方奥右衛門、御玄関番原郡右衛門、
當春已来川御普請ニ付、出精致苦労候段、称美申渡。

一御門番倉右衛門、御普請所へ引切杖突相勤令苦労候ニ
付、是又称美申渡。

一三郷大小庄屋中。右者去夏山潮洪水にて及破損候御普請
所之内、堤川〻用水差支候急場所之分、當春已来追〻御
普請被仰付、近比ニ至り假成ニ致出来候。就夫大庄屋中
ハ素り、小庄屋中ニも御時体を奉恐感、兼而村〻之者江
茂申聞せ様宜、其上右御普請場所〻江無間断罷出居、村
〻人夫ハ勿論、一体人夫働方等心を相用令下知候ニ付、
破損掛中當節は人夫召遣方別而手配宜果敢取、夫ニ應し
入切人夫高諸品ニ相減、用水假成ニ不差支様ニ相成、某
共ニも安心之事ニ候。右心を用骨折之段、奇持之至ニ
候。右之次第ハ御国へも可申上候条、先壱通称美申渡候。

十一月十九日

佐役、吉野應介在勤

一三郷園部大小庄屋中、百姓中。右者去年五月八日、山潮
洪水ニ付、荒損之田畠開残之分、別而大破之場所にて急
ニ開発不相成、當辰ノ年ゟ弐拾ケ年之間、御年貢上納御
免、且又川普請不被仰付内は、発方難相極分幷永荒之場
所之、御物成上納御免許被為仰付被下候様ニ、先達而以

書付願出、吟味差詰候處、無余義次第ニ付、右願書両通、
畝高寄、御物成之積帳共ニ御国許江差越、委曲相伺候
処、今般御返答ニ被仰下候は、先以大造之御普請所、村
役人幷百姓共ニ至、御時体を令寒心、夫賃銀等之義をも
不申出、一体自分償を以、荒地過半早速ニ地位仕直、御
年貢令上納候段、奇特之至ニ候。追而御吟味之上被仰付
様之品も可有之候。然は此節願出候開発方之口〻、願之
通被仰付候間、年限内ニ開立候様、申付候得と之御事ニ
候。抑右之荒所、最初ハ大ィ成事にて甚御心遣ニ被思召
上候処、一統御時勢を奉恐察、願ヶ間敷義も不申出、開
方ニ格別精力を尽候段相貫キ御聞通宜、願之通被仰付儀
ニ候。此上は猶又皆中相勵、願出候年限之内ニ発方全令
成就候様出精仕、元之御地面ニ仕直候段、上下之為ニ候
間、大庄屋幷小庄屋中下知方は勿論、百姓共精密ニ心を
用、無油断可相心掛候。

二年癸巳二月廿三日

一當町市之儀、漸〻相衰、唯今ニ而は市之形も取失ひ可申
模様ニ相見、尤先年已来為市賑町役中ゟ願出、用銀方ゟ
銀壱貫五百目宛毎年拝借仕、様〻手段を付申候得共、曽
而其詮相見不申、只今之通ニ而漸〻町方之勢も及衰微候
而は、公儀御役人様御通路之場所ニ而、下宿仕候家も無
之様ニ成行可申、旁を心遣ニ存、何レ町役中ハ素り、其
外頭立候者共、存寄書為仕差出候様ニ申付。

八月朔日

一御扶持人中何れ之役迚も、専算筆之人候勤而已ニ而候故、
若年之人兼〻心掛は可有之、尤其藝ニ依り得手と不得手
之分ヶも候得共、其心掛出精之違にて、何ッ迄も同様に
ハ無之筈ニ候。是迄之算筆相應之人連續ニ而、差閊たる
義も無之候得共、少人数故至後年、萬一中絶共有之もの
ニ候得は、其役代ニゟ忽御事閊ニ至り可申は必然之事ニ
候。譬ハ十ニ七八其器ニ當り候人ニ而も、読書假成ニ無
之人は、役柄ニ依たらさる處有之、残念儀ニ候は何方茂

同様と申内、當所ハ差詰之事故、讀書算勘之人不絶様ニ
無之してハ其役其事ニ臨〻面り差支候所を深く勘弁有
之、若年之人勤之透間〻〻ニ、此上猶又被心掛度存候。
尤年比之子弟所持之面〻ハ、此趣を教諭有之、段〻御用
立候様被仕立候義、尤之事ニ候。右之趣ハ相知たる筋ニ
而、新に不及演達訳ニ候得共、此後礒と御事閊ニ不至様、
有之候得かしと希候は第一之義、次ニハ銘〻之為ニ候故、
内〻申達置候。以上。

一御領中之儀、隣国へ挟り候所柄候得は、他領之者間〻入
込、當領之者他領江も時〻罷越候事故、何時如何体之義
出来可仕義も難斗、殊ニ境目ハ勿論其外之村たり共、不
慮之義出来候時、他領掛合事ニ而、即答仕候義も可有之、
右様之節は其村之庄屋處置之趣ニゟ、此方之恥ニも相成
義ニ候間、兼〻如是之意味相心得居、心掛之儀専一之事
ニ候。尤庄屋之義、筆算素り地方之義茂能相心得居不申
候而は難叶訳ニ候間、若年之庄屋ハ猶又心掛、仲間中へ
も申合、講談仕候様有之度義ニ候。尤御扶持人中江以書
付申達候趣を以、庄屋中召呼申達候様、然し屹度申付ニ
而ハ無之候得共、其通相心得出精仕候時は、御用立候義
ハ素り、其身之為ニ相成儀ニ候間、必大様ニ不存様ニ申
達候得と、手代中江申達ス。

三年甲午七月四日

本役、三浦酒之允在勤

一庄屋中之儀、若年多、其上筆算書讀等之儀甚疎ニ有之、
往〻御用之差支ニも可相成様子ニ付、去ル巳八月被仰出
之訳も有之候得共、其已後迚も一切相替たる筋も無之、
只今之通ニ而は極而御用支ニ相成可申、其處至而可歎候
故、内〻存寄之趣手代中以書付一統申達。
先般御扶持人中若年之面〻、及庄屋中之若年、年比之子
弟ニ至迄、書讀筆算心掛之儀被仰出、右之段其砌委細申
達候。於此義ハ甚御深慮有之、被仰出たる御事と相聞
候。尤諸藝之儀其人〻ニ依而、得方不得方有之事ニは候

得共、真実稽古出精次第何とも舊日之通ニは無之筈ニ候故、此已後御扶持人中之若年子弟、有用之諸藝相勵、其内手跡稽古之儀は、其人〻之心掛にて、幾重ニも修業可相進候得は、讀書勿論致出精、其上師範を立、会日を定置、文義一通成共可致吟味覚悟候。偖又算勘之儀も功者人相招、是又会席等を定、可致稽古と之規格申談居候。然は庄屋中之若年子弟共ニ、算筆讀書、其外ニも諸藝稽古有之度事ニ候。讀書之儀ハ其最寄相應之仁有之候ハヽ、其場所其方角勝手ニ随ひ被得指南、猶其上之志も相立、四書之文義等をも被致會得度、存寄之人〻は緒方又右衛門様へ相談有之可然哉、算数之義ハ若年之面〻とて茂、是迄之通にて役義之當用は、随分相達可申事ニ候得共、不圖平常ニ相替たる事ニ臨候時は、行當何分難相濟儀も可有之哉、依之其人〻存入次第、立入候(ママ)術は御領中ニ而算勘功者之仁も有之事ニ候得は、時〻被受指南、第一地方之精微を究、不時之御用郷村之用共ニ不指支様ニ被相勤候義尤候。日勤と申にても無之候故、役用農事之隙、夜分又ハ陰雨等之節、心掛ニ〆随分稽古可相成事ニ候間、何卒出精有之度事ニ候。就夫庄屋中老年又は痛氣等ニ而役義及御断候節、跡役御吟味方之義、従御國許先達被仰越置たる御旨も有之、素り相續之儀希候ハ人〻同様之事ニ候。此已来は大概其器ニ當り、才藝並〻にも無之而は、縦令其子之年齢等相應たりとも、容易ニ跡代ニハ難被仰付越ニ相聞候得共、先般之被仰出を能〻体認之上、年老之仁は、幼年之子弟ニ右心得を以、往〻教育有之度事ニ候。

一両町役中も子弟之教育も有之、其外在町共、今日之生業筋不自由に無之者之子弟ニ至候而も、右ニ準諸事心掛有之候様、已来御教諭有之度事共ニ候。縦令家業筋不怠候而も、夜分閑隙等之節、徒ニ居候而は不宜事ニ流れ易、右体之心掛人〻相勵候様ニ有之、風俗も自然と立直候様、可相成哉と存候。

右之趣は、先般之被仰出已来、是迄格別前方ニ相替申たる様子ニも相聞不申候ニ付、差當存寄之義粗書伸申候。

一去巳年十二月十日、園部上村小松ニ居候新蔵、不慮之怪我ニ而致即死跡、妻子今程難儀仕候段聞届、新蔵儀類い希成遂横死、妻子迄も令難義候段、不便之様子を以、米壱俵與之。此米堤給餘米之内〆遣之。

十二月十二日

一在町へ申諭。在町共近来は間〻心得違仕、鉄砲取扱候者有之と相聞候ニ付、左之通三郷両町へ申觸。

鉄砲之儀ハ御法式有之、前〻〆嚴重被仰出、猶又我〻を以毎〻稠敷被仰付候事ニ候處、近来別而忽ニ相成、間〻心得違有之歟之様ニ相聞申候。無玉威鉄砲ハ格別、其外猟師鉄砲たりとも、源右衛門外之猟師鉄砲里村ニ而取扱候儀、決而不相叶儀ニ而、素

(ママ)大公儀之御法令、聊も忽ニ可相心得筋無之候間、右之旨嚴重ニ御申觸、威鉄砲御免之者ニ而も、鳥威等之節は、時〻御案内申出、御免之上威申候様、御申付置可有候。若違背之者有之候ハヽ、其掛之役〻越度可相成候間、在町共ニ克〻御申諭可有候。以上。

五年丙申八月十四日

一本役、樋口　靱負　在勤

一佐役、古川半左衛門　同

一當春重キ御法事ニ付、御叱之面〻、御赦免被仰付候。御書付左ニ記ス。

一城戸村元上郷先〻大庄屋徳左衛門、河内村元下郷先大庄屋宅平。右者去ル寶暦七丑年勤方不埒之筋を以、両人共役義被召放、右村〻江蟄居被仰付置、然處當春圓鏡様被對重御法事、格別之以御宥恕、此節蟄居被差免候。

一城戸村之内仁田元姫方村先〻庄屋清左衛門。右者立帰者村方江召置、不埒之勤方ニ付、明和四亥年役義被召放、右村へ所替被仰付置。

一園部上村之内古屋敷元曽根崎村太平次、宮浦西村之内陣屋、同村徳右衛門、同人母、同人姉いん。右者姫方村江立帰者掛合之訳有之、不届之次第ニ付、明和四亥年右村へ所替被仰付置。

一城戸村元田代町伊七。右者兼而不行跡ニ有之、町方之害ニ相成候ニ付、入牢被仰付、其後元文五申年右村へ所替被仰付置。

一柚比村元酒井東村先庄屋四郎兵衛。右者勤方不直之筋有之、明和六丑年役義被召放、右村へ流罪被仰付置。

一萱方村元同西村九郎兵衛。右者村方ニ而不直之筋令頭取、御法相背不届者ニ付、明和六丑年居宅取揚、右村へ所替被仰付置。

一小倉村元酒井東村傳蔵。右者村方ニ而不直筋令頭取、御法相背不届者ニ付、明和六丑年居宅取揚、右村へ所替被仰付置。

二月十五日

一三郷大小庄屋中ゟ申出候。當春川御普請被仰付候ニ付、人夫出方之儀、先日委細被為仰付奉畏候。早速村方人〻江申論候。然處先頃ゟ追〻申上候通、去夏秋両作之損毛替被差免。尤酒井村居住は御差構、外村之義ハ勝手次第住居。

一姫方村元長野村文五郎、田代村元宮浦東村善右衛門、萱方村元同村忠兵衛。右者延享二丑年、上郷村〻百姓中訴状差出候節、頭立不届者共ニ付、同卯年右村〻へ所替被仰付置、當春圓鏡院様被對重キ御法事格別之以御仁恵、所替被差免夫〻ニ以書付申渡。

六年丁酉正月十七日

一去宝暦七丑年、同十三未年、御咎之筋有之、御國へ被差越候者共、當節帰郷御免、今夕帰着仕候處、存寄有之、今晩は大庄屋預ケニ申渡、町宿ニ一所ニ召置候様、明日評議之上如何様共可申付。

二月十五日

一三郷大小庄屋中ゟ申出候。當春川御普請被仰付候ニ付、人夫出方之儀、先日委細被為仰付奉畏候。早速村方人〻江申論候。然處先頃ゟ追〻申上候通、去夏秋両作之損毛

強ク、極〻難儀之年柄ニ而、當春ニ至り食用必至度無御座、既ニ御救奉願上御事ニ御座候得は、片無は素り山野ニ掛葛根を掘、或は日用拵或ハ山拵等ニ而、漸當日相凌候体之者而已御座候得は、川御普請ニ罷出候程之者、村ゟ五人拾人之間ニ多人数罷出候儀、何分ニも難相叶趣歎出申候。山潮破損所御普請之義ハ、極〻差掛候場所多候座候處、右体之艱難之年柄ニ御座候得は、御憐愍を以、何卒毎日人夫賃銭御渡被遊被下候ハヽ、當日〻〻食用之備仕、御普請夫為相勤申度奉願上候。左様無座候而は、老親妻子等迄も面り飢及候外無御座候。誠ニ御時体奉恐察罷在候得共、右申上候通之儀に御座候ニ付、無據御歎申上候。此段被為聞召分、願之通被仰付被下候ハヽ、難有可奉存上候。右事情無據相聞候得共、御国表へ御仕向之義被仰越置候ニ付、節〻申論置候様、手代中へ申達ス。

七年戊戌五月四日

一御銀弐貫目、田代町。右者當町之義漸〻零落仕候ニ付、先年已来仕方を以、御銀拝借之義奉願上候処、宜御聞通被為遊、是迄毎年願之通被為　仰付、甚町中之勝手宜、殊に右銀借廻之利息町用銀ニ相加へ、町中之雑費相償、成丈貫銀之石當(ママ)も相減候様ニ仕、猶又當日凌兼候極難之者相救、或ハ居宅之修理等相加へ得不申段之者へは、見量を以修理銀等をも相與、誠以不一方蒙御蔭、町方一統之大益ニ相成、勿論右体之雑費相償候余分取集申候処、次第ニ相應之用銀出来仕、不時之備相立、別而難有奉存上候。然は御時体も被為違候處、又候恐多御願難申上奉存候得共、當年も右之御銀も拝借被為　仰付被下候ハヽ、重畳難有仕合可奉存上候。尤御返上之義ハ来亥ノ三月限無滞上納可仕候趣、町役中ゟ書付を以願出、願之通申付。銀は用銀方ゟ出之。

十月十五日

一本役、平田主典在勤

圖書殿、監物殿ゟ御両所へ御宛被成候御書付、左ニ

記之。

一御国許ゟ之御状面。御家之義御小知ニは被成御座候得共公義向御格並重ゝ御勤被成、夫に被應し江戸表ハ勿論之義、諸御勤向之御入料、御勤御下向之御物入、且御役儀ニ付、朝鮮向之御備、其外旅役被差置候所之御入目、御平常定式、不時之御用費、此等之口ゝ何れも御交易利潤之餘勢を以、御入料に被當来たる義、年久敷事ニ有之、其交易漸ゝ相衰、年ゝと御利潤無之様ニ相成、近年ニ至候而は、御交易之道終ニ相絶、因而朝鮮向ニおゐて御利益を被得候筋無之、總而之御用費御借銀を以、多年被補来候處、近来ニは御引當物も無之候ニ付、御借銀調達不致、定式ハ素り御手不被届、差掛たる御用之節は、御急辨之為不被得已、御餘分無之田代之御年貢米をも追ゝ御引當借ニ取斗、今程大銀ニ及、當年之御年貢米御国渡無之積ニ相成、御時体とは申なから残念無限義共、御領中之者共ニも同前に可存、笑止千万成事ニ候。扨又御家中之義、朝鮮御役義ニ付候而ハ、多勢之人数御分限御不應ニ候得共、被減候儀御自由ならす、御扶助之御渡も多年不全、御撫育方之御手當様之心遣不大形事ニ候。然は前文令書載候通之御国体ニ被至、御取行難成ニ決候ニ依、去ル申年其段

公義へ御愁訴被仰上候處、御聞通宜、御永續之為御手當御金壱万弐千両宛年ゝ御拝受被為蒙仰、誠ニ恐悦至極難有御事ニ有之、如右大金御頂戴之上は、御勝手向之御土臺も相立、江戸表へハ不及申、御國共ニ御差操方御心克相成候義と、不存候而不叶筈ニ候得共、彼地年分定式之御入料斗も大造之上、近年は差延難成御入料之口ゝ差湊、多分之御出金有之、尤御上納方御引落ニも相成、彼是にて一ト通下墨候とは大ニ違、御下銀之分ニ而彼地諸御入料決而有餘無之、猶御國ゟ御銀被差向候而は、(半脱カ)御凌難成積ニ付、其心遣窺中ニ候。然処右御許受金被蒙　仰候節、御別紙之以御書付、已来は御国体之姿の被変、御倹約御

省略之筋被取行、御身代之規矩を被立候様ニと、御教諭之御旨有之、依之御永久之御主法可被取行段、

真常院様ゟ御朱印之以御書付、御下知被仰出候処、様ゝ成御故障有之、御在中終ニ御取行不至、當今に至候而は諸般礒と被行詰、第一御家中御撫育之御手當大ィ成不足と相成、其餘之御用費等御償之道無之、勿論

公義ゟ御達被成候御旨も有之、彼是弥以早ゝ御主法御取掛、御身体之規矩を被立、諸事之姿を不被替候而は難叶、依之御家法是迄之御鑄形を被改替、御国田代之御年貢米幷公貿易之御所務、且御拝受之壱万弐千金を以、上ゝ御衣食を初、萬事之御分量ゟして、下ゝ御家中末ゝ迄之御撫育方御手當を新ニ立、其外江戸表御入料は素り、諸方口ゝ共悉皆右之三口を以御用費ニ當、計入而為出之良法を急度土臺ニ踏へ、切縮かたき所を是非共ニ切縮候而、御永續之御規格新タニ建立、其御法上下ともに周密に相守、御勝手向御立直被成候筋之取斗、此場機会ニ付、御屋形へ御主法方を被設、拙者共出張其御用筋専精詳ニ取調候。然ルニ右取行ニ先達候品は、米穀銀貨之備ニ候處、御差操切迫頂上ニ被至候上ニ付、其手段無之候を、様ゝ工面を尽、過半ハ調候積ニ候得共、今三百貫目之銀数調達不致候而は、御規格立之御手當不全夫而已ニ無之、差掛年内御家中御扶助米之手當も不相届、大切千万之時体ニ候。抑當節之御主法ハ御国家存亡之間を、上御一己大切と思召被取行候計之御訳ニ曽而無之、

公命之重キ御旨聊も等閑ニ難被差置は勿論ニ有之、いつれニも御國体之姿を被改替たる御実事を、

公義御聞通被遊候様之御取斗ニ不至候而は、決而御訳不被為立、其儀無之おゐてハ、御首尾合ニ被拘候は必定之儀ニ而、大切至極成事ニ候。就夫御領中之儀、毎度御用銀被

仰付候処、令出精奇特千万成事ニ有之、殊ニ近年は風旱水之憂も打續候上ニ候得は、御用銀之義容易之訳を以可

申渡様無之候得は、被蒙
公命候上、御身体御土臺之規格を被立直候取行方、其最初ニ備を被立候は、第一御領中之御年貢米ニ候處、右ニ書述候通之訳ニ而、御膳米御差足米外當年御覆無之積に有之、其手段様〻加差圖候得共、是迄調達之道無之、然とて決而其儘に指置不相濟儀ニ有之、今度有田杢右衛門被差越候ニ付、委細申含置候条承達有之、尤當節御主法取行之次第は、公私ニ付而重大之御事ニ候段、御領中之者共一統へ申聞せ、感服之上正銀百五拾貫目令出精候様、此節は誠ニ御浮沈之場故、出銀於御用立候ハ、御國家へ對し大ィ成忠義候段、懇ニ可被申付候。以上。

九月

田嶋　監物
古川　圖書

平田　主　典殿
古川半左衛門殿

右ニ付、爰許時体等旁被尽御評議候上、左之通被仰渡。

今般杢右衛門此表へ被差越候節、主典半左衛門へ別紙之通被仰付越、猶又杢右衛門申談、御領中へ相達候様、被仰付越主意は、別紙ニ有之候通被蒙、
上御身体之御土臺之規格を被立候御先務は、米穀之御備第一ニ候處、皆中存知之通、當御領中年貢米大半御借銀引當ニ相成、銀先へ御渡被成候ニ付、御家中之御撫育御手不被届、依之右借銀口〻此節不残拂切被仰付候。然処當所御米ニ相當候御借銀御払前、元利四百八拾弐貫目餘ニ有之候處、御国諸向御逼迫之中なから大銀之調達被仰出、御郡中市中之出精銀其外御差繰を以、御銀主引請等ニ被仰付候口も左之通ニ有之、其内當所へ被差向候現金三百五拾貫目餘ニ有之候内、やうやく銀弐百貫目丈相備候處、今百五拾貫目余之不足ニ有之候。當御領中之儀連年御用銀被仰付、頂上灘之中と申、殊去年銀調達方ニ付、被仰渡置候品茂有之候ニ付而は、弥以此砌少したりとも御領中迷惑之筋は不被仰付筈ニ候。併此節は是非〻

〻此表御借銀を絶チ已来御貢米不残御国へ不被取廻候而は、御家中御撫育之道相絶、
公義可被為蒙御咎段必定にて、御浮沈之御場ニ候得は、何之道ニも右不足たけ之銀は不相調候而は不相叶候付、御国ニおゐて色〻御作略有之候得共、何分調達不仕ニ相決候。依之不被為得已今度御差圖有之、御国ゟ相達候弐百貫目之銀を土臺にして、不足之分百五拾貫目を御領中に引請、銀先相對を以遅速之間拂入差引相濟、御借銀之根を絶チ候様被仰付度被思召、別紙之通被仰越たる事ニ候。然處前〻書述候通、御領中連年の困窮、殊更當年之出来穂不熟ニ付而は、御領中難儀之体見届之前ニ而、御差圖之儀なからも、右不足之金数、御領中江引請候様ニと難申達、因而様〻令評議、五拾貫目餘は於當所極〻無余義操合を以相償、跡百貫目たけを御領中乍難義引請、左之積合にして御借銀之根を絶チ候様申渡候。偏ニ御主法御取行之御土台之調否ハ、此節御領中一統之覚悟ニゟ候事ニ候間、深く勘弁之上、申達候筋尖ニ御請申出候様、可被申渡候。以上。

亥十月十五日

有田杢右衛門
古川半左衛門
平田　主　典

手代中

覚

一銀四百三貫六百三拾七匁
（御米引當口〻御借入之分
一同七拾八貫四百弐拾五匁
（右は利銀當戌十一月迄ニメ
メ銀四百八拾弐貫六拾弐匁
内三拾八貫四百〇四匁
（博多にて金五百両調達代銀元利拂前凡如此、御国
ゟ御手當被仰付候分引之
同九拾三貫四百六拾五匁

（坂越御借銀元利御拂前、右同断之分引之
残銀三百五拾貫百九拾参匁
（當所隣旦ゟ借入之口ゝ元利御拂前之分
同弐百貫目
（御国ゟ御仕向之分
同百貫目
（御領中江引請被仰付候分
同五拾貫百九拾三匁
（當所にて此節差繰を以調達致候分
但此残銀三百五拾貫百九拾三匁之内、銀弐百九拾弐貫
弐百三拾七匁ハ元銀之分、同五拾七貫九百五拾六匁ハ
利銀之分
以上

御借銀口入之面ゝ江、左之通以御書付被仰渡。當表御年
貢米之儀、連年御借銀引當ニ相成、銀先へ御渡被成候ニ
付、御家中御撫育方御手不被届、其上先般
公義ゟ被仰出之御旨も有之旁ニ付、此節御主法筋被取
行、當所御米引當御借銀不残拂切被仰付、別紙之通御領
中へ申渡候。依之御借銀口入之面ゝ、銀先へ懇ニ掛合、
御為宜舗相働候様可被申渡候。以上。

御借銀口入之面ゝ
田代町別當　勘　治
病氣ニ付名代差出　荒木次郎左衛門
病氣ニ付名代差出　草野忠平
同断　酒井喜兵衛
田代町　与傳治
同断　高田村　恕平

八年己亥六月廿六日

一下郷大庄屋治兵衛、養父郡大庄屋新右衛門、上郷大庄屋
弥次兵衛。右者去ゝ酉年御米支ニ付、御領中江御用銀百
五拾貫目被仰付、右銀高之内五拾貫目高掛ニ令差圖候
處、年並不宜候ニ付而は、全之貫立難相成、弐拾貫目丈

ハ借替上納令皆濟候と相聞へ候。然処去年之儀、近年稀
成凶作にて、莫大之銀米御差延願出、剰水入村之義ハ、
御救をも被成下候程之年向ニ候得は、右之借銀利銀丈之
儀も、決而貫立難相成候筈ニ候を、右利銀拂之手當とし
て、案内をも不遂、余分之米高令貫立候と之儀相聞、手
代中ゟ及尋問候處、貫立之最初案内申出候儀、令忘却候
と之義、口上書を以誤出、猶又銀米差引之目録等ニ至、
手代中ゟ指出見届候。抑地高掛之重キ儀ハ勿論、少之儀
たりとも別貫等之儀ハ、前方ゟ申達置候筋も有之候處、
何たる申出も無之、加之極ゝ損毛之年向をも不相厭、余
分之石高ニ候を勝手次第令貫立、甚以不埒之至ニ候。依
之禁足申付候条、相慎可罷在候。

九年庚子八月三日

一佐役、児嶋平左衛門在勤

一河内村介右衛門、同村権四郎、同村徳平、貝方儀平次。
右者河内村之内見方山添川原山草山之處大ィニ焼候ニ
付、山役中ゟ色ゝ穿鑿仕候處、右焼候者漸相知候ニ付、
山役ゟ案内申出、先禁足申付置。

十二月九日

一久留米御領小郡町、佐嘉御領村田町江、第一之興行有之、
爰元之儀ハ右体之義不相携候様、兼而御制法被仰付置候
處、在町之者共、第一の存をいたし候段手代中ゟ申出、
手代中に任之。

一田代町四郎右衛門、幸蔵、甚蔵、手錠申付。同町重左衛
門、幸右衛門、源作、禁足。瓜生野町善右衛門、縄下。
同喜平次、手錠。嘉平次、禁足。宿村文五郎、禁足。今
町徳平、手錠。園部上村三介、禁足。合人数拾弐人。

天明元辛丑五月四日

一河内村庄屋蔵之平出。同村茂次平と申者、先年乱心ニ罷
成、養生を尽し全快仕居候處、去子十一月比ゟ又ゝ其機
有之、此度は火を取扱、一統も甚以心遣仕、囲に入置養
生を加へ候得は、正月ニ至り得快氣、専耕作出精仕居申

候。然處當月朔日又〻稠敷再発仕候ニ付、又復囲ニ入候處、今四日九ツ比囲を抜出、近邊ニ住居仕居候伯母方江駈込、八十余ニ成候伯母を横槌ニ而打殺、従弟文七儀は近日相痛打臥居候を、是又右之横槌ニ而頭を打割候故、半死之体ニ而漸息之通候斗ニ候故、早速内外之醫師相招、薬用等為仕、右茂次平儀は直ニ搦置候段、手代中ゟ申出。手負之者ハ念入保養を加、茂次平儀は搦之儘番人等相附召置候得、囲之儀は猶又厳重早〻出来候様、申付候得と申附。

八月廿四日

一本役、古川蔵人在勤

一蔵人ゟ申達。御領中人民之安危は仕置方之精疎ニ相関、正曲勞逸は當役今日之身持行作ニ寄り可申儀ニ而、不肖之某蒙其職今般罷越候段誠ニ大切千萬、実ニ某式不應身分ニ御役儀ニ候得共、畢竟持格〻召(マヽ)役ニ而被仰付儀ニ候得は、達而御辞退茂難申上、先御請申上、此度罷越候。

就夫各〻は年来之勤ニ而、先〻當役之勤向茂能被存居、且御領中之時体ニ至り諸事功者之事故、某指圖方不行届儀は、無伏蔵被申聞度候。抑某一分之不調法は、某壱人を御叱被成候得は相濟候儀ニ候得共、御領中ニ相関候儀は、後弊不輕事ニ而、斯申達候段聊身分を厭候訳ニ無之、御呵ハ叩職候儀覚悟之前ニ候得共、指圖方疎略有之候而は、其疎略人民ニ及ひ、人民ニ及候儀は某何分ニ御呵被成候而茂不帰事故、此所別而不安儀ニ存候。仍而は縦令某身分ニ當候事たり共、御領中之指支ニ可相成と被存候筋は、少茂無遠慮可被申聞候。勿論某におゐても當時其職ニ居候上は、萬端隔意なく申承ニ而可有之候。是又左様相心得可被置候。尚愚意之次第は追〻可申達候。以上。

八月　古川蔵人

手代中

廿五日

一蔵人ゟ役〻江申達。會日ニ旧例ニ付、是迄袴着用不仕儀と相聞候得共、存寄之筋候間、以来會日ニは袴着候間、手代役以下茂其旨心得、平日袴着用仕候得、破損掛山廻役ハ裾細ニ而出勤仕、朔届(望)ニは肩衣着候間、朔届(望)ニ出候面〻茂申達其通可有之候。

一毎日出勤掛役順ニ不拘、出掛ニ逢候間、一役宛相揃候上、其通仕候得と申達ス。

九月九日

一御支配之御年寄中ゟ之御書付、今般御国許ニ而被取行候御主法之主意ハ、去戌年八月之書状を以、田代先役江申達置候通ニ候間、彼地到着之上披見可有之候。就夫右御主法取行之儀、御出方之筋を被相省候段は不及申、夫而已之儀無之、去ル申年　公儀江　仰出之御旨ニ付而は、御國躰之姿を被改変候儀、相顕候御取計無之候而難叶、依之年頭之御規式を初、御祭事諸御祝事ニ至り、重儀をも其形を被残候迄之御取行有之、扨又御金壱万弐千両、年〻御拝受被成候而茂、猶御不足之御身体柄ニ候段、　公儀江御聞届被遊、三ヶ年ニ一度御参覲、四五ヶ月御在府と被仰出置、御献上物之品数をも被相省候。如斯　公儀之御勤たに御用費を被省、被為蒙御用捨候程之御事ニ候条、是等之御主意を被相含、御領中之儀、以前ゟ仕来之筋、共〻事品ニ依り形を被残候迄ニ取計、素り無益之儀と相見候は不及申、少之御出方たりとも省略可相成筋は、深く心を可被用、假令他国江相拘候御仕来事共ニ、時宜ニ應し省略有之、最前御領中之趣と変り格別至(倹)検之際相見へ候程ニ無之候而不叶事ニ候。乍然御国内とハ少し訳違候間、万事ニ付時所位之勘弁専一ニ候。勿論取計之筋難決儀は早〻可被伺越候。一ト通之品は取計之上、追〻其段可被申越候。以上。

一火用心之儀は、毎歳壁書を以申渡儀ニ候得共、委敷儀は書面ニ記し無之、尤銘〻油断可致様茂無之候得共、平易之時は自然と用心茂輕薄ニ成行候段、何方迚茂人情之常

ニ付、此度左之通申付候。弥無油断相心得、家内ミ女童江茂此趣折ミ教訓可致旨、在町之役ミゟ懇切ニ申付置候様、可被相達候。以上。

一居爐裏之儀は、火之元大切之場所ゆへ、毎歳両度宛塗替可申事。

一不限男女拾歳以下之者へ、燈或は火鉢之類為持申間敷候事。

一神佛之燈明ニ氣を付、不用心成儀等致置申間敷事。

一行燈之下ニ紙くす置申間敷、尤休ミ候節、猶又氣を付可申事。

一家内ニ而紙そく(燭)或は松等ともし候節、随分氣を付、若風立にても致し候時は、成たけ無用ニ可致事。

一家内ニ而假初ニも燃さし抔を持歩き申間敷事。

一火燧ニ随分氣を付可申候。尤夜分休ミ候節、必火を入置申間敷事。

一くわへきせる致し、打臥申間敷事。

一塵焼致候節ハ始終付添居、尤相仕廻候時念を入消し、跡ニ水を掛可申事。

一風立候節は別而火之元を可入念事。

一自身番之儀、無懈怠調敷可相勤候。尤心掛少ニ而茂怪儀見當候ハヽ、不限火災、直ニ筋ミ江相訴候事。

以上。

一家頼中之儀ニ付、書付及印鑑弐枚両町江相渡。

一家頼共、於在町法外之儀相働候ハヽ、無用捨直ニ此方江可申出事。

一於在町茶たはこ之外、少之饗應茂致し申間敷事。

一金銀米穀之類其外商賣物、何品ニよらす、此方之印形なく猥ニ相渡申間敷候。尤少之品たりとも、掛賣決而不可致事。

晦日

一御膳米弐拾五俵減少記之。御膳米之儀、近年は百弐拾俵宛上納被仰付候處、御主法ニ付而は、諸事御倹約被為取

行、殊ニ御膳米之儀は、仕立方別而手入之儀と相聞、郷方可令難儀候ニ付、今般弐拾俵御減少被仰出。尤其時ミ増減も可有之儀ニ候得共、當年ゟハ百俵宛上納仕候様被仰下候間、右之趣、三郷大小庄屋申江可被申渡候。

十一月朔日

一去月廿八日、以書付申渡候訳ニ付、大庄屋ゟ壱人、小庄屋一組壱人宛、今日初而罷出ル。

一破損掛申江達ス。御屋敷御構垣之儀、連ミ之破壊と相見へ、既ニ形も無之様相成居、御構之儀と申、第一不用心ニ有之、片時茂其向難差置候ニ付、當時乍御物入急ミ御普請之儀申渡、則致出来候。乍去此節ハ新規之御普請ニ而、一所ニ御物入茂強候故、全御普請ニ茂不至、先は御構之形を出来候と申迄之儀ニ候。何れ此向ニ而は不相濟候条、来春ニ相成候ハヽ、又ミ令差圖候品茂可有之候。尤其外御屋敷内所ミ破損所等も相見へ、只今之内修補不致時は、是又頓而可及大破候。惣体破損所小破之内修補を不加候故、及大破候と申儀は、目前相知たる事ニ而、況其為之役人決而油断無之筈候處、右之通形茂無之様相成候迄、其向ニ致置候段、役儀之主意を失ひ、勤方甚以大様不埒之至ニ候。破損掛は破損之場所を致見分、御普請方諸事御為宜敷様、不令下知候而不相叶儀ニ候を、大様所より此節新規之御普請と相成、第一御物入と申、其為之役人御立被置候詮無之候。則右破壊之次第ハ、先般御支配江茂委細御案内申上置候故、屹度存寄之旨茂有之候得共、先此節迄は令用捨候。就夫向後御屋敷内は勿論、上使屋其外諸御蔵ミ共ニ風雨之砌ハ不及申、時ミ立廻致見分、小破之節直ニ修補之儀令下知候。御勝手向追年被差迫、御普請場は年ミ相増候様有之候而、上御身代御立可被成哉、勿論如何程心掛候而茂、損する時節ニは損し、崩時節ニは崩候儀、當然之儀ニ候得共、心を用と不用とは格別之違ニ而、殊ニ先般申達置候通り之御時体ニ候得は、尚又御為筋深心を可用候。若此以後大様之勤方

於有之は、無用捨直ニ御国江申上、重ク可及沙汰候。右之趣可被申渡候。

十二月廿四日

一佐役、上川定右衛門在勤

一酒屋麹屋ゟ先達御運上銀御減少之願、去ル十七日書付を以、御免之儀申渡候處、昨廿三日身分祝として樽肴差遣し甚不届ニ付、右樽肴は直ニ返却、今日申達候は、御時体ニ付而は、右様之願差上候而は可恐入筈之處、甚以不埒之仕形ニ付、酒屋中閉店申付。

一御国御支配方ゟ之御状

一一筆申達候。長崎御奉行御交替、其御領御通駕御泊休之節、佐役ゟ御音物之御使者相勤来候處、供廻之儀以前之格ニ違、多人数召連、其外御貢米初仕出ニ付而之出張、宗門改幷御境目見分等、奥役同然罷出候節之供廻共ニ、奥役佐役同様ニ召連候由相聞、其余振合共ニ是迄追〻相勤候佐役心得違茂有之たる哉ニ相聞、如何敷候。平常格〻之分ハ不及申ニ茂、御役筋之輕重ニ付而は、他所向勤事之節茂其差別無之候而不叶儀ニ候。依之此節佐役勤筋之節ニ召連候供廻之人数相極、状末ニ書載せしめ候間、以来定之通可被相心得候。就夫大小姓中江御使者勤、其外共ニ御馬廻勤向之儀を被仰付候は、於何方も御繕勤ニ候段は無申迄事ニ候。依之於其元佐役より御使者勤等有之候節は、案内書状幷日帳ニ記候儀共ニ、御繕勤と書載有之候儀不苦段、勿論之事ニ候。右之趣可被得其意候。恐〻謹言。

十二月五日　　田嶋監物
　　平田隼人

古川蔵人殿
上川定右衛門殿

佐役ゟ御使者勤之節、召連候供廻。

但、奥役之勤向相繕候節之供廻は、其節之可應時宜候。

一若黨四人

一鑓持壱人
一挟箱持壱人　上下九人
一草り取壱人
一合羽籠持壱人

但、御使者勤之節、歩行ニ而可被罷越候。若痛所又は風雨之節、歩行ニ而勤向不都合ニも候ハヽ申談、駕籠可被相用候。

宗門改、御境目見分、御貢米初仕出等之節、佐役供廻。

一若黨壱人
一鑓持壱人　上下五人
　　騎馬
一草り取壱人
一夫壱人

（但、弁當雨具持

但、痛所有之騎馬難成候ハヽ、あんた可被乗候。

一佐役之儀、御領中は不及申、移代之節共ニ駕籠乗候儀、無用ニ候事。

以上。

一筆申達候。其地賄役方ニ而諸請拂之指引、奥役證印を請候儀、近年は十日印之格を失ひ、日延ニ取計候趣ニ相聞、如何敷儀ニ付、今度御勘定奉行所江状末之通申渡、其許賄役江為及差圖候間、可被得其意候。将又爰元御主法御取行ニ付而は、諸旅役所共ニ同様之儀ニ付、於其御領茂是迄取行来候定式事之内、減縮可相成筋は不及申、新成御出方は少之儀たり共、成丈相省候様心を付、御出方輕〻候筋可被相尽候。尤賄役江事情等精申達候儀、専要之事ニ候条、何れニ茂御為ニ相成候様、熟談可被相候。此段為可申達、如斯ニ候。恐惶謹言。

十二月五日　　田嶋監物
　　小野六郎右衛門
　　平田隼人
　　古川圖書

古川蔵人殿

上川　定右衛門殿

御状米御書付。

田代賄役方諸出入請払之差引、以前ゟ奥役佐役證印請候仕来有之、其上宝暦八戊寅正月申達有之、嶋村弥次右衛門為賄役被差越候節、尚又申渡候通、十日印之格ニ候処、近年は其格不相立、證印請候儀日延ニ相成候と相聞、甚以如何敷候。以来は急度前ゝ之通、十日分之請拂奥役佐役證印を請候様可取計、尤御主法ニ付而は、万端減縮之筋取行方、奥役江相含置候品茂有之候間、是迄仕来定式之儀ニ而も省略筋ハ不及申、新成御出方は弥以之儀、一ゝ奥役佐役江申出、得差圖取計候様、可相心得旨、賄役田井渕右衛門江早ゝ可被及差圖候。以上。

十二月五日　　御勝手方支配

御勘定奉行所

一筆令啓上候。御書付を以状末之通被仰出候条、左様御心得可有之候。尤渕右衛門江茂御達可有之候。此段為可申伸如此御座候。恐惶謹言。

十二月五日　　樋口靱負

古川　蔵人殿

上川　定右衛門殿

児嶋　平左衛門殿

御状末御書付

田代奥役佐役賄役等、彼地交代後、日数十五日之逗留被仰付置候段、享保二十年御極被置候處、近年ハ定日を越、令逗留候人有之候と相見、不埒之事ニ候。以来ハ交代後、田代滞留之日数、右定之通急度無相違様可被心得候。万ゝ一重病又は格別之故障等ニ而、定日之出立難成儀茂有之候ハヽ、其訳委細ニ願越候様可被致候。

一右同断移代之節、博多逗留之儀、定日無之候。依是迄勝手ゝゝニ多日逗留及候と相見、如何敷候。依之向後は博多之逗留、御国ゟ被差越候節は日数十五日、交代帰国之人ハ日数八日、御極被仰付候間、其心得を以手前可相仕

廻候。尤右日数之内、出立上船等ニ及候人は、御為之事ニ候。右之趣被得其意、田代役江被差越候面ゝ江兼而可被申渡候。尤只今在役之面ゝ江茂可被申越候。以上。

十二月五日　　年寄中

與頭衆中

一筆申達候。爰許之儀御主法御取行ニ付、諸般減縮被仰付候。右ニ準し其元省略之筋之儀、状末ニ令書載候間、被得其意夫ゝ可被取計候。尤右之外減縮之筋心付次第追ゝ可被伺越候。右之段為可申達如此ニ候。恐ゝ謹言。

十二月五日　　田嶋監物

平田隼人

古川圖書

古川　蔵人殿

上川　定右衛門殿

一年始御蔵開之御祝、是迄五献ニ候を三献ニ改。

吸物

皿盛　　押

一右同断之節、是迄は奥役佐役幷賄役ゟ扇子三本宛持参、手代ゟ同弐本ツヽ、差出来候得共、以来其儀ニ不及候事。

一年始初而昌元寺、西清寺

御霊前江参拝之節、御香奠幷扇子三本ツヽ、持参仕来候由ニ候得共、以来は御香奠斗左之通相備、扇子持参ニ不及候事。

御香奠銀壱両　　奥役

同銀弐匁　　佐役

同銀壱匁　　賄役

但、御法事之節茂同様可被相備候。尤御法事之節ハ、奥役ゟ御代番可被相勤候。且奥役ニ限り自分御焼香仕候儀、御免被仰付候事。

一年始ニ付、為祝詞扇子持参之格相改、以来左之通

扇子三本入三箱　三郷ゟ
同　三本入弐箱　両町ゟ
右奥役江
扇子弐本入三箱　三郷ゟ
同　弐本入弐箱　両町ゟ
右佐役江
扇子三本　三郷ゟ
同　弐本　両町ゟ
右賄役江

御扶持人中
三郷大小庄屋中
両町役中
穀物改役中
大廻船差引役
馬醫
田代町平之者

六十人中
寺院

但、右銘〻ゟ奥役江扇子弐本宛、佐役江扇子壱本ツヽ、賄役江は御扶持人以下其類之組合ニ而、輕扇子持参之事。

一御扶持人中、新規受礼之節、奥役扇子弐本、佐役江同壱本ツヽ、令持参候事。

一飾肴

但、長崎御奉行田代御休泊之節は、是迄仕来之通、御本陣ニ差出候事。其外御大名様御通駕之節は、飾肴相止候。尤国許今程厳敷倹約取行ニ付、差出不申候趣取繕可為挨拶候事。

以上。

廿六日

一今日目付役中江以書付申渡。目付役之儀は役柄茂違、年齢人品之撰抜は勿論、御奉公之浅深ニ茂依可申儀ニ候

處、以前ゟ之形と相聞、玄関番ニ被差出候得は、直ニ目付役をも相勤候様相成居候段、役儀之重所不相見如何敷候間、以来は人柄吟味之上、目付役被　仰付候様可被取計候。尤右之通相改候段、勿論ニ茂可相成為ニ候条、向後ハ縦令玄関番年数相勤候とも、其器ニ不當人は、可被仰付様無之候。此旨兼而被相心得置、尤一統江茂相達可被置候。以上。

一宗門改之節、饗應無之様之書付。宗門改某共廻村之節、大庄屋方ニ而先格祝差出来候様相聞候。然處追〻申達候通、御国許御主法御取行ニ付、諸般厳敷減縮被仰付候儀、於御領中も夫ニ應し候様不取計候而難相叶、其上某共在町江罷出候ニ付而、其所之造作ニ相成候様有之候而は、當役之身分ニ取、別而無本意次第、殊ニ兼而被仰付置候御旨茂有之、旁ニ付来年より祝差出候儀無用ニ可致候。尤先達而も大庄屋中江申達候通、自作之品又は屋敷内之菓物等輕〻仕出差出候儀は、下情を通る之為ニ候間不苦候。尤宗門改ニ不限、不時見分事等ニ罷出候節迚茂同様相心得、若萬一少ニ而も取繕丁寧之振舞於有之は、可及沙汰候。

二年壬寅正月十六日

一田代村仁三次、去〻ル八日柚比村之内平原松山ニ而自縊候ニ付、御吟味之上、弟正左衛門村替被仰付、且御裁許事左ニ記之。

一田代村仁三次自縊ニ付申渡。田代村庄屋益左衛門。右は去〻ル八日、同村仁三次儀、平原松山之内ニ而令自縊候段、案内申出候ニ付、早速役〻見分之上、益左衛門且組合之者江茂遂吟味候處、仁三次儀、平日村方之者ニ對し口論等いたし候儀無御座、其外疑敷儀茂見聞不仕、尤近年病氣差出、農業之働難相成難儀仕居、定而右病難ニ付与風了簡違仕たると存候旨申出候。病難と申も狂氣或は疝火抔と申類之痛は失本意候病氣故、横死茂有内之事ニ候得共、左様之病症共不相聞、本精有之、右之通存究候段、死ニ替候程之趣意無之候而ハ難相叶、依之猶又再應相尋

候處、最前申出候通ニ而、其外意趣遺恨等之儀毛頭無御座、一類不和成儀茂不及承旨申出候。然は弥極貧病苦ニ迫り、兎角渡世難相成存候處ゟ、覚悟を極候事と被相察候。右之通病氣ニ付、農業之働をも不得致極貧者ニ候ハヽ、御救ニ而茂願請可申儀、殊ニ仁三次儀、生得不具之者と相聞候得は、弥氣を付深切ニ差圖方茂可有之候處、窮民を御救被成下候御政道之重所を不存付、受持之百姓極貧病苦ニ迫り候を其向ニ打捨置、剰此節之成行ニ至候段、庄屋之役儀相立候哉、第一役儀之趣意を令忘却、只上納差引算用差引役と而已相心得居候と相見へヽ、勤方甚以大様之至ニ候。仍而は申付様之品茂有之候得共、益左衛門義平素人柄相應之者と相聞候ニ付、加用捨不及沙汰候。以来諸事心を用、請持之百姓無優劣身体持立候様、役儀之根本ニ目を付可相勤候。

一仁三次組合、忠平、喜平、善蔵、喜平次、吉平、茂平、源左衛門、傳右衛門。右同断。組合之儀は別而氣を付可申之處、大様之至ニ付、申付様之品茂有之候得共、加用捨不及沙汰候。以来心を可用候。

一柚比村正左衛門。右者去ル八日、田代村兄仁三次儀、平原松山之内ニ而令自縊候段、案内申出候ニ付、早速役ゝ遂見分、田代村庄屋は勿論、正左衛門江茂遂吟味候處、何れ茂口書差出見届候。然處仁三次儀、平日村方者ニ對し口論等いたし候儀見聞不仕、其外疑敷儀茂無之、尤近年病氣差出、農業之働難相成難儀仕居、定而病難ニ付、難忍了簡違仕たると存候旨申出候。病難と申茂狂気或は疫火抔と申類之症は失本心候病氣故、横死も有内之事ニ候得共、左様之病症共不相聞本精有之、右之通存極候段、死ニ替候程之趣旨無之候而難相叶、依之猶又再應相尋口書為致處、最前申出候通ニ而、其外意趣遺恨等之儀毛頭無之、親類不和成儀不及承旨申出候。然は弥極貧病苦ニ迫り、兎角渡世難相成存候處ゟ、覚悟を究候事と被相察候。素正左衛門ゟ茂折節ハ雑穀等遣し候得共、誠ニ僅斗

之儀ニ而、見續と申程之儀は何分相届不申由、抑艱難疾苦を相助候儀は、不限親族儀、況兄之方江折節雑穀類等相贈候儀不珍事ニ候。縦令一飯を事欠候共不相救候而難叶、尤何分ニ存候而茂共ニ極貧之身分、見續等之儀全手届不申候ハヽ、其訳村役人ニ申出、御救ニ而も願請候様取計候歟、何れ之道ニ茂万端深切ニ申談候ハヽ、此節之変死ニ不至儀茂可有之、殊ニ仁三次儀、生得不具之者とも相聞候得は、猶以諸事氣を付可申儀ニ候處、見續不相成とて其儘打捨置候段、弟之身分として大様千万之儀、畢竟平素親族之親ミ薄ク、孝悌之道を失ひ候ニ其紛無之、縦令左無之時、此節之変死、正左衛門身分ニ取、不孝不悌之名は難逃候。不孝不悌之名を得候者、其分ニ召置時は勧懲之道不相立、実は御政道之不行届と申ものニ而、旁罪科難赦者ニ候得共、仁三次儀外ニ身寄之者茂無之様相聞候得ハ、跡ミ迄茂別而不便ニ存候故を以、正左衛門罪等を此節輕取計、田代村仁三次跡ニ村替申付候。然上は死後ながらも孝悌之道を不失、一生仁三次吊等疎ニ不致様、若萬一心得遣於有之は、其節ニ至り不孝之罪ニ可置候。

一田代村庄屋益左衛門。右者同村仁三次儀、此節之成行云ミ、大概前文に不違候故略之。

一柚比村庄屋九郎左衛門。右者去ル八日、同村正左衛門兄仁三次云ミ、後文前文と大意同然故略之。

廿一日

一今日大小庄屋座通りに召寄、御制法之筋且庄屋中心得方等之儀、委細申諭。

二月朔日

一在町共ニ年長之女、振袖令着用居候者多、素り古風とは相聞候得共、厳倹を守候ニは甚無益之儀ニ候条、以来拾歳迄ハ勝手次第、十一歳ゟ振袖令停止候。

四月廿六日

一水屋村正行寺俊應。右は寺内ほうまんの木と申所之両所

之墓所地を掘撥、作所ニいたし候と申風聞有之候ニ付、役ゟ指越遂見分候處無其紛、仍而口書為致候處、先代ゟ之住職之墓所不相知候ニ付、右穿鑿為可致、土中一面ニ掘撥見候處、則一代目明徹石碑掘出、其餘は得と不相知、尤開基明玄墓ハ筑後領ニ有之段、承及候得共、未致吟味由、三代目恵空墓ハ素石碑無之、杉を墓印ニ植置たると聞傳、右杉株ニ探當候得共、遺骨無之候故、大概此場所ニ而可有之哉と存候所之土を取、土中ニ埋、扨又五代目啓運夫婦、六代目行運、是等之墓は寺内ニ有之候を、ほうまんの木ニ直し、開基を除、二代目、六代目、恵海坊守、啓運坊守、都合七人之墓を築、是迄印無之墓ハ追ゟ石碑を建候所存ニ候由、其外右之通一面ニ掘撥候ニ付而は、不存寄古墓所并遺骨迄茂掘出し、是亦此節一所ニ墓所を轉し、扨又大附賀門と申石碑其一族之墓、惣而四ツ寺門ニ有之、此子孫吟味仕候得共、至極年数久敷事ニ而子孫相分不申候ニ付、是又墓を轉し候由、申出候。

一先代ゟ之墓所不相知候ニ付穿鑿いたし、印無之墓は追ゟ石碑等建候所存之由、左様候ハヽ是非とも掘出し見候ニ茂及間敷、卵塔之内何れ之所ニか遺骨は無之候而難叶、石碑たに建、祭り候ハヽ可相濟儀、此所如何心得候哉之旨相尋候處、明玄、明徹、恵空、此三代本山ゟ申請候法名之印書無之、扨又過去帳之儀は、先代之節洪水ニ而流失仕、一向年月命日も相分不申、其外親族之老人ニ相尋候而茂相分不申、何れ石等土中ニ埋居可申と存致穿鑿候處、遺骨等有之所ニ掘付候ニ付、素先代之墓所列ニ築申度所存ニ御座候ゆへ、幸此節一所ニ直し代ゟ次第ニ追ゟ石碑等建候覚悟ニ候由申出候。先代之墓所を一列ニ集、追ゟ石碑を建度存念ニ候ハヽ、能ゟ遂穿鑿、其墓斗を引移し候筈ニ候處、古墓所地をも悉皆掘撥候は、其法有之儀ニ而候哉之旨、又ゟ相尋候處、御国法は素り宗法迚茂存知不申、私之一存ニ而相働候段、不埒之至兎角可申上様無之、誤入候段、申出候。

一五代目啓運夫婦、六代目行運、是等之墓は寺内ニ有之候を、ほうまんの木ニ直し候由、先代ゟ之墓所不相知を令穿鑿候儀は、仕方ニ依り全致間敷儀ニ茂無之候處、能相知居候右之墓所を態ゟ掘出し、ほうまん之木江移し候段難得其意、同所ニ墓を不築候得は不叶事ニ候哉之旨、相尋候處、御堂極ゟ及破壊、先年再建有之、庫裏ハ御堂之東脇ニ有之候處、至極汚損、三ヶ年以前之洪水ニ而洗崩候故、無據家内之者共客殿ニ住居いたし居、然は庫裏之儀、以前之通東脇ニ造候時は勝手向不宜候故、此節は御堂之西方江建申度、左候時は此墓庫裏近ゝ相成、不浄之場所柄と相成可申、旁ニ付、右之通代ゟ之墓一列ニ仕度存念ニ候ゆへ、ほうまん之木江一所ニ引直し候。其外親族之墓ほうまん之木江有之候を、此畠江一所ニ轉し、寺内ニ有之候大附賀門親族四人之墓を一所ニ轉し申筈ニ而、致掛召置候段申出候。寺内ニ有之墓所地往ゟ本堂西之脇江庫裏を建候時、不浄茂可有之、旁場所不宜候故掘撥、ほうまん之木北畠両所ニ移し候段申出候。乍去此節一体之致方墓所地を縮、専作所を設候致方と相聞、甚以如何敷取計、此處如何ニ候哉之旨、又ゟ相尋候處、墓所地を縮、作所を設候は、古ゟ墓所之跡を宅地ニ仕召置候半より、作所を設候而佛閣道場之再建之筋ニ相成候ハヽ、却而亡者之為ニ茂可相成と存、右之通取計候段申出候。墓所地を掘撥何分遺骨取集候共、骨肉之残可有之儀必然ニ候處、畠作物仕付候時、最前ニ申出候之訳合を以は、養ひ等之不浄有之儀は不指支儀ニ候哉之旨、又ゟ相尋候處、佛閣道場之儀を一途ニ存、畠作を仕付、骨肉之残不浄ニ染候儀は気付不申、御尋問ニ付存當誠ニ大様之致方、兎角可申上様無之、誤入候段申出候。

一墓所地之儀は、容易ニ掘撥可申様無之、墓所(ママ)地は尚以之儀ニ候。就夫右場所之儀は寺代ゟ之墓所斗ニ而、脇方ゟハ一体不葬と申儘成留書ニ而も有之候哉、又は留書は無之候得共、聞傳を以取計候哉之旨、相尋候處、寺代ゟ之

墓所地ニ而檀家ゟハ葬候所ニ無之候と申、留書等も無御座候得共、當寺持分之畠ニ而御座候得は、見分ニ而寺一体之墓所地と相心得取計候由、申出候。住職以来年数茂纔ニ候得ハ、右取計之最初、極而檀家之者江も申談たるニ而可有之、又は一存之以取計申たる儀ニ候哉之旨、又〻相尋候處、寺内ほうまんの木墓所之儀、寺一体之墓所と存居申候故、檀家之者ニ茂相尋不申、私一存之取計ニ而候由、申出候。抑寺院は住持請持之儀なから、諸事檀家江申談無之候而難叶筋ニ候。見聞而已ニ而一存之取計難得其意候段、又〻相尋候處、寺院之儀は一切檀家之心遣を以相立居候處、其所ニ存當り不申、一存之取計仕候儀不念之至り、今更可申上様無之、誤入候段申出候。右之口書之大綱を摘令書載候。此外委細之申口茂候得共、枝葉之文言ニ而趣意立候儀ニ茂無之候故、細詳ニ不相顕候。抑先代〻之住職之墳墓不相知を令穿鑿、石碑等建候儀、聊無筋儀ニ無之、後住之身分左茂可有之儀、致方ニ

見候。縦令何分ニ筋道を立申出候共、言行不拘候而は全筋道相立候とは難申、此儀ニ廷許而已ニ無之、衆見難逃所ニ候。殊更申口之始終不相貫、偏ニ弁口を以只申開而已ニ相聞、抑墳墓再建之名を以、恣ニ墓所を縮、作所を延、剰遺骨等之取置方甚麁略ニ有之、出家之本意を失、俗欲ニ貪、其上彼是筋道を申立、非を遂可申といたし候段、公聽を欺候所存ニ而、旁以不埒ニ候事。

一右口書之内、御国法は素り宗法迚も存不申、其身一存ニ而相働候段不埒之至り、兎角可申上様無之誤入候段、申出候。抑宗法之儀は如何相立居候哉、其儀は此方ニ不相知事ニ候得共、旧陵を勝手次第ニ掘撥候而不苦と申法は有之間敷、其上一寺之住職を茂相勤候身分ニ而、素り出家之事ゆへ、俗体之儀は不存儀茂可有之候得共、身分ニ相係り候宗法を不存旨申出候上は、其餘皆其通之儀と相見候故、不及多筆ニ候。既返答書之内ニ茂、畠作物を仕付、骨肉之残り不浄ニ染候儀ニは氣付不申、尋問ニ付存當候旨申出候を見候得は、第一出家之本意を失居候故、法儀等ニ心を不寄茂其筈之儀ニ而、先以出家不相當不埒之僧ニ候事。

右令書載候通、俊應此節之擧働(動)重〻之不埒ニ付、先差控申付置。尤右之外口書之内難落着所茂数〻有之、因而は申口ニ随ひ一〻遂糺問、屹度取計様之品茂有之候得共、畢竟出家之儀ニも候ゆへ、格別之加容赦、此上品を不付、差控差免候。就夫開基明玄、三代目恵空、五代目啓運、六代目行運、此等之石碑早〻出来、ほうまん之木江可令造建候。尤明玄墳墓之儀は、口書之趣ニ而は筑後領ニ有之様、相聞候得共、開基之儀は訳茂違候事故、此節別段ニ石碑を念を入出来、尤造建之上門中相招、重法事致執行、其外ニも此節転し候先住之墓所毎ニ改葬之式法儀之通取行、是又法事等可令執行候。且亦正行寺儀は、檀家之墓所地無之様相聞候ニ付、此節掘撥候場所、以来作物を不仕付、檀家之墓所地ニ相施し、勿論此後諸事心を用、

少之義たりとも一存之取計決而致間敷候。

附り

明玄、明徹、恵空、此三代本山ゟ申請候法名之印書無之、扨亦過去帳流失ニ付而は、年月命日も相知不申由、しかし明徹石碑ハ此節掘出候故相知居可申、明玄石碑之儀は、筑後領ニ有之と相聞候間、此節遂吟味、若茂不相知候ハヽ本山江右之委細申越、明玄、恵空、両僧之法名再ヒ申請、且又年月命日之儀茂本山江問合候ハヽ、若留書ニ相知居候儀可有之、何れニも早ゝ夫ゝ可取捌候。等閑ニ可相心得様無之、取計方一ゝ庄屋江可相届候。右之通委細ニ可申渡候。

一水屋村庄屋藤兵衛。右は同村正行寺俊應儀、墓所地を掘撥、作所ニ致し候と申風聞有之候ニ付、役ゝ差越遂見分候上、口書為致候處、先代ゝ之住職之墳墓不相知候ニ付、穿鑿為可致掘撥候由、其外委細之申口茂有之候得共、一ゝ不信用、因而段ゝ深遂吟味候処、弥風聞之通無相違、押詰大様無念誤入候段申出、出家不似合不埒千万之挙働ニ付、差控申付置、此上取計様之品茂有之候得共、格別加容赦、此節書付之通申付候。就夫藤兵衛儀、役柄ニ付而は、右体放埒之取計方承付候ハヽ早速委遂尋問、其品ニ依案内ニ茂可及儀ニ候處、尋遣一通之返答を承り其向ニ致置候段、役儀甚大様之至ニ候。人民之儀ニ候ハヽ、庄屋ともに申付様之品も有之候得共、畢竟寺院は世外之者ニ而、村中一体之風儀ニ相係候と申ニ而も無之候故、不及沙汰候。以来無油断可相心得候。右之趣申渡。尤此節俊應江申付候品、取計方等ニ心を付、差圖方は勿論若茂俊應心得ニ寄、等閑之取計も候ハヽ、申出候様是又申渡。

七月十日

一下横目江御米拝領被仰付候書付、左之通、

一米壱俵、御門番治右衛門。右は在町打廻下横目加役申付置、勤方繁、別而令苦労候ニ付、御時体は違候得共、為

御見合、右之通被成下候。

九月五日

一蔵上村ゟ願出候貧民救用例救之儀、纔たりとも凶年之備ニ而、至而重キ筋ニ候条、成丈囲置、右体之者江は御救米可被成下候と其旨申達、願書差返ス。

日記抜書

従天明三癸卯至同五乙巳

扒

天明三癸卯正月六日

一手代中之申達ニ、去冬以来年並ニ付而、隣旦共ニ物騒有之と相聞、就而は在町共ニ火用心決而油断不仕様、厳重御下知可有候。

一年始礼は、一家寄會等旁ニ而家内引明候儀、間〻有之事ニ候間、火用心之儀は勿論、盗人用心も能〻御下知可有候。

一松之内ニは賭事等御免之様ニ相心得、老若ニ不限、色〻遊事を相企候儀、間〻有之と相聞江、如何敷次第共ニ候。両町上郷小町〻〻ニは別而厳重御下知有候。

一第一之存之儀、毎〻申達候通、無油断御下知可有候。

一馬口労之儀、前方〻被仰出之筋茂有之候處漸〻緩セに相成候と相聞、旧冬以来は様〻成掛合筋等茂有之たると相聞、言語同断之次第共ニ候。以来決而右体相携不申様ニ稠敷御下知可有之候。

四月九日

一本役、浅井求馬介在勤

博奕は天下之大禁、近来ニ至り尚又申付之旨可相守儀勿論ニ候處、間〻取扱候之薄〻聞江茂有之、扨又隣國江第一興行有之と相聞江、携候之風聞旁以如何敷事ニ候。以来猶以停止之旨在町之者申付、弥堅可相制之候。自然申付を不相守、其筋於相顕は、其者は不及申、在町役可及越度之沙汰ニ候。

一火用心之儀、前〻〻申付之通、無油断厳重可相守候。其上時勢ニ随ひ盗等之企ニ依り、其仕業難斗候間、平素無油断在町堅夜廻(役はカ)等緩ニ無之様可相心得候。扨亦盗之族

召捕候而茂、落着迄之間自然自分之失却等を考、竊ニ追放之様之儀、萬一心得違有間敷ものニ茂無之候。追而申付様之品可有之事ニ候間、盗人召捕候ハヽ堅置、手筋を以可遂案内候。

一荒木次郎左衛門。右者宮浦西村掛持之地面、川添之土手筋、山潮洪水之節及破損居候得共、一体大造之御普請所ニ而極急場所〻御取繕有之、是迄右場所之御普請無之候處、當節自分〻取繕度旨庄屋迄申出、令普請候と相聞候。御地面大切ニ存候處〻、失却を茂不相厭、大造之普請所全令出来、奇特之至ニ付、称美申渡候。

一高雄養純、右同文。

十五日

一田代町祇園宮頼殿屋根替有之。右〻付前〻〻葺替等之節之上、四ツ目結之御紋以前〻付居候得共、箱棟等江は付居不申候間、此節箱棟鬼板仕替候ニ付、御寄附被下候ハヽ、付ヶ申度段申出。以前〻御紋付居候所茂有之、殊ニ材木願出、願之通申付候得は、旁ニ付評議之上、四ツ目結之御紋箱棟鬼板ニ限り付候様申達。

六月十二日

一口達を以、在方ニおいて諸商賣堅停止之事ニ候處、在住之者之内、小麦等を當時之相場ニ直段を増、一手ニ買上候之聞有之候。不依何品商賣之儀、両町ニ関り候事ニ候を、自分勝手之取斗甚以不埒成事ニ候。此儀大庄屋〻関り之郷村深遂吟味可相制候。若重而其筋有之者於相顕は、申付様之品有之候。此旨相達可被置候。手代中。

七月十四日

一本役〻之書付。某儀當役蒙仰、當春罷越候處、元来不肖之身分、御政事之諸般至而大切千万存事ニ候。抑當役勤向之主意は、御朱印を以被仰付、先般皆中拝聴被致候

通之御旨ニ而、御領中一体を御預ケ被置たる御事ニ候得は、大略當役之果決ニ依候儀、不易次第ハ無申迄事ニ候。然は御領中之安危は、仕置方之疎密ニ相関り、人民之正曲労逸は、當役之身持行作ニ係り可申儀ニ而、某儀其職を奉し人民之上ニ立、諸事ニ付下之法則とも可成意味ニ候得は、毛髪程茂疎略邪曲之筋有之候時は、其疎略邪曲人民ニ及ひ、必定人民之惑を生し、終ニは御法を侮り、上之御下知を茂不相守様成行可申、左候時は下知差圖之品可難届事情共被察、御領中之後弊不軽次第、此所終食之間茂別而不安事ニ存候。仍而不肖なから當職罷在候上は、心之及正直専要ニ心掛、旦夕深ク相省ミる事ニ候。若其内ニ茂存付之筋有之敷、亦は右被仰付之御旨致相違候差圖方を茂いたし候ハヽ、其節は決而無猶豫微細ニ可被告知候。畢竟上下相隔下情不相通候而は、諸事之差圖方ニ泥ミ、間違之筋茂可有之事ニ候。尤第一當役身分ニ候故、大事を左ニ令書載候間、此趣常ミ相考被見、一端一毫も存付候筋は、書付印判封ニメ指出候様、可被相心得候。勿論面謁之銘ミは直訴不苦事ニ候。

一賞罰之裁断不正敷
一諸事下知之品、依怙贔負沙汰有之敷
一人民ニ對し無理成下知をいたし候事等有之敷
一賄賂ニ泥ミ、理を非ニ曲ケ候差圖之事等いたし候敷
一遊興を好、飲酒ニ耽り、御政務之筋疎略怠慢候敷
一栄耀を好、奢を為事有之敷
一諸事差圖方ニ付、我意を押而事を取計候儀有之敷
一人民を不憐、我儘成儀有之敷
一人を侮り禮儀を乱し、傍若無人之挙働有之敷
一言行不釣合之儀有之敷
一邪妄私曲之筋有之敷

右之条ミ、於某身分一事たり共見聞候ハヽ、全不及遠慮、即刻可被申聞、是偏　上之御為、次ニは人民之為重大事ニ候条、聊以私情無貪着、假令風聞たりとも是非之沙汰ニ不及、詳ニ可被申聞候。

上之御為を専要ニ存、懇ニ加教諭輩も候ハヽ、忠節誠ニ

不薄、當役之某身分ニ取候而も、何程敷可頼母(敷脱カ)、此一事ニおいては身分之軽重を不撰、慎而畢見ニ可随候。仍此書付不残写取、銘ミ宅ニ張置、無油断一覧有之、配下之面ミ江は、右之趣不絶委細ニ可被申聞候。

八月四日

一御領中田畠作之儀、無間断出精、勿論手入方専要之事ニ而、養ひは厚薄ニ依り損益面り可相見、譬は手入厚候得は、下田は中田ニ茂立並、中田ハ上田ニ茂等く可相成、手入薄候得は、上田茂中田ニ劣り可申道理ニ候。扨又牛馬之撰第一之事たるべし。就夫酒糟油糟等田畠ニ入候得は、養ひに格別宜相聞、幸イ御領中右商賣我ミ有之といへども、難手届者ハ両品之糟買入候儀も不任(脱アルカ)者勝ニ可有之、他領ニ買取得作得候段、農民共嘸以残念ニ可存は勿論、右両商賣之者も假令他領賣、得高利候儀有之共、聊之儀殊更當時之益と申もの、御領中一体之為を令思慮候ハヽ、子孫ニ至り永住之土地故、真実不本意可存候。酒糟之儀は、馬飼料時節ニ依り肝要之品と相聞、田畠作之専牛馬之働肝要ニ而、常ミ飼料宜とよろしからざるとは働之軽重可有之、無理ニ責遣ひ候ハヽ、脳強(マヽ)或は煩を生し可申、年分ニは多数之死牛馬と相聞候。素り時行病等有之といへとも、一ツは飼料ニ茂依り可申事、因而は酒糟等専相与候様可相心得事ニ而、酒商賣之者ニおいても酒糟他領賣利益ニ可拘事ニ無之、御領中繁栄之道を令思慮候ハヽ、嘸かし実ミ不本意可存事ニ候。右ニ付左ニ令書載候。

一酒糟油糟御領分農民江賣渡し、他領江成丈賣出間敷候。
一御領中農民、酒糟油糟他領向寄之場所ゟ調間敷候。御領分町中之酒屋油屋ゟ可買調候。現銭調難成り貧民は、譬は油屋ニ候得は辛子相渡候敷、又は出来作引當令熟談、何れニ茂相對を以買請、双方無相違堅く申極メ可令賣買候、酒糟賣買方之儀、引當等之品は違可申候共、何れ之道ニ茂右ニ準し、相對を以無相違可令差引候。

一辛子他領江賣出間敷候。御領分油屋中向寄ニ可令相對請込餘計有之、他領江は賣出し、自然油〆方不差支節は、油屋〻引合之書付を添候而、他領出證文差出候様、其筋之者江可令應對候。

右之通申渡候茂、第一は農民之為、且ハ市中商賣方ニおゐても双方他領江銀等を不出、御領中互ニ令取引候様有之度、存故之儀ニ候間、在町役此旨能〻令得心、其筋〻江懇ニ申渡、互ニ実情を尽、嚴重可令取引候。右之趣大庄屋両町役江具ニ可被申渡候。

九月廿七日

一願書。賀嶋兵介様延宝三年〻貞享弐年迄十壱ヶ年、爰元御在勤之間、安民之筋ニ日夜被為尽御心、一統奉蒙御善政之恩化候次第、

上御記録等詳悉可被為在、不及申上御事ニ候。其節御跡之大旨相記召置候覚書等茂相傳り居、誠以高大之御恩恵難有次第難尽筆舌、今以茂人民奉蒙御遺沢候。深重成儀共素各様御存知被成候通之儀ニ御座候。然は其節奉蒙御特恩候大小庄屋拾壱人之内、六人之子孫は漸〻困窮仕、當日茂凌兼候体ニ罷有、相残五人之子孫、飯田村庄屋市右衛門、城戸村庄屋杢之平、宮浦東村庄屋作治、牛原村庄屋益介、槇村庄屋曽平儀は、以御蔭是迄庄屋役相續、假成ニ相勤罷在仕合奉存、祖父以来右之御功労深く奉感歎、子孫ニ至り忘却不仕為、且は御功徳永世ニ傳候為、石碑ニ称し傳置申度、内〻之志願も有之候得共、時体をも見合罷在、殊ニ微力之身分入料難及手式、彼是を以無據黙止罷在候處、既ニ貞享弐年御帰国〻来辰年迄百ヶ年ニ相當候故、祖先以来之遺志を受継、乍恐石碑建立仕度存立候処、入料之儀左迄餘分之儀ニ而は有之間敷候得共、右ニ茂書載候通、纔五人之微力ニ而は、何分造立仕候儀難相叶段申聞、於在町も頭立候者之内、間〻其志之者有之候ニ付、幸ィ此節戮力候而石碑造建仕度奉願上候。御指支之儀も無御座、願之通被為　仰付被下候ハヽ、

一統難有仕合可奉存上候。尤願之通被仰付被下候御事ニ御座候ハヽ、場所之儀は吟味之上追而御伺可申上、此段何分ニ茂宜被仰上、願之通被仰付被下候様、御取成奉頼(願カ)候。以上。

卯九月

飯田村庄屋　市右衛門
城戸村庄屋　杢之平
宮浦東村庄屋　作治
牛原村庄屋　益介
真木村庄屋　曽平
宮浦西村庄屋　弥兵衛
小倉村庄屋　治左衛門
長野村庄屋　久右衛門
奈良田村庄屋　太次右衛門
永吉北村庄屋　安左衛門
柚比村庄屋　九郎左衛門
園部下村庄屋　仁左衛門
同　上村庄屋　九郎兵衛
神邊村庄屋　幸兵衛
萱方村庄屋　勘平
古賀村庄屋　彦兵衛
河内村庄屋　蔵之平
田代村庄屋　益左衛門
原　村庄屋　文右衛門
姫方村庄屋　忠兵衛
幡崎村庄屋　惣介
酒井西村庄屋　善吉
同　東村庄屋　小兵衛
水屋村庄屋　藤兵衛
養父村庄屋　与三右衛門
蔵上村庄屋　佐介
宿　村庄屋　喜右衛門
鳥栖村庄屋　善七
藤木西村庄屋　清右衛門
今泉村庄屋　次郎介

瓜生野村庄屋　善右衛門
瓜生野町座親　佐　七
瓜生野町別當　与三右衛門
田代町年寄　傳右衛門
田代町年寄　太　兵　衛
田代町座親　新右衛門
田代町別當　勘　治
上郷大庄屋　弥次兵衛
養父郡大庄屋　新右衛門
下郷大庄屋　治　兵　衛

門　司　郡兵衛殿
永見　文左衛門殿
緒　方　喜　内殿

右願書御国許江伺越。

十一月八日

一朝鮮木綿参疋、養父郡大庄屋新右衛門。右者當年八十壱歳ニ罷成候處、役儀別而令出精、平素氣質壯年之者ニ不劣、日〻御屋敷ニ茂罷出、書上諸帳面等ニ至り今以自筆ニ取調、郡中請持之村〻無油断立廻、令下知候ニ付、第一諸上納方納無遅滞様出精、勿論其内取立方難相成者へは、借替等之指繰を以、銀米納方人〻先キニ相勵、大風雨等之節ハ尚以昼夜之無差別罷出、諸事之行道壯年之者ニ等く、身分堅固と申内、分而氣丈成生得ニ而、農事方は素り諸下知方無抜目、其以下之者共帰服、一体之勵を設、御領中一統手本とも可相成勤方ニ有之、前以河内村庄屋相勤居候内、裏山ニ竹御仕立被仰付候處、土地悪敷生育不致處、右之代ニ杉壱萬五千本程仕立候様、村中江令下知植立させ、先年以来御用村用ニ専相立、扨又谷山之内立木無之場所、新右衛門見立を以、松弐万本其身一手ニ而植立、今程御用木と相成居候由、新右衛門儀、庄屋役〻當大庄屋ニ至り、是迄四十五ヶ年勤労之次第、委細各より被申越、数十年来勝而令精勤、彼是御為ニ相成

候段奇特之至ニ候。依之御時体柄爰許専御主法ニは候得共、数十ヶ年来格別之被称勤労、為御褒美右之通被成下候間、極老之乍身分、猶此上可令精勤候。

右之通今般被仰付越、是迄多年数〻之依勤労、御時体は違候得共、格別之以思召御褒美被仰付、御高恩之程難有、尚又此上相勵可令精勤候。此旨可被申渡候。

十二月四日

一銀参枚、上郷永吉村百姓貞平。右者生得人柄格別相勝、貞平拾七歳之節父ニ離れ、其後母子両人ニ而農業いたし、母當年七十七歳ニ相成候處、七ヶ年以来中風之機ニ而歩行たに不叶候ニ付、貞平壱人之精力を以、是迄母子假成ニ令經営、諸公役は勿論、耕作方ニ至り別而出精、扨又病身之老母壱人召置、公役等ニ當り罷出候節は、前夜隣旦之者江懇ニ相頼置、公役方無懈怠直をに令精勤候ニ付、其内相怠候者間〻有之候而も、貞平勤方ニ恥入自然と相勵候様有之、老母儀限り有る参り先江は其身背負候而連越、懇ニ令介抱、其外重病極老之者ニ有之候得は、昼夜之取扱方心之及深切を尽、右ニ付大庄屋を初居村庄屋同村百姓共〻、貞平常〻之人柄無相違段書付をも差出し、依之各〻委曲被申越、貞平人柄相勝、第一老母江孝心深く、格別奇特成生得之者ニ相聞候ニ付、為御褒美右之通被成下候。

右之通今般被仰付越候。貞平大庄屋召連出候ハヽ、御書付之趣具ニ讀聞、重畳御憐愍之程深く難有奉存、尚又孝養を尽し、公役方は素り、耕作無懈怠可令出精旨可被申付候。母儀は大庄屋役江召呼、御書付之趣可讀聞候。尤右之趣、永吉村百姓江も可申達、此旨上郷大庄屋弥次兵衛、永吉北村庄屋安左衛門江可被申渡候。将又右貞平孝心相勝れ、公役方耕作共ニ相勵、平素実直ニ有之段著く、因而右之通御褒美被仰付候。御領中人民銘〻家業は素り孝心を本として、貞平業作可相学事ニ候。人心不同故を以、善ニ入候而は善ニ随ひ、悪ニ入てハ悪ニ随ひ、善悪

友ニ依而之道理、身分を省る事専要ニ候。此段在町役江も申渡、関り之人民江兼〻為申聞、邪正を糺し其品無遠慮可申出事。

廿九日

一走番之儀、村〻ゟ罷出候公役之内ニ茂走番之者有之、甚紛敷如何敷有之、依之評議之上、以後は使番と唱候様申達ス。

四年甲辰正月十四日

一宗門御改田代町之節、讀聞セ之書付。孝は人倫之要道百行之本にして、一日片時茂廃し候而不叶道ニ候。勿論生育之恩高大にして、尚又父母之其子を思ふハ無限事ニ候得は、其高大成慈育之恩を思ひ、貴賤上下之差別も無之、子たる之道を尽し候様心掛ヶ候ハヽ、孝行之道ニ茂相叶可申事ニ候。且孝と申茂父母之孝養愛敬而已不限、婦之舅姑ニ事へ、孫之祖父母に事るも同し道理ニ候。人は人之道備りて、君臣父子夫婦兄弟朋友之五ツ之道有之候得共、右体親ニ孝をいたし候心を以、君臣父子夫婦兄弟朋友ニ押及し候ハヽ、則其道ニ叶可申儀ニ候。然るに愚蒙之下民は只目前に親之氣に違すあしらひをも能致し候斗を孝行と心得間敷ものニも無之、如何程親之あしらひを能致し候而茂、其身之行作不宜、或は生業之道ニ怠り、夫婦兄弟親族に不和なる歟、又は其所之害ニ人之悪〻を受候様有之候時は、親に憂をかけ、是又不孝と成儀ニ候。刑罰数〻之中ニも不孝之罪は第一重キ事ニ而、何程金銀米穀を貯江威勢を振候而も、孝行之道欠候時は、天罰不逢事古今其例多事ニ候得は、其所能〻可令會得事ニ候。然は永吉村貞平儀、老母之孝養無残所、殊ニ其身之行作格別相勝候段、達　上之御聞、此節以御書付御褒美被仰付、銀参枚被成下候。御領中右体之人物有之候儀、　上ニ茂奇特ニ被思召、誠ニ孝心之感應にて、天之恵を受、右之通仕合當役之身分ニ取候而も感慨至極之事ニ候。因而右貞平孝行之次第、御領中之者江遍くしらせ度存念ニ

候間、先達永吉村ゟ差出候貞平行跡之書付、且此書面共ニ在町役〻写取、銘〻宅ニ張置、請持之人民幼児之輩ニ至迄深切ニ申聞、以来時〻教諭を施し、尚又讀書等を茂致、身分之者ニは、孝經を茂讀習ハセ候様有之候ハヽ、自然と風俗も立直、孝子孝婦も出来可申儀ニ候。村里淳厚之風俗ニ相成候は、其掛之役〻平生之教により可申儀ニ候故、聊忽ニ不相心得、請持之人民常〻懇切ニ教育可致儀、専要之事ニ候。

五月十二日

一佐役、宮川平左衛門在勤

一上郷大庄屋弥次兵衛。右者當節村〻田根付取掛候處、一体水少ニ有之、一面ニ田根付不相叶、或は適根付致候而茂、地面乾キ苗生育不致村〻と相聞、打續之凶作ニ候得は、當年は大事之年柄ニ付、去ル二日三郷宗社當町祇園社において、氣候和順雨乞之御祈禱　上ゟ仰付、依之重キ為祈願右四社江致参詣候ニ付而は、存寄有之聊饗應ヶ間敷儀抔無之様ニと、前夜堅申付候通ニ候得は、當日社参之主意を得と相考、尚又差圖之旨急度可相守儀ニ候處無其儀、等閑ニ相心得候仕形等有之、不埒之至ニ候。因而申付様之品も有之候得共、此節は別段之了簡を以不及沙汰候。

六月二日

一法儀心得違ニ付、宝暦十三未年、同十四申年、安永六酉年、所替被仰付置候者共、間〻元村江立戻居候と相聞、依之居村元村江役〻致手分立越、蜜(密)〻吟味仕候様申付。

一宮浦西村城戸村江片山勇介

一園部両村江原永介

一柚比村河内村江原岡林右衛門

一萱方村古賀村宿村江緒方喜内

一原村曽根崎村酒井両村飯田村重田村江永見文左衛門

一幡崎村永吉北村奈良田村江古賀平八

一瓜生野町鳥栖村藤木東村今泉村江岩谷丹治

一真木村高田村水屋村江門司郡兵衛

十九日

一岩谷順左衛門願書。私儀無調法者ニ御座候得共、御屋敷下代被為仰付置、以御蔭是迄假成相勤難有仕合ニ奉存候。然處右御役之儀、御役名と勤方不相應ニ有之、其上御用之品ニ因候而は、旅人ニ茂毎〻掛合、又は隣旦ニ被召仕候儀も御座候處、於隣国も下代之役目は至而輕儀ニ御座候得は、旅人役柄を相尋候上及掛合候節は、不都合之言訳茂有之、其外如何敷次第等も間〻御座候而、先〻相勤候者も此儀甚難渋仕候次第ニ御座候。因之近比恐多奉存候得共、勤方相應之御役名御改被為　仰付被下候ハヽ、私儀ハ不及申上、至後来候而も難有仕合ニ可奉存候。尤前〻ゟ右之御役名ニて相勤来候處此節御願申上候儀、重畳恐多奉存候得共、右ニ書載仕候通之次第(當)倒惑難儀之仕合奉存、殊ニ元禄年中爰元御手代役之役称御改被仰付候先例も御座候ニ付、不奉顧恐御願申上御事ニ御座候。右之趣何分ニも宜被為聞召通、願之通被為仰付被下候様、御席之砌宜被下候(様脱カ)奉願候。

極月廿三日御左右御達被成、左之通御付紙を以願書差返ニ相成。

一御付紙を以、岩谷順左衛門ゟ之願書、御国江差上候處、役名之儀、自分ゟ願出候段、如何敷候故、願書は差返候様、尤右役名之儀、数十年来濟来候事ニ有之、強而指支之儀も有之間敷事ニ付、先是迄之通可心得、追而御差圖候品も可有之との御事ニ付、願書差返候。

一目付役之儀、専御政事方ニ相拘候ニ付而、多分以書付申出候事勝ニ候。然処是迄筆墨紙御渡方無之、役目ニ付而は主意如何敷候間、以来左之通御渡被成下候。

右之趣被申渡、尤御屋敷下代岩谷順左衛門江も可被相達置候。

一筆五對

一墨弐丁

一半紙壱束

一白半紙弐百枚

一墨半切紙百枚

以上

廿六日

一江戸御左右有之、諸国時疫流行之段、公儀達　御聞、今般御仁恵之　思召を以、左之通薬法之儀被仰出候間、在町役江被申渡、一統不洩様可相觸旨、可被申付候。

大目付江

時疫流行候節、此薬を用て、其煩をのがるべし。

一薬法は日記ニ有之、略之。

一右は享保十八辛丑年、飢饉之後時疫致流行候處、町奉行所ゟ板行被仰付、御料所村〻江被下候写。

右者當時諸国村〻疫病致流行、又は軽キ者共、雑食之毒に當り、相煩致難儀候趣相聞候處、前書享保十八丑年村〻江被下置度御薬法書付、年久敷事故、村〻ニて致遺失候儀も可有之候ニ付、此度為御救、右之写村〻江領主地頭ゟ相觸候様、可被致候。

七月八日

一養父郡大庄屋新右衛門、園部下村庄屋仁左衛門、高田村

一茂相(忽カ)忽自然相顕候ハヽ、其節は急度可申付候。

庄屋佐吉。右は頃来遂再問候品ニ付、申出候筋不届千萬之至りニ候。依之差控申付候。急度相慎可罷在候。

一城戸村庄屋杢之平、長野村庄屋久右衛門、飯田村庄屋市右衛門。右同断、不届之至ニ付、差控申付候。

右之通、夫〻可被申付候。

一藤木西村庄屋清右衛門。右者養父郡大庄屋新右衛門差控申付、大庄屋之儀勤方繁く、郷中用事も多く差支候ニ付、當時兼帯可相勤候。

九月十五日

一差控等申付置候庄屋中、門戸を閉居候而は、御貢米取立方は勿論、蔵取入等差支候ニ付、門及玄関其外ニて百姓出會之下間明させ被成候様、手代申ゟ申出、其通申達。

一園部上村庄屋九郎兵衛。右者同下村庄屋仁左衛門不埒之筋有之、差控申付、當時假役申付置候。然處御年貢米取立之時節ニ相成、素り御貢米積船廻着次第、不時津出も可申付儀ニ候間、假庄屋ニ而は差配方不行届儀も可有之

節茂手代中江可相届、諸事無緩申付、平素之行作共ニ氣を付、若心得違等於有之は、不指置可申出候。

一右所替之者共、元村江令所持居候田畠之儀、賣拂、居村且隣村にて相調候歟、又は居村隣村之田畠ニ相對振替ニ而も手捌宜様可仕候。尤右取計方来年限取調、其掛り之庄屋ゟ案内可申出候。

十一月三日

一御門番使番小人。右者御國幷上方筋御銀来宰領状飛脚等船路ゟ被召仕候節、船中飯代之外、月御合力銀之儀、且諸方江陸地より被召仕候節之御渡方等、是迄六拾文銭之積を以、被成下候處、近年諸色高直ニ相成、別而米直段抜群高直ニ有之候處ゟ、惣国共ニ旅籠銀相増、御渡方之分ニ而は何分相足不申、餘計之指足致し、将亦博多御蔵屋敷江被差越候節、以前より往還共ニ昼旅籠不被成下、旁以難儀至極仕候。依之右月御合力銀、其外諸方江被召仕候節之御渡方共ニ、悉皆正銀にて被成下、博多江被召

候条、九郎兵衛儀、諸事氣を付、村用共ニ不差支様、假庄屋可申談候。

一永吉北村庄屋安左衛門、柚比村庄屋九郎左衛門儀、不埒之筋有之、閉戸申付置候ニ付、右同様ニ訳を以、安左衛門儀、氣を付諸事不差支様、假庄屋可申談候。

一今泉村庄屋次郎介、高田村庄屋佐吉儀、不埒之筋有之、差控申付置候ニ付、右同様之訳を以、次郎介儀、氣を付諸事不差支様、假庄屋可申談候。

廿六日

一今日御書付を以申渡。宝暦十三未年不行跡之筋ニ付、流罪所替申付置者共、元村立越之儀は、先年堅差留置候處、近年掛作等ニて、猥ニ立越候者有之段相顕、不埒之次第ニ候。夫ニ付、流罪所替之者共、無據用事有之、元村江不罷越而難叶訳有之候ハヽ、日数三日迄の逗留は双方庄屋引合之状通を以差越、三日を越不令逗留候而難叶訳有之候上、(はカ)則用事之趣紙面ニ相認差越、居村江帰候

廿三日

一城戸村庄屋杢之平。右は去月廿一日之夜、白坂町於幾右衛門宅、氏神祭礼之座本請取渡之節、同町源左衛門と治三次、武介及争論、源左衛門を碍敷令打擲候手疵にて、源左衛門儀、翌廿二日相果候。右体人命ニ相拘り候程之大なる喧嘩差起及騒動候段、平素村中示方緩セに有之と相聞、甚不埒之至ニ候。此節屹度申付様之品茂有之候得

共、格別之宥恕を以、重不及沙汰候。以来村中示方可心
を用候。

一白坂町亦太郎。右は親源左衛門儀、去月廿一日之夜、令
酔狂、同町治三次、武介と及争論、稠敷打擲逢候手疵に
て、翌廿二日、源左衛門儀相果、畢竟源左衛門酔中不埒
之仕方ゟ喧嘩差起、不届之至ニ付、家内之者共禁足申付
置候得共、格別之宥恕を以、此節禁足差免候。

一同町治三次、武助家内。右は同町源左衛門、去月廿一日
之夜、右同断ニ付入牢申付、家内之者共は禁足申付置候
得共、格別之宥恕を以、此節家内之者、禁足差免候。

一同町幾右衛門悴太助、太兵次。右は去月廿一日之夜、於
自宅右同断ニ付、宥恕を以重不及沙汰、禁足差免候。

一科代夫拾人、同町組頭吉兵衛。右同町幾右衛門宅ニおい
て源左衛門と右同断、格別之宥恕を以、重不及沙汰、禁
足差免、右之通科代夫申付候。

一科代夫拾五人、同町幾右衛門。右は當年城戸村氏神祭禮
之神座相勤、去月廿一日之夜、於自宅来年之座本江請取
渡之節、右同断ニ付、格別之宥恕を以、重キ不及沙汰、
禁足差免し、右之通科代夫申付候。

十二月二日

一烏目弐貫文、園部上村清七、源市、善次郎、惣左衛門。
右は當節御屋敷大造之御普請有之、餘計之材木入用段承
付、自分仕立置候杉壱本宛差上度段、庄屋を以、山方役
迄申出、先以殊勝之心底、殊に兼ゝ材木仕立方等相心掛
候者共と相聞、此節御用立旁以奇特之至ニ付、為御褒美、
右之通被成下。

一園部上村庄屋九郎兵衛。右は當節御屋敷大造之御普請ニ
付、餘計之材木入用ニ候處、同村清七、源市、善次郎、
惣左衛門、自分仕立之材木壱本宛差上度段申出候由、九
郎兵衛より山方役迄申出候通承り届候。右之者共、兼而
材木仕立方等心掛候者共と相聞、畢竟九郎兵衛、村中之
者共江平素之示方右体之差圖方共ニ宜所ゟ、此節御用を

重し候心中、旁以奇特之至ニ候。依之申渡候、以来猶又
懇ニ可令知候。

六日

一朝鮮木綿六疋、荒木次郎左衛門。同弐疋、梯七郎右衛門。
同弐疋、酒井喜右衛門。同壱疋、草野雄介。同壱疋、梁
井勘治。同壱疋、田代町年寄太兵衛。同壱端、同治助。
同弐疋、大庄屋格惣左衛門。同壱端、長野村文右衛門。
同壱端、奈良田村文治。同壱端、野口村善兵衛。同壱端、
園部村弥七。同弐疋、園部上村源市。同弐疋、同村惣左
衛門。同壱端、同村清七。同壱疋、河内村甚兵衛。同壱
端、高田村曽平次。同弐疋、田代町治右衛門。同壱疋、
同町弥左衛門。同壱疋、同町助治。同壱端、同町介右衛
門。同壱端、同町亦吉。同壱端、同町清右衛門。同壱端、
瓜生野町新兵衛。右者御領中去ゝ年去年打續之凶作ニ
付、在町貧民者共食用無之令難儀、追ゝ御救米願出、其
節ゝ現米被成下候内、干和布をも被差越候ニ付割與へ、
當春迄多人数ニ及候處、漸麦出来ニ取續、殊に近来諸国
共に稀成米穀高直ニ付而は、耕作方不得致者共ハ、日ゝ
之食用買調、弥以難儀之体に罷在候ニ付、右之面ゝ、貧
民難儀を厭、身体ニ應し、米穀相与候次第聞届、御国江
委曲申上候處、皆共心底奇特に被思召候ニ付、御時体は
被為違候得共、此節為御褒美、右之通被成下候間、難有
頂戴可仕候。

五年乙巳正月十五日

一田代町諸商賣、右は諸商賣筋近年不景氣ニ有之候上、去
ゝ年已来之凶作ニ付而は、商賣方迄も自然と手挟相成、
別而難義之由ニ而、委細以書付願出候趣、見届候。

一商人統領之義、一町壱人ツゝ、都合五人可相立、人柄之儀
ハ、吟味之上追而可申付候。商賣体ニ付、當町之損益に
相拘候筋心付候義ハ、追ゝ可申出候。

一毎月之市日ニ不限、在方ゟ米穀ハ素り諸色共ニ手廣持出
候様、此節三郷へ申付候間、双方順路ニ申談可令賣買候。

尤隣国ゟ入来候商人共を小宿ニ而不引留、當町之市場へ小宿之者同然出候様可致旨、此節堅申付置候間、若不埒之義も候ハヽ、小宿ゝゝへ商人統領之者立廻、かさつニ無之様、申諭可相談候。

一在方江塩油等日用之品之外ハ、諸商賣人猥ニ立廻り候儀、御法茂有之不相成事ニ候得共、万一心得違之者茂有之候ハヽ、是又商人統領之者、在方立廻差止、専賣買体可申談候。

右之通申付候間、旅商之人は勿論之儀、在方之者共ニも随分懇ニ申談、少もかさつ非分之儀無之、市立令連續、當町之賑ニ相成候様可出精候。自然旅商人且在方之者へ對し、非法之取計等いたし候義相聞候ハヽ、其節ハ統領は勿論諸商人共ニ可為曲事候。是等趣前後能ゝ致得心候様、町役を以委申付候様申渡。

毎月之市日ニ不限、在方ゟ當町へ諸色持出可令賣買之處、勝手尽を以、近来ハ米穀諸色共ニ、多分他領へ持出候者有之段相聞、且又在方へ塩油等之日用之品之外、猥ニ不持込様、猶又町役ゟ申付候得、扨又市日ニは小宿之者共ニも田代町へ諸品持出令賣買、尤隣国ゟ入来候商人共を、小宿ニ而不引留、田代町之市場へ小宿之者同然出候様いたし、惣而此後心得違之者無之様ニ、堅可申付候。尤此節田代町之者共依願、商人統領之者五人申付候間、右之者共在方立廻賣買体専申談、若不埒之儀も候ハヽ、差止申ニ而可有之候間、村ゝ江此段も可申付置候。尤右統領之者、於在方自然かさつ非分成義等有之候ハヽ、早速可申出候。

右之通在町役人江茂申渡。

晦日

一御国許ゟ之御書付、手代中へ申渡。宗門改之義ハ重御掟、

厳重吟味差詰可入念之義、勿論之事ニ候。然處大庄屋新右衛門へ被成下置候婢之者、九ヶ年已前、長野村内上野居住之甚蔵と申者へ密ニ縁付為致、追而新右衛門ゟ長野村庄屋久右衛門へ申談候訳ニ依、長野村宗門帳ニ記し候上、新右衛門婢幷甚蔵女房と、一人を両村ニ而相改候と相聞、因而は惣人高之数現人不足之積、重キ次第ニ候。手代役之義ハ定住之身分、宗門改ニ付候而ハ、帳面吟味人数引合肝要之勤筋ニ有之、委敷申サハ在町多人数と申内、右之女ハ先年御咎之者、新右衛門婢ニ候得は、廻村等之節ハ凡見知候程ニも可有之、役義ニ付吟味方不行届段恐入、差控をも可伺出儀ニ候處、無其儀相聞、上を茂不恐令蔑如候心得、不埒之至ニ候。依之被仰付様之品も有之候得共、此節ハ加宥恕、重不及沙汰候。已来卒忽之義無之、諸事心を用可入念旨、厳重可被申付候。

一日附中へ申渡。宗門改之義ニ、天下之重法、厳密ニ致吟味、可入念義勿論之事ニ候。然處養父郡大庄屋新右衛門へ永代婢ニ被下置候女、九ヶ年已前、長野村甚蔵と申者へ密ニ縁付為致、新右衛門婢ニ記し、長野村宗門帳ニも記し、壱人を双方ニ而相改候段相顕候。就夫目付中時ゝ廻村等之節、右躰之儀見聞も可致義、其上宗門改之節は、立會之事ニも候處、吟味方大様相聞候。已来宗門改且廻村等之節ハ、右躰之筋ゝ深念入心用候。

一養父郡大庄屋新右衛門。右は元城戸村格右衛門女房不行跡之次第有之、宝暦十四申年、右新右衛門へ永代婢ニ被成下置候処、先年長野村甚蔵と申者方へ縁付為致候段相顕、吟味之上、新右衛門以書付申出候は、数ヶ年召仕、人柄立直候処、瘡毒相煩、右婢親奈良田村与平次と申者引請、療治仕呉度旨相歎候ニ付、其通申付、今以快氣不仕、其儘ニ召置、早速御案内不申上、大様不念之段申出候。長野村庄屋久右衛門申出候書面、親与平次、新右衛門方へ参、右女長野村甚蔵へ遣度段申候處、不苦之由令返答、其砌田代町宿ニ而新右衛門ゟ久右衛門へ申候ハ、

右与平次娘甚蔵方へ遣度申候。此方は遣し候而も不苦、親も歎候事故、其通致呉候様相頼候処、久右衛門不落着ニ付、追而可致返答之旨相答、其後田代町ニ而頃日之儀如何仕呉候哉と、久右衛門へ相尋、其節も返答大形いたし置候処、最初久右衛門へ申向候 奈良田村 六郎次と申者、甚蔵方へ右女連行候段、久右衛門聞及候得共、新右衛門度〻相頼候事故、其分ニ差置候由、然処右女帳面前之儀、又〻新右衛門折〻申聞候得共、五ヶ年程ハ帳面ニ差加不申、其後子共令出生、猶又新右衛門帳面前如何仕呉候哉と相尋候ニ付、帳面ニ難加之段、久右衛門答候得共、繰替を以成とも加へ呉候様、頻ニ相頼、其上万一後難之節は、申分可仕之旨申聞、尚紙面を以も久右衛門へ頼向、後日之所新右衛門引請、申分可致と申を證據と心得、九ヶ年已前ゟ甚蔵女房書載、宗門改之節判形為仕候段、久右衛門申出候。抑新右衛門義、小庄屋ゟ大庄屋ニ至候而四拾ヶ年餘相勤、年老役功之者ニ候得は、郡内之義ハ不及申、御領中一躰之勵にも可成程之身分、既ニ先般年来之被称勤労、御褒美被仰付候得は、猶以諸事潔白不相勤候而不叶事ニ候處、其儀無之、軽身分なからも大庄屋役之義ハ重被立置、他領掛合をも致候身分として、婢之者を密ニ縁付為致、村方庄屋心得薄キを枉而取計、帳面付移一段付而ハ、邪成筋を談掛、此節吟味最初之答ニは、右女瘡毒煩、為養生親方へ遣、今以快氣之仕、其儘ニ召置候と申出、再吟味之答申抜不相成ニ依、役義乍相勤不埒千万之仕形奉誤入、一言可申上様無御座、奉恐候段申出候。永代奴婢之義ハ、其科重く厳科可被行を、御慈悲を以、右之通被成下、奴婢之号不免内は、目之前ニ召仕候而不叶事ニ有之、其上宗門御改之義ハ天下之重法、其旨を背、壱人を両名ニ付置、新右衛門婢ニ而改、又甚蔵女房ニ而改、上を掠、我儘邪悪之挙働(動)、一郡を関り候役義令忘却、不届至極之次第、難勝計候。依之可處厳科者ニ候得共、各別(格)以宥恕、此節大庄屋役召放候上、

婢之者取揚候。

一長野村庄屋久右衛門。右者城戸村格右衛門女房不行跡之次第有之、養父郡大庄屋新右衛門へ永代婢ニ被成下置候処、右女長野村甚蔵と申者へ縁付為致候段相顕、及吟味答ニ申出候ハ、此者奈良田村与平次と申者娘ニ而、新右衛門、与平治申候者長野村甚蔵方へ遣度段頼向候處、其通仕候而も不苦之旨、新右衛門令返答候由、右ニ付奈良田村六郎治と申者久右衛門方江参、新右衛門婢之者甚蔵方へ遣候而も差障有之間敷哉と相尋候節、難成次第令返答候処、其後田代町宿ニ而新右衛門度〻ニ頼向候得共、大形ニ相答置候由、然を新右衛門押而取計、右之女甚蔵方へ差遣、其上新右衛門ゟ帳面付移之儀申聞候節、左様難致之段相答、押詰繰替等之儀を談掛、後難之節ハ新右衛門申分可仕之旨、申聞候を證據ニ致、年を經甚蔵女房と書載、宗門改之節血判仕候段申出候。抑久右衛門義一村之庄屋をも相勤候身分、新右衛門 申分不落着ニ存たる故、最初ゟ返答大様ニ致置たる由、其後枉而甚蔵方へ遣候を聞及候ハヽ、早速手筋へ可訴出之処、無其義其儘差置、剰追而帳面ニ付移、婢号不免者を甚蔵女房と相改、新右衛門方ニ而ハ婢ニ改、壱人両名にして天下之重法を背、上を掠邪成道ニ令荷膽(ママ)、一村を預候身分役義失本意、不届至極之次第ニ候。依之屹度申付様有之候得共、加宥恕庄屋役差除候。

一高田村 庄屋佐吉。園部下村 久右衛門子 太右衛門 家内共ニ、宝暦十四申年所替申付有之候処、家内多人数久留米領へ罷越居候段相顕、及吟味候處、水損打續渡世難成難儀之餘、十人之内七人為排罷越居候義、乍存不申出、其上御切手をも不奉願、大様不念之段奉恐入候申出候。一村相預候身分として、所替申付置候程之者共、他領排生園之者同様軽〻敷心得、第一切手不願請段、役儀令忘却不届者ニ付、申付様有之候得共、此節ハ加宥恕、庄屋役差除候。

一園部下村庄屋仁左衛門。右者去卯年御領中凶作ニ付、米穀他領出當役ゟ堅停止置候処、其旨を背、他領賣相顕、及吟味申出候は、船賃銀代米賣拂銀納仕候処、直段之綾を以、米五拾弐俵筑前原田宿へ相拂、其余は田代町へ賣払候段申出、直段高下を考候は左茂可有之、殊更銀納之手當ニ候得は、其筋訴出得其急、可取計之処無其義、隠密ニ賣渡、停止之旨令違背、上を不恐、利慾ニ貪、不埒之至極に候。扨又元園部下村久内、不行跡之依科、御国江被召呼、去ル酉年帰郷、家内共ニ飯田村之内重田江所替申付有之候処、子九内と申者園部村江請持之田地有之、去年ゟ掛作手入等之ため、一類之内古家有之借宅いたし、女房共ニ令逗留、久内幷女房、去夏田根付加勢として罷越、幼少之者疱瘡看病之為居留、右体之節ハ双方之庄屋書状取遣いたし候由、然を手筋へ無訴逗留為仕候と相聞、且宝暦十三未年幡崎村へ所替申付候九介子久作と申者、園部村へ養子ニ参候

其科之主意をも不相弁、猥ニ媒妁、偖又甚蔵儀、右女を引請致縁組候段、旁不埒者共ニ付、屹度申付候之品も有之候得共、格別之宥恕を以、重不及沙汰、右之通科代夫申付候。

一重田村久内家内。右は久内儀、不行跡之次第ニ付、宝暦十三未年、御国江被召捕、安永六酉年以御慈悲帰郷被仰付、重田村へ流罪被仰付置候処、悴久内義、元村へ請持之地面有之、為掛作時ニ罷越、数日令逗留、久内儀ハ去夏作収納、且田根付等之為加勢罷越、是又数日令逗留候段相顕候。元村立越之儀は、屹度申付置候品も有之候處、双方之庄屋へ茂之申出、猥ニ罷越数日令逗留、不届者共ニ付、久内儀は去秋入牢申付、家内之者共ハ禁足申付置候処、格別之宥恕を以、此節家内之者共ハ禁足當分差免候。尤元村立越之儀は、全差留候。

二月十五日

一江戸表杉村直記殿ゟ之御状到来。一筆申達候。昨廿日御勘定奉行松本伊豆守様ゟ御留主居中へ、御切紙御達被成義有之候間、明四ツ時大手御番所後御勘定所へ、壱人被出候様と之儀ニ付、今日御留主居手代り古川佳橘罷出候処、御勘定与頭豊田金左衛門殿、平御勘定瀧又右衛門殿被出會、左之通被相達候ニ付、口達控致所望、書写帰候通、左令書載候。

筑後国筑後川通水行様子幷寄洲附洲等有之新開場等ニ可相成場所見分之儀、西国郡代揖斐靱負へ申渡候。然處靱負當時病氣ニ付品ニ寄、為名代手附之者之内ゟ致見分候義も可有之候ニ付、於場所役人幷村役人等呼出、相尋候義も可有之候間、諸事差支無之様可被致候。此段申達候。

筑後川通見分之節、音物等決而無用ニ可被致候事。

右之通被相達候。年来不承儀ニ而、兎角場所柄ニ依、手入後害ニ相成義、可有之哉と気遣敷存事候。扨又下モ村年ニ水害之場所、此折申立ニ依、幸と御利方ニ相成候義ハ有之間敷候哉、諸般勘辨勿論巡見之時節、間も有之様

子ニ候ハヽ、品ニ依御国へ被伺越候筋も可有之候。於爰許ハ其土地等委敷人も無之、旁差當り可及差圖手掛も無之義ニ候。いれ能ゝ申談、萬端心配可被致候。且又見分人へ音物等可為無用趣も口達之内ニ有之候。是等も隣旦之模様等被相考、節(マヽ)被斗候。右之趣為可申達如是に候。恐ゝ謹言。

正月廿一日　　杉村直記

浅井求馬介殿

宮川平左衛門殿

尚ゝ本書申達候趣、御同列中へも此度申越候間、可被得其意候。以上。

右御左右ニ付、今日書付を以申達ス。手代役門司郡兵衛、佑(祐)筆役青木金治。右者今般江戸表杉村直記殿ゟ御状相達候処、筑後国筑後川通水行之様子、幷寄洲附洲等有之、新開等ニ可相成場所御見分之義、西国御郡代揖斐靱負様へ被仰渡候処、靱負様當時御病氣ニ付、為名代靱負様手附之

内ゟ致見分候義可有之、於場所役人幷村役人等呼出、尋等も可有之候間、諸事差支無之様可致旨、御勘定奉行松本伊豆守様ゟ御留主居御呼出ニ而、御達有之候由、就夫下村年ゝ水害之場所、此折柄申立ニ依、幸と御利方ニ相成候道も可有之、諸般致勘弁、萬端心を配候様と之御事被仰下候条、見分之節呼出し有之候時之手配、且申込方之利害、素り已前ゟ大川筋ニ付而之訳合、他領懸合之次第等、委敷吟味可致置事ニ候。依之此節引切右御用掛申渡候間、勿論同役中申談、心付之儀は追ゝ申出、諸事念入可被相勤候。尤金治へは此旨可被申渡候。

十六日

一下郷大庄屋治兵衛、上郷大庄屋弥次兵衛、養父郡大庄屋清右衛門、宮浦東村庄屋卯右衛門、小倉村庄屋惣介、奈良田村庄屋太次右衛門、園部上村庄屋九郎兵衛、飯田村庄屋市右衛門、酒井東村庄屋小兵衛、同西村庄屋善吉、水屋村庄屋利左衛門、蔵上村庄屋佐介、今泉村庄屋次郎

介、瓜生野村庄屋善右衛門、真木村庄屋曽平。右者今般大川筋通水行之様子幷寄洲附洲等有之、新開ニ可相成場所見分之義、西国御郡代揖斐靱負様へ被仰渡候処、靱負様當時御病氣ニ付、靱負様手附之人為名代近ゝ見分可有之、於場所役人幷村役人呼出し尋等も可有之候。就夫下村年ゝ水害之場所、此折柄申立ニ依、幸と御利方ニ相成候道も可有之事故、右之面ゝ此節右御用掛筋、引切相勤候様申付候。勿論呼出有之候節は、手配且申込方之利害、素り已前ゟ大川筋ニ付而之訳合等、兼ゝ吟味を詰置、心付之義ハ、此節之御用掛り門司郡兵衛、青木金治迄、追ゝ申出、諸事心を配、念入可相勤候。

一田代町役中。右者今度大川筋水行之様子、幷寄洲附洲等有之、新開ニ可相成場所見分之義、西国御郡代揖斐靱負様當時御病氣ニ付為名代、靱負様手附之人見分可有之体ニ依、當町へ止宿滞留可有之哉も難斗候、就夫下村年ゝ水害之場所此折柄申立ニ依、幸と御利方ニ相成候筋も可有之有之事故、若止宿等有之候節之應對方、其外心付之訳等、此節之御用掛門司郡兵衛、青木金治迄追ゝ申出、諸事手支無之様、可相心得候。

口達

一酒井東村七郎左衛門、新左衛門、同西村九郎左衛門、平兵衛、水屋村惣右衛門、甚平、藤木村甚六、新兵衛、今泉村林平、五兵衛、真木村太郎兵衛、甚左衛門、安楽寺村宇右衛門、高田村太郎兵衛、文吉。右は今度大川通水行之様子、幷寄洲附洲等有之、新開可成場所、西国御郡代揖斐靱負様手附之人、近ゝ見分可有之、就夫百姓呼出尋事等も可有之候ニ付、下モ村年ゝ水損之次第、此折柄申立ニ依、幸と御利方ニ相成候道も可有之事ニ候。依之右御用筋ニ付、引切相勤候様申付候間、庄屋之差圖を請、呼出有之節之答方、且已前ゟ大川筋ニ付而之訳合等、能ゝ可相心得居候。

十七日

一宮浦西村庄屋弥兵衛、城戸村庄屋杢之平、永吉北村庄屋
安左衛門、神邊村庄屋幸兵衛、萱方村庄屋勘平、古賀村
庄屋彦兵衛、田代村庄屋益左衛門、原村庄屋文右衛門、
姫方村庄屋忠兵衛、幡崎村庄屋利右衛門、牛原村庄屋益
介、養父村庄屋与三衛門、宿村庄屋喜右衛門、鳥栖村庄
屋善七、長野村假庄屋亀右衛門、柚比村假庄屋林兵衛、
園部下村假庄屋作右衛門、高田村假庄屋左衛門、河内村
假庄屋五右衛門。右者大川筋通水行之様子、幷寄洲附洲
等有之、新開ニ可相成場所、西国御郡代揖斐鞏負様手付
之人、近〻見分可有之候ニ付、別紙之書付之面〻此節右
御用引切相勤候様申付置、就夫下村年〻水損之次第、此
折柄申立ニ依、幸と御利方ニ相成候筋も可有之事故、其
旨を相心得、御為筋心付之儀、其存付次第、此節之御用
掛門司郡兵衛、青木金治迄、無遠慮可申出候。

十八日

右取計方ニ付而は、別録有之、略之。

廿六日

一備中御代官万年七郎右衛門殿〻之飛札到来。以切紙致啓
上候。然は今般七郎右衛門儀、筑後川筋水行之様子、幷
寄洲附洲等有之、新開場ニ可相成場所為見分被差遣候
旨、
主殿頭様被仰渡候付、明後廿一日、備中国倉敷陳(陣)屋出立、
豊度国日田揖斐鞏負様御陳(陣)屋江向ヶ罷越候。尤於彼地可
及御懸合候得共、先右之段可得其意置候旨、七郎右衛門
申付、如此ニ御座候。以上。

四月十九日　　前野　弥右衛門

中尾郡次

宗　猪三郎様

御役人中様

三月晦日

御本家大臺所、今日上梁、作事掛古賀平八致下知。

四月六日

大川筋ニ付、筆頭役嶌居与八郎着仕。

十八日

豊後日田元〆役、川嶋英右衛門、今日大川筋見分有之。

五月朔日

一養父郡大庄屋假役、藤木西村庄屋清右衛門。右は大庄屋
新右衛門義、不埒之筋ニ付、先達役義被召放。右清右衛
門義、跡假役申付置候処、年齢人柄相應ニ付、直ニ本役
ニ被仰付候。一郷相関候役義候条、万端心を用、念入可
相勤候。

一今泉村庄屋次郎介。右ハ藤木西村庄屋清右衛門、大庄屋
本役被仰付、藤木西村庄屋ニ繰替被仰付候。飯田村庄屋
市右衛門、右者園部下村仁左衛門跡、園部下村庄屋繰替
被仰付候。田代村庄屋益左衛門、右は飯田村庄屋市右衛
門跡、飯田村庄屋被仰付候。姫方村庄屋忠兵衛、右ハ柚
比村庄屋九郎左衛門跡、柚比村庄屋ニ繰替被仰付候。宮
浦東村藤右衛門、右ハ田代村庄屋益左衛門跡、田代村庄
屋被仰付候。河内村先庄屋蔵之平悴郡之介、右ハ親蔵之
平義令病死、直ニ跡庄屋ニ被仰付候。

一養父郡大庄屋清右衛門。右此節今泉村庄屋次郎介儀、藤
木西村庄屋ニ繰替申付候跡、今泉村之義ハ、當時清右衛
門掛持ニ被仰付候。

一奈良田村庄屋太郎右衛門。右ハ長野村庄屋久右衛門跡、
當時太郎右衛門掛持ニ儀仰付候。

右之趣、夫〻ニ委曲書付申渡。

一米五俵、園部下村假庄屋作右衛門。同五俵、柚比村假庄
屋林兵衛。同五俵、河内村假庄屋五右衛門。同四俵、長
野村假庄屋亀右衛門。右之者共、假庄屋申付置候処、此
節庄屋相立候ニ付差免候。是迄精勤令大儀候ニ付、其村
之庄屋仕代り米之内ゟ、右之通被成下候。

七日

一今朝卯中刻、水屋村へ下り居候門司郡兵衛、青木金治ゟ
之手紙ニ、御巡見ニ付、七郎右衛門様ゟ之御書付之写、

今日ゟ御巡見有之候事申来。

一求馬介、今日大川縁へ下り候筈ニ候処、夜前ゟ痛発不罷出。

一嶋居幸之進、今日大川縁江罷下。

一宮川平左衛門、筑後府中ゟ夜前丑刻、水屋村迄罷帰、水屋村一宿。

十二日

一万年七郎右衛門、今日爰元御止宿之積ニ付、永見文左衛門、岩谷順左衛門、御茶屋へ相詰ル。

一御同所様、大川縁通御巡見ニ付、役〻罷出居、夫〻ニ取計。委細別録。

一御同人様江、緒方喜内儀ハ御料日田ゟ久留米御領府中迄、御附廻相勤候付、爰許御逗留中も為伺、毎日御旅館へ出候様申達。

十九日

一万年七郎右衛門様、今暁七ツ半時、人馬無滞御発駕有之、

為御見送、宮川平左衛門及手代役門司郡兵衛、三国境迄罷出。

一為附廻、緒方喜内及門司元碩、博多御泊迄、相附添罷越候様申達。

六月朔日

一鳥目壱〆文、田代上町藤吉。右は去ル七日夜、同人借宅と隣家之催合に差火有之候を、近所ゟ帰り掛見當、早速ひさしまつら(ママ)ゟ登り、着物を抜、火をつゝみ打消候処ゟ、無事故火鎮り、勝而相働候と相聞、奇特之至ニ付、為褒美右之通被成下候。

二日

一白木綿二疋宛、手代緒方方喜内。佑(祐)筆役青木金治、白布壱疋、玄関番目附兼帯片山勇介。右ハ去冬朝鮮御米漕船福聚丸、長府領湯玉浦ニおひて破船之節、右之面〻其場所へ出張、溺死助命之者、其外諸取引心を配致苦労候ニ付、右之通被成下候。

一鳥目五拾疋、御門番勝兵衛。同百疋、使番安右衛門、同五拾疋、小人喜三右衛門。右同様ニ付、令苦労候ニ付、右之通被成下。

一油布弐疋、宮浦東村庄屋卯右衛門。右同様ニ付、書物等ニ至り別而令苦労候ニ付、右之通被成下。

一鳥目七拾疋、水屋村庄屋利左衛門。右同断差越令苦労候ニ付、右之通被成下。

七月四日

大川筋御用ニ付、先達御国ゟ被差越置候、筆頭役嶋居与八郎、今日出府、爰許佑(祐)筆役青木金治、酒井西村庄屋善吉相附、同前出立。

八月十日

一法儀一件ニ付、流罪所替之者共、若ハ心得違にて抜〻元村へ立越候訳等は無之哉、為見分吟味村〻へ手を分、役〻立越候様申付差越、手配ハ略之。

八月十三日

田代町佐兵衛義、去春已来御門出入差止置候処、亡祖父代ゟ紙類調達御用等も相勤来候者ニ而、元来巧たる不埒筋とも不相聞旁ニ付、此節御門出入差免候。

田代町善右衛門義、去寅年博奕之宿いたし候科ニ依、河内村へ流罪申付置候処、元来商人之義ニ而耕作之働難成、且は老年ニも及、今程悔先非、行跡相改、但(ママ)看商賣筋ニ分而手馴候者ニ而、長崎御奉行之御往還、其外餘時之御用等之節、随分心を用相働候者と聞旁ニ付、此節立戻申付。

田代町儀三太事、吟味筋ニ付不埒之義申出、去〻卯年、河内村庄屋へ五ヶ年切奴ニ申付置候処、前後之勘弁もなく、吟味申付候其場所ニ驚、麁忽之義共申出候而已ニ而、

為指悪事抔企候様とも不聞候付、此節田代町居住申付。

廿七日

一田代町統領中。右は御領中両町幷小町ニ至り、酒豆腐之直段、時ニ依不同有之候ニ付、已来米豆其時之相場ニ随ひ、御定直段被仰付度之旨、以書付申出候紙面之趣一筋有之、尤ニ相聞候ニ付、申出候通申付候。尤極方之儀ハ、其時之相場を以相考、以書付役方へ申出、可得差圖候。自然商賣方已来不都合之聞へ於有之ハ、其者は勿論、統領迄屹度可申付候。

一岩谷順左衛門江申達候書付。御領中両町幷小町共ニ、酒豆腐之直段、時ニ依不同有之候ニ付、已来大豆其時之相場ニ随ひ、御定直段被仰付度之旨、田代町商人統領共ゟ申出、其筋有之儀ニ付、此節申出候通申付候。就夫極方之義、其時之米豆相場を以、統領共ゟ申出候通致勘考候上、極直段之儀は此方へ可被申出候。

九月十二日

被申渡候。

廿九日

一稲　一麦　一大豆　一小豆　一粟　一稗　一蕎麦　一辛子　一空豆　一芋類

一野菜類　一瓜(瓜)類　一苗物類　一諸穀物類

一櫨実　一摘茶

以上

御領中在町人民之風俗、已前と違、近年別而頽敗いたし、専邪欲奸曲之筋ニ心を寄候。中ニも村町ニゟ田畠作物を竊取候族、年ゝ有之と相聞、既ニ頃日已来櫨実竊取候者も有之由之風聞ニ候。田畠作物之義ハ、百姓共寒暑を忍ヒ、極ゝ辛苦せし艱難を、自分之心情引應し候ハヽ、右体法外は仕間敷筈ニ候処、人情之衰微とは乍申、欲ヶ間敷次第言語同断之事共ニ候。因而已来於村町、昼夜共ニ眼を配り友(マヽ)吟味ともいたし、右体不埒之族於有之ハ、早速召捕可遂案内候。自然其村町ニ而隠密いたし置候段相顕候ハヽ、其掛之在町役屹度越度可申付候旨、在町役ゝへ可被申渡候。

十月八日

田代町之儀、近年漸ゝ致零落、長崎御奉行其外諸家中御通路之節、御家中衆中已上之下宿、別而差支候由、就夫長崎御奉行其外紅毛人附之下宿は、向方ゟ御定之旅籠代幾斗請取候付、

上ゟ増銀被成下候得共、近年米穀諸品ともニ高直ニ付而は、賄料不足ニ有之、令難義候段願出候事。

一近年町方之駅馬漸ゝ相減、通駅之用事も間ゝ差支候程ニ有之、畢竟近年人馬共公役之出方繁く、其上旅商之荷物等手寄を求、家中之荷物ニ仕立、定法之賃銭相拂、致通路候様之義ニ而、甚令難儀候由、就夫御屋敷公私入用之人馬御雇賃銭、只今之御渡方ニ而は、佐嘉博多其外泊り之所ゝ江差越候節、人馬之食料ニも致不足、令難儀候段願候事。

一山方役原岡林右衛門。右は姫方村庄屋役宅之儀、長崎御奉行諸御大名様當駅御休泊非常之節、御立退場之壱所ニ相立居候処、近年及大破候ニ付、修補之備相立候為メ、當時庄屋代申付候。就夫姫方村之儀、零落之村柄ニ付、此節林右衛門義見かしめ被仰付候間、姫方村庄屋役宅へ住居申渡候。村方諸用之儀ハ庄屋代可取斗之、林右衛門義ハ村中之示し方諸向厳重ニ下知を加へ、村方連ゝ成立候様、随分心を用可相勤候。持役之儀ハ勿論、是迄之通可被相心得候。

一御膳米之義、最前ハ壱ヶ年ニ百弐拾俵宛、相納来候処、仕立方等格別大造之事と相聞候ニ付、御用捨筋を以、去辛丑年御減少被仰付、壱ヶ年百俵宛納来候。然処御時体ニ付而は、諸事御倹約被取行、尤仕立方手入之義とも相聞候ニ付、猶又此節弐拾俵被相減、當年ゟ八拾俵上納仕候様、被仰付候、尤追而御入用之節ハ、辛丑年已前之通、百弐拾俵ニも可被仰付候間、右之趣三郷大小庄屋中へ可

一公義御役人其外、
公義ニ相拘候御用筋ニ而、通路有之候面〻、休昼賄之義、是又御定之賃銭相請取候上、
上〻被成候増銀之分ニ而は、令難義候段願出候事。
一諸方〻御用筋ニ付、来候飛脚賄之義、御渡前ニ而は雑用とも致不足、難義候段願出候事。
右口〻之御渡方、何共六拾文銭之積を以、被成下来候処、難義之次第ニ付、正文銀之積を以、御渡被下候様、先達願出、御国へ相伺候処、是迄御定之通済来候義ニ而、不容是筋ニ候得共、前比と違諸品商直之時体付而は、難義之事情無余義次第ニ付、格別之御憐情を以、願之通口〻且別紙添書ニ申出候。隣国へ御雇人馬、其外役〻近在幷水屋濱津出等之節之御雇人馬賃銭、いつれも先當分正文銀之積を以御渡被下候、将又博多役方へ被差越候人馬、御帰ニ申付候而も、彼方之模様ニ依、一夜又ハ二夜も追逗留候儀有之候處、是迄其分之増賃不被成下、此節之趣ニ依、是又御帰之賃銀割合にて被成下、正文銀之積を以、御渡被下と之御事ニ候。尤諸品下直に相成候節ハ、早速元之通六銭差引ニ可被仰付候。

十一月四日
一岩谷順左衛門。右者御役名と勤方全体不相應ニ有之、其上旅人掛合等ニ付、不都合之筋も有之候故、相應之役名ニ相改被下候様御国江伺置、此節請拂留役と被仰下。

従天明六丙午至同八戊申
日記抜書
玖

天明六丙午三月七日
一穀物蔵上梁下知作事役古賀平八勤之。

四月十五日
一本役、平田直右衛門在勤
一御支配方〻之御條書。手代役門司郡兵衛、祐筆役青木金治。右者大川筋水行相滞、年〻水害長、近年ニ至候而は水難及数度、御領分之難澁不一形段ハ無申迄事ニ候。然處御三領共ニ去年境川筋御見分之儀、従公義被仰出、両度之御見分相済候末、於江戸表、水害難儀之次第、御権門家江杉村直記殿〻被及御内聞候品有之、御勘定御奉行松本伊豆守様〻直記殿江御達之御旨ニ依、佐賀久留米御役人江被遂熟談候折節、我〻申談之上、嶋居幸之進儀致出府、段〻申上候筋ニ付、此節右熟談取計方之御用向被仰含越候。就夫去夏川筋御見分之節、右両人儀御用掛申渡置候處、其節之訳合と違、此節ハ別而御意味深長之儀共ニ有之旁ニ付、此節新ニ右御用掛申渡候間、別紙書付を以申渡候事情を茂令貫通、諸向之取斗方心付之儀等、無伏蔵都度〻〻ニ申出、万端念入可被相勤候。尤金治江は此旨可被申渡候。以上。

四月廿九日
一今日大川筋一件ニ付、佐賀久留米御役掛衆集會、今巳刻着有之、當役〻之為使、吉松忠右衛門、原永介、草履取召連相勤、嶋居幸之進〻之使ハ御雇宿村庄段喜右衛門、帯刀ニ而草履取召連勤之。
佐賀〻之出役之面〻、左ニ記之。
佐賀〻出役面〻、伊東李兵衛 申宿主荒木次郎左衛門方、

田代勘左衛門 中宿主 小川四兵衛方、石橋三左衛門 中宿主 荒木屋善七方、

久留米〻出役之面〻、左ニ記之。

久留米〻出役面〻、稲次縫殿 中宿主 竹屋治右衛門方、岩本忠介 中宿主〆野屋弥左衛門、廣川戸内 中宿主 京屋助右衛門方、御茶屋江嶋居幸之進出浮居、御両領面〻相見へ候節、使者之間迄為出迎罷出、直ニ誘引御本座江居付、熟談筋調候上、為見廻、直右衛門参候而一通挨拶申述、直ニ引取、平左衛門ハ始終致出會、門司郡兵衛、緒方喜内相伴仕、無滞亥刻比相濟。委細別録。

五月五日

近来宮浦西村ニ而紙を漉候者有之、則出来之紙令見候處、昨今之拵ニは品茂宜敷相見へ、珍重之至ニ候。其上右紙漉候義、御領中江是迄不仕来を存立候段、心掛宜敷故と相見、奇特之至令吹(聴)籠候。猶又致永續候様、庄屋共心を付可申候事。

小出したり共、出役銀合封候様、尤当用銀小出したり共、出入之節ハ右之面〻立會、遂見分候上、員数其度〻目付役〻本役佐役銘〻江書出候様、被仰付越。

一破損掛山方役〻入切之目録差出候を、賄方ニ而御算用帳仕立来候得共、以来ハ條理入目堤川御普請共ニ、都而之入目月〻ニ相極、帳面ニ仕立差出候様、其上ニ而右帳面を直ニ賄方之御算用帳ニ取用候様被仰付越、右之外ニも御便利筋之御為ニ相成候心付之儀ハ、一統無伏蔵申談、不差置此方江申出、勿論御時体を弁、諸事廉直ニ可勤旨、夫〻申渡候。

一用銀掛前川金吾。右者今般於御国御主法之定則被取行候付、爰元之儀、右ニ准賄方之御主法此節申渡候様、且去年〻之御算用帳面銀銭仕分之儀茂、御差圖之趣、兼而御勘定奉行所〻申来候旁ニ付而ハ、御役所之手数別而手張候。萬事請拂留役同無相勤候様、尤用銀掛〻請拂留役兼帯之儀ハ、享保年来被仰付置候儀候處、是迄留役方之勤方引請不申様相聞、左様候而は此砌御用支ニ至候事故、以来ハ用銀掛之儀、御雇勤等ニ茂、容易ニハ申渡間敷候条、常〻心を用、内外御為ニ相成候様、心掛可相勤候。

六月廿日

口達

一昨夜目付幷下横目轟木町御境目立廻り候處、瓜生野町藤八と申者、了簡違いたし忍参居候を見咎〆、町役江預置候由出候。然處右之一段ハ事品茂違、表立叱等申付候時は隣端之響も可有之、如何ニ各評議被致、此度ハ各限ニ取斗之儀申達候様、左候ハヽ急度戒置、以来之儀、町役江茂厳敷可被相示之旨被申出候。書面之趣其筋有之候ニ付、先此度迄ハ各了簡之通可被取斗置候。素り兼〻心掛存居候事故、申迄無之候得共、猶又目付下横目折〻立廻り、無緩様ニ厳重可被申渡候。

七月廿八日

賄方銀戸棚出入ニ付役〻出會之儀、先達而御差圖之趣申

渡候處、目付役之儀、元来人少ニ而此上臨時之勤方相増候而ハ、難儀之次第委細書付を以申出候通、御国江御伺申越候處、立會之儀ハ先賄役請拂留役用銀掛立會を以出入致、合封諸事嚴重ニ取斗候様、尤月〻之銀銭出入ハ、先達而御差圖之通、翌月〻〻ニ其書付、御国御勘定奉行所江差越様、幸便無之節ハ態〻飛脚を以、翌月之三日限り博多迄差出置、手数可相心得旨、此度被仰越候間、得其意来月朔日より銀銭出入帳夫〻〻相伺候様可仕旨、留役用銀掛江申渡。

七月晦日

先達而作事方諸算用帳面引仕分之儀ニ付、御差圖之趣申渡候。品ニ依破損掛申ゟ何分少人数ニ而難手届段、委細書付を以申出候通承届、御国江伺越候處、猶又今般被仰下候は、其仕法不宜所ゟ被相改候儀ニ付、其改候意ハ買入之高と拂高と月〻突合候様ニと申達候訳ニ無之、一ケ年切或は二季郷方ゟ引合候を、月〻現ニ取遣候分都度〻ニ拂付、入切之帳面を一月〻〻ニ取調候儀ニ而、日〻證印を請居帳面、月〻〻高ニ賃銀或ハ品〻直段書付、此銀高何百匁、人夫何〻之代り何月中之分と書付ニ而庄屋方ニ相渡、代銀賃銀之拂相済候形ニ心得、月〻之帳面仕立候得は、強而手入は無之筈ニ候。庄屋方ハ月〻之引合書付を集置、是迄之形二季或ハ壱ヶ年切賄方江引合、左候時ハ最前之手数ニ格別相替候儀無之、扨川普請用之杭した竹等之類、郷方ゟ請込高之内、譬ハ當月帳面ニ何程拂、現品ニ何程残り居候と申處見繕候而、払帳面ニ極候儀ニ無之、是茂月〻取遣候丈宛帳面拂付置、壱ヶ月分宛〻寄、突合は十二月之高を以夫〻引合候様可致候。尤破損掛(筋カ)助ゟ帳面仕立候茂同様之儀ニ付、請取高何程之内如斯取遣、残何程と引合、残品ハ本役江可被差渡候。右之通此節御差圖被仰付越候間、破損掛申へ此旨夫〻申渡。

八月三日

一今般川筋取斗心得方等之儀ハ、兼而書付を以申渡置候事

ニ候得共、愚存之筋有之、此度相示置候趣、左之通。

直右衛門ゟ門司郡兵衛、青木金治江申達候書付、此度川筋取斗之儀ニ付、被蒙

公命候は、莫大之御規模と申、御三領従来之水災相除候大幸之儀候得は、萬一此方役〻取斗心得違之仕方ニ依候而ハ、忽御両領之御氣取悪敷、御破談ニ相成候ハ必定之儀ニ候。然は右被蒙

公命候重大之處ハ不及申、被對

公辺、御見通不相成儀を御請持被申上候御咎、何程ニ可至茂難斗、此方御首尾合之處大切成義ニ候。然は役〻之面〻、取斗筋心得方肝要之儀候条、心膽を砕キ御為筋可被相勤儀は勿論ニ候内、第一御双方氣取悪敷相成候ハ、強〻敷事ニ而候。古人之言ニ茂右体之節ハ、疑れさる様ニいましめ有之、瓜田ニ不入履と承候得は、何事ニよらす三思して、無指障様萬端心得之儀、専要ニ候条、其元達を初役〻之者江茂兼〻可被相示候。此度之取斗御順弁令調味候得は、公辺江之御忠儀、御三領之御大幸、隣旦江之響キ、古今無双之儀ニ而候。其取斗は、偏ニ各之身分ニ係り候處ニ候得ハ、此上御熟談弥相調、水災除候得は、御国家江被對、右子孫江被残忠教、冥加之儀ニ候条、人欲ニ迷、聊私意之儀等無之様、一端之事たり共、徳心を以被取捌候儀、萬〻希ニ候。不肖某儀、當職ニ罷在候得は、各忠勤於相調は、吹聴之沙汰可致候条、此旨堅守堅慎、可被令精勤候。以上。

一御役所銀銭出入之規格被相改、其月切之取斗ニ相成候付而ハ、請取前上納之銀銭、是迄之通勝手次第書付差出候而ハ、前後いたし、手捌間後ニ相成旁ニ付、其時〻急速差出候様、尤月末廿五日以後申出候者ハ、翌月相後可申候間、其旨相心得、以来取斗候事之翌日歟翌〻日歟ニ書付可差出候。且又川御普請其外三郷ゟ差出候人夫諸品共ニ、毎月朔日ゟ其月中之分書付、翌月二日迄ニ可差出候。尤當月ゟ右之通取斗候事ニ候条、其通相心得、正月

ゟ七月迄之分茂品〻書出可申候。此旨御扶持人中幷三組在町役〻江申渡。

八月廿一日

一平田直右衛門ゟ被達候書付。御領中之儀ニ共、少之事たり共、役儀ニ付被申出候筋ハ、此方江可被申出儀勿論ニ候。若此方ニ不承筋は、後相顕候時、其子細取揚不申義ハ素り、役儀ニ付可為越度候。尤去寅年申渡之通、猶又可被相心得候。

一目付中ハ役柄茂重り候得ハ、諸事令一致候而、理非互ニ議論を極、案内筋可被申出儀ニ候。乍去事品ニゟ候而ハ、一人一名を以被申出候儀茂可有之、其段ハ事品ニ依り可申候得共、押通之儀ニ一名ニ而被申出候段ハ、不吟味之儀茂候条、成丈連名を以可被申出候。

十月朔日

作毛捨例之儀、元禄年中並定免被仰付候砌、正道取斗居候と相聞候處、其後漸〻相弛、宝暦初年比ニ至候而は、別而令廃弛候付、同七丑年厳重ニ申付、其道再復いたし居候處、近来又〻緩ニ相成、様〻如何敷不直之筋茂有之段相聞候。抑捨切之儀ハ、其年之豊凶を考候道(通カ)ニ而、至而大切筋ニ有之、並定免被仰付置候節、御勘定所ゟ被申渡候書付ニ茂、穂検免之節ゟ毎年御代官と穂検使立會見分之上、其年〻捨と免とを相極候を、並定免被仰付候時ハ、其郷之大庄屋、村〻庄屋、頭百姓立會致見分相極候由ニ候得共、庄屋頭百姓若邪欲之心を生し、小百姓を虐ケ候而は、御為甚不宜、此儀別而無覚束事ニ候由相見候。然は庄屋之儀、一郷一村を御預ケ被置たる義ニ候得は、上之御為を奉存、百姓之邪曲を不治候而ハ難叶訳ニ候条、元来之本意を無忘失、以来捨例之儀猶又厳重可取斗候。

一並定免願上候節、穂検免ニ而ハ不勝手ニ而、費之筋数〻有之候ニ付、百姓共及困窮、其上捨之儀、次第ニ増候茂減候儀ハ有之間敷、彼是上下之為不宜候ニ付、並定免被

仰付候ハヽ、田畠之手入養諸事手廻シ宜、漸〻田畠共ニ作出来宜、勝手ニ相成候と之肝要之主意を以、願上たる義ニ候處、近来百姓共もたれケ間敷風俗ニ相成、農業方不精有之段相聞候。右之通漸〻風俗頽敗いたし候時、末〻ニ至り候而は、捨ニ目を付、不作を好候抔之心底之者可有之(茂カ)難斗候。萬一右体之者於有之は、不差置可申出候。

一並定免之儀、元来捨例厳重取斗候主意を以、願之通被仰付たる事ニ而、其砌ハ捨切ニ罷出候者共、少茂邪欲私曲之仕方仕間敷と之旨を以、神明ニ誓を立、村〻於神社血判等いたし候上ニ而取斗候事と相聞、宝暦年中ニ茂其筋厳重申付置候得共、近来其法漸相弛、自由ニ取斗、其上不恐神霊を仕方之村茂有之様相聞候。以来古格之通屹度可相心得候。

一例切之節、頭百姓共我儘を申募り、平百姓ゟ酒肴等持参仕らせ、不埒之筋有之候ニ付、宝暦年中停止申付置たる事ニ候。以来弥堅可相守候。

一例切之場所ニ罷出候共、其田主ハ差控、余人ゟ例之、尤例シ之時刻切候場所見斗等之儀、古格之通可相心得候。

一捨例之儀、元来弐割之干減を入、摺切之量り方ニ候處、近来其法相弛、様〻如何敷仕方茂有之様相聞候。以来御定法之通、摺切之量り方ニ可取斗候。

一村〻捨切取掛之儀、案内申出候日ゟ見合、村毎ニ役〻差出、上中下之田之例切相済候場所、三坪程ニ閘を入、其閘當り之場所ニ而例を初、最前村方ニ而例置候有高ニ引合可申候。右之趣を大小庄屋共堅相心得、村〻百姓共ニ茂令得心候様可申付候。惣而近来ハ申渡之筋を庄屋共ゟ百姓等江之達方等閑ニ有之様茂相聞、如何敷次第ニ候。右達方之精粗、以来吟味之手筋茂有之事ニ候。彼是具ニ可被申渡候。

十月廿二日

一大川筋一件ニ付、今日於養父郡大庄屋宅、佐賀久留米下

役中集會、手代中三人巳刻比罷出。

一右ニ付、下郷大庄屋治兵衛、上郷大庄屋弥次兵衛、奈良田村庄屋太次右衛門、酒井東村庄屋小兵衛、同西村庄屋善吉、水屋村庄屋利左衛門、牛原村庄屋益介、蔵上村庄屋佐介、高田村庄屋與介、藤木村罷出、諸事致心遣、内談役等も同前罷出。左之名前、佐賀〻罷越候面〻

大庄屋
（中嶋　九兵衛
直塚　李之進）

内談役
（大園伊右衛門
最所文左衛門）
（弥　平　次
嘉市兵衛
次　兵　衛
林右衛門）

久留米〻罷越候面〻

（尋木　斉兵衛
澁田忠左衛門
津留崎　惣吉）

大庄屋
（佐々木　佐市
浅川　磯八）

内談役
（和　介
新左衛門）

一何レニ茂挨拶相濟、膳部出、菓子迄出、暫有而御酒出、及長座翌朝ニ至、諸事無滞集會相濟候申出。

十二月四日

近年御用繁多ニ有之、日勤之銘〻毎日暮ニ及候迄茂相詰、苦労ニ可有之候ニ付、以来壱ケ月三日宛之暇日申付候と之事、直右衛門〻達之。

同十二日

一口達。當所ニ而ハ樫実を食候得ハ、血を吐候とて甚以恐候由、是偏ニ其製法不宜ゆへと考候。人之毒と成候を食候様可相進(勘)様無之、先試ニ當所之樫之性合如何哉と製見

候處、御国樫之性合ニ別ニ相替候儀無之候間、可食存候者は、近国〻相調候手筋茂有之候ハヽ、相求置食用之助ニ致候様、大庄屋町役共〻可令下知候。扨樫実を對州ニ而茂以前給掛候時分ハ平等ニ製法無之處〻、間〻罷當候もの茂有之たる歟、俗醫之銘〻不吟味ニ而ハ浮説を設、樫の性合不宜、可食品ニ無之由申し觸、人ニ依恐候者茂有之候処、其後年中食通候村柄健壮ニ有之候を以、近年ハ大に行れ、決而人〻害をなし候儀不相見候間、食候者製法を念入候儀専一ニ候。右之旨在町役共〻食候者へ為申聞候様、相達可被置候。以上。

同廿六日

一古賀村庄屋彦兵衛。右者去巳年御貢米納前之内七拾七俵令不納候段、下郷大庄屋〻申出、遂吟味候處、兼〻貧窮之上不幸等打續困窮差廻候処〻、無餘儀令不納候段申出、役義之主意令忘却、不埒至極ニ付、閼所閉戸ニ申付置、御国へ相伺候処、格別之以御宥恕役儀被召放、河内村之内大谷へ流罪被仰付と之御事ニ候間、其旨被申渡、夫〻可被取斗候。

一彦兵衛一類中。右者古賀村庄屋彦兵衛儀不埒之筋有之候ニ付、役儀被召放、御慈悲之上河内村之内大谷へ流罪被仰付候。依之同人家内之者ハ一類共へ被成下と之儀被仰越候。扨又彦兵衛令不納候御米上納之儀ハ、親類共〻願出候通、年賦上納被仰付と之儀ニ候間、此旨をも可被申付候。以上。

七年丁未正月十六日

一手代中〻在町江申觸。宗門御改之節、近来は當病之由にて残判之者夥敷有之候故、病氣之虚実相糺、御改之場不参無之様被仰出置、猶又當節右之旨厳重被仰出候間、実病之外決而不参不仕様、能〻御下知可有之候。

一不行跡筋御叱之者、縁談養子之出入間違無之、扨又名替等有之候ハヽ申出候様、委御申達可有之候。

一宗門帳仕立方、毎歳申達候而も粗末に有之、書載違或は

算違等間〻有之儀ニ候間、仕立方随分念入候様、御下知可有之候。

一追〻被仰出候御制法之御旨堅相守、尤高直成染物長羽織等着不仕候様、能〻御下知可有之候。

一在町共ニ若年之輩、近来別而高鬢ニ有之、一圓風儀相改不申候間、鬢体は勿論、一体之風俗急度相改候様、是又厳重御下知可有之候。

二月廿五日

一江戸御左右有之、　御老中様〻御三領殿様方江御達之御旨有之、右之御意味合、御領中末〻之者迄深く相心得候様ニと之御事ニ而、右御書付讀聞セ、猶又於爰元申渡候書付、於御廣間(弛)右筆青木金治を以讀セ被成候ニ付、御扶持人中幷三郷大小庄屋中、両町役中、布上下着御廣間江罷出、三組之者共ハ使者之間、三郷村〻両町〻組頭三人宛罷出、御廣庭ニ薄縁敷群列、直右衛門麻上下ニ而在席、大川筋水行順流之取斗方、於爰元之示談相調、去冬十一月二日〻川筋之普請取掛相始候段、於江戸表御勘定御奉行桑原伊豫守様江旧臘十二日御三領御同様御届被仰上候。然處、去月十七日　御老中水野出羽守様〻御三領之御留主居被召呼、別紙写通之御書付壱通宛御同様御用人を以御渡被成、其段杉村直記殿より御國江被及御案内候處、上御承知被遊候上、今度右被　仰出御書付之御旨、爰元役〻幷末〻迄厳重相守候様、急度可申付と之御事御下知相達候。依之　御書付讀聞候間、謹而拝聴仕、被仰出之御旨無違失、以来聊も異論ケ間敷儀無之様、堅可相守候。尤末〻之者共江は、其掛〻〻〻右同様屹度可申付候。萬一心得違之者於有之は、可被行曲事候条、可存其旨候趣、平田直右衛門、嶋居幸之進〻以書付申達。

松平肥前守
有馬中務太輔
宗猪三郎

筑後国ニ而は筑後川と唱、肥前国ニ而は境川と唱候川

筋、水行宜相成候様取斗方之儀、當二月中申立候趣相達候通、三領家来熟談之上、土居荒籠等之川除、其外立木伐透等相調、當十一月二日〻右川筋普請取掛候段、右家来共〻相達候旨、御勘定奉行申聞候。然上は先達相達候通、弥川筋水行差支無之様三領申合、川除幷竹木伐透等之取斗方、以来は別而無違失相守、聊異論ケ間敷儀無之様、領〻役人共は勿論、村〻之者迄得と可被申付候。

十二月

一右ニ付、直右衛門、幸之進〻〻口達書を以尚又委細申渡有之。

三月十二日

一當町市場ニ而穀物令賣買居候場斗共之儀、御運上銀差上来候処、即今ニ至候而は、市立之形茂無之体ニ付、場斗之賣買相止居候由ニ付、市再興迄御運上銀御猶予之儀、去冬町役共〻以書付願出、書面之趣無余儀相聞候ニ付、則御国江伺越し候處、今程市立も無之、運上銀上納方令難儀候段、無余儀相聞候ニ付、市再興迄は別段之思召を以、運上御免儀仰付と之御事儀仰下候ニ付、其旨可相心得候。勿論以前之通、市復興いたし候ハヽ、可令運上候。

六月十五日

一佐役、江口小兵衛在勤

一當役時〻令廻村候而、百姓共之内、御領中之為ニ可相成儀、且又當役を初メ在町役〻ニ至、勤方善悪之儀ニ付、心付之儀直訴致度存候筋は、無遠慮可申出候。其品ニ依り可承届候。右之趣、庄屋共〻相達置候様申渡。

十五日(マヽ)

一在町共ニ流行之病有之、近来ニ至候而ハ別而多人数相煩候由、時候ニ付而は甚以心遣ニ付、祇園社大般若轉讀申付、昌元寺松林院召寄申達候得と申達、依而は在町共右札弐枚宛軒別に遣候ハヽ、人〻氣請も可宜と之儀申出、其通申達。

一右ニ付、備物料鳥目弐貫文、御賄方より相渡。

一御領中惣竈弐千八百参拾四軒ニ札紙用杉原壱束弐帖、是又御賄方ゟ相渡。

七月六日

一緒方善五右衛門儀、紙末(マヽ)御年寄中ゟ儀仰渡候通、明和弐酉年長崎役方書手に被召抱、當年迄二十三ケ年ニ及候處、年罷寄難相勤由にて御断願出、此節被差免候。就夫同人儀、最初爰許玄関番被召出、其後段〻轉役被仰付、前後四十四ケ年之間実体ニ相勤候ニ付、年来之勤労を以、年分八木六俵宛一生被成下と之御事ニ候間、難有頂戴可致候旨申渡。

一緒方善五右衛門。右は元来田代御扶持人善左衛門忰にて、寛保元年田代玄関番ニ召抱、目付兼帯其後右(祐)筆用銀掛迄追〻相勤、二十壱ケ年ニ及候處、病気依願隠居申付、明和弐年長崎書手に召抱、當年迄二十三年ニおよひ実体ニ相勤候處、年罷寄難勤断願出候段、當役佐治軍吾ゟ爰元役方へ申越、無相違相聞候ニ付、願之通書手勤差免候。就夫善五右衛門儀、此末可令難儀、年来逗留令在勤候事ゆへ、長崎居住方軍吾申達候處、何分帰郷仕度之存念と相聞、御領中之者左も可有之事ニ候。然は善五右衛門儀、田代長崎共都合之年数四十四ケ年ニ及書手勤、多年来出精之段、軍吾ゟ申越、老年者帰郷之上難儀事情、爰元役方ゟも委細申出、無余儀次第ニ相聞候。依之御時勢茂違不容易事ニ候得共、右年来之勤労を以、善五右衛門儀帰郷之上、年分米六俵宛一生被成下候。此旨可被申付候。

九月四日

某共廻在之節見請候御領内百姓町人之内、礼儀大様之体間〻有之、我〻江對して禮儀を闕候を以は、以下之役〻江之無礼は不及申、父母兄弟諸親類江之辞儀作法も一向不相弁者可有之、至而如何敷次第ニ候。平生人柄相應ニ有之、家業等無懈相働候者も身分ニ應し候禮節無之、見掛横柄ニ有之候得は、自然と不行跡者之様ニ相見へ候。

素り輕〻者ニ而も、相當之禮節無之候而は不叶筋勿論候候。尤端〻には我等とも不見知者も可有之候得共、自他によらす、侍に行逢候節之礼儀、且上たる人を可敬と之儀は、毎度壁書を以申渡儀ニ候處、畢竟其掛之役人教諭下行届處ゟ放外者益相當〻候と相見へ候間、在町役〻其旨令会得、父母兄に對し禮節を守候儀は素り、我〻及以下之役〻ニ至り無礼放外仕形無之様、常〻懇ニ可加教諭事ニ候。惣而農商之家業相働候もの等、於道路我〻を見請候節は、其仕業を止〆遙先ゟ相慎居候ニも不及、其前罷通候節礼儀を不失様心を用、且重荷を負又は牛馬を率候者等は、笠手拭等を取罷通候而不苦事ニ候間、総而年季召仕之下男等ニ至迄、以来分〻に応し候辞儀作法急度相守候様、其掛之庄屋町役組頭等ゟ厳密ニ可令教道旨、兼而在町役〻江可被申付置候。尤各廻在之節放外之者被見及候ハヽ、早速其所之庄屋組頭等呼出、厳重可被申付旨申達。

十月十五日

大川筋水行順流之儀ニ付、去〻秋於江戸表従　公邊杉村直記殿江御差圖之御旨ニ依而、佐賀久留米御役人江追〻被及御掛合、川筋取斗方之品熟談相調、則取斗方大綱之箇條書出来、幷延享年右之筋申組、及破談捨居候議定帳を茂取出ニ相成被相添、於江府御三領為取替有之、右之両冊共ニ　公邊江被指上、御老中様方御一覧之上、御勘定御奉行所江御留被為置、猶川筋取斗方之儀、以御書付御三領被仰渡有之候趣、直右衛門、幸之進ゟ逐一書付を以申達。

十一月五日

一城戸村之内白坂町治兵次、武助。右は去ル甲辰年、城戸村祭礼ニ付、十月廿一日白坂町幾右衛門と申者之宅ニおいて、祭禮之神座城戸村之者共請取渡之節、双方之神座組合中令集合、右治兵次武助組合ニ付罷越居、例年之通盃之取引等いたし候處、同席之内酒井喜右衛門と申者、

少〻酒ニ給酔令休息候。然るを白坂町源左衛門と申者令酔狂、喜右衛門休息を不快ニ存、神座難引渡由何角と申候ニ付、居合之者共様〻相制候而も不聞入、城戸村之者江法外之仕方有之、源左衛門を治兵次抱留相宥候故、暫相慎、神座引渡之手数等相濟、城戸村之者共引取候。其後源左衛門儀、右抱留候意趣を含、火箸ニ而治兵次額を打破候ニ付、治兵次不差置、源左衛門を令打擲候由、其上ニ而も源左衛門弥悪口相募候ニより、武介儀源左衛門両手を取引立候。則互ニ椽先ニ落、源左衛門踏上り之石ニ而頭を打、先ニこけ候ニ付、皆共立寄、小路迄連来候節、治兵次駈付、眉間之疵之残念にて醐敷打掛候ニ付、氣之毒ニ存、甚七取すかり相障、幾右衛門方江連越相宥メ候由、右治兵次武介両人之者申出候。然處相手之源左衛門、翌廿二日相果候ニ付、庄屋杢之平、神座組合及源左衛門組合親類之者共江喧嘩之次第、其場之様子、死ニ至候始終相糺候處、源左衛門弟新六申出候は、治兵次武助両人にて源左衛門を引抱、幾右衛門座敷口ゟ投出、石ニ而頭を打懲ヶ、扨亦武介腰と陰嚢をしたたか蹴付候ニ付眼閣ミ、其後は一向何事も覚不申段、源左衛門申聞候由、右ふんつ蹴つ仕候腰相痛、大小便も留り相たけりたる旨申出候。尤醫師仲庵口上書ニも、月代ニ打疵有之、左之頬より胸ニ掛腫強く、落命之体と相見候段申出、庄屋杢之平見届書ニも、弥打擲之悩にて相果候ニ紛無之段申出候。然は椽ゟ諸共ニ落候節、石ニ而頭を打候疵重り候而相果たる所は不相見、全く治兵次武助両人之打擲強く、陰嚢胸腹ニ掛、急所之脳(惱)募相果候ニ無相違相見、先以一旦之口論ゟ重キ人命死ニ至候程之体ニ至り、不届至極之次第ニ候。勿論元来は怨を結ひ企たる所為ニ無之、偏酔中勢ニ乗り前後を忘、不慮之次第とは相見候共、併相手之源左衛門右打擲之脳(惱)ニ而相果候上は、右治兵次武助両人共ニ御法之通、死刑ニ可被處者ニ候。然處當年、

大順院様御十三回忌被為當候ニ付、御慈悲之上、偏ニ被
對
御尊霊様、右両人之者宥命被仰付被下候様、昌元寺西清寺住持ゟ願出、素り右之御法事御執行ニ付而は、非常之御慈悲を以、御裁許筋総而一等軽く被執行候場、両僧之願無余儀御聞届被下、且源左衛門跡妻子親類共ゟも治三次武介御赦免之儀、其砌願出置候ニ付、此節別段之御慈恩を以、両人死刑之罪科御宥赦之上、治兵次儀は昌元寺江、武助儀は西清寺江永代儀成下候間、剃髪發心為仕、奴僕之格ニ召使、不法之儀無之様、両寺江堅申渡候様、被仰付候。但本書は頗略之。

一田代町忠兵衛女房。右は夫忠兵衛小刀を以刺候次第、手筋ゟ案内申出、及吟味候處、同町太七と申者と密通之体被見顕、異見ニ逢、衣類等太七江借し遣し候段茂相顕、無面目懇意之者方江引退居候處、段〻教訓之上七月晦日忠兵衛ゟ家内も取乱し渡世難成候ニ付、女房を奉公ニ出し元手を仕立候等之覚悟申聞、在方江罷越し、其跡ニ而又〻令家出候を、即夜近所之者取扱連帰候處、太七を忠兵衛捕置、憤強女房をも括可申と申候節、過言之答致し、其場太七ゟ斯顕候上は勝手次第と詰寄、其節忠兵衛刀を以太七首を刺通し候處逃出、引続キ女房をも刺候處ゟ聲

を立、近所ゟ駈集り押留候段、令白状候ニ付、組合預申付置候。先以夫之恩恕を令忘却、間夫之悪行を仕、遂夫之家抓乱し、重〻不届者ニ付、右女忠兵衛親類之者江被成下、生殺心ニ任、如何様存分之儘ニ取斗候様申付候。

一田代町忠兵衛。右者八月朔日之夜、同町太七と申者を其身所江捕帰、小刀疵を負セ、其次第手筋ゟ案内申出、及吟味候処、女房儀、右太七と密通之段相顕、太七途中ニ而行逢候を連帰り括置、女房儀令家出候を近所之者取扱行先ゟ連来、右弐人同然相糺申募候上、太七首を小刀ニ而刺通し候処、直ニ逃出、女房儀も小刀ニ而刺候を、近所之者駈集り押留候段、令白状候ニ付、禁足申付置候。太七儀、可令吟味之処、深疵ニ而言舌不相分、其砌相果候。依之右女遂穿議候処、太七儀令密通居候段、始終白地令白状、妻敵ニ無相違上は、忠兵衛儀構無之候。雖然右忠兵衛現在女房女之道を失、同町太七江令密通、不行跡不相改、剰家具衣類等盗出し七月仕着之品忽〻不見体ニ取乱、或は与風家出をいたし、彼是傍若無人之仕方ニ候を、男たる身として安閑と其儘ニ召置、却而最前密通不埒筋見請候節、両人江色〻加異見候由、申出候為体、一向男子之氣象を失、無十方次第、果而増長之後一旦之赤面ニ依り、私ニ人命を害候ニ至候段、重〻不埒之至ニ候。依之衆人為見懲、三ケ年切奴ニ申付候。

一忠兵衛太七組合中。右は忠兵衛女房太七と密通之次第、数年来之事ニ而能存知居候由申出候。惣而組合中は互ニ申談、右体不埒之筋風聞たり共鎮方心を付、下ニ而不相濟儀は筋〻江申出、不遂過様斗ヒ方處置可致儀ニ候處、数年来之儀存なから増長至候迄、其向(ママ)ニ召置候段、一統大様不念之至ニ候。以来屹度心を用、相互ニ正敷示合候様可仕旨申付候事。

一田代町忠兵衛。右は當八月朔日之夜、田代町太七と申者ニ小刀にて疵を負セ候段、手筋ゟ案内申出及吟味候處、女房儀、太七と密通之段見顕相糺候得は、却而太七儀女

房同然悪口申募、其上兼〻不埒之仕方有之堪忍難成、右令争動候段申出、尤太七儀深手ニ而言舌不相叶候ニ付、吟味難成、押詰右之手疵にて相果候ニ付、右女重畳遂穿鑿候處、密通之段始終白地令白状、妻敵ニ相違無之上は忠兵衛儀構無之者ニ候得共、乍然女房之不行跡彼是傍若無人之仕方ニ候を、安閑と其儘召置、却而私ニ人命を害候ニ至候段、不埒之至ニ付、三ケ年切奴拝領ニ被仰付と之御事ニ候。

右之通、被仰付候ニ付、小倉村庄屋惣介江三ケ年限奴に拝領申付候。此旨可被申渡候。

一玄関番中。右は前〻ゟ玄関番ニ而目付兼役被仰付来候ニ付而は、在町之打廻り且諸見分事等、別而繁雑之勤方ニ有之、殊ニ目付役之儀は、潔白廉直に不相勤候而不相叶儀勿論ニ候處、元来御扶助之御宛行数少に有之、兼役之主意不相立候ニ付、御時体は被為違候得共、以来為加役料米弐俵宛年〻被成下と之御事ニ候間、猶又勤方可相勵旨可被申渡候。

八年戊申二月廿七日

一季奉公人之儀ニ付、去〻午十二月十九日書付を以申渡置候筋有之、其心得を以召使候段素り之儀ニ候。其節申渡候通、近年奉公人之風俗甚悪敷成行、給銀を余計ニ申掛、衣服踏物下女之髪飾等ニ至迄、不應其身ニ結構を尽し、主人同様之仕成し致し、或は食物之儀ニ付、難渋ケ間敷儀を申掛候と相聞、不埒至極之儀ニ候。就夫此節奉公人之給銀幷日雇賃銀之高相極申付候間、左之通無相違可相雇候。

上ノ下男	弐百匁
中　同	百五拾匁
下　同	百弐拾匁
上ノ下女	百四拾匁
中　同	百匁
下　同	七拾匁

日雇賃（六拾匁 百文手飯）

右之通、当年ゟ相極申付候之間、只今召使居候者ニも、右之割合を以可相與候。

一来年ゟ奉公人召抱候節は、其掛り之庄屋町役組頭五人組江も、何村何某百何拾匁ニて召抱候段相届、庄屋町役より帳面ニ書載可差出候。勿論其役ゝ幷組頭五人組互ニ遂吟味、相背候者有之候ハヽ、急度見届置、早速可申出候。猶又吟味之上称美可申付候。

一下男下女共ニ以来賃銀早く相成候訳を以、万一不働ニ有之候歟、又は御法を不守等之族有之候ハヽ、其主人ゟ掛り之庄屋町役江可申出、役ゝ遂吟味、弥其者之不埒ニ相極候ハヽ、両町は別當座親之差圖を受、村ゝハ大庄屋迄訴出可請差図候。尤両役所にて難済儀ニ候ハヽ、早速案内可申出候。全体は宝暦年之申渡、其上去ゝ年申渡置候主意を相心得、分限に不似合仕成し等不致様、勿論他領奉公日雇抔等堅差留候条、其掛り之役ゝゟ厳重可申付候。尚又蜜(密)ゝ遂穿鑿、若相背候者於有之は、主従ともに曲事ニ申付、其掛り之庄屋町役迄越度之沙汰ニ可及候。

三月廿日

御領中、以前は才藝多能之人も有之たる哉ニ相聞候處、近来は時体ニ随ひ、風俗浮薄ニ相成、諸藝心掛候人茂自然と稀ニ可有之歟、抑御領中之儀、小狭之地たりといへとも、大国に介り候場所柄ニ候得は、御政治之大要不相立、漸ゝ風俗致頽敗候様有之候而は、第一 御外聞ニ相係り、且は不肖之某等當役之身分大切至極恥入候事共ニ候。其大要を立候ニは人才を教育いたし、夫ゝ之司職を任し置候得は、不労して自治り候儀、古今之事跡顕然之事ニ候。因而諸藝心掛之人は申出候得、規格ニ相成候面ゝ可及沙汰段、先達而在町可及書載候。

一武藝之事

但、武術何品にても其師ゟ之手数目録、又は免状等相傳有之銘ゝは、尚其訳書載可有之候

一算術之事

但、天元術をも学得候銘ゝ同断

一諸禮之事

以上

五月五日

一朝鮮木綿三疋、田代町別當梁井勘治。同弐疋、同座親新右衛門。右者京都青蓮院宮様ゟ地神經讀盲僧為改、国ゝ江御役人被差下候ニ付、右用掛申付候。就夫御国盲僧之儀は、惣代之者一両人其元迄差出候様ニとの儀、兼而大坂役彼方ゟ掛合有之候處、爰許盲僧之儀は至而卑賤之者共にて罷越、彼方御役人江掛合等致し候体之者無之、其上被差越候時、御貸之筋ニも有之旁ニ付、何分不被差越候而相濟候様、可被取斗旨申達置候ニ付、其旨含候處、則御役人爰元江廻着有之、段ゝ及掛合押詰御物出少く申働、殊更爰元ゟ理人被差向候ニ不及ことく取斗、諸事無

抜目掛合相濟、格別骨折令苦労候と相聞候。依之右之通褒美申付候。

一烏目三百文、田代町座親新右衛門。同三百文、同町年寄清右衛門。同三百文、同半兵衛。朝鮮木綿壱疋、同助治。同壱反、同町役格太兵衛。同壱疋、六十人格梯七郎右衛門。同壱疋壱反、同梁井勘治。同六疋、同荒木次平治。同弐疋、大庄屋格惣左衛門。右者去ゝ秋凶作之上、去夏作大損毛にて、貧民共食用ニ差支、御救願出候者次第ニ相當候節、銘ゝ分限ニ応し施を作し候と相聞、於時勢は左も可有之事ながら、相勵助合令出精候故、御救米をも存之外相減、然は右之者之助力潤之一端ニも相成候と相見、何れも格別奇特之事ニ候。依之此節、右之通褒美申付候。

一朝鮮木綿五疋、古賀村庄屋新助。右者御領中去ゝ秋凶作之上、去夏作大損毛ニ而、貧民共食用ニ差支、飢餓之苦ニ至り、御救之儀願出候者次第ニ相當ゝ、誠ニ不安大切

之場ニ付、御米大豆等御国ゟ被差廻、危急御救被下候程之時勢ニ有之候處、古賀村之儀は、御救願出候もの壱人も無之候は、偏ニ新介平常之差配相勝れ百姓を厚実(マヽ)ニ加教育候故之儀と相見へ、加之自力を以貧民を取救、此度相與候数は纔と相聞候得共、救を施候は此節ニ不限、庄屋役不申付以前より村方之貧民を取救候由、役儀ニ付而は所行其筈之儀なから、軽キ者ニは稀成氣經(脉)働之者、奇特千万之事ニ候。誠ニ一郷一村之治メ之宜は、隣村時習するハ事理之當然ニ而、自然と其善風漸〻廣く押移候様相成儀ニ候間、猶此上相勵においては、沙汰之品も可有之候。先今般為褒美、右之通相與候間、可遂精勤候。

一朝鮮木綿壱反、田代町治右衛門。同壱疋壱反、助右衛門。同壱疋、弥左衛門。同壱疋、亦吉。同壱反、与傳治。同壱疋、久左衛門。同壱反、喜右衛門。同壱反、熊五郎。鳥目五百文、正兵衛。同、安平。同、文平。同、権右衛門。同、善七。鳥目三百文宛、新三郎、利兵衛、儀助、所平、長兵衛、傳介、弥右衛門、賀四郎。朝鮮木綿壱疋壱反、瓜生野町喜兵衛。同壱反、治兵衛。同壱反、茂介。同壱疋、惣左衛門。同壱反、松次。同壱反、隆吉。同壱反、用七郎。鳥目五百文、喜右衛門。同参百文、弥助。朝鮮木綿壱反、園部下村弥七。同壱疋壱反、同上村源市。同壱反、惣左衛門。同壱反、清七。同壱疋、水屋村貞八。同壱反、太郎兵衛。同壱疋、飯田村弥平次。同壱反、宅右衛門。同壱反、惣兵衛。同壱反、鳥栖村喜兵衛。同壱疋、高田村曽平次。鳥目五百文宛、長野村善左衛門、奈良田村文治、野口村弥平、園部下村弥平次、姫方村惣兵衛、清五郎、治右衛門、幡崎村宅左衛門、惣治、蔵上良介、鳥栖村善兵衛、長野村弥藤次。鳥目参百文宛、長野亀右衛門、奈良田村勝兵衛、野口村善次、園部上村惣八、太兵次、孫四郎、姫方村利右衛門、幡崎村徳右衛門、水屋喜兵衛。右者御領中去〻秋凶作之上、去夏作大損毛ニ而、貧民共食用ニ差支、御救願出候者次第ニ相當候節、

銘〻分限ニ應し施を作し候と相聞、於時勢は左も可有之事なから、相勵助合令出精候故、御救米も存之外相減、然は右之者共之助合潤之一端ニも相成候と相見へ、何れも格別奇特之事ニ候。依之此節右之通褒美申付候。

一朝鮮木綿壱疋、高田村曽平次。右は御領中去〻秋凶作之上、去夏大損毛ニ而、貧民共食用ニ差支、飢餓之苦ニ至り、御救之儀願出候者次第ニ相當候節、大小麦にて五拾俵程も所持致居候を可差上由、賄役財部久右衛門迄申出候處、最早御手當假成ニ相調候ニ付、不及其儀段申達候と相聞、時体令寒心斯く申出候は、差出同様奇特成事ニ候。仍而右之通、別段褒美申付候。尚又以来可相勵候。

十二日

去年十月申達候通、川筋取計方之議定帳　公納之壱冊、青木茂作を以江戸表江差越、旧臘廿八日御勘定御奉行根岸肥前守様へ杉村直記殿ゟ被差出置候處、三月十四日御留主居御呼出ニ付、大手後御勘定所江罷出候處、御勘定奉行久世下野守様御出席、御三領御留主居同様、左之御書面被仰渡候上、則御書付をも御渡被成候段、今般直記殿ゟ被仰下候。就夫川筋之一段、延享年申談之議定帳とは違、當節ハ御三領大小之御役人連印之帳面　公納ニ相成、御老中様御見届之上、御達之品茂有之候得共、両御領共ニ普請捗取候様無油断取計有之、無程皆出来ニ可至、於然は水行順流水害漸〻ニ相免候は必定之事ニ有之、御領中之大幸無此上、彼是恐悦之至ニ候と之趣、平田直右衛門、嶋居幸之進、江口小兵衛ゟ手代中江申渡。

御書付写

松平肥前守

有馬中務太輔

宗猪三郎

右家来

筑後国ニ而は筑後川と唱、肥前国ニ而は境川と唱候川筋、水行順流取計方之儀、三領申合追〻熟談之上、去〻

午十一月ゟ川除普請取掛候段被相届、其節被仰渡も有之候通、尚又三領申組之趣、為後證議定帳為取替候旨、三領之役人連印之帳面被差出候ニ付、其段牧野備後守殿江申上候處、右議定帳之趣を以、可成丈普請捗取候様取斗、皆出来之上可被相届候。

右之段、自分ゟ可申達旨、備後守殿被渡候間申達候。

廿七日

一油〆日雇賃銀之儀、先達而御法も被仰出置候處、畢竟雇入候其主人ニゝゟ御法を背キ不埒之訳ニ付、油屋申一統閉店申付。扨又油〆共之儀、申合セに致内意、徒党を企、是又御法を破り候訳ニ付、禁足申付。

廿八日

一當上町之儀、流行之病有之候ニ付、邪氣追仕度段ゝ申出、餘町之儀は流行も無之候得共、餘町同然邪氣追仕度段申出候得共、病氣流行ニ付而は難儀ニ存、申出候筋尤ニは候得共、前方ゟ邪氣追ニ付而は、躍狂言等相催、町ゝ共ニ費ケ間敷儀夥敷有之段、聞込之筋も有之候ニ付、難聞届趣申達。

一右流行ニ付而は、町方之者共可及難儀候ニ付、上ゟ御祈禱執行被仰付候。夫ゝ例之通手當仕候様ニ申達。

七月廿三日

一役ゝ詰所之儀は

上ゟ被設置候役所にて、殊更寄付之儀は、表張役所候得は、於寄附不作法之為体等有之候而は、公私之差別不相立、奉對

上不敬之儀と申、且在町役ゝ見掛も有之旁ニ付、自堕落之儀等無之様、其外諸役所共同様相心得、勿論於御寄附は自由之飲食致間敷事。

一書札方之儀は、御用之書物有之場所、且御用筋ニ依候而は、御隠密之儀等も有之事ニ候得は、手代役之外は猥に書札方被立入申間敷事。

一作事掛中之儀、御屋敷内御茶屋破損之場所は勿論、屋根

廻且草取掃除方等之儀心掛致差圖、殊に御門外表通之儀は旅人通行之場所、御外聞ニ相拘候所柄ニ候得は、尚又時ゝ氣を付、掃除方等致下知可申事。

一山方役之儀、御用木之手當且仕立方等之儀専心掛、以来普請所有之節ニ不手支様可心掛事。

一玄関番之儀は、近来形を以は警衛之役主意相立不申と相見候間、朝之内且役ゝ引取候後は、玄関之間ニ相詰、尤手習讀書等は可為勝手次第、勿論町並ゟ見込之場所、旅人之見掛も有之儀ニ付、不作法之為体等致間敷事。

一目附役之儀は、元来人之作法を糺候儀役主意ニ候得は、前条之趣を心得、役ゝ不作法之挙働は勿論、勤方ニ付而は善悪無遠慮可申出、将亦御領中一体に目を配り候儀、専要に可心掛候。就右候而は、追ゝ申渡置候。

役ゝ於詰所之作法相立候様申渡。就右候而は、自分之下人之不作法之儀有之候而は、役ゝ及迷惑候筋も可有之相考候間、此方において尚又厳重可申付候。就夫召仕之者共不作法有之候時、場所柄事品に依候而は、一向不存儀も可有之候得は、役ゝ見當次第無遠慮可被申聞候。素り一家之締は下人之行作善悪に依り諸人之知る処ニ候得は、家内之者不作法にては外人之示し難相届儀ニ付、右之通申渡候。

八月九日

下民之治否得失は、役筋之才器ニ依候儀ニ而、在町之役ゝは一町一村を引請、人民を教育いたし候儀、専要之主意ニ候。然は大概ニも其筋道を不心得しては、何分法令を施し候而茂教化可行届様無之、因而は人民教育之一筋ニ茂可相成筋為心得、此節於御屋敷有学之面ゝ召寄セ、經書之文茂且御政治方之治否得失をも承度候間、在町之役ゝ幷子供中ニ至、其當日ニは無懈怠可罷出候。尤在町役其外ニも不可有之、左様之人は諸人誘引之為、尚又相勵可致出席候。以来一町一村治方ニ心を寄せ、其功も相見候においては、可及評議儀勿論ニ候。假令在町役ゝ子

共年比相應之者たりとも、其才器依候而は用不用沙汰之品も可有之候。将亦出家社人醫者其外在町之者は、是又無遠慮勝手次第罷出候。

十五日

御領中村〻川御普請用之杭紫(柴)朶小竹之儀、三郷山附之村〻ゟ請負伐出来居候處、近年之時体ニ付而は、是迄御定之賃銭ニ而は、相運候場所其村之遠近ニ依、一日壱人賃銭之當り繼に有之、甚令難儀候付、正銀之積りを以賃銭儀成下候様、破損掛山方役迄書付を以願出、無余儀相聞候ニ付、御国ニ相伺候処、多年来御定有之候賃銭、当節改り候は不容易儀なから、格別之御憐愍を以、當分右之賃銭正銀之積ニ御極被下と之御事、今般被仰付越候間、右御用之杭紫(柴)朶小竹等以前ゟ御定之品位少も無相違伐出候様可申付旨、破損掛山方役江可被申渡候。

九月八日

一御免相銘〻蒙之儀、是迄之通、拾石以下之村勘弁之而已

月廿三日娘ともに連帰候段、庄屋益助ゟ案内申出候ニ付、組合預ケに申付置候。先以夫之恩恕を令忘却、婦道を背き間夫を構、家を抓乱し令出奔、不義不順之仕形、村中江も扼(厄)介を掛、重罪之者ニ付、此上申付様之品も有之候得共、先非を悔候所存も有之と相聞候ニ付、當節は格別之加用捨、衆人為見懲、於同村往来之辻に一日さらし候上、本夫平吉江被成下候条、奴婢召仕候共、又は奉公等為仕候とも存分之通取斗候様、庄屋益介ゟ可申付旨申渡。

晒場立札

申九月

養父郡牛原村
平吉
年廿九　女房

廿四日

御膳米之儀、古格百弐治俵之高ニ候處、去ル辛丑年乙巳年両度、四治俵御減少被仰付候處、右仕方不一形手入之儀と相聞、猶又百姓之被為厭労費、今般参治俵御減少被仰付と之御事ニ候間、當年ゟは先ッ五拾俵宛上納可仕旨、三郷大小庄屋中江右被申渡候。

十月九日

御国之儀、外國に接候御場所柄ニ付、御国事御取締方御勝手向、旧時ニ被復候筋之委細、御老中松平越中守様ゟ御達之御旨ニ付、此節格別至倹之御主法被仰出、上ゟして御身分様を被為懲候御実情、御国中固く行届、御国家御永圖を被為設筋、且文武之勵方、衣服着物之制、彼是御議定之口〻別冊之通被仰出候間、御書面之旨一統謹而可奉拝見候。就夫

公邊当時之御勢ニ而は、質素至倹之御風儀周く不相及所

も無之、隣端追〻御取締と相聞、　此方様之儀は別而被為蒙御熟達候御事ニ候得は、隣端ニは相勝、庶民之風儀淳朴ニ無之候而は、御響合至而御大切之御事ニ付、右之釣合を以諸事之省略改正、衣服音物諸停止等を初、惣而御領中弊風相改り、一統致帰服候筋〻取斗方之御用ニ付、此節直右衛門儀、急ニ中帰国被仰付候間、御領中締方ニ相成古風後シ候筋、兼而心掛候儀専一之事ニ候。因而は衣服其外共ニ制度方追〻御改正可被仰付候間、御国元御制度之旨を心得罷在、自今して持来之品たり共、難用品〻は質素之品ニ振替候覚悟可致置候。先以此節之取締方は、

公邊ニ相拘り重キ御政法之儀に候得は、不容易儀勿論ニ候条、於御國被仰出之御旨逐一令熟覧、爰許にて永〻可被取行筋存寄之儀は、不依何品無遠以慮書付可被申聞候。

御國之儀追〻申達候通、重大之御用向被為見来、先以御参覲之儀、敏にも不被遊候而難叶儀ニ候處、段〻被蒙御公恩、是迄御延引ニ相成居候。然處先達御老中松平越中守様ゟ古川圖書殿被為召候御用向之訳ニ付而は、来年ニは是非

御参覲不被遊候而は難叶、

公邊之御振合ニ係り御大切之御場ニ被為至、其御手當方大造之御入料ニ有之候ニ付、御行装も御格外被成、其上御身分様ニ被為附候事之御省略筋、至倹之道を以成丈被切縮候御入料、七百貫匁ニ余り候御銀積りニ相聞、御国体之程誠以恐寒至極之御事ニ候。就夫御領中當年作毛之儀、夏中之不氣候ニ而去年ニ比候而は出来込も薄く相聞、其上蝗之害有之旁ニ付而は、實取之厚薄も可有之候得共、先は実熟ニ至責而之事ニ候。然は前〻申達候通、大造之御入料ニ付而は、右之御差繰として當年御貢米之内切詰、御家中御扶助米丈を被相備、壱萬俵程上方江被差廻候逼迫之御差繰と相聞、右ニ付而は追〻御差延被仰

付置候未収米之内、成丈出精返上可仕時体此場ニ候。尤多年之間凶作打續百姓共及困窮居、昨今年漸難苦を免れ居候折柄、斯く申付候段至而難儀ニも可存候得共、上ニ茂御身分様を被為懲候程之御取締方ニ候得は、一統御時体奉恐感、誠一之力を合、返上米仕候覚悟を以、人〻節倹之道心掛可罷在候。右之趣大小庄屋中江懇ニ被申渡、下〻之者浮薄之心得不仕様、請持之人〻江委敷可申付旨可相達候。

廿七日

一朝鮮木綿弐疋、田代町荒木屋善七女房。右は元来久留米御領小郡町之者ニ而、願ニ依当御領中在付御免被仰付、善七方江嫁来候。以来、善七両親江之事方宜敷、既去〻年姑長〻相煩候内、昼夜介抱を尽し看病方等懇ニ相勤、其後相果候ニ付而も死後之取斗旁無残所相営、将亦舅宇左衛門儀は数年来中風之病氣ニ而、老耄之体ニ相成居候處、是又同様之あしらひ方ニ而、諸事氣を配、不自由之儀も無之通り、心を用、懇切ニ介抱致し居候処、先達而相果、死後ニ至前後始終懇ニ見届候之由、幼少之子供も有之候中、右体孝養を尽し候段、頼母敷心操、誠以感心至極之事ニ候。其上家事之〆り方等格別心を付、召使之男女ニ至り愛情を加候ニ付、皆〻相懐キ家内も睦敷有之由、旁以不一形貞節重畳奇特之至ニ候。依之為御褒美右之通被成下候。

十二月八日

一三郷大小庄屋中、両町役中ゟ書付願出。一季奉公人并日雇抔之者、給銀賃銭之員数、先達御定被為仰付候處、間〻如何敷次第茂有之哉ニ被成御聞、掛之役〻大様ニ被思召上候ニ付、當時之事情を斗、永續之定数衆議を定申出候様ニと之御旨被仰付、誠以大様不念之至奉恐入候。依之打寄衆議之上員数相極、別紙書載差上之候。就夫油〆之儀、日雇賃銭是迄百八拾文之高ニ候處、常体之日雇賃相増候ニ付而は、夫ニ準相増呉候様仕度、是又同様書載

仕置候。御差支も不被成御座候ハヽ、右之員数ニ御定ニ被為仰付被下候様奉願上候。

一季奉公人幷諸日雇賃銭覚

上之男
一六拾文銭弐百五拾匁以下弐百匁迄
中之男
一同百九拾匁以下百五拾匁迄
下之男
一同百四拾匁以下見合
上之女
一同百八拾匁以下百五拾匁迄
中之女
一同百四拾匁以下百匁迄
下之女
一同九拾匁以下見合
夏秋手飯日雇賃
一丁銭七拾文
一米壱升
冬春手飯日雇賃
一丁銭五拾文
一米壱升
諸日雇賃
一丁銭五拾五文

朝引夕引
一同七拾文
上之油〆日雇
一同九拾文　但中下見合

但諸日雇共ニ強弱ニ依り見合賃銭相与申度候。

十九日

今般御国許之儀、諸事御取締方 御格別 御改正筋 被仰出候。就夫御領中之儀は分而御差圖之品茂有之候ニ付、爰元之事情当否之間評議を以諸省略改正、衣服音物諸停止等之品、一〻令吟味別冊ニ仕立、御扶持人中三組并三郷両町江相渡置候間、以来在町役組頭等ニ至迄、一体示方之精粗且御法守否之間、目付役下横目時〻立廻、萬端心を用、厳重ニ遂吟味、此節は御法違背之者有之候ハヽ、不差置早〻可申出候。

一右御法之次第相犯候者、御扶持人之内ゟ見當り候ハヽ、是亦手代役迄可申出候。

従寛政元己酉至同二庚戌

日記抜書

拾

寛政元己酉年正月十六日

一旅之藝者を多人数、當町ニ数日留置、所〻ニ而狂言様之義密ニ為致、既に浄覚寺ニおひても去十四日之夜、狂言為致候義承届候。右様之者を相雇、数日為致滞留候段、抑去冬申渡置候倹約筋は勿論之儀、御領中全体之風俗ニは相障候機有之間敷哉、此義町役共不存義ハ有之間敷、依之存寄承之候間、書附を以申出候様相達、去十四日之夜、於浄覚寺旅之藝者を雇込、狂言様之儀為仕候段承届候。抑去冬申渡置候倹約筋ニは遠慮可致義ニ候処、其儀無之候は、右住持義、兼〻身体柄相應者故と相聞候間、已来は申付方有之候ニ而候得共、先當節存寄之旨有之候間、御領中之座頭共、来十九日召呼、銘〻包銀壱人前丁銭四百文宛可相與候。此旨町役を以申渡候様申達、座頭共へも申觸候様申達ス。

廿三日

下民之治否得失ハ、役筋之才器に依義ニ而、在町役〻之義ハ一町一村を引請、人民を教育いたし候義、専要之主意ニ付、去秋已来講習取行候は、畢竟古聖賢之遺訓を致會得、其郡其村相治り御国許之思召奉随、益以下情相通候様と之存念ニ候義、先達も委細申達置候通ニ候。然処其定日ニ在町役之内、出席いたし候も有、或は不参之者も間〻相見候。尤其郡村稼穡之下知方、又は自家之業作等ニ餘暇無之故ニ而も可有之歟、強ゝ當務を闕候而是非出席いたし候様ニと之主意ニ而は無之候得共、若しハ古聖賢之遺訓を無用之義とも存、又ハ力之不及義面倒之筋を申付候抔と存候ハヽ、法令を無ものニいたし、我手ニ

我身を害候ニ至候は、自暴自棄とも可申義ニ而、誠以可嘆事ニ候。當節殊ニ人材を御撰挙被成候間、弊風改民間在附候様ニと之義、御国許至要之思召ニ候得は、諸役〻其人〻聊も無忌憚、各互ニ勧勵之志を立御用ニ立候様、旦夕心を可用事ニ候。

一梯七郎右衛門、草野雄介、梁井勘治、荒木次平治、養父郡大庄屋清右衛門、上郷大庄屋良介、河内村庄屋郡之介、牛原村庄屋益介、古賀村庄屋新介、宮浦東村庄屋假役俊蔵、瓜生野町隆吉。右之面〻兼而勧学之志厚有之由、素り承之居、去秋已来会讀相始候ニ付而も、猶又無懈怠致出席、有志之者へも勧合相勵候由承届、奇特之至大慶之事ニ候。扨又草野雄介義、瓜生野へ居住之事ニ候処、同町之儀往還筋と申、他領之境ニ候場所柄故、おのすから風俗華美を好、人情浮薄ニ有之哉ニ相聞、右体身を持之銘〻ゟ志操相勵候ハヽ、漸〻風儀も立直可申、偏ニ町方之幸なる事ニ候。惣而當時之人情當座之事而已ニ氣を付、永久之基不相立風儀ニ候得は、其輩之面〻ニ申合、若年之者共をも引立、風俗変化之助ニ相成候通可心掛事ニ候。御國之義、當今之御時勢専才器之者御吟味有之義ニ候得は、其才能ニ依り候而は、追〻可及御沙汰ニも義勿論ニ有之、人〻可相勵機會此場ニ候。依而先當時之称美申渡候間、猶又学業有志之者引廻、人材教育之道可相勵候。

一田城養朔、緒方政叔、門司元格。右之面〻業術ニ付而は其筈之義なから、右同断格別出精相勵奇特之至ニ候。猶又仲間中申談勵合候通可心掛義、勿論之事ニ候。

二月廿二日

一田代在住緒方又右衛門。右者地方格別功者と相聞候ニ付、此節被召出、土地方吟味耕作方見分役を被仰付候。御宛行は手代役之通、席之義ハ手代役之上席ニ被仰付候。尤右勤筋ニ付、言上事此方江直ニ申越度存候節は、無遠慮可申出候。

右之通、今般被仰付越候間、御書付之趣、被相心得精勤可有之候。

廿八日

一緒方又右衛門へ申渡之書附。

御領中之弊風ハ、畢竟両町之染習ニ可有之、因而此節両町ニおゐて荒木次郎左衛門、草野雄介儀、町方風俗下知役ニ申付候。就夫貴殿義改正加役被仰付候間、革正之主法方両人ゟ伺出候筋は引請差圖可被致候。

三月六日

一米壱俵、瓜生野町隆蔵、道立、藤四郎。右三人之者共、奉養之力不行届、老母ハ他家へ致寄食、夜白を合せて食し候段可歎儀此事ニ候。御領民江之御教化不被行届ハ所詮我〻不調法之所致、尤鰥寡孤獨之窮民ハ、已前ゟ御救被成下来候御仁政之一端ニ候得共、右老母義永来食用難儀ニも及候ハヽ、窮民同様ニも可被仰付事ニ候。併若差當及飢餓候而は不便之甚敷事ニ候故、此節格別之訳を以、右之米被成下候条、老母養育之助可致候。不孝之罪ハ神明之所不許、天地之所不容ニ候得は、三人之者共其旨を相心得、已後生業筋相勵、随分孝養ヲ尽し候様可心掛候。

右之趣、町役共ゟ能〻申諭候様申渡。

七日

一下郷大庄屋治兵衛、依願役義赦免申付。古賀村庄屋新介、下郷大庄屋轉役申付。

一瓜生野町隆吉、古賀村庄屋申付。

廿三日

一本役、小河左軍在勤

一御領中諸職人共ニ賃銭之義、是迄之定数有之候處、近年米穀諸色共ニ高直ニ有之、渡世方令難義候ニ付、以来隣国之通、賃銭相請取度由願出候趣見届候。已前ゟ定たる賃銭なから申出候事情無余義相聞候ニ付、今度諸職人上中下相極、紙末之通申付候間、一統深切ニ申談、細工方令出精、不埒之儀無之様可相勤候。萬一心得違等いたし

候族も有之候ハヽ、早速吟味之上、別而申付様之品も有之候条、此旨破損掛中〻申付候様、可被申渡候。

一銭百三拾文、上大工。百弐拾五文、中大工。百弐拾文、下大工。百弐拾五文、上木挽。百弐拾文、中木挽。百拾五文、下木挽。百弐拾五文、上桶屋。百弐拾文、中桶屋。百拾五文、下桶屋。百弐拾文、上畳屋。百拾五文、中畳屋。百拾文、下畳屋。百拾五文、上屋根葺。百拾文、中屋根葺。百〇五文、下屋根葺。百〇五文、鑿彫。百弐拾五文、左官。百拾文、枌割、枌葺。百五拾文、瓦葺。

一手飯雇之節は、上中下共ニ定賃銭外ニ米壱升、又は時〻相場を以、米代可相渡事。

一細工取掛、朝正五ツ時分日入迄、尤遅参之節は時割を以、賃銭可相渡事。

一口達。諸職人賃銭定之儀、為試五ヶ年之内別紙之通申付候間、萬一心得方不埒之者有之候ハヽ、年限之内たりとも屹度元之通可申付候。尤細工之功拙ニ依段取仕替之段ハ、頭取共〻其節〻申出候通、作事掛中〻申付可置旨、可被相達置候。

四月朔日

御国之儀、御主法已来大形御尽之上ニ候得共、頓而被見来候御大用、彼是前後之御取續御難渋之段、達上聞御憂慮不浅、

御先祖様御遺誡之御旨を被為思召出、御格式ニ付候御参覲之御行装等、御分限御不相應と申程之御省略被仰出候上、是迄之御仕来を被改、御召服ニも乾濯之品御用被遊、諸事御膝本〻御奢侈を被禁と之御儀、先般殿様御直書を以、御年寄中へ被仰出、諸役中へも拝見被仰付、役〻丹誠粉骨相尽、猶又御省略御為筋之存寄も候ハヽ、無遠慮申出候様、屬下之面〻江も具ニ申達し候得と之御旨、被仰出候。抑

上御一人之御躬行を以、御家中末〻迄之御標準と被為成候御徳義之程、差當舌頭ニ難申尽、第一御身を被懲、御

国家之儀を大切ニ被思召候

御先祖様江之御孝心、下〻ニも至倹相守艱苦を凌候様、思召被成下候御仁恵、旁以感涙恐伏之仕合、重キ御役義被召置候身分、聊以御差圖方緩怠ニ相心得可申様無之事ニ候。然處先般古川圖書殿依

召出府被仰付候處、御老中松平越中守様御前へ被召出、来聘御延御用相濟候後、御家御間柄之御釣合ニ付、御咄被遊と之御事ニ而、御家中御取締方御国政御隣交之御心掛御勝手向復旧時候様、被思召と之御示教被蒙、御教諭之一〻誠に被徹御骨随ニ、忝被　思召上、兼而之御尊慮ニも符合之御旨ニ候得は、一入御本望被思召上候ニ付、御懇諭之上御條〻厚堅御守被遊、猶亦御家中御取締方改而厳重ニ御覚悟被遊と之思召を以、去年九月被仰出之候御條〻之趣、一統為奉畏ニ而可有之、仍而は御領中御省略方、先達而申達可有之候得共、猶又御為筋之存寄も有之候ハヽ、余事を閣可申出候。尤在町ニ関り候御為筋之儀は各其役分有之、何れ油断可有之様無之候得共、全体ハ我等司之事故、居町居村之仕来たり共御不為と存付候節ハ、無遠慮聞糺、銘〻役〻之異見を不相立、打割而会談令熟議、諸口都合之御為を相償候様有之度、我等乍不肖、當分御領中を御任被置候得は、責而此節之

上命御領中一同ニ感伏ニ至り、真実〻至倹取守連〻ニは分限之備を相立、

上御憂慮之一筋をも奉安候様有之度、是則御保領第一之事ニ候。

八日

御領中御田地上納貫立方之儀、其年之捨を以村並いたし取立来候を、寶暦年中荒高掛ニ取立候様、被仰付置候處、其後何角と故障申立、村並ニいたし候村〻餘計ニ有之、村並にてハ如何敷筋も可有之哉相聞候ニ付、去申秋主法を設、畝詰悪地有之難渋之地面ハ遂見分、永世之村勘弁相極、地高掛取行候様申達候儀、皆とも存知之前ニ候。

尤去年不作ニ付、於上村野口村永吉両村曽根崎村并水入村ゝ之儀ハ、地高掛難取計由申出候ニ付、村並之貫立ニ申付候得共、當年ゟ右村ゝ迚も自余之村之通可相心得候。然上ハ已後稀成損毛ハ格別、御領中一体地高掛取立ニ申付候条、耕作方随分相勵可申候。勿論時ゝ役中差廻し、手入養等之義為致見分、萬一天災之外不心掛ニ而及損毛候場所も有之候ハヽ、事ニ依其田地取上、作主之仕形相糺、怠惰無相違候ハヽ、其者ハ不及申、掛之庄屋も下知方大様ニ落候事ニ付、急度曲事ニ可申付候間、其旨相心得、無油断可令勉勵候。

（上欄の注）
農家之義、夏作を以、年中之食用と仕候處、御城下と海上遙隔候之御當邑故ニ、穂検之上免相極候而ハ甚延引仕、逐年困窮之模様を見測り、元禄年之大庄屋等色ゝと御歎申上候ニ付、為一統御救被仰付置候之並定免之儀にて、其規格等屹度定置候処、時世推移其弊生候ハ古今之通患にて、已前之疾苦ハ皆以失却仕り、自然と弊風生候義も至而無覚束、耕作方相勵作毛宜有之田ハ、不然田之上納を償ひ候付相勵候詮無之候

十八日

緒方又右衛門、門司郡兵衛、緒方喜内、岩谷重次郎。右者去申年秋作収納相後レ、既ニ御本口米皆納定日之納不

相成日延願出、氣候とハ乍申、実ハ手入之大様成處ゟニ而も可有之、如何敷次第ニ候。依之當年ハ何卒定日限皆納小物成共ニ年内ニ取立候様有之度、就夫段ゝ田方下地手入時分ニ相成、各心附之義も候ハヽ、無遠慮可被申聞候。

十九日

大石甚三郎。右は兼ゝ藝術精ニ入、令修練殊更得免状、格別殊勝之事ニ候。就而は、頃日右流義遂見分候處、別而丈夫ニ相見へ候。御奉公相勤候身分としてハ其筈之事に候得共、分而心掛宜奇特之至ニ候。猶又弟子中指南方令出精、此上弟子取立流義廣り候様可仕候。右心掛宜候段、称美申渡。

御門番勝兵衛。右ハ藝術精ニ入、殊得免状至而殊勝之事ニ候。就而は頃日右流儀令一覧候處、格別丈夫ニ相見、一段之事ニ候。御奉公相勤候身分其筈之儀なから、分而心掛宜奇特之至ニ候。猶又弟子中指南方令出精、流義廣り候様可仕候。右心掛宜段、称美申渡。

五月朔日

一養父郡大庄屋清右衛門。右は先達木垂拂之義申付候處、清右衛門ゟ達し方ハ委敷申觸候と相聞候得共、小庄屋共

之内其意を不弁、養父宿両村之儀、数拾本根臥いたし候内、樫木を余計ニ伐取候。樫木之義ハ兼而堅く差留置候ニ付、随分仕立候様不致候而不相叶筈ニ候。殊ニ養父村之義ハ當正月ニも数本盗取、材木ニ迄いたし候を乍存、是迄其儘ニ召置候を以は、同意之上と相聞候。當節も楠木迄伐取候を以は、諸法度ニ至り得心不致ものと相聞候付、両庄屋ハ勿論、郡中庄屋共時〻加教諭、右体之不埒無之様屹度可相示候。惣而頭たる者之申付を不相用、頭之頭たらさる故ニ候間、猶又已来諸下知方可念入候。

一御當邑男女旅拂之儀、兼而被停止置候処、間〻心得違之者有之歟之様ニ相聞候。御領内之義、田畠ニ應し候而は人馬寡キ處ゟ自然と耕作之手入等麁略有之處を以、右之通御制度被為設置事ニ候。然處右体心得違之者有之候而は、第一御法不相立、耕作方も麁略之基本ニ候条、此處能〻致会得、當時之事たりとも密〻に他領拂ニ出間敷候。無余義訳有之、其筋相立候者ハ、役筋へ申出、切手願候ハヽ吟味之上可差免候。万一抜〻ニ罷出候者有之、後日たりとも於相顕ハ、本人ハ素り、其掛之役〻組合之者迄、法令之道乍不便曲事可申付候間、此旨能〻可相心得候。

一耕作方為見分役〻廻村之義、自今已後猶又其節〻諸役〻差廻し、手入方之精粗相糺ニ而可有之候。

一田根付案内之義、是迄之通申出、勿論緒方又右衛門方ニも可相届候。

一田作之義、山草をおもに入候得は、格別其験相見候事と相聞候ニ付、其内初夏之内ニ草を苅入、根付前之耕方手抜無之様可念入候。

一田草を除候義、専一之事ニ候。天災年之外平易之年向、根付相濟候後、大凡壱番草を廿日限、二番以後四番草迄十四五日宛迄ニ相仕舞、其節〻其村之庄屋ゟ請持之役〻方へ書付を以、百姓使にて可届候。数遍抓ませ候程実入能相聞候得は、其上之手入かたハ人〻出精勿論之儀ニ候。

（上欄の注）
壱番耘之儀、廿日限と有之候得共、土宜ニより廿日内ニも耘候村も有之、廿日過候而耘候所も有之、或ハ水掛之遅速ニもゟ、根付も夫ニ應し候地面も有之候故、一統廿日限と申義ハ難極候付、大凡之規格を以如是相極有之、其末之弐番耘三番耘四番耘ニ至候迄ハ、十四日十五日限宛迄ニ相仕廻候様に有之候得共、是も大凡之規格ニ而、其間ニは粟を蒔付、草を取除候義、時候を不失之手筈も有之候得は、其儀ハ相含候而大凡右之通不申達候而は、田之耘方前ハ懈怠可仕歟も難量、受持之役〻と有之候ハ、耘者三郷一統大概同様之事ニ付、諸役〻三人ツヽ一郷を引請候而、壱番耘ゟ四番耘迄ハ、其節〻見届候様申付候。百姓使と有之候は、右之手筈有之候時、庄屋中ハ其村〻〻ニ居候而、朝夕之下知方ニ時を為欠不申為ニ、百姓之内壮年之外老少之内を以、其受持三人之内之頭立候人之家ニ届候様、然時ハ其余弐人之面〻ニハ頭立候人ゟ申達候手筈ニ申極、七番草迄も申付有之候筈ニ候処、貧富之不同も有之、其村之土宜も有之候而、度数之違も有之候得は、不能之事を申付候而は、却而法之破至候故、如是申達。

一水入村之義、水害有之候年ハ、其跡手入方急廻之事と相聞候得は、昼夜ニ掛候而も為相仕廻、時を不失様ニ心を可用義勿論候間、右体之節ハ其村〻之庄屋ゟ可申出、左候ハヽ、役中見計を以、一村壱人宛引切罷出見分差圖可有之候。万一之ため此段茂申達置候。

（上欄の注）
水害有之候而、意気を取失候を其儘ニ棄置候得は、翌年ニ至田草生候儀相倍候而、甚手入ニ成候付、其年可成たけ耘候得は、萬一御上納仕候程之米出来不申候共、下民之食用若ハ牛馬飼用には被用候程之益有之候付、如此申付候。

一若ハ一村之内水旱之難有之候歟、或ハ蝗等之患を以、譬ハ五段壱町格別之損毛ニ而、御物成不足と相見候場所も出来候ハヽ、惣見分之上、畝高相改、庄屋中ゟ可申出候。其上ニ而役〻罷出吟味之上、下知方可有之候。

（上欄の注）
是迄不作之場所有之候得は、庄屋中之惣毛見を請候上にて、餘村ゟ償ひ米を受候義有之候處、兎に角と惣毛見甚延引仕、此間及難義候筋有之と相聞、第一夏作仕付も遅〻仕候処ゟ、実熟も夫ニ應し延引仕候得は、翌年之田根付茂又相後〻、彼是不宜候ニ付、遅滞為無之、且ハ其筋見届之為ニ如是申達。

一惣毛見之儀、彼岸過候而七日目より急度仕掛候様相心得、定日可申出候。其節ハ其方達内一郷壱人宛可被罷出候。

（上欄の注）
三郷惣毛見之儀ハ定免之規格と聞へ、一郷村中を其郷中之大小庄屋相廻り、其年之毛上を見分仕、大凡之毛上を以、村〻之作並之上中下之位を定候処、是を以兎に角と及延引候故ニ、夫ニ應し其末村〻之例切収納等迄後れ候様ニ相聞候ニ付、手代役差出候ハ遅〻無之為と申、大凡彼岸を以期と仕り、田之水を落し候故、夫ゟ六七日を經候而、見分之期と相極。

一例切之儀、惣毛見相候済後実熟方見計、無油断差急キ可申候。尤是迄之通案内申出候ハヽ、前条之通役中立廻見分可有之候。

（上欄の注）
例切之差図、右同様之主意を以申達。

一年ニゟ格別損毛之故を以、万一地高掛難致村も有之、捨置ニ不相成候而難叶節ハ、其村〻毎ニ役〻可差廻候間、坪〻見分を請、例切可致候。其節罷出候役中も、一村之内見分残有之候とも、日〻移代ニ順番を立置、譬ハ今日水屋村へ罷出候人ハ翌日ハ高田村分ゟ、真木村へ相勤候人ハ翌日今泉村と、段〻其跡ニ入代、村順を以無不同様ニ可被相勤候。勿論其日〻〻被見届候野取帳之捨番付へは、一〻押印可有之候。

（上欄の注）
此條之儀、大略譬ハ拾ヶ村を拾人仕り率之廻り候様ニ一日宛を限候而廻村之上、例切を見分仕候手筈ニ如此候得は、拾人之面〻皆以拾ヶ村之毛上を見分仕り、後日毛上善悪之衆議之便りとも宜、其日〻〻之野取帳之捨り高、其日之役人見分之末、押印仕置候は、是ハ其跡ニ而若ハ聞違無之為を以、如此申付。

一前条申渡候通、格別損毛ニ而地高掛難取計村有之、無難之村ゟ取替米をも請候程ニ而、若ハ三郷毛見を請候ハヽ、其段可申出候。其上ニ而役中罷出、不足米其場ニ而相極候様、差圖可被致候。

（上欄の注）
手筈は大概前條之通之意にて、不足米其場ニ而不相立候而ハ、是迄之儀、如是之筋後日ニ至り案外之延引ニ及候義も有之、且ハ難貫之意味も有之歟之様ニ聞候付、一統疑心無之為ニ如是申達。

緒方又右衛門殿、門司郡兵衛殿、緒方喜内殿、岩谷重次郎殿申達。

六月七日

一米壱俵、白坂傾弥、木山口哥悦、養父村辰家。右之者共平生貧窮之由相聞、殊更盲人之世渡可及難義と被察候ニ付、憐愍を以右三人之者江与之。

十七日

醫は人之命脉を預、其術甚重キ事ハ今更不及申事ニ候。依之月〻日を極置、銘〻宅ニ而廻り〻〻ニ醫書之会讀可致候。追而醫学熟達之人も出来之上ハ、於御屋敷醫書之講談當役可承候と申達ス。

七月八日

一米壱俵宛、緒方又右衛門、門司郡兵衛、緒方喜内、岩谷重次郎。右者荒高掛取行候初年ニ付、田作手入方之儀見分申達候處、村〻立廻委敷見分精勤有之、暑中別而被致苦労候ニ付、右之通遣之候。以上。

一米壱俵、原永介、緒方貞吉。右者荒高掛取行候 初年ニ付、田作手入方見分之義、手代中同然申渡候処、村〻立廻委敷遂見分精勤有之、暑中別而苦労候ニ付遣之候。

八月朔日

一両季之社日ニは、村ニ依人ニゟ氏神等へ田株を備祭候者も有之候処、統而ハ右体之義も無之と相聞、耕作第一之祖神祭ニ付、當秋社ゟ出作之田稲一株宛、銘〻ゟ氏神へ相献祭候様申達度、尤仕方等之義ハ追而許議も可有之事ニ候得とも、秋社差掛候付、先右之通申達。

十一月廿日

當所之石牌、多ハ石形を相用居、甚尤之仕形ニ候。併間〻ニは切石ニ而石塔も有之、於御国已前ゟ石牌之寸尺御法有之候処、猶又去冬御(改)政正砌委細被仰出候間、是ニ準し爰元御扶持人中及三組之者在町共ニ石牌寸法此節申渡候。尤是迄在来ハ不及改候間、以来御法之寸尺ゟ大ニ仕立候義、堅令停止候。惣而笠を立、或ハ唐草蓮花定紋等之飾を彫付、連〻手入なる美麗を尽し拵方一切令停止候間、成丈御法之寸尺ゟ内端ニ可令出来候。身を立道を行名を後世ニ揚候段孝心之本義ニ而、石牌之美悪孝子之顕ニハ不相成候間、御國柄之根本分限之程比を弁、倹素之道ニ協、右体之儀格別古風ニ相営、無益之費無之様可相心得候。

石塔高サ弐尺　　御扶持人中

但、石形を用候ハヽ寸尺勝手次第之事。

石塔高サ壱尺五寸　　(三組之者在町)

但、石形を用候ハヽ寸尺勝手次第之事。

右之通申渡候。尤寺社之面〻茂、右之釣合ニ而内端ニ可相営候。将又御法を背候石牌を立候者有之候ハヽ、寺院ゟ急度可遂案内候。若相包後日相顕候ハヽ其寺院共可為越度候。

右之通不洩様可被相達候。

廿五日

一鳥目五百文、城戸村庄屋杢之平。右者當秋城戸村之供日、平常ゟも別而心を用、随分身分を清浄ニ致、如在之神を専とし祭ニ付、諸事經費無之様村中へ相示し、其旨一統相守、他村ゟ際立候由、其筋之者ゟ申出、是畢竟去年申渡之改正を相守、村方一統令帰服候段殊勝ニ候。加之城戸村之儀、當年田根付ゟ四番耘ニ至迄第一番ニ届申出、尤村之廣狭地之遅速ニも依り可申候得共、兎角ハ庄屋下知方宜之所致ニ而候。其上村方之儀品ニ依延寶之遺風も略存候様相聞、猶又祖先之規格を不失様、村中風俗宜様、随分可令出精候旁ニ付、為御褒美右之通被成下候旨申渡。小倉村庄屋藤右衛門、右者城戸村同様之趣、且は御境目之村〻ハ右体之所ニ心を可用事ニ候。仍而御称美被仰付候旨申渡。

十二月廿三日

當年之儀、田作収納方尖有之、御貢米仕出方も年内ニ相済、稀成事と相聞候。尤実熟之遅速は其年之気候ニも可依義候得共、當年銘〻蒙取行候ニ付、又右衛門ハ素り各日〻廻在、手入養方等見分被致差圖、庄屋共にも得其意、村方下知宜、百姓共令出精候故と相聞、奇特之至ニ候。此旨称美被申渡、猶又此上夏作共手入方無油断令差圖、銘〻蒙致連續候様可被申渡候。以上。

寛政二庚戌正月七日

一當時之水旱或ハ流行之疾病ニ付而は、三郷宗社田代町祇園社江祈禱社参有之候得共、是迄年頭社参之式無之候ニ付、當年ゟハ氣候和順為祈念、三郷宗社田代町祇園社江社参仕、御初穂及御祝、賄方ゟ用意有之。

十一日

一當地之者間〻他国之神社ニ立願之由ニ而、切手願を差出候。惣而四民ハ各職業を尽し、扨先祖を尊ひ、次ニ氏神を崇敬するこそ本意ニ而可有之候。當所ニ茂在町共ニ氏神有之候間、願あらは一村之氏神一郷之宗社ニ可禱事ニ

候。道にたに協ひ候ハヽ明鑑納受可被成候。然るを胯越へ他国之神を禱るは、物数奇なる仕方ニ候。其上御領分ニ茂大神宮を奉初、諸神普ク勧請有之候得は、随分居参ニ而可相済事ニ候。兎角誠たに尽し候ハヽ何国ゟ禱候而も感應あらん事無疑候。夫を閣キ他国之神ニ参り候は、畢竟神は二段ニ而自分之物好様ニ相聞、是則風俗を乱る之基ニ候間、此所得と被致勘弁、以来右類之願は容易ニ不取揚様、兼而筋ゝへ教諭いたし可被置候。

三月八日

一緒方又右衛門儀、先般以御見出土地方耕作見分役と被仰付置候。就夫此節目附勤をも兼候様被仰付候間、猶又心を用、萬端精ニ入可相勤と、今般御国許ゟ被仰付越候間、猶又心を用、萬端精ニ入相勤候様ニ申達。

一銀拾五両宛、土地方吟味耕作見分役緒方又右衛門、手代役門司郡兵衛、緒方喜内、岩谷重次郎。右者御田地上納取立方畝廻悪地等ニ而蒙り不應之場所、其村切ニ而勘弁米相極、去年ゟ村ゝ銘ゝ蒙り申付候一件ニ付日ゝ廻村、此節勘弁米無御手入様相極候ニ付而は、令苦労候段相聞候。依之右之通褒美申付候。

右者今般御国許御左右到来、右之通御賞賜被仰付候間、可被申渡候。以上。

一銀拾両宛、六十人荒木次郎左衛門、田代町別當梁井勘治。右は地方功者ニ有之、此節勘弁米永年無御手入様相極候取計ニ付而ハ、彼是御為方ニ申談、勘治儀ハ役ゝ江相附日ゝ廻村、算用方等之儀別而骨折、両人ともニ出精令苦労候段相聞、奇特之至ニ候。依之右之通褒美申附候。

右は今般御国御左右到来、右之通御賞賜被仰付候間可申渡候。

一鳥目壱貫文宛、宮浦西村庄屋弥兵衛、奈良田村庄屋太次右衛門、神邊村庄屋幸兵衛、酒井東村四兵衛、蔵上村庄屋佐助、瓜生野村庄屋善右衛門。右者此節勘弁米極メ方ニ付見積等之義承り、日ゝ役ゝ江相附立廻り令苦労候段、相聞候ニ付、右之通褒美相與候。

右者今般御国御左右到来、右之通御賞賜被仰付候間可被申渡候。

戌三月八日

一白木綿弐疋、大庄屋格惣左衛門。右者土地之儀格別功者ニ有之、尋向筋無伏蔵申出、御益ニ相成候義多く、殊兼ゝ郷中成立方之儀令心労候次第等茂有之趣相聞、役外之者と申、右体ニ有之段奇特之至ニ候。依之右之通褒美申附候。

右者今般御国御左右到来、右之通被仰付候間、可被申渡候。以上。

廿一日

一受払留役岩谷順左衛門。右者川方加役申渡候ニ付、神邊村堤給余米之内可被成下候間、當年ゟ右給地手入養等見分取立指引、夫ゝ差配有之候様申渡。

廿六日

一下村之儀、大川筋之變ニ依り度ゝ洪水出、多は如年ゝ作物及水腐、根付砌之洪水ニ而は植付苗莫太(大)腐、其跡植直し之苗御領中は勿論、隣且ニ茂掛ヶ相求候得共、全備ニ

至り不申候ニ付、於上村備苗之仕方ハ有之間敷哉、大小庄屋中心付茂候ハヽ申出候様相達置候處、下村水腐苗囲行届候分ハ大造之儀ニ而、右苗別段相備候ニ付而ハ、田之仕代り米且種籾等之基不相立候而は難届候。依之元禄年中並定免之御願申上候節之約定ニ而、上村中ゟ田壱段ニ付三把宛之割を以是迄合力致来候を、此節五把ツヽ之積ニメ割付、尤是迄之囲方ニ而は不宜候ニ付、根付之節畦際通り間ヾ植込置、下村水難茂無之時ニ至り、抜捨候様之仕方之趣、申出之通り承届、心付之趣尤至極之事ニ候。右合力苗之儀は定免約定之主意候處、此節も相増候付而ハ百姓共夫丈手入ニ相成、迷惑之訳も可有之候得共、下村之水損ハ上村ニも相係候儀旁ニ付、百姓相互之救合之心入を以、苗囲方等麁略ニ無之様可相心得候。尤人ニ依り苗不足之者茂可有之歟、右体之者は村内ニ而有餘之者ゟ相弁くれ、猶又根付之時節ニは庄屋中時ヾ立廻り、地面之障ニ不相成通可令下知事。

一御領中蝗生し候節防油之義、其時ニ臨相調候而は不勝手之筋ニ有之、隣旦迚茂同様致拂底、抜群高直ニ相求候段、農民及難儀候付、兼而油囲置候仕方之儀心付之趣茂可有之哉、是又相達置候處、御領中惣畝数全行届候通、一箇之囲方は其基不相立候而ハ難叶、且備方ニ付而ハ様ヾ差支之訳も有之候ニ付、於村ヾ五段以上之持分ニ應、自分ヾヾ入用丈を囲置候ハヽ、其餘差支も有之間敷之旨、是又尤之心付ニ候。右之仕方ハ銘ヾ之儀ニ而、他ニ不相拘難儀之訳も有之間敷哉ニ相見候間、右之通可取計事。

一右両條之儀は、畢竟

上ゟ茂御備を可被立儀、下之所為御任被成候段ハ、実ニ不本意儀ニ候得共、當今御時勢ニ付而は何分御手難被為届、尤追ヾ其土臺茂出来候ハヽ、御備茂可被仰付、先右之主法筋何卒連續いたし候様、役ヾ心を可用候。将又下村洪水之時節ニ依り、何れ苗不相求候而は難叶儀ニ付、於村ヾ銘ヾ餘苗茂有之候ハヽ、疎略ニ不相心得、成丈念入囲

置、下村入用之節相當之直段を以賣渡候様可致事。

廿七日

一岩谷順左衛門儀、川方加役申渡置候處、堤掛を茂兼役被仰付候間、猶又御為宜精勤可有之候旨申渡。

五月十一日

一我ヾ此間廻村之節、宮浦西村庄屋弥兵衛、長野村庄屋勇右衛門、幡崎村庄屋利右衛門、耕作自身働之体を見受、尤至極之心掛ニ候。右体之事ニ付、前以達之筋茂有之候処、右之者共其意ニ相叶、殊勝奇特之至ニ候、仍而称美申付候。

庄屋共心得方之義ニ付、宝暦八寅年委細相達有之候処、年隔候得は、昨今之庄屋又は年若之者は不存事茂可有之候間、右之宝暦年之達を写し見セ候之間、猶又一統此旨を深切相心得候様可被申渡候。但右写ハ本書有之。

六年廿一日

一瓜生野町役中。瓜生野之儀、兼而風儀之不宜所と相聞、就中祇園祭礼之節ハ祭は二段ニいたし、彼是醜聲在之候所、近来格別弊風相改、平素質素相暮、町並も漸ヾ取繕候様相見候。扨又當祇園會之節ハ神を敬する而已ニ而他客等茂不致、酒宴遊興事一切無之一際相立候段相聞、是畢竟町役共教諭行届故と彼是奇特之至ニ候。尚又以来此形之不顕様示方尤ニ候。仍而ハ称美申渡候。

一草野雄介、是亦同様之趣を以、称美申渡。但、雄介事最前風俗下知役目付兼役も申付置候故如斯。

七月十四日

今般御国御左右到来、於江戸表

殿様益御機嫌能被成御座之段、御年寄中ゟ被仰下恐悦之御事候。就夫御倹約筋ニ付、今般

御前ゟ御自筆を以、御年寄中江被　仰出候御旨有之、

御自分様ゟ被為先立候

尊慮之程、誠心難有御事ニ候。倹約筋之儀は、去ヾ申年被仰出之御旨を以、於爰許委細申達有之候通、少茂緩ニ

可相心得筈茂無之儀なから、猶又此節被仰出之御旨ニ付、弥以堅相守萬端取締方心を可用事ニ候。総而奢ニは移易人心之通情ニ而、自然と身分之行作茂大様ニ成行候様有之候得は、面〻一己之難澁は不及申、実ハ

上之御締筋ニ相拘り、此段至而不容易次第ニ有之、殊ニ當今之御時体ニ付而は、如近年万事御倹約被取行候而も、今以定式之御備ニ不相届、此節御参覲ニ付而も大造之御入料、其上於江戸御疱瘡被遊候ニ付而ハ、御意外之御滞府ニ被為至、扨又朝鮮向御隣交之間ニおゐても、様〻御難渋之御事も有之、旁以いつれか只今之向ニ而は難相濟候付、乍此上御至倹筋追〻御取行可被成、素り是迄御仕尽之末ニ而、此主之所は品ニ依り御必用を茂被相欠候ニ付、此節御省略筋御治定被仰出之御旨茂有之、極〻御大切之次第一統奉感心事ニ而、此段之所を能〻勘弁仕、假初ニ茂猥成儀等無之、風俗質素ニ取〆、諸事御制法之筋堅可相守候。依之

御自筆之写讀聞候間、謹而可奉拝聴候。右之趣御扶持人以下在町役〻江茂可被申渡候。御自筆写、

此方着服之儀、去〻年於国許一定申出置候得共、爰元府着以来未其儀候。御當地は御膝本之儀ニ(と)申、先般申出置候筋弥堅く不心得候而不叶事故、以来屋敷内は素り、平日ともニ綿服可令着候間、諸役先達追〻申達候筋、其方達聊由(油)断有間敷候得共、猶以無緩様存事ニ候。

七月廿四日

一宮浦東村秋光之者、致踊候ニ付、衣装為取揚、下横目治右衛門差出、踊衣装取揚、庄屋江預ヶ置候段申出。

廿六日

一去ル十五日、水屋村之正作と申者、於古賀村不埒之為体ニ付、致喧嘩候次第ニ付、携り候者共双方名附差出候様申達。古賀村之者十壱人、水屋村之者十六人、本人水屋村正作儀ハ不埒之次第ニ付、水屋村と高田村之間ニ有之通路之竹橋を掛させ、村方之者共ハ徒黨を結ひ大勢古賀

村江立越し、剰江仕返等之意主を企候不埒ニ付、牛飼土手笹之内道を作り、古賀村之者共ハ喧嘩之様子承付候ハ、取鎮方も可有之處、大勢立集り打擲等致候不埒ニ付、古賀村と萱方村之際ニ有之土橋を此節石橋ニ仕替させ候様申付。

八月十八日

一桐菊御紋之儀ハ、　御家ニ付御訳有之御紋ニ而、御家中其筋之人江茂拝領ニ茂不出程之重キ御紋ニ候。然処爰許寺社ニ依り、幕提灯等ニ茂桐菊ニ似寄候紋を付候者有之様相聞、

上を不恐不敬之至り言語同断ニ候。真宗之儀は、本山ゟ之免なとゝ心得候者茂可有之哉ニ候得共、其国ニ入而は其国之作法を不相守候而不叶事ニ候得は、以来は御寄附之品ニ無之、猥ニ桐菊之御紋付候義、神社佛閣ともに急度差留候。併本山之免茂候ハヽ、戸帳等は可為格別候。

九月四日

一目附勤平素之心掛之事。

一諸方立會見分心得之事。

一別見分之節心得意味之事。

右勤方土臺之主意は可相替様無之候得共、人〻勤方之意味茂可有之候ニ付、銘〻心得之筋委細書付、印判封ニ而指出候様、目附役中江可被相達候。

同九日

諸人倹約之儀ハ追〻申達在之候處、天和之比殊ニ在町役中ニ申諭之通、倹約は壱匁遣候銀を五分遣ひ、壱升遣候米を五合遣、物毎減さへすれハ能とのミ心得、貧者茂輕重可有之事ニ候、壱匁遣候銀を三分減候而程能茂可有之、五分遣候銀を不遣候而程能茂可有之、倹約之定規ニは、入ルを量と出事を為すと(ニ脱カ)不可過、各我家ニ入来物を量て、入来物之七八分を以過し候様仕、今飢寒ニ及貧民ハ猶更右之定規を用候而、縦は一月壱斗より外ニ不在之米を、末之考無之毎日五合宛食、廿日ニ食尽し候ハヽ、十

日之食無之候而餓死ニ及候事疑無之と之趣、細論之筋百年之下至感ニ不堪、其他教諭之旨茂皆中能〻存知居可申候得共、今更逐一申達候ニ不及事ニ候得共、年經事去て在町之面〻茂若ハ心得違可有之候故、兎角天和之通何卒致復古候様ニ皆中茂心を用、且ハ近来被仰出候御制度筋ニ至り、弥以無治断申諭候様可仕候。此方共ニ申達方茂行届不申儀不少可有之候故、役中茂心付之筋有之候ハヽ、封書を以役筋ニ差出候様可致候。

一諸上納之儀ハ格別之筋と申、其上先般被仰出之御旨茂有之候得は、弥當年茂去年之通出精、年内限ニ無遅滞皆納可致候。若茂取立方之延引ニ及候ハヽ、却而下民之為ニ不宜之意味有之と相聞候ニ付、得其意候而可相勤候。

一御年貢米之儀、遠方海上運漕之事ニ候得は、随分ひめ宜敷様、拵方ともニ念入候様、縄俵等ニ至迄少も麁略之儀無之様、心を用可相勤候得と之趣、在町役中江申渡。

十一日

一鳥目壱貫文、原村儀右衛門祖母。右之女元来藤木村出生之者ニ而、原村善蔵と申者江嫁来候處、善蔵儀壮年ニ而脾胃虚相煩、働方不相成、素り貧窮者ニ而繼之田畠所持致、他之受作を茂相加令耕作居候處、子共幼少ニ有之、右女壱人之精力を以假成令生計、夫存生之内ゟ馬を茂持来居候處、女之身分として飼用之草を伐、或は自分ニ馬をも仕イ、無余儀鋤耕之節人手を頼候様之儀ニ而、手入養等暫時茂無油断心を寄、加之女之仕業等ニ至り少し茂不指支通心掛、余並ニ勝れ出精いたし候故を以、自然と身体茂立直し、其後同村之宇平次と申者を養子仕、姉娘に娶ハセ孫を茂出生致、睦敷有之候處、宇平次義も不幸ニメ病身ニ相成、働方不相叶、数年之間相煩、終に病死いたし候ニ付、孫儀右衛門ニ家を渡シ、只今ニ而ハ下男を茂召仕候程ニ至り、猶追〻田畠弐町四五段余相求、其外請作之地面を茂打加へ三町余茂令自作候由、四十ヶ年以来女壱人之治メ方ニ依り子孫を茂養育、其内不幸茂有

之候得共家及相續、殊老年迄も不相替令出精候と相聞、誠に奇特之至り不堪感心候。依之先當時之為御褒美右之通被成下候。猶又家内令和睦、作方弥出精いたし候様、庄屋ゟ懇ニ可申聞旨申渡。

廿一日

一梯七郎右衛門。右者養父郡大庄屋假役申付候。大庄屋之儀は一郡を引受、其任甚重キ候間、萬般心を配念入可相勤候。夫付七郎右衛門儀兼而六十人格を被下置候事故、此節大庄屋上席ニ申付候と之儀申達。

十月廿九日

一鳥目壱貫文、酒井西村武四郎。右之者元来假成之百姓ニ候処、親太平次代ゟ漸〻致零落居、其比同村弥五右衛門と申者、壮年ゟ盲人と相成、娘三人男子二人有之、何れ茂幼少ニ而耕作之働いたし候者も無之、大勢之家内養育方及難義、持抱之地面茂漸〻賣払、或ハ質入等ニ相成候付、右武四郎儀、弥五衛門家為取立同人方江引越、嫡女と縁組いたし、繼之地面を以数ヶ年間精力を尽候処ゟ身代茂立直、弥五右衛門次女両人を縁ニ在付、男子両人江茂教育方宜敷、人柄相應ニ生立、供〻力を戮せ耕作他ニ勝出精いたし候ニ付、右質入ニ相成居候地面茂請返、其上田畠弐町五六段程買求、弥五右衛門実子両人江茂妻を娶り、夫〻新ニ家造作いたし呉、各田畠壱町四五段宛譲渡、家財農具作馬等迄無差支様致配分候上、其身ハ元之実父屋敷ニ家を構、弥耕作出精いたし候由、元来武四郎儀正直之人柄ニ而、右家を引請候而数十ヶ年之間家内和睦いたし、弥五右衛門夫婦江之奉養方等懇ニ有之たると相聞、家作之仕方田地配分等之取計、全躰私情を離候心底、誠ニ天道之幸福ニも協たる哉、弥五右衛門跡両家ニ取立、其身実父之遺跡をも無別条令相續候段、奇特之至り不堪感心候。因而先當時之為褒美、右之通成被下候。

右之趣庄屋ゟ懇ニ可申達旨可被申渡候。

十一月十八日

一科銀壱貫五百文ツヽ、瓜生野町宇作、松之介。右之者共、去ル十日之夜同町藤四郎於借宅、藤四郎同然、令博奕候段相顕、召捕遂吟味候處、無相違及白状候付、直ニ入牢申付、口書之趣見届候。博奕之儀は一体

公儀之御法度筋ニ而、殊ニ近来ハ色ミ名目を付寺社等ニおいて致賭候者茂御糺被仰付と之御事、去ミ年別而被仰出之御旨有之、其趣ハ御高札場ニ制札を立相示置、猶又於爰許茂追ミ厳重申付儀ニ候處、御法を不相守不埒者ニ候。総而致博奕候者は對

公儀候而茂屹度可申付義ニ候得共、格別之宥恕を以、瓜生野町往来之辻ニおゐて三日之間さらし、右之科銀申付差免候。以来銘ミ家業之筋可心掛候。若萬一不埒之聞於有之は、無用捨可罰之候。

一同町藤四郎。右同断之訳ニ付、藤四郎義宿を茂致し、自家ニ而も無之於借宅右体不埒、家主徳右衛門江茂迷惑を掛ケ候不埒者ニ有之、其上兼而貧窮者ニ而親之養育方茂不行届段相聞候付、親為養育去年三月米相与申付置候品も有之候、死去後忌之日数茂不相立内、右致不埒候段言語同断、博奕之科ハ勿論、第一不孝之罪所不遁、旁重罪者ニ付、瓜生野町往来之辻におゐて三日之間さらし、町役格喜兵衛江五ヶ年限奴ニ被成下、此上向方ニおいて不埒之聞於有之は、直ニ召捕無用捨可罰之候。

一右之趣、喜兵衛ニ茂以書付申渡。

一瓜生野町役中。右者同町藤四郎、宇作、松之介儀、藤四郎於借宅令博奕候付、去ル十日夜召捕入牢申付置候、遂吟味候処無相違及白状、不届者ニ付夫ミ裁許申付候通候。右体御法を背候は畢竟町中之示し方緩ニ有之候処ゟと相見、殊ニ雄介義は同町風俗下知役を茂被仰付置候処、何れ茂勤方大様之至りニ候。就而は申付様之品も有之候得共、此節は不及沙汰候。以来示し方無油断心掛、猶又右之者共以後行跡改方心を寄、萬一不相改候ハヽ直ニ手筋を以案内可申出候。

廿七日

一田畠之諸作物、野菜類、或ハ櫨実、弐番茶等あらし候者間ミ有之と相聞、別而作物之儀は、人ミ辛苦を以仕付置候品ニ候得は、其身ニ引應し候而茂可恥事ニ候処、不埒之仕形言語同断之次第ニ候。因而此節三郷両町江肆木相渡候間、在町ニおゐて右体之者見當候ハヽ、早速庄屋江申出、其上は不及案内、男女ともニ村町其場所ミミ江さらし可置候。若見當候而茂難申出筋も有之候ハヽ、直ニ下横目迄内ミ申出(可脱カ)候。尤其仕方之模様ニ依り、訳茂違候品茂有之節は、表向手筋へ申出、可受差圖候。右之通相肆候而も萬一心底不相改、再度法を犯し者有之は、不差置案内可申出候。

十二月朔日

近来於町方大鳥を求候者間ミ有之と相聞、畢竟賭博之道ニ相拘り如何敷筋ニ而、押詰風俗を害之基ニ候間、屹度差留候。依之是迄所持致居候者共、今明日之内隣国へ持出可賣拂候。此上萬一私ニ取扱候者有之候ハヽ、役筋之者見當次第急度申付様之品有之候。

一緒方又右衛門、向後御用日ニは御寄附江罷出居、會席江茂罷出、其役所ミ江茂立越、心付之儀ハ無遠慮申出有之様申渡。

四日

一御普請所杭紫(梁)朶人夫積書付、庄屋共ゟ差出候処、凡積とは乍申大成違茂有之、既ニ當春再度為積直候内、後之積ニは余程相減し候所茂有之を以は、見分之上内端ニ入候を主意と心得、村ニ依り平日心組候望之様及承候筋茂有之、右体之儀畢竟役人之心逢迎すると申ものニ而、所詮無用之手数ニ候。御普請之模様は役筋之存寄ニ而積(候脱カ)ゟ外ニ、人夫相増候事茂有之、又は減し候所も有内之事ニ而、庄屋中之心組不及事ニ候へハ、以来は庄屋中其村之年功之百姓召連、其場所ミミ逐一立會、委細見積之上、心一盃指詰候積書指出候様可被申達候。

廿七日

曽根崎村弥三次。右者若年比不行跡之筋有之、宝暦七丑年御領分追放被仰付、既ニ前非を悔立歸之義、数年来手筋を以毎度歎越候訳ニ依り、此節御領分立歸り申付、大庄屋新介奴ニ申付。

寛政辛亥三正月八日

郷村川御普請、明後十日ゟ取掛候様、破損掛申江申達。

十五日

門司郡兵衛儀、病氣ニ付、手代役差支候ニ付、緒方又右衛門儀、持役之内ゟ先ツ手代勤相兼、乍苦労令日勤、諸事御為宜敷精勤仕、持役ニ付在方立廻り之勤筋ハ、原永介江申付候間、是亦宜敷可申談旨書付を以申渡。原永介、右者緒方又右衛門儀、持役之内ゟ手代勤相兼候様申付、依之在方立廻之勤ハ同人江申付、御為宜敷令精勤候様申渡。

十六日

寛政三辛亥 日記抜書 拾壱

一諸取計筋ニ付、緒方又右衛門御用掛ニ被仰付候間、天和以後御領中紀綱ニ相関候美政ニ引合セ、吟味斟酌可被差詰候。右ニ付掛之役ゝは名前を以可被申出候。尤取掛候日限詰所等ハ其上ニ而可及差圖候。

廿五日

一緒方喜内、岩谷重次郎。右ハ諸取計筋ニ付御用掛被仰付候間、同勤之又右衛門被申談精勤可有之候。御用筋ハ追而可相達候。

一原永介。右ハ手代中江達候御用筋ニ付、持役茂有之事故加江候間、無伏蔵申談精勤有之候様、可被申達候。

一養父郡大庄屋梯七郎右衛門、上郷大庄屋良介、下郷大庄屋新介。右者手代中江達置候御用筋ニ付、右之銘ゝ差添候間、其筋ゝ之御用令成熟候様、懇ニ可被申渡候。委細ハ追而可達段申渡可被置候。手代中。

一瓜生野町別當草野雄介、田代町別當梁井勘治。

右同断。

一伊勢参詣之事ニ付申付候口達。

御領中之者、伊勢大神宮江参詣いたし候儀を、全躰差留候と申ニ而は無之候得共、其輩さそい合候内、或は借銭之筋不寡候而、却而困窮之一端とも成、難儀仕候様子ニ付、去年正月教諭之次第心之及申達置候得共、弥其意之行届候歟茂無覚束候故、當春も又〻可申諭哉ニ候得共、天和之比は御領中在町之模様、令すれハ行ハれ、禁すれハ止候と相聞、其以後迚茂其通ニ可有候処、當節之事は所詮我〻不徳之身分を以、徒ニ文面而已ニ而千百度申諭候而も、皆中得心可仕とも存らす(られす、カ)候。然らはとて其儘ニ見過し候も本意ならねは、若茂一時之浮氣ニ而往年之困窮を不顧之者茂有之候ハヽ、其者共を其掛之庄屋町役〻御屋敷江召連来候様被申達、猶又以前〻之教諭之趣をも受續被申候ハヽ、差図之行届候様、親切ニ愛憐之情を尽し被申達候得、夫にても得心不致候而、萬一往来切手不願請、抜〻ニ致参詣候者有之候時、長路中不慮之難儀も不可量知候付、其掛之庄屋町役之無念ニ帰し、越度たるへく候。

一田代村之百姓年〻と借銀借米莫太(大)ニ至り、往〻利息ハ際限茂無之、銀主〻之催促不輕困窮ニ迫り、纔ニ廿八軒之竈数ニ成候内、既ニ八九軒ハ去冬も又〻潰れ竈と成へく様子ニ付、田代村庄屋藤右衛門、下郷大庄屋新介手段之筋申出、手代役茂取計之趣申談候事ニは候得共、最早年内余日無之、米銭他借之歳月利息自他之算用難届候ニ付、右両人と田代町役と之相談を以、當正月迄程能申諭置候處、取計之帳面口上書相添、昨日新介、藤右衛門〻差出見届、其筋尤ニ相見江、弥其通取計候様申達。但田代村之公役代米八拾俵有之候を以、十ケ年賦ニ拂潰候積、委細仕方帳面有之、勿論新介、藤右衛門、田代町別當勘治、座親新右衛門江其趣申達、仕方成就之上、借り主と貸主と之名前之下ニ承知之為致押印置候得と申達ス。

廿九日

一諸取計筋ニ付御用掛申付置候左之面〻、若茂御用筋洩聞候而は如何に候故、今日誓旨為仕、手代役緒方又右衛門、緒方喜内、岩谷重次郎、目付役原永介、緒方貞吉、青木幸蔵肩衣着、大庄屋梯太郎右衛門、良介新介、両町別當草野雄介、梁井勘治羽織袴着、於御寄席ニ血判為致。

二月朔日

一手代役三人、大庄屋三人、別當役二人、今日同様溜間出会、以後月〻九会を以、習俗改正論候様、目附中は當節専一と溝渫修理ニ付闕席、勿論御用掛之面〻外出入差溜と之儀、溜間懸紙為致、委細別録。

一今般闘鶏流行ニ付而は、其徒之費を思禁置候處、瓜生野町甚右衛門、長吉、大鶏を飼居候趣聞及、去月廿七日禁足申付置、今日書付を以、甚右衛門科銀弐貫文、長吉ニ壱貫文申付。

一瓜生野町之儀、風俗不宜候付而は、去〻年以来習弊を為致候様と之存念を以、喜兵衛、弥介茂新ニ町役格ニ被仰付置候處、其際之不相見は我〻差圖不足之然る事ある歟、抑亦其品之無るへからさるの意茂有之(マヽ)何れ歟、教諭之不届様ニ相聞、今晩又右衛門儀瓜生野町ニ出浮、是迄之心得方致尋問候得と申達。目附役原永介儀大鶏之筋ニ付而ハ、最前取計方之意味も有之候得は、同様於別當雄介宅、座親佐七及喜兵衛、弥介其地組頭中と甚右衛門、長吉ともニ召寄、委細申諭候旨申出。

一瓜生野町幼年之者ニ孝心之子有之候と聞及候故、委細承合申出候得と又右衛門江申遣、又右衛門儀於別當雄介宅、幸と皆中召寄置候内之事故問候得は、上町善蔵子嘉蔵子関蔵と申者、當年九歳ニ成、善蔵儀ハ宝暦年為人宜候と申を以賞美有之、嘉蔵儀も同様之人物ニ候處、去冬より病氣発候付而は、関蔵儀當町祇園社ニ日夜参詣仕り、父之快然を祈、暗夜之節ハ朋輩之内を誘ひ候得共、何之為之故(に)と申事茂不語候得は、其訳をしり候人も無之候處、折節見當候者有之、問候得は、父之為と答、何と申候而

拝し候哉と申候得は、ととさま之病はやく快なられ、元ミ之様ニ蠟をしめ被申候様ニと禱り候と申候より、初而隣家之面ミ茂其事を聞及、殊勝之儀と申合候程之事ニ而、是迄不申上儀茂今日之次第ニ候と之町役中申聞之趣、又右衛門ゟ委細申出。

二月二日

一瓜生野町嘉蔵子関蔵。右者親嘉蔵儀、去冬以来欝症之病氣差発、近来は不仕合ニ而渡世方茂難儀仕候者と聞、右関蔵儀當年九歳ニ成候處、親之病氣為祈念、同町祇園社ニ日参仕り、夜ニ入候而も又ミ致参詣御由、幼少之身分、親之為ニ昼夜神を祈り候至誠、天性孝心之處、真ニ感心無限次第候。兼日衣食茂不足之者と相聞、依而當時之為御褒美、木綿嶋一反被成下候。猶又家内之者共病氣奉養方氣を付、弥孝心を勵候様、町役ゟ懇ニ可申諭旨申渡候。

御口達之写

瓜生野町嘉蔵子関蔵。親去冬ゟ病氣ニ候處、関蔵當年九歳ニ罷成、尽孝心同町祇園社ニ昼夜親之病氣平快を禱り候由、尤貧窮者ニて家内暮方茂乏布相聞、父之看病方茂不手廻ニ有之、夜ハ幼少なる弟を懐き寝候而、母ニは父之看病を為致候由、天性之孝心殊勝奇特之至ニ候。以後於遂孝心は被仰付様茂可有之候得共、先ミ彼是之振合を以、乍些少我ミゟ米弐俵與之候。

瓜生野町関、年九歳、其親嘉蔵儀、元来油屋仕候處に、漸ミ不勝手ニ相成、渡世方難立候ニ付而、小商賣等仕候得共、愈以生計方乏敷、彼是之辛苦不軽之故ニ候哉、去庚戌冬ゟ欝症相発、快氣之期難量難儀之仕合ニ候處、右関蔵儀幼少なからも父之病氣を憂苦仕、其比ゟ氏神　祇園社江祈願を籠昼夜参詣仕、幼年之儀故夜入候節ハ、近隣之子供を誘ひ連立候得共、終ニ其様子を不申候得は、其事を知候者茂無之、近来ニ至り憂戚之体を見及候者有之、何之故ニ致参詣候哉と尋候得は、父之病氣故と申候ニ付、何と申拝し候哉と問候得は、はやく快氣被致、元

之様ニ油をしめ被申候様ニ祈り候由相答、且又當節四歳ニ成候弟を愛し、夜ハ抱き臥候而母之能介抱あらん事を翼ひ、寒夜には父之難堪可有之を心付候哉、其懐入り肌を温め候様之儀茂有之、惣体父之病氣騒敷儀を厭ひ候事を察候而、家内ニて之挙動茂物事を静ニ仕り候趣、幼年之心底実ニ孝心之程、奇特千万之儀ニ奉存候。嘉蔵女房儀茂介抱方甚貞順ニて、母子之行状一際相勝れ候段、是又近隣之者感心仕候。右之趣承付候ニ付、先荒増申上候と之儀、書付を以申出。

孝子関蔵の傳

関蔵は、肥の前州養父郡對州の領地瓜生野町之者なり。父を嘉造といふ。ミつから油をしほり、それを賣りて生計之いとなミとしけるに、不幸の事とも打かさなりて、いとなみの計らひ心の儘ニもならさりし、其憂苦の積りにやありけん、去し寛政の戌の冬よりやまふの床に臥しぬ。ことし亥の春、関蔵九歳ニ成けるか、わきて他の子供よりハ生れつきのをさらしくそ（ママ）見へけり。しかるニ父の病のこゝろもとなさを深くかなしミ歎き、町のうぶすなの社ニ日夜歩ミをはこひて、父の平愈をそ祈願し、さありて又時ミは友とちの子ともニ打つれ立なとしまふてけれは、其あたりの人ミも唯わるされの事ニ見過し、かつて其子細をしるものもなく、つれなふ友とちとても亦其故をしらす。かくて父の病、物さわかしき事をきらひけれハ、家の内のふるまいもいと静ニものし、弟の四歳ニ成けるをあわれみいつくしミて、夜にはいたきて相ともニ臥ける。これ偏ニ母をして父の介抱のまめやかならん事を願ふゆへなり。又寒き夜には父の寒からん事をいたわり、其ふところに入て身をもてあたゝめなとしけるとなん。或日たれか礼社のほとりに射場をまふけ、打つとい居ける折から、かの関蔵例のことくまふてけるに、やつ〳〵しき躰にてやゝ立やすらひ居けるを、人ミ見怪しミて問けるに、涙にくれて父之病之はやくいへん事を祈

るよしを具ニこたへけるにそ。是を聞人ミ且驚き且感して、いとねんころに計らい、猶かれ是之事をくわしく問たゝして官府に告けるに、官府是を褒美したまいて、綿布一匹米若干を賜ふ。まことに天性孝順なる児にや。すゑたのもしき事ニこそ。

紀孝子関蔵事

今茲辛亥春某日、郡大吏以本府命賞関蔵、以米若干石布一匹以旌其孝也。関蔵基肄瓜生野人、父曰嘉蔵販油為生癈居不利家。盖窮困。庚戌之冬嘉蔵寝疾、饘粥之供獨頼妻賃縫之贏。嘉蔵視其室如懸磬、妻之拮据難干衣食也。呻吟之間動輒曰一旦有不起将令汝輩轉於溝壑、毎一思之轉加楚痛。関蔵生而九歳、毎聞其言来嘗不吐哺悲泣、日夜調護扶持問其所安、欲醫薬遽効而不得矣。廼私詣邑之神祠懇祈乞命。祠太家數百千歩詣祈日必一二次。有弟、常仰乳於毎之懐抱、呱呱而啼。関蔵慮母之以弟故侍疾、或有所闕暇則耻之於懐撫而慰夜不倦。郷児呼関蔵欲與戯遊、必負弟而出。其心豈在嬉樂乎。獨助母看護耳。還又詣祠不少寧處如将不獲請不措者状。於是一郷之人稍稍知其所、為嘖ミ傳誦不已。事聞郡廳使有司来撿問情實不爽、乃有今命云。

野史氏曰、関蔵之孝於是乎大郡大吏賞以揚之。凡為人之父母者傳而誦焉、為子若弟者慕而戒之、其讒子弟内愧其行之汗而外知、陰徳之有陽報、莫弗瞿然革面、翕然嚮化、至性之不可以已如是。其甚語曰夫孝百行之本、教所由生也。関蔵之孝得賞命愈大矣哉。

四日

一関蔵親嘉蔵病氣之次第、醫者を相撰、病症為論候而服薬為仕候様申付。門司元碩、田城養朔、緒方政叔、原三潔、高尾東陽、同養則六人、明後六日嘉蔵病症候之主法書出之候様申達。

十二日

一四阿屋宮御田祭之儀、近来心得達之筋有之候ニ付而以書付申渡。猶又御口達之趣、手代中〆為申聞、其事に預り候村ミ之庄屋中江達之候付而ハ、是迄之風俗ニ付表裏之處無覚束品茂有之、是を以今晩〆下横目差出申候間、其通心得と申渡。

神を祭候は神明を崇敬すると本意候處、近来三郷宗社神事ニ付而ハ、銘ミ戯藝を専一といたし、争心を挟ミ村ミ不和之意地相つのり候機相見、神明ニ奉對候而ハ甚不敬之至り可恐之事ニ候。殊ニ四阿屋宮祭式之儀、農業を令勉勵候主意ニ聞及候之處、其事ニ付而ハ却而時日を費し、農作之手入茂餘所ニなし候儀逐一承届、本意を令忘却候段甚如何敷次第ニ候。其儀は其村之庄屋中最初見受可有之候得は、屹度相糺可申儀ニ而、其上茂難届次第茂候ハヽ、可遂案内事ニ候處、役儀之主意ニ茂不相協、抑御改革ニ付而ハ、下ミ之失墜を省き衣食足らしめ、諸事古風に復候様之心得方之儀、追ミ申付置候處、兼而歎ケ間敷儀等申出候とは、表裏之違有之候ニ付、右体不釣合之儀無之、改正之一際相立候様申談、取計候得と書付を以申渡。

十五日

一去冬以来於三郷之宗社事、社日祭之儀申付置候処、郷村〆初穂供候事無之、相詰候庄屋中茂他之儀とは違、茶多葉粉而已ニ而ハ如何ニ茂有之候ニ付、以来は御供物用及談合、酒肴用ニ其郷村〆銭三拾匁宛貫銀を以取調候儀申達。且(ママ)然後年ニ至り若茂相増候様ニ共成行候而は、甚以

不宜候、乍然申出之筋は可然儀故、右之員数は後年不相
増様心を用候得、當年秋社ゟハ手代中其郷ゟゝニ社参之
儀も申達ス。

一瓜生野町孝子関蔵ニ頃日被仰付候木綿島、衣服ニ仕立着
仕候得と達之。今日着為仕、別當草野雄介誘引仕候ニ付、
左車ゟ扇子手つから遣之、以来随分と孝心を尽候得、親
嘉蔵病氣も其方之孝行ニ依候而は、多は快氣可仕候と、
委細懇ニ申聞、此節緒方又右衛門取合セ仕。

一小兵衛方是亦同様委細申聞、扇子ニ菓子相添遣之。

廿三日

穢多之儀、羽織は紐、脇指は下緒、衣服は紋所不付筈ニ
候處、其通無之と相見、女房子供茂紋所不付様申付候得
と申達。

廿六日

今日義倉之上梁有之、差配ハ甚三郎江申付。

廿九日

郷村溝洫春普請、時節後れ候而ハ、田間耕作差障致候下
情委曲聞及、兼役申付置岩谷順左衛門、目附役原永介、
緒方貞吉、青木幸蔵、下目附川上覚右衛門、作事掛中は
素り之儀、申合相勵御為可然心を用候得と令差図、雨天
之外ハ日夕戴星出勤仕、杭之儀茂古格ニ復候ニ付、凡弐
持(本脱カ)は是迄之壱本持之致用立、其他紫(柴)朶小竹等茂八九束ニ
而拾束十把之用をなし、夫役茂勘懲を以使ひ候故、未明
ゟ出相働、所ゝ之御普請格別速ニ果敢行(マヽ)垣流水吐御修理
彼是今日迄ニ而相濟。但飯田村川筋之大破之場所、村ニ
より先年山潮荒之開立之残之無飼(餘)儀所ハ見計を以追ゝ可
申付と之事申達。

（上欄の注）
寸法之事

一杭壱本持長一丈二尺
廻一尺
一同弐本持長一丈
廻一尺一寸
一同三本持長八尺五寸
廻一尺

一同五本持長六尺五寸
廻七寸
一紫朶(柴)　廻り四尺
一駄八把
一小竹一束廻り二尺
五寸
一蛇籠竹　廻り右同断
束十一二本也

以上

三月朔日

○御領中一季奉公人之儀に付而は、以前より追ゝ申付之品
も有之、殊に去申年、上中下之段取を以、給銀の多少を
極候而申達有之候處、表向は相守候様聞候得とも、内ゝ
にては今以不相締之様子及候。然は奉公人五人抱候程之
者も過半減少候様成行、耕作方自然と失勵、手入方届か
さる様に成行候而は、畢竟御領中衰微之基本とも相成可
申を以、左之通申付候。

○在町ともに一町一村相應之者撰ミ、奉公人肝煎之者可相
立と云ゝ、委細別録。

○在町ともに其村掛之役ゝ可相定と云ゝ。

○在町ともに毎歳奉公人之名前人数、且召抱候者之名前人
数出し、肝煎之者江相渡と云ゝ、委細別録。

○在町肝煎人之賃銭云ゝ、委細別録。

○三郷村ゝ石高に應、人馬寡く村ゝは耕作方疎略に有之、
就夫他領抔に罷出候者云ゝ、委細別録。

右之條ゝ之終に不敢行は、達之瑣細過候歟、事之時宜
に不協歟、人之乏敷を以て故歟、後人之斟酌是を待、
但申達之節守否之吟味可得其意旨、目附中江達之。

注、三月朔日の本条は「基養政鑑」により補う。

三月五日

一貧を賑ハし候は古来よりも美と致所ニ而、當御領中之儀
も窮民を被為救候道被立置候義、広く被施候は難被為届
候處、累年田作不宜故ニ候哉、田代村之百姓内ゝ米銭を
借候事而已ニ而返済之遅滞有之、既ニ去冬差廻候事情、
下郷大庄屋田代村之庄屋ゟ申出候ニ付、面付帳見届、借

用之段取返弁之多少主法を設、帳面相渡候間、銀主中江其筋為致得心、田代村百姓共ニ茂心得違無之様便順之筋取計、以来一村之在付ニ茂至り候ハヽ、

御仁政之意ニ相協可申事ニ候。就夫下郷大庄屋田代村庄屋儀ハ「右年限之内、拂方土臺を引請、田代町役にも差引之筋相心得可致、差配之旨委細申達候得と、手代中江達之。猶手代中より口達為申候は、□銀主之内、料簡を加へ候者も有之歟、又は田代村之者其拂方心得違之者も有之候ハヽ、早速申出候通□可得其意候様申諭候得と達之。」

注、「右年限……達之」は「基養政鑑」により補う。

十日

一田代町瓜生野町之儀、商賣之筋相衰漸〻及零落、田代之儀、近年は月〻之立市茂全躰其形を失候様成行候ニ付、去ル申年法度申渡之節、教令之品茂有之候得共、其験も不相見、勿論数年頽墮之風儀、所詮其土臺不相立候而ハ、

容易ニ可立直様は無之、世上之時勢茂有之儀ながら、商賣之仕方ニ茂依可申歟、何分主法手立を設候而も人之懐きを不求、目前之利欲ニ而已ニ迷候而、猥ニ高利を貪候而は、商賣之筋繁昌不致而已ならす、却而衰微之発端と相成、殊両町之儀ハ通行之場所、旅人入込茂有之事ニ候得共、旅商江之あしらい方等ニ至り、諸人帰服之道永久之所ニ眼を付候儀、肝要之事ニ候。依而は両町ともニ町年寄町役格を差配頭と定、且於町方正直之者五六人商人頭取と立置、高利を貪候者有之歟、其外商賣之仕方不宜筋之儀は時〻吟味之上、差配頭江相届致教諭候様可仕候。就夫取計之筋〻左之通申付候間、一際成立候様可心得候。

一酒直段時〻可相極事。

但、年番之者ゟ其時〻差配頭江可相届候事。

一油直段右同断。

但、頭取之者ゟ相糺、差配頭江可相届事。

一豆腐直段右同断。

附り、形寸法可相極事。

但、右同断。

其外品〻直段相極候節之掛札可致事。

一一切之品〻直段之不同無之様可相極事。

一肴類格別直段之高下無之様可相極事。

一諸品共ニ現銀賣可致事。

右之外、藍染屋、鍛冶屋、諸細工人等心掛相仕立、其外町方賑候仕方等は無遠慮可申出、尤事ニ依顕ニ難申出意味も有之候ハヽ、封書ニして手代中目附中迄可差出候。直段高下朔望届仕。

十九日

一宮浦西村庄屋弥兵衛、奈良田村庄屋太次右衛門、神邊村庄屋幸兵衛、酒井東村庄屋四兵衛、蔵上村庄屋佐介、瓜生野村庄屋善右衛門。右之面〻地方功者ニ付、秋作勘弁見分之節、役〻江相附令廻村、當春は夏作手入方見分を茂申付候處、彼是令太(大)儀候。地方之儀ニ付心付之品可有之故、無遠慮追〻可申出、若顕ニ難申出意味茂有之候ハヽ、封書を以手代中目附中迄可差出候。

一城戸村庄屋杢之平、長野村庄屋勇右衛門、園部上村庄屋九郎兵衛、酒井西村庄屋善吉、飯田村庄屋益左衛門、藤木西村庄屋次郎介、牛原村益介。當節御改革ニ付而ハ、御用之節は格別ニ令差圖候趣可有之候間、可得貴意候。勿論郷村之儀ニ付猶且心を用、存寄之筋は其掛之大庄屋内密申談、其品(ニ脱カ)依り候而ハ手代中又は目附中江封書を以可申出候。

御領中之儀、小狭之所柄ニ候處、真宗之寺数甚多、門徒之数は寡候故、生計及難儀候と相聞、たま〳〵学問ニ心掛候而茂、志を不得遂儀可有之、宗学ニ不達候而ハ宗門之衰とも可申、畢竟は二男三男等迄法躰致させ、遊食之者多く有之、生理を計ル之道ニ疎キ之故歟、第一享保十一丙午年、在〻之寺院弟子壱人ニ限り御免之儀、於御国被仰出有之候得は、以来法嗣之外二男三男等成丈相應之

職業を以生理之資と致、願は勧学之力を得、宗意達し候ハヽ宗門之栄美とも可相成候間、勉勵之筋可心掛候。尤無據訳茂有之ニ、二男三男之内法躰之節は願出可得免許候。

一先達而従
公義被仰出候諸宗寺院御改之儀は、御意味可有之儀と相聞、宗法之儀は對
公義至而大切之次第は不及申、宗風之乱は国政之障り共相成可申儀ニ候得は、法中は勿論門徒之者共宗意心得違無之様、時〻相糺可申候。

一住職之儀ハ重キ事ニ而、宗学ニ疎候而ハ容易ニ難被仰付候間、能〻吟味可致事ニ候。依而は法嗣之男子たりとも法躰得度之節は、法中吟味之上可願候。

一旅僧住職之儀、能〻訳不相立候而ハ容易ニ難被仰付意味茂有之候得は、於御領分相應之住職無之節は、吟味之上其筋申出可得差圖候。

一諸願筋之儀、法中吟味之上一郷限り連印を以、願書其郷

ゟハ自分廻村之儀共ニ、其節〻書付を以役所江可申出候。吉凶ニ付料理等之品覚へずも、時風ニ移り華美を設候様聞候付、申年制度之通弥手輕致へし。是等之儀ハ其掛之庄屋町役ゟ厳重ニ可糺之處、柔弱之所致歟、以後時〻下横目差廻為見届、若分限ニ不似合之結構いたし候者於有之は、曲事ニ可申付候。

一神道は古昔神明之君之天下を被治候道ニ而、其神徳を致崇敬を以奉祀ニ付、社職之作法事を神道と唱候様、近来巫覡之道は祈禱祈念を主といたし候故、神道之本意とは主意違茂可有之候得共、其儀ハ一統之習風古今之時変所不得已ニ候。然ながら所崇敬之本意ニ不達しては、神明之感應も無之筈ニ候得は、専ら古書之意を学ひ、本理ニ叶候様可心得ニ候。尤社家中之儀、生計之筋ニ心操を被奪候而ハ勧学之余力無之、たま〳〵志を立候茂不得遂之儀有之歟、第一享保十一丙午年、於御国被仰出之御旨茂有之旁ニ付、以来継嗣之外二男三男等は得手相應之職業を以生計之資といたし、遊食之者無之様可心掛候。苦無據訳も有之候ハヽ、願出可得免許候。

総而寛文五年従
公義被仰出之御旨を以、猶又天明三卯年御觸有之通、村持之社或は村長宮座講座抔と称し神事之祭礼之営等不致様相守、或ハ佛躰を神躰ニ仕成し請持候輩も有之哉ニ相聞、甚如何敷可恥之至ニ付、神職之筋不致忘却様可心掛候。

廿二日

田野墾闢等之利は大概仕尽有之、唯今ニ而ハ地低め畝まち倒し新溝抔之仕形、多くハ他方之害を不憚者之仕業と相聞候。乍去是等之筋専要ニ可心掛筋ニ候得は、他方之害に不成之所ハ其利を為尽度候間、向後右体之儀ハ庄屋迄申出、其村之庄屋組頭及隣村之庄屋迄茂立會見分衆議之上、地之利を為得候様可致候。若又難決場所茂有之候ハヽ、早速可申出、役筋を以為致見分可令指圖候。

一生を好殺悪候(を脱カ)ハ天道之常ニ候處、當分非薄之人情、其

大庄屋及其願主掛之庄屋江宛、奥書を以可願出候。但田代町は下郷法中ニ属し町役江可願出、瓜生野町之儀は是迄之通可相心得候。法中一統之願筋ハ、三郷大庄屋町役ゟ取次可願出候。

右之趣、真宗寺院中江其掛之役筋ゟ相達候様可被申渡候。

一下民之零落は多くハ借銀借米ゟ之故と聞候得は、拂潰し之主法、天和年之通在町推渡し可取行之処、時体ニ依り権宜茂有之歟ニ候故、三郷両町前後之模様委敷見計之上、筋〻可申出候。

一天明八申年之御制度被仰出置候内、音物贈答之筋都度〻〻ニ仕方不行届儀有之と相聞候は、是迄一統心得方等閑之故歟と被存候。向後ハ事柄之輕重ニ随ひ、申達シ之通多少之間、屹度包銭を以取遣仕候様相心得、自是之後弥以申年之通、大庄屋ハ無隣(マヽ)怠諸事御制度之趣逐一令教諭、小庄屋ハ其節〻ニ書付を以大庄屋迄届申出、大庄屋

子を路傍ニ埋め、又は寺院ニ捨候事有之ハ、可痛之甚敷候得共、従来貧窮より之事ニ而、不得止之意も可有之歟、仍而捨子之救方如何様之設有之候ハヽ、撫育可相届哉、尤不容易之事にて普ク可行届事ハ難量候得共、願は一村一町ニ両三人宛ニ而茂致撫育候仕形を設度候。其備之品在町役中論談之上可申出候。

一父母之忌五十日ハ、天下之通喪ニ而重キ制ニ候處、人により廿日歟三十日過候得は、勝手次第髪月代を仕り、或は肉を食し又ハ他方ニ遊行するよし相聞、可歎之事不過之候。父母を無ニするハ

上を無ニするの基ひ、則天下之大法を犯候は是ニ近く候。但有官之人復起ニ而罷出候は和漢之しなり(マヽ)ニ候處、私喪を殺候訳ハ決而無之儀ニ候。是等之習俗急度相改候様、其掛之役中ゟ可申諭候。喪服之儀さへ天下之大法重キ筋ニ候間、在町役ゟ服忌令を写取候而、以下之面ゝニ時ゝ讀聞、得心為致置候様申渡。

一在町貫銀帳之儀、入目ニ付而ハ取捨之筋茂可有之候故、自今之後は、御目附之内手代役同様、月ゝ之入目吟味申付候間、其意を得候様ニ。御目附中之儀、手代役ゟは時ゝ在出茂有之事故、假(縦)は其村之宮普請、其村之御年貢蔵出火之節之諸道具等ニ至、入目筋或は拵替之見糺茂有之事故、右之通申達。

四月十九日

一豆田井堰濱筋間違之訳ニ付為見分、今日小兵衛罷出。右ニ付緒方又右衛門、岩谷重次郎、目附原永介等見分相済候而、於永吉大庄屋宅奈良田村百姓召寄候上、右濱筋之儀以前と違、元禄年繪圖面ニ致相違、如何敷場所茂相見江候間、庄屋百姓ゟ久留米御領手筋之方江掛合、古繪圖面之通取整有之候様、精ゝ相尽申向候様申達。委細別録。

廿二日

一男子を設候得は、端午ニ幟を建祝候事は、本朝武を宗之古実其謂有之と相聞、諸国海島ニ至迄此事取行候。然處

是等之事茂無法ニ競候而は如何敷、爰許茂此所大様ニ相見、百姓町人之戸前ニ幟菖蒲鎗等数本建ならへ、間ゝニは圓居等茂建、飾ニ金銀之箔を用、厳倹之御家風ニは甚不都合ニ相見候。右幟飾之式は、於御国御法茂有之候間、夫ニ準し此節左之通申渡候間、此旨堅相守候様可被申渡候。

一紙幟　弐本
一菖蒲鎗　三本
　但、飾ニ金銀之箔不用
　右御扶持人中
一紙幟　弐本
一菖蒲鎗　弐本
　但、右同断
　右在町役六拾人格、三組之者、其外礼席ニ罷出候者
一紙幟　弐本
一菖蒲長刀壱本
　但、右同断
　右百姓町人

以上

廿四日

一宝暦以後累年申達有之御物成取立之儀、中古以来捨り並之仕方、定免請合之規格相扒り候訳有之、宝暦年地高掛之法相設候得共、近年は其法一統ニ不被行、捨並を好候者多候故、地高掛斟酌頃年其主法相定候而、定免之主意不扒候通相定置候處、唯今之地高掛ニ而は難義之田坪間ゝ有之由、後言致し候意味、実ニ難渋之地面勘弁米等之仕形、未行届儀敷、少茂無遠慮申出候得、吟味之上宜敷取計候様可申付候。

一一昨年昨年酒井村ニ而、廻し高貫立と申を以、諸上納取立候と聞候。此義以後何れ之村ニ而取行候とも伺出、得差圖可取計候。

廿六日

一田代村之義漸〻及零落、借用之米銭年〻相重、耕作ニも取離候体ニ有之候ニ付、去冬拂潰之主法を立候處、去春迄ハ作食等他借を以、根付手入をもいたし候得共、當春又〻他借致候而は往〻之成行難計候ニ付、御米三拾俵拂借被仰付候ハヽ、耕作為取續、下知方も行届可申、但返納方之儀は拾ヶ年之間 毎年 新米替ニ而 其年〻三俵宛引潰、上納ニ被仰付被下候様、下郷大庄屋新介、田代村庄屋藤右衛門、且下知方相談相手神邊村庄屋幸兵衛連印を以願出、則願之通之米数拝借ニ申付、割當之面附別録。

晦日

一捨量之儀ニ付書付を以申達。千木秤と舛(升)之儀は別而可念入事ニ候得ハ、舛ハ弥京舛(升)を用、千木秤ハ弥善四郎秤を用可申候。尤干物等之類、右之舛(升)難用筋可有之候茂、万一寸法ニ違候品を用候而は、決而不相済事ニ候ニ付、両品共ニ此節役方ニおゐて改を請候様申付候間、可得其意候。

五月朔日

一先年高田村庄屋闕役之節、給地餘米等之代銭、今般取計之上、高田村百姓中ニ返下申付。右銭之内九百六拾匁八分七厘は、去年氏神之社再立入目不足之分、他借仕置候筋ニ返弁仕り、残五百目之分は頭立候者ニ預ヶ候而借廻ニ仕り、元利を以洪水之節之馬揚場を築立候様仕度趣、百姓中申出。勿論不滞之為ニ當郡大庄屋江茂申談置度旨之伺書差出、其通仕候様申達。

五日

一宮浦西村庄屋弥兵衛、園部上村庄屋九郎兵衛、神邊村庄屋幸兵衛、酒井東村庄屋四兵衛、蔵上村庄屋佐介、瓜生野村庄屋善右衛門。右は是迄村〻田地養水之配分、仕来茂有之と相聞候得共、時或は所ニ依不行届義茂可有之哉、畢竟

上之御田地ニ候得は、何れをよしミ何れをにらみ候訳は無之故ニ、右之面〻配水掛ニ申付候間、私情ニ不拘村〻

配水行届候様相勤候得と、書付を以申渡。

六日

一霖雨降續、夏作損毛を以之故歟、隣国米穀高直を以他領ニ賣候者有之と聞候得共、両町或は村ニ〻粮米乏敷、難義之趣も追〻申出、頃日〻段〻衆議申達候處、難締訳茂有之、是迄他領出停止茂見斗候得共、益以及難義候事情ニ付、手代中〻之口達書ニ供、在町役中ニ申達候様申聞。

一當春以来両勝ニ付、夏作損毛を以、近来ハ米穀賣候者無之、町方之者粮米及難義、在方茂村ニ依同様ニ相聞候。付而は在町共ニ米穀貯居候者茂、直段合ニ拘候哉、今程賣出候者寡聞候得は、時節相當之直段ニ而賣渡候様、買請候者も其心得有之、双方迷惑不致候ニ賣り買イ仕り不差支通御下知可有候。依而は當時米穀他領出ハ被差止候間、其旨茂御申付可有之候。

一御制度筋ニ付、音物贈答之儀、親疎之差別諸人之心得不委細様聞届候ニ付而、猶又在町ニ申達候様申付、其口達書。

追〻被仰出候御法令ニ付、音物贈答之義、其筋在町共ニ未委と相聞候。親子兄弟叔姪迄は吉凶ニ付輕キ品を取遣可致候。其以下之類家は包銭ニ而可相済候得と之趣、此節猶又被仰付候間、在町ともニ未〻迄茂行届候様、厳重ニ御申付可有候。

七日

一當地寺〻ニおゐて毎〻説法いたし、御国ニ而は両彼岸に限り昼斗り之説法有之候。當所は夜中之法座老若男女打混、慰体ニ相心得、甚不行作ニ有之哉ニ相聞、実は仏法之主意ニも有間敷、出家中ニも不本意可存筈ニ候。依而以来夜中之説法堅く差止候。壮年之男夫家職を捨、隙を欠候而、白昼説法之節寺参いたし候者も可有之歟、是畢竟家を治る之道にあらす、宗風之習染により候而は御政治之妨とも不相成候に付、常〻年廻忌日等ハ格別、壮年之男子忌中之外は説法参詣之儀令停止候。此旨寺院中江

も其懸り〻相違、猶在町之人〻も委敷申付置候得と、書付を以申達。

五月十一日

一下モ村之田、洪水之後苗窩候節、上ヶ村〻間引遣し候苗之儀、壱段ニ付三把宛之数、以前は其数ニ而可然候処、其後大川筋荒籠有之候ニ付而は、古今之異同有之儀ニ候故、五把宛ニ相極、其五把を畦脇之下ニ間〻に假ニ植込置候様申達候処、其様子を見候得は、手取ふとく候ニ付、土用時分ニ至り本株之妨に成候而、虫も生し候様申候得共、虫は其年之氣候ニも依り可申儀哉ニ付、當年迄は去年之通に植籠置候得、手取之儀は常〻之手取之通よりほそく仕候様、三郷大庄屋中ニ口達書を以申達候得、農政方六人中へも委細達候而、村〻百姓中ニ能〻申聞候様申達候得、抜苗之儀は宝永五子六月二日之所に記有之儀を考當り候処、銘〻何〻と竹札之書付を指候得、何村は何段何畝に何拾何把と申候積書有之、勿論最前申組有之歟も、定免以来数十年之儀故、自然と其弊有之候歟、間引候而遣候苗不宜も有之、或は時日を經候も有之、折角植付候も用立不申、適〻為請取ニ馬を牽参候而も、空敷帰候も有之と聞候ニ付、當節〻は下モ村何村何百何拾把は上ヶ村何村〻何百何拾把と前以極置、其期ニ至り候ハヽ、上ヶ村遣候村ニ前夜〻歟其朝歟役筋〻差其、下モ村請取候村へハ、何日に何村〻何村ニ朝歟暮歟ニ参候様申遣手筈ニ仕候ハヽ、是迄之弊改り可申、依之三郷大庄屋中ニ苗積之書付差出候様申遣候得と、手代中江申達。

十二日

一神邊村分大木川筋下川原井堰、田代村と藤木村と之論難、去年取計之書付、東西之面〻に為念為致内披見候後、田代村庄屋〻享保年之古帳差出、下川原弐ヶ所は田代村〻堰候と書載之訳を以観候得は、田代村之井堰ニ相違無之と見江、然時は東西等分之配水は如何ニ被存、尚又昔時之様子為問合候処、只今論所之井堰上下相接居候事ニ候

得ハ、弐ヶ所之材木は壱ヶ所ニ而相濟候儀ニ而、夫役をも減候之意にて、最前神邊村庄屋假役新右衛門存寄を以省略候由ニ聞候。然ハ宝暦以前は論所弐ヶ所之材木も願居候とも被存知、其事柄は不知候得共歟、定免被仰付置候而、郷村之請持之儀ニ候得は、如斯儀迄立入、遮而申達候事ニ而は無之訳と之先輩之論談之様子をも承傳居、夫は定而郷村之為ニ借替米之筋共にて有之たる哉、其頃は古格廃弛ニ不至候得は、彼も一時にて其後民間弊風相募候付而は、宝暦年諸政更張被仰付候儀、是も一時にて右御更張之節、村ニ〻井堰帳不傳も有之候ニ付、新ニ為仕立候得共、唯帳数を備候迄にて、多事を以之故に終、相互ニ引合申ニは不至候。抑先輩談話之模様を以観候得は、享保年之井堰帳と申候而も、若は立會之上両郷相互ニ引合ニ不至事も有之候半哉、但藤木村神邊村之古帳は最前ニ相失候と聞候得共歟、唯今藤木村分新溝と唱候は、若は天和延宝之頃掘候共ニ而は無之候半歟、或は深溝之形不審ニも有之候共、古昔〻神邊川之下流を用水と仕来候とも無存知候得は、此節田代村古帳而已を以、一向致證據候も如何可有之哉、然共此儀も若は固必ニ渉り可申儀も不遠慮に候故、指當り之趣を以申候事に、東西之地面も乍恐

御上之地面勿論之儀ニ候得は、今新ニ井堰を御設被為成候ニ仕候時、随分双方之地面不差障、各自隔意無之論談之上、其筋相立候趣を御伺申上、御差圖を奉請事故、最前〻下川原井堰より大木井堰ニ至迄之間之所〻を両郷立會為論談、養父郡大庄屋七郎右衛門、農政配水加役之蔵上村庄屋佐助、瓜生野村庄屋善右衛門、其掛之鳥栖村庄屋善七、藤木西村庄屋次郎介、下郷大庄屋新助、農政配水加役之神邊村庄屋幸兵衛、酒井東村庄屋四兵衛、其掛之田代村庄屋藤右衛門、原村庄屋文右衛門、扨亦各論談之時宜ニ〻差配も可有之ゆへ、上郷大庄屋良介、田代町別當勘治寄合、下郷面〻養父郡面〻双方一盃ニ為論候

處、皆以其筋有之候得共、明和八卯年安永五申年山潮以来、水流之異同地面之高低も有之、所詮難決候付而は、権宜を以左之通申組候得共、裁許を可請程ニ不至候故、渇水之節ニ至り様子見定候迄は、當時手代役三人之預りニ仕置、後輩之明断を待候事。後之今を視候茂、猶今之昔を視候様可有之故、斯録之候と之儀申出。

一下川原井堰は、中古之仕替溝を埋め、堰方は以前之通ニ樋道を堰上候而、下川原井堰ニ用水湛候様之事。

一其下モ藪原井堰は、只今水可通ニ堰候事。

一其下モ倉瀬田井堰ハ、當年は古来之通之由ニ而、杭堰ニ堰候儀以下之井堰之争論之端と聞候ニ付、近年之通ニ芝堰ニ仕候事。

一其下モ同名倉瀬田井堰は、唯今迄之通ニ堰候事。

一柳井町井堰は、唯今通堰候而水口を開、藤木村之田ニ水を掛、其末川際八寸廻之竹井樋を掛、其田ゟ大木井堰之上ニ水落込候様之事。

一大木井堰は、只今之堰方砂掻立候儀不宜候ニ付、當節ゟ井堰縁迄水湛候様堰候事。

十六日

一御領中男女奉公人、風俗不宜候付而は、数十年来毎ゝ申付茂有之候得共、今において不改、却而近年弥相募、加之主人之品を盗取、小宿を極置候而持込賣払候族も有之段聞候。奉公人之儀は自分之生業不得相立、身を賣り其代を以生計とし、又ハ両親妻子をも致養育儀ニ候得は、一入正道ニ可相勤之處、右体心得不埒之至ニ候。因而は此節屹度可相糺儀ニ候得共、宥恕を以先ツ其分ニ差置候。以来不埒之筋於相顕は、さらし之上其輕重ニ随ひ申付様之品も有之候。

一右致小宿候者ハ、盗ニ令同意宿をもいたし候段、其科一等重キ所有之候故、相顕次第所替可申付候。扨又品物を買いたし候者をも、是又同罪に可申付候。

一御領分他領江境候村之百姓共、密ゝ他領地面を令掛作候

者有之と相聞、剰近来ハ其村請作之地面をも地主江差返、他領之地面を作候族も有之、是偏に利欲ニ拘り候仕方、其風儀漸ゝ押移り、境目ニ不拘之村も令掛作候由、言語同断不埒之至候。御領分之者他領之地ニ致掛作候は、上之御外聞ニ相拘候訳有之、向方之御国ニ被對不敬不輕之次第ニ候。勿論右之者共此節吟味之上屹度可申付儀ニ候得共、存寄之旨有之、是迄之不埒は先ツ差免、自時(ママ)之後他領掛作之儀堅差留候。萬一法を背候者有之相顕候ハヽ、不閣村替申付、且其村之庄屋不吟味之所をも可及越度之沙汰候。

廿六日

一在町貫銀帳取立帳之儀、去年六月ニ御国元江申上、御頭書を以被為仰越置、元来貫銀帳御国元江被差上来候ハヽ、享保年ゟ之古法ニ而、取立帳之儀は宝暦年之規格ニ而候得は、不相廃様之仕方儀、下書今日手代中ゟ差出、依而申出候は、我ゝ賤陋(ママ)唯成是を守候之難も、抑以前民間之疾苦為御聞糺、御国元ゟ再三御目付被為差越、終ニは宝暦年諸政御更張ニ被為至候御事ニ而、其節ゟ在町貫銀月ゝ之御見届ニ相成候ニ付、内ゝ之貫銀凡弐三拾貫目年ゝ相減候。御上納米取立方も諸掛物不少候處、取立帳之御取計を以内ゝ之取立、今以莫大(ママ)相減候。貫銀帳取立帳は其比餘程力を被尽候事ニ候得共、其事打合候後は御国渡之貫銀帳取立帳は無用之儀と申候を以、役中之内ゟ御断申出候事も有之候得共、享保之貫銀帳も御国元ニ御差越被成候處ゟ、基本と成候而御聞糺被仰付候得は、取立帳も御差越不被成候時は、爰元御役所之手数も若は後年廃弛ニ可至も難量、又復民間之疾苦在町之衰微之所を、深く是を御憂被成下、御差越被成候事と承知仕居候得は、其御憂慮と當時之事情とに不戻様之御賢意に奉随候而、可然可申談之旨手代中申出。

六月八日

一豆田井手溝筋之儀ニ付、手覚書奈良田村庄屋太次右衛門

ゟ差出、六月七日此方善次、弥兵衛、筑後東野口又左衛門方江相越、同所百姓又次郎、次郎右衛門の相招、咄合仕候覚書。

一善次、弥兵衛申候は、先達而ゟ豆田井手溝筋御取計方及内談候訳ニ付、去月廿七日御四人拙者方へ御出候而、御返答被申開候通、底井樋之内下ゟ弐番之樋は、急ニ土俵を以て樋口御築切可被成候。且又東西之横溝壱ツ溝口弐間通り御埋幷土手下二重溝は全御埋立之儀、當秋冬ニ掛無間違御埋可被成候。

一又左衛門、又次郎、次郎右衛門申候は、被入御念御越被下御苦労ニ存候。御申被成候通、去月廿七日貴宅へ四人罷越申置候御境目溝筋取計方之儀は相違御座、いかにも下ゟ弐番之底樋天氣晴候ハヽ、土俵ニ而樋口を築切相塞可申候。且又東西之溝口埋幷三重溝埋立之儀は、秋冬ニ掛無間違可仕候。

一善次、弥兵衛申候は、此節之内済、小郡御庄屋次右衛門

幷百姓衆中は御存不被成体ニ而、只ヽ御地主中之御勝手ニ茂相成儀故、内濟被取計候と御申被成候儀、三ケ村庄屋百姓江申聞候處、皆中致承知則内済ニ仕候。併此儀も三ケ村一統は不存向ニメ、我ヽ両人之了簡ニ而小郡之御地主衆は熟談之上、内済仕候趣ニ致置候。左様御聞置可被下候。

一小郡三人申候は、御庄屋太次右衛門殿幷三ケ村百姓衆も、此節之内済方御存不被成体ニして、貴殿方之御了簡を以内濟御取計被成御儀承知仕候。此方庄屋百姓中江も我ヽゟ得と可申聞置候。以後之儀猶又無油断心を用候様申付候得、勿論秋冬ニ至二重溝を埋、及樋口築切候節は役筋ゟ内ヽ見分仕候様申達。始終之儀別録。

十三日

一下モ村洪水弐丈三尺六寸迄出、依之御救可被成下候間、早ヽ手當仕候様申達、例之通下郷養父郡大庄屋宅にて飯為炊候ニ付、諸役ヽ手を分罷出。

廿七日

一宮浦西村吉左衛門病氣ニ付而御救人参願出、願之通申付。以後略之。

七月朔日

一田草耘之儀、以来は壱番取ゟ四番取迄、村ヽゟ申出次第其日ヽ帳面ニ記候而、當番之人ゟ申出、佐役之方は其村ヽ之庄屋ゟ申聞候様申達。

一両町商賣之品直段高下之案内、是迄十日限り申付置候處、以来は朔望ニ申出候様申達。

四日

一科銭四貫文、宮浦東村宇右衛門。右は他領ゟ往還之荷物押取之證文を取候而、銀米を借し入候儀は、可恥之甚敷筋ニ候處、右宇右衛門儀、筑後御領干潟村之者ニ押取之證文を以、銭幾程借入置、返弁無之候ニ付而は、終ニ同御領古江村ゟ之麦挽馬を六疋押候ニ付、麦は脇家ニ預ケ置候而空敷帰り候次第役筋ゟ申出、不届者ニ付禁足申付置候得共、宥恕を以禁足差免、右之通科銀申付候。以来右体之聞於有之は、曲事ニ可申付由申達。

一今泉村久右衛門家内、又左衛門、長ヽ相痛極貧民ニ而、御救之儀願出、願之通申付。

十一日

一當役交替之節、新役江為祝儀輕キ塩肴ニ而も差遣来候得共、天明八申年御法令被仰出置、尚又當節包銭之格申達。

青銅三拾文手代中、同三拾文御扶持人中、同拾八文穀物改役、大廻船差引役、馬醫、拾八文両町役中、同拾八文大庄屋中、同拾八文三郷庄屋中、同拾八文六十人中。

一下モ村洪水後之田作為見分役ヽ差出候處、真木村之内手入方不宜之田坪多有之内、如何敷場所も有之段聞届、科銭壱貫五百文申付。

一酒井東村之儀、右同断之田坪不少、尤庄屋四兵衛儀病氣と相聞候得共、心配大様之訳ニ付而は、科銭壱貫八百文申付。

一同西村、是又同断手入方大様之田坪間ゝ有之候ニ付而は、庄屋助役平兵衛儀以来下知方心を用候様申付。
一飯田村庄屋益左衛門儀、酒井東村庄屋病氣ニ付下知難届有之と相聞候ニ付、當時同村之耕作之差配相兼申付。
一年中之手数書戴、寄會之間ニ掛之。
条(ミ脱)
正月
一八日宗門御改村繰書載可出候事。
一十日比ゟ定式川普請可初候事。
二月
一朔日、前月貫銀帳月ゝ可出候事。
一前月庄屋屋廻村書付月ゝ可出事。
大庄屋は四季廻村之節ゝ、右帳面ニ書載可出候。
一前年郷村欠米書載可出候事。
一夏作手入役ゝ見分可仕候事。
一人高目録二月末三月初ニ可出候事。
一一宗一帳之御案内右同然。
一三郷両町御物成帳可出候事。
一同御小物成帳右同前。
一前年貫銀帳右同前。
一郷貫銀帳右同前。
一村貫銀帳右同前。
一町貫銀帳右同前。
一三郷割貫銀帳右同前。
一在町諸上納取立帳右同前。
一出家中證據印可仕候事。
三月
宗門御改已後判残之者改之。
四月
豆田井堰之節役筋見分仕。
注、「三月……分仕」は「基養政鑑」により補う。
五月

一宗門御改之後四月迄之生死出入目録可出候事。
一夏作出来分量之書付、當月末六月初可出候事。
一村ゝゟ田根付相済候届可申出候事。
一村ゝ田草壱番取ゟ四番取迄届申出、其節ゝ役筋見分可仕候事。
「両町自身番引取之届出。
備油之届申出。」
注、「両町……申出」は「基養政鑑」により補う。
八月
一津出し場所御蔵材木朽損之分可願出事。
一郷村作道造候届可申出候事。
一彼岸過六七日比ゟ田作惣毛見可仕候事。
一毛上位付書付可出候事。
一捨付届申出役筋見分可仕候事。
一津出場所御蔵可取立候事。
一平米献上可仕事。
「御上納米縄俵拵方申達。」
注、「基養政鑑」により補う。
九月
一新穀他領出停止可仕候事。
一火床改在町共目付中并下横目差出候事。
十月
一三郷田畠捨高書付可出候事。
一當月銀納越米引戻米之数可申出事。
一水屋村高田苗代田有籾積り帳可出候事。
一上使屋給地下作差引帳可出候事。
一郷村両町御年貢諸上納張紙可出候事。
一村ゝ例籾書付可出候事。
十一月
一郷村免方勘弁書付可出候事。
一園部村同前。
一十五日三郷園部村本口皆濟手形可出候事。

一米穀他領出可免候事。

十二月

一十三日両町ゟ年木可納候事。

一十五日限、諸小物成上納可仕候事。

一御国渡残米有之年は、蔵詰可申請事。

一上使屋給地餘米差引目録可出候事。

一廿日限ニ銀上納取立可申出事。

以上

廿七日

一佐役、永尾儀兵衛在勤

一投文之儀ニ付而は、天明六午年申渡之品有之、名印を不顕は匿名之書と申、従　公儀被仰出之御法も有之候得は、假令差出候時可取揚様無之は勿論之儀、尚又善悪ともニ心付之儀手筋江顕ニ難申出意味も有之候ハヽ、封書にして差出候様、兼而相達置候處、其筋不相分もの有之歟、名を隠し心得違え者も有之候ニ付、以来役ニハ素り、百姓町人共ニ手筋江難申出次第は、名印を顕し封書ニして可申出旨、在町役ニゟ委敷申聞置候様可被申渡候。

八月三日

一蔵上村庄屋佐介出。同村与平女房年六十歳ニ成候處、平生大酒を好候付而は、繼之品を茂盗取、酒ニ代替候様子ニ候處、去月下旬同村五平と申者之単物を盗候而、宿村ニ致質入候次第相顕、子供三人有之候得共、進退當惑之趣ニ相聞候。併為全体暴木ニ半日敷一日暴申度候得共、私を以人を罪候は遠慮可仕儀ニ候故、此段内ニ伺候趣申出、其通仕候得と申達ス。

十九日

一下モ水入拾ヶ村之儀、皆窩之田坪不少、耘方甚手入ニ有之、食用乏敷候而難儀仕候付、先達ゟ追ニ御救之儀歎出候得共、是迄様ニ手段を尽し取續候。最早下以之筋難届、乍恐當時御救奉願候。尤難儀仕候者共之内、口拝仕候程之者并弐才子ハ差除、別紙面附帳差出、下郷養父

郡大庄屋ゟ茂副願書を以時情申出、無據趣とは聞江候得共敷、抑御国許ニ被成候時、御救被仰付候儀は御容易不被為成事ニ而候。風土之違も可有之候得共、當所之儀は民間之事情(ママ)別而水入村之儀、動茂仕候得は簇而御救を願候様子と相聞、其習風不改候而は當節御革政之本意ニも不協事ニ而甚以不宜候。然共貧民真以饑餓ニ及ヒ候を、御救不被　仰付は御仁恵ニ戻り候筋ニ而、出入之吝と申にも落可申候半敷、唯是當役之儀は、二十四朔を以交替之限り有之事ニ候得は、其費之不輕は居役之手代役と大庄屋役とニ可有之事ニ而候。當節之願も猶又當否を致再思候而、願書連名之庄屋中ニも能ゝ可然申諭候得、願書を差返候。最前下郷大庄屋申出候郷村捨付之籾、是を申出之通與江候得と申達候得は、捨付之籾ハ宝暦年中ゟ之御取計ニ而、其以前ハ田間例切之所ゝ而其日ゝゝ之飲食用と相成候を、下民凶歳萬一之備ニ茂仕候様と之御仁慮を以、如是被仰付置、既ニ享保之大凶年ニは粟糠草実を食候程之事ニ候得は、其籾を以時情申出、無據趣とは聞江候得之、其後田畠作茂不宜之年向に、右之稗を民間江御返被下候故、御救米茂甚相減候。當節其村ゝニ而割與候筋當然之儀と存候。先日下郷大庄屋と致議論候ハ、其郷上ヶ村貧民難儀之不甚は、此節不割与候而も可然候哉之故、其郷中村ゝと申談之上、當難之下モ水入村江借渡候歟、又は与江切ニ仕候歟（注、挿入字句あるも、不明）宜様ニ相談有之度と申置候。何分可然様致差圖候様申聞候付、養父郡下郷大庄屋召寄、其通申達候得と申達ス。

廿三日

一献上平米は、其年ゝ當作之最初を献候主意ニ而、以前は実熟早速ニ差上居候と相聞候処、漸ゝと其規格相弛ミ、若も自分ゝゝニ取用候而之後、献上仕候様心得候趣ニ成行候而は、其主意甚如何敷候ニ付、従當年之後は、手前ニ不取用最初ニ上納可仕候。

一御上納米之儀、干目を致第一候儀勿論之儀、青米赤米之

儀は享保年被　仰出之御法も有之候得共、今更委細ニ不申達候間、猶又古法之通随分念入可相納候。

一縄俵拵方是亦格法有之、毎歳役筋〻達も有之、殊ニ従御国毎度御仰越候訳も有之候付而は、時ニ臨ミ厳重申付義ニ候處、役筋之下知之不行届歟、勿論村ニ依り古法を守候茂有之候と聞候得共、不然村も有之候は、畢竟其村之論方委細ならさるを以、手僻之様ニ成来候歟、訳も違候品麁末ニ仕立候段、不埒之次第ニ付、以来古格之通可念入候。

一木垂伐は田畠作物之妨を除候為之故ニ候處、屋敷之際ニ材木を仕立、隣家干場ニ蔭を差候場所、又は田畑之畔ニ櫨杉を植立、餘人作物之妨ニ成候義も有之と相聞、偏ニ己を利し他方之害ニ成候儀不仕様ニ、毎歳壁書ニ讀聞候儀ニ候處、是等之儀、則己を利し他方之害ニ成候と申ものニ候得は、如此之場所は山方申江申出、伐拂可申儀勿論之事ニ候。惣而以来右体之場ニ材木仕立候ハヽ、其村之庄屋江申出可得差圖候。

右之趣、庄屋〻厳密ニ申付候様被申渡、庄屋も又平生右体之所江心を配候儀尤ニ候。心配之勤惰は村方之治否見江候儀ニ候得は、是等之事ニ下知之届と不届とを以、平生勤惰精麁之沙汰ニ可及候間、此旨をも可申渡置候。

一右ニ付手代中〻副書を以申達。當節被仰渡之御書付差廻候間、各〻其郷内庄屋中江被申達、御差圖之通行届候様、猶又懇ニ可有演説候。依而は一統庄屋中平生其村之百姓中江教諭方當節被仰渡之御旨ニ不限、全体其村之治方之是と非とニ付而は、褒貶可被仰付儀ニ候得は、若も不慮之不調法有之候時、其節ニ臨候而は何分執成を被頼候而も、決而我〻力之不及事ニ候故、平生其村之治方諸事御差圖之通行届候様精勤有之、何れ歟弊風相改候而、村中在付候様、日夜心配有之候儀肝要之事ニ候。是則一統之庄屋中を前廉(廂)執成候之主意ニ而候。縄俵拵方古格之法は

猶又為心得、左ニ致書載候。

俵拵方古格之法

一外俵　横四尺廻り余
　　長弐尺三寸餘　　金尺

但四所編ニメ壱手藁拾五六筋、小縄拾四尋

一内俵　横三尺六寸餘
　　長壱尺五寸餘

但三所編ニメ藁手すくりニ而拾壱弐筋、小縄六尋

一俵口くゝり縄九尋　但角縄少し小振

一結縄ほとめ縄ともニ拾六尋

メ縄弐拾五尋、但掛目三百三四拾目

一内ニ竹札入

一外ニ指札木札ニ而苧よま付

以上

解題

肥前国基肄郡全域と養父郡の東半部は、慶長四年から廃藩まで、対馬の島主、宗氏の領する対馬藩田代領で、俗に「きやぶ」と呼ばれる草高一万石余の小領域である。主邑田代[注一]に代官所が置かれ、対馬から派遣される代官によって統治された。[注二]

この「日記抜書」の原本は、対馬厳原町の宗氏の菩提寺、万松院境内の「文庫」に所蔵され、延宝四年から寛政三年まで、百十六年間の田代代官所の政績が、十一冊にわけて収められている。

これは「基養政鑑」[注三]序によると、代官所の企画により、「代官所毎日記」[注四]から抜粋、編纂されたものであり、寛政三年以降、「基養政鑑」の成った同十一年迄の間に撰せられたもののようである。

「代官所日記」そのものでなく、為政者の手になる抜書ではあるが、代官所の統治意図ならびに田代領内の民生などをうかがうに足る好個な史料ではあるまいか。

注一、藩政時代の田代町は、現在鳥栖市内で、田代昌町、田代新町、田代上町、田代大官町、田代外町となっている。（口絵ページ写真参照）

注二、代官所役は、本役、佐役、賄役の三役で、ほかに領内から手代役として数名の者が仕えていた。

領内を「三郷両町」にわかち、各郷に大庄屋、郷内各村に庄屋を、田代町、瓜生野町（鳥栖市本町一丁目、秋葉町）の「両町」には、それぞれ別当、座親を配した。

なお、園部村は寛永十二年から正徳元年まで七十七年間、天領であったため、別に併記することがある。

寛政年間の郷村名はつぎのとおり。

上郷（基肄郡のうち十三か村）
宮浦村（東、西の二村）、城戸村、小倉村、長野村、金丸村、奈良田村、野口村、永吉村（南、北の二村）、柚比

村、園部村（上、下の二村）
下郷（基肄郡のうち十四か村）
神邊村、萱方村、古賀村、河内村、田代村、曽根崎村、原村、姫方村、幡崎村、飯田村、酒井村（東、西の二村）、赤川村、水屋村
養父郡（養父郡東部十二か村）
牛原村、牛原河内村、養父村、蔵上村、宿村、鳥栖村、藤木村（東、西の二村）、今泉村、瓜生野村、真木村、高田村

注三、鳥栖市、津田謙荘氏蔵。六巻（但し巻一散逸）。
「日記抜書」と同期間の事蹟が収められているが、項目、内容とも若干取捨されている。寛政十一年完、撰者は「日記抜書」と同一人か。

注四、安政二年正二月分一冊が残っている。

なお、本書は、昭和三十三年八月、当時の鳥栖史談会が対馬厳原町万松院文庫で原本を写真撮影したものから更に筆写したものである。

本書の出版については宗武志氏をはじめ、厳原町文化財保護委員会、ならびに万松院文庫の津江篤郎氏の御承認と御協力を頂いた。

また、複写本からの筆写は長忠生氏（基里小学校校長、鳥栖市史編纂委員）、校合は城島正祥氏（佐賀大学教授、鳥栖市史執筆委員）の御尽力を得た。

鳥栖市史資料編　第一集
日記抜書（田代代官所日記）
定価八〇〇円
昭和四十四年六月十三日　印刷
昭和四十四年六月十五日　発行
編纂　鳥栖市史編纂委員会
発行所　鳥栖市役所
（佐賀県鳥栖市宿町）
印刷　福岡印刷株式会社
福岡市舞鶴一丁目2ノ5